

シラバス

2026 年度入学者用

学校法人 佑愛学園

愛知医療学院大学

シラバス 目次

<リハビリテーション学部リハビリテーション学科>

科目 区分	開講科目		ページ 番号	科目 区分	開講科目		ページ 番号	科目 区分	開講科目		ページ 番号
教養 基礎 科目	科学的思考の基盤			専門 基幹 科目 (理 学 療 法 学 専 攻)	基礎理学療法学			専門 基幹 科目 (作 業 療 法 学 専 攻)	基礎作業療法学		
	1	生命の科学	1		52	理学療法概論	110		93	作業療法概論	204
	2	エネルギーのしくみ	3		53	理学療法研究法Ⅰ	112		94	臨床運動学	206
	3	情報科学	5		54	理学療法研究法Ⅱ	114		95	基礎作業学	208
	4	基礎統計学	7		55	人体触察法実習	117		96	基礎作業学実習	210
	5	医療英文講読	9		56	臨床運動学実習	120		作業療法管理学		
	人間と生活				57	運動療法総論	122		97	作業療法管理学	212
	6	心理学基礎	11		58	運動療法演習	124		98	作業療法管理学演習	214
	7	人間関係論	13		理学療法管理学				作業療法評価学		
	8	倫理学	15		59	理学療法管理学	126		99	作業療法評価法	216
	9	教育学	17		60	理学療法管理学演習	128		100	作業療法評価法実習Ⅰ	218
	10	教育心理学	19		理学療法評価学				101	作業療法評価法実習Ⅱ	221
	11	英語Ⅰ	21		61	検査測定法	130		102	身体障害作業評価学	223
	12	英語Ⅱ	23		62	検査測定法実習	132		103	精神障害作業評価学	225
	13	英語Ⅲ	25		63	理学療法評価法	134		104	発達障害作業評価学	227
	14	健康科学	27		64	理学療法評価法実習	136		作業療法治療学		
	15	レクリエーション	30		理療療法治療学				105	作業療法研究法	229
	社会の理解				65	神経筋障害理学療法治療学	139		106	作業治療学理論	231
	16	生物と環境	32		66	神経筋障害理学療法治療学実習	141		107	身体障害作業治療学Ⅰ	233
	17	現代社会の理解	34		67	運動器系障害理学療法治療学	144		108	身体障害作業治療学Ⅱ	235
	18	国際協力論	36		68	運動器系障害理学療法治療学実習	147		109	身体障害作業治療学実習	237
	19	経営学	38		69	内部疾患系障害理学療法治療学	150		110	精神障害作業治療学	239
	20	法学入門	40		70	内部疾患系障害理学療法治療学実習	152		111	精神障害作業治療学実習	241
	21	社会福祉学	42		71	小児疾患系障害理学療法治療学	155		112	発達障害作業治療学	243
専門 支 持 科 目	複合教養				72	小児疾患系障害理学療法治療学実習	157		113	発達障害作業治療学実習	245
	22	スタートアップセミナー	44		73	老年期障害理学療法学	159		114	高齢期作業療法学	248
	23	医療職教養演習（理学療法学専攻）	46		74	日常生活活動学	161		115	日常生活作業学Ⅰ	250
	24	医療職教養演習（作業療法学専攻）	48		75	日常生活活動学実習	163		116	日常生活作業学Ⅱ	252
	人体の構造と機能及び心身の発達				76	義肢装具学	165		117	日常生活作業学実習	254
	25	解剖学Ⅰ	50		77	義肢装具学実習	167		118	高次脳機能障害作業治療学	256
	26	解剖学Ⅱ	53		78	物理療法学	169		119	義肢装具学	258
	27	解剖学実習	55		79	物理療法学実習	171		120	義肢装具学実習	260
	28	生理学Ⅰ	58		80	臨床理学療法総合演習	173		121	臨床作業療法演習	262
	29	生理学Ⅱ	60		地域理学療法学				地域作業療法学		
	30	生理学実習	62		81	生活環境論	176		122	リハビリテーション関連機器	265
	31	運動学総論	65		82	予防理学療法学	178		123	地域作業療法学	267
	32	運動学	67		83	予防理学療法学実習	180		124	地域作業療法学実習	269
	33	運動生理学	70		84	地域理学療法学	183		125	就労支援学	271
	34	運動学実習（理学療法学専攻）	72		総合理学療法学				総合作業療法学		
	35	運動学実習（作業療法学専攻）	74		85	臨床実習Ⅰ（見学）	185		126	臨床実習Ⅰ（見学）	273
	36	人間発達学	76		86	臨床実習Ⅱ（地域）	187		127	臨床実習Ⅱ（地域）	275
	疫病と障害の成り立ち及び回復過程の促進				87	臨床実習Ⅲ（評価）	189		128	臨床実習Ⅲ（評価）	277
	37	病理学	78		88	臨床実習Ⅳ（総合１）	191		129	臨床実習Ⅳ（総合１）	279
	38	公衆衛生学	80		89	臨床実習Ⅴ（総合２）	193		130	臨床実習Ⅴ（総合２）	281
	39	臨床心理学	82		90	臨床セミナー	195		131	臨床セミナー	283
	40	内科学	84		91	卒業研究	197		132	卒業研究	285
	41	整形外科学	86		92	総合演習	200		133	総合演習	287
	42	神経症候学	88		専門 発 展 科 目				臨床演習		
	43	精神医学	90						134	臨床力アップ演習Ⅰ（病期別）	291
	44	小児科学	92						135	臨床力アップ演習Ⅱ（中枢神経系障害）	293
	45	リハビリテーション医学	94						136	臨床力アップ演習Ⅲ（運動器系障害）	295
	46	医療安全学	96						137	臨床力アップ演習Ⅳ（内部障害）	297
	47	臨床検査・画像診断学	98						138	臨床力アップ演習Ⅴ（精神障害）	299
	48	総合リハビリテーション学	100						139	臨床力アップ演習Ⅵ（発達支援）	301
	保健医療福祉とリハビリテーションの理念								140	臨床力アップ演習Ⅶ（スポーツ支援）	303
	49	リハビリテーション概論	103								
	50	多職種連携	105								
	51	障がい者スポーツ概論	107								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
1	生命の科学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	選択	2単位	30時間
担当教員名						
森谷 和司						
実務経験のある教員						
授業概要						
私たち生物はDNAを遺伝子の本体とし、40億年近く前に誕生した生命体から延々とそれを受け継いできている。近年の急速に進歩した生命科学は生命・生物に対して新しい知見や見方を示し、生命に対する考え方を変えていく。本科目では、高等学校で学んだ生物学の知識に基づき、主にヒトに関わることを中心に生命現象について学修を進め、生命倫理についても学ぶ。学んだことが専門科目への橋渡しとなり、将来に役立つ科学的なものの見方・考え方ができるようになってくれることを期待する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①生物や生命現象について、生命科学の基本的な概念や原理・法則を使って説明することができる。 ②生命倫理とは何か、現代社会との関わり、その重要性と意義について述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③ヒト及び身の回りの生物や生命現象に関する事柄・トピックに、科学的な思考や判断で対処できる。 ④生命倫理、現代社会との関わり、生命倫理に関する今日の話題について科学的な思考や判断で対処できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤ヒト及び身の回りの生物や生命現象に関わる事項について興味・関心を持ち、自ら課題をもって学ぶことができる。 ⑥生命倫理と現代社会の関わり、生命倫理に関する今日の話題について興味・関心を持ち、自ら課題をもって学ぶことができる。					
授業形態						
講義	配付資料とスライドを用い、グループ・ワークも導入する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	森谷	生命とは何か	生命とは何かについてグループ・ディスカッションを行う。 生命の特徴、起源、生命の基本単位である細胞について学修するとともに、生命をつくる物質の化学的性質と役割について学修する。			
2	森谷	細胞の構造と機能	生命の基本単位である細胞の構造、機能について学修するとともに、細胞内での物質の移動、細胞膜を通した物質の移動についても学修する。			
3	森谷	細胞の増殖と分化	細胞分裂、細胞の分化、組織、器官について学修する。			
4	森谷	生命活動とエネルギー	酵素の働き、物質交代とエネルギー交代、エネルギーと生命活動について学修する。			
5	森谷	遺伝の法則① ーメンデル遺伝の基礎ー	メンデル遺伝学の基礎　遺伝のしくみについて学修する。			
6	森谷	遺伝の法則② ーメンデル遺伝の応用ー	メンデル遺伝学の応用　様々な遺伝現象とそのしくみについて学修する。			
7	森谷	遺伝の法則③ ー様々な遺伝現象ー	ヒトを中心に、様々な遺伝現象について学修する。			

8	森谷	遺伝子の本体	遺伝子とは何か、その本体のDNAについて学修する。					
9	森谷	遺伝情報の発現	DNAの遺伝情報をもとにタンパク質が合成されるしくみを学修する。					
10	森谷	生物の発生	動物の発生過程と分化のしくみについて学修する。					
11	森谷	人体のしくみ① －筋肉運動・神経系－	ヒトの筋肉運動、神経の調節について学修する。					
12	森谷	人体のしくみ② －自律神経系・内分泌系－	ヒトの自律神経、ホルモンのはたらきについて学修する。					
13	森谷	動物の行動	動物の行動とそのしくみについて学修する。					
14	森谷	生体防御－免疫	ヒトの免疫機能について学修する。					
15	森谷	生命倫理と現代社会	生命倫理とは何か、その重要性と意義についてグループ・ディスカッションを行う。生命倫理と現代社会の関わり、生命倫理の今日的話題について学修するとともに、講義全体をとおして自らの学びを振り返る。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			60	①②③④
	課題		●	●		●	20	①②③④⑤⑥
	講義の振り返り					●	20	⑤⑥
評価の 特記事項	課題、授業の振り返りは授業ごとに評価する。なお、評価基準は授業内で説明する。 全評価の合計が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。その際は、筆記試験で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）学習の目的を理解し、内容を調べる。 （事後）授業中に指示された課題を解答する。 （復習）授業プリントを振り返り、まとめ直して十分に理解する。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
毎回授業の終わりに簡単な課題を提示し、コメントペーパーを回収する。 次回の授業の冒頭で課題の講評やコメントペーパーの質問対応等を行う。								
教科書								
使用しない。授業用のプリント・資料を配布する								
参考図書								
参考図書は授業の中で紹介する。								
備考：履修者への要望								
今までに学んだ生物の知識を深め、生命についての新たな見方・考え方を身に付け、間違った情報に流されず、正しく科学的な判断ができるようになってもらいたい。そのためには、ヒト及び身近な自然、生命倫理等に関する新聞等の記事にも関心を持ち、生命科学のおもしろさを実感してもらいたい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
2	エネルギーのしくみ	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	選択	2単位	30時間
担当教員名						
古池 観司						
実務経験のある教員						
授業概要						
物理学の中でも特に力学・熱力学・電磁気学分野を中心に、エネルギーに関する理論・法則性を講義のなかで理解するとともに、定量的な問題をくり返し解く演習により基礎知識の理解を深め、エネルギーの概念をふまえた思考が身につくことを目指す。最近のハイテク機器の進歩は、急速かつ高度化しており、医療分野の機器も例外ではない。医療現場に導入された各種のハイテク機器は、使いこなされてこそ、その能力・真価が発揮される。そのためには、物理の基礎・基本原理を理解した上で専門的な学修を進めることが望ましく、当講義の学修成果は、さらなる技能の向上と作業の熟練により一層の効果をあげるものとする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①「エネルギーの概念」を理解し、その法則を使った計算ができる。 ②教科書記載のリンクを使って実験動画等を視聴し、その現象の理解を深めることができる。					
思考・判断 ・表現	③学習して身に着けた理論、法則、公式を、教科書の演習問題や応用問題に適切に当てはめて問題を解くことができる。 ④ケアレスミスや自身の読み違い等による失敗を起こしにくい、見やすく適切な解答を書くことができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤ものごとを物理学的にとらえ、初見では解き方のみちすじすらわからないような問題にも粘り強く取り組んで解答し、課題を期限までに提出できる。 ⑥基本問題が解けるようになったら、応用問題にも積極的に挑戦し解答することができる。					
授業形態						
講義	講義を中心とした理論と演習問題の解説で展開する。さらに、必要に応じスマートフォンまたはタブレット端末で教科書記載のリンクを利用し、講義内容に関連する実験動画を各自が確認することで理解を深める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	古池	物理の基本の基本 運動 (Ⅰ)	物理量とは 単位と量の表し方・有効数字・次元 速さ、直線運動をする物体の位置と速度・変位			
2	古池	運動 (Ⅱ)	直線運動をする物体の加速度、等加速度直線運動 平面運動の速度と加速度			
3	古池	力と運動 (Ⅰ)	ニュートンの運動の法則 (慣性の法則・運動の法則・作用反作用の法則) 運動量と力積 直線運動での運動の法則			
4	古池	力と運動 (Ⅱ)	地球の重力 (重力・垂直抗力) 力の合成と分解 (合力・偶力・分力) 運動方程式を使った問題の解き方 (Ⅰ)			
5	古池	力と運動 (Ⅲ)	運動方程式を使った問題の解き方 (Ⅱ) 摩擦力が働く運動 (最大静止摩擦力・動摩擦力) 力のつり合い			
6	古池	仕事とエネルギー	力と仕事、仕事率 仕事と運動エネルギーの関係、重力のする仕事と重力ポテンシャルエネルギー 力学的エネルギー保存則、エネルギー保存則			
7	古池	周期運動 (Ⅰ)	円周運動とは 回転力			

8	古池	周期運動（Ⅱ） （連続体の力学）	等速円運動 単振動 （圧力、密度、水圧、浮力・アルキメデスの原理、力と変形）					
9	古池	波動（Ⅰ）	波の発生、伝わり方、波を表す量 波の性質（独立性と重ね合わせの原理・干渉・反射・屈折・回折・定在波）					
10	古池	波動（Ⅱ）	音波（縦波）・音の三要素・音速・うなり・ドップラー効果・超音波 光波（横波）・反射・屈折・全反射・光の分散と電磁波のなかま					
11	古池	熱と温度（Ⅰ）	熱と温度、相と相転移（物質の三態と状態変化・融点・沸点） 熱と分子運動・内部エネルギー 熱容量と比熱容量、相転移と熱転移、熱の移動					
12	古池	熱と温度（Ⅱ）	理想気体の状態方程式 熱力学第一法則（断熱過程と永久機関）・熱力学第二法則（不可逆過程とエントロピー増大の法則）・熱機関					
13	古池	電荷と電流	静電気と電流（クーロンの法則、電場・電位とエネルギー） オームの法則（回路を流れる電流・端子間の電圧・電気抵抗） 電源・電流の仕事率（電気とエネルギー・消費電力）					
14	古池	電磁気学	磁石と磁場、電流のつくる磁場 電磁誘導、交流と直流 電磁波					
15	古池	原子力	原子物理学の基礎 原子核（核エネルギー・原子力の平和利用と課題）					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			75	①②③
	課題		●	●		●	25	①②④⑤⑥
評価の 特記事項	筆記試験は、教科書の例題、問、演習問題より一部手直したものを出题する。 課題は、各回の復習と定着のために毎回課す。課題の評価については授業内で説明する。 筆記試験と課題を合わせて6割に達しなかった場合、再試験を行う。なお、再試験の評価は筆記試験のみで行う。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
科目の性質上、類題を繰り返し演習する過程で問題を解けるようにしていく必要がある。そのため、講義中に教科書から問題を指定するので、必ず講義終了後に紙に書いて解くこと。課題として指示したものについては、期限までに提出することが求められる。（この課題提出は上記のとおり評価の一部となる）。指定した問題の解答に要する時間は1～2時間程度であるが、類題・応用問題、あるいは自身で条件（問題文中の数値等）を変えて解いてみるなど、自分自身で工夫して問題解法の定着を図ることができれば高い評価が得られる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題はノートまたはルーズリーフ等へ書き、答え合わせをしたものを提出（記名を忘れないこと）。ただし、課題の答え合わせは各回の演習問題を全問解答し終えてから教科書巻末の解答を見て行うとともに、不正解だった問題は必ず、再度解き直す。これを次回講義開始時に提出する。（次々回の講義日までに点検して返却されるので各自でファイリング保管して筆記試験に備える）								
教科書								
「物理学入門 新装版」原康夫 学術図書出版社								
参考図書								
「文系の私に超わかりやすく物理を教えてください！」西成活裕 かんき出版 「始まりから知ると面白い 物理学の授業」佐巻健男 山と溪谷社 「イチから鍛える物理演習」木村亮太 学研プラス その他、高校で使った教科書「物理基礎」「物理」および「問題集」								
備考：履修者への要望								
受講生の中には理系で物理を選択してきた人があるかもしれないが、本科目では高等学校で「物理基礎」または「科学と人間生活」のみ履修した（「物理」は選択履修していない）ことを前提で進める。上にも書いたように、基本事項を確実に習得して専門科目に生かしていくよう、帰宅後または講義終了後に演習問題を必ず解いて身につける努力を求める。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
3	情報科学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
田中 雅章						
実務経験のある教員						
田中 雅章：Word、Excel、PowerPointの実技検定に携わった実績がある教員が、Office操作の技術指導をする。						
授業概要						
情報科学ではパソコンを使って効率よくデータや事務処理を行う方法を習得する。ネットワーク社会でのルールやモラルを理解する。また医療従事者として情報倫理や情報データの取り扱いについて学習する。 Wordは公文書の規則を学び、効率の良い文書作成方法を習得する。Excelは操作方法学び、効率の良いデータ処理方法を習得する。 PowerPointは課題に基づき、他の学生と相談しながらプレゼンテーションを完成させる。 毎回の授業終了時にPCやスマホからリフレクションを入力し、15回目にリフレクション活動の総括を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①医療従事者として、個人情報保護や情報倫理、AIを理解し、正しい実践ができる。					
思考・判断 ・表現	②課題に従って、適切なプレゼンテーションの表現ができる。					
技能	③Officeの機能を理解し、目標とする文書作成やデータ処理、プレゼンの作成ができる。					
関心・意欲 ・態度	④期日までに課題の提出ができる。 ⑤リフレクション活動を通じて、客観的な自己分析ができる。					
授業形態						
講義	教科書に沿って、パソコンを利用する演習形式の講義 アクティブラーニングを実践する（リフレクション活動）					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	田中	情報処理・情報倫理	授業オリエンテーション、リフレクションの提出方法・提出規則 医療従事者としての情報倫理を事故事例を交えながら説明する。			
2	田中	OSの基本操作 Word入門	Windowsの基本操作を習得し適切なフォルダーやファイル操作・管理を行う。ペイン トの基本操作を習得する。Word入門でワープロの概念を理解する。			
3	田中	Word基本	Wordの基本操作を理解し、文書作成の基本を習得する。			
4	田中	Word応用	Wordの応用操作を理解し、公文書やレポートの作成方法を習得する。			
5	田中	Wordまとめ	Word目標到達を確認する実技試験を行う。不合格者は補習を実施する。			
6	田中	Excel入門	Excel入門で表計算の概念を理解する。ExcelとWordの違いを理解する。			
7	田中	Excel基本	Excelのデータ入力規則を理解する。演算子と計算式や関数を理解する。			

8	田中	Excel応用	Excelの条件判定や検索を理解する。					
9	田中	Excelグラフ	グラフの種類と作成方法を理解する。					
10	田中	Excelまとめ	Excel到達目標を確認する実技試験を行う。不合格者は補習を実施する。					
11	田中	フォトレタッチ	フォトレタッチによる画像編集を習得する。					
12	田中	PowerPointを使ったプレゼンテーションの作成方法	PowerPointの基本的な使い方と画像編集の技術を習得する。					
13	田中	プレゼンテーションの企画立案	出題されたテーマに基づき、他の学生と相談しながらプレゼンテーションの企画立案を行う。					
14	田中	プレゼンテーションの制作と提出	完成したプレゼンテーションをオンライン提出する。					
15	田中	リフレクション活動の振り返り・AI	提出したリフレクションの一覧表に基づき振り返り活動の総括を行う。個人情報保護・情報倫理・AIの理解を深める。					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実技試験				●		40	③
	プレゼンテーション			●	●		20	②③
	課題提出				●	●	20	③④⑤
	リフレクション活動		●	●		●	20	①②④⑤
評価の特記事項	実技試験は、Word実技試験（20点）、Excel実技試験（20点）を実施する。 プレゼンテーション作品（20点）は、別に示したルーブリックに基づき評価する。 課題提出（20点）は、別に示したルーブリックに基づき評価する。 リフレクション活動（20点）は、別に示したルーブリックに基づき評価する。 全ての合計得点が、6割に達しなかった場合は、再試験（課題レポート＋課題提出）を実施する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）事前に教科書を読み、内容を理解し、授業に備える（1時間）。 （復習）教科書および配布した講義資料を用いて授業を振り返り、リフレクションペーパーに記入し、授業内容を知識として定着させる。 授業で習った操作ができるように復習する（3時間）。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出された課題は、完成度によって、再提出を求める。各提出状況・合否状況を一覧表にし、次回の授業でフィードバックする。 提出されたリフレクションペーパーは、提出状況を一覧表にし、次回の授業でフィードバックする。提出内容はICTを活用した内容分析を行い、次回の授業の復習計画の資料にする。								
教科書								
「例題50+演習問題100でしっかり学ぶ Word/Excel/PowerPoint+情報・AIリテラシー標準テキスト」 技術評論社編集部 技術評論社								
参考図書								
「30時間でマスター Office2024」実教出版企画開発部編 実教出版								
備考：履修者への要望								
医療現場では医療・コンピューターの進歩が著しい。現場でコンピューターを使いこなせる技術を習得する。各自が復習に努め、思い通りに情報機器が使えるように努めてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
4	基礎統計学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
山田 和政						
実務経験のある教員						
山田和政：医療・介護保険分野において理学療法士としての勤務経験のある教員が、リハビリテーション医学関連の研究論文を理解する上で必要な統計手法について教授する。						
授業概要						
健康診断における多くの検査項目の基準値は、統計学的に求められている。また、リハビリテーション医学関連の研究論文を理解する上で統計手法の理解が必要となる。本授業では、医療分野で必要とされる医学統計学の基本的概念や考え方を理解するとともに、各種データをパソコンを用いて解析し、統計学の基礎知識を深める。 授業終了時にスマホからリフレクションを入力し、15回目にリフレクション活動の総括を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①医療従事者として基準値が統計学的に求められている根拠を理解することができる。					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度	②積極的にリフレクション活動を行うことができる。					
授業形態						
講義	基本的に講義資料と教科書を中心とした講義形式であるが、理解を深めるためパソコンを使用した演習も行う。 また、アクティブラーニングを実践する（リフレクション活動）。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田	統計データを探す	多くの検査項目の基準値は統計学的に求められていることを知る			
2	山田	データのばらつきを調べる	2つの変数間の関係を調べ、質的変数と量的変数を理解する			
3	山田	一部から全体を知る	母集団と標本、確率モデルを理解する			
4	山田	一部から全体の特徴を当てる	「風邪薬の有効率はどのように計算され、どのような用途に活用されているのか？」の事例を通して理解する			
5	山田	離散から連続へ	正規分布と連続値データの確率分布を理解する			
6	山田	母集団と分布を調べる	標本平均の分布と母集団の平均に対する検定を理解する			
7	山田	介入効果を調べる	t検定、等分散性の検定、ウェルチの検定を理解する			

8	山田	順位を用いて介入効果を評価する	ウイルコクソンの順位和検定を理解する					
9	山田	割合の違いを検討する	患者対照研究におけるフィッシャーの直接確率法を理解する					
10	山田	必要な標本サイズを決める	検定に必要な標本サイズを理解する					
11	山田	2つの変数の関係	2変量の関係を要約する相関関係を理解する					
12	山田	判別と閾値	薬の量と効き目の関係を調べる用量反応関係を理解する					
13	山田	打ち切りデータ	コックスの比較ハザードモデルによる生存確率の差の検定を知る					
14	山田	同じ土俵で比較する	層別化による交絡因子の調整、偏相関係数による交絡因子の調整から年齢調整済死亡率を求める					
15	山田	折れ線を当てはめる	折れ線回帰による折れ線を当てはめる					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				60	①
	リフレクション活動					●	40	②
評価の 特記事項	期末試験（筆記試験）を実施する。中間試験は実施しない。 リフレクション活動（40点）と期末試験（60点）にて評価する。 リフレクション活動については、事前に提示する評価基準を用いて評価する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施し、筆記試験のみで評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
予習：事前に教科書を読み、内容を理解し、授業に備える（1時間）。 復習：教科書および配布した講義資料を用いて授業を振り返り、リフレクションペーパーに記入し、授業内容を知識として定着させる（3時間）。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出されたリフレクションペーパーの提出状況を一覧表にしてフィードバックする。 筆記試験の答えは返却しないが、希望者には個別に開示する（事前連絡必要）。								
教科書								
「PT・OTのための統計学入門」渡邊宗孝、寺見春恵、金子翼 三輪書店								
参考図書								
「事例でわかる統計シリーズ 医療系のための統計入門」景山三平 監修 実教出版								
備考：履修者への要望								
理学療法士・作業療法士が活躍する場では、統計学を根拠としている数値や統計学を用いる場面が多々ある。 各自が予習・復習に努め、興味をもって授業に望み、正しい統計学を身につけてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
5	医療英文講読	理学療法学専攻 作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
山森 孝彦						
実務経験のある教員						
山森 孝彦：医学部において20年間、論文講読授業等の教育実績のある教員が、医療に関する英語の語彙力、読解力を伸ばし、英語で書かれた医療に関する論文を読むコツを解説する。						
授業概要						
英語論文の構造を理解し、英語で書かれた医療に関する論文の読解力の基礎訓練となる演習課題を行う。指定されたリハビリテーションに関する論文について、演習課題を解きながら可能な限り自力で読解を進め、グループ学習を行い内容理解を深める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①英語で書かれた医療に関する論文の基本的な構造を理解し、リサーチクエッションが書かれている位置を特定できる。					
思考・判断 ・表現	②論文に書かれている情報が信頼に値する内容であるかどうかを考え、判断する手掛かりを探すことができる。					
技能	③英語で書かれた医療に関する論文から、PICO(Patients, Intervention, Comparison, Outcome)や自分が必要とする情報を抽出することができる。					
関心・意欲 ・態度	④英語で書かれた医療に関する論文を意欲と関心を持って読むことができる。					
授業形態						
講義	英語で書かれた医療に関する論文を課題論文にして、授業中に演習課題をこなしながら論文のどこに着目すれば良いかを体得する演習を行う。またスライドによる解説とアクティブラーニングを組み合わせ授業を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山森	医学論文の構造	授業の進め方　医学論文の構造（タイトル, IMRaD, Research Question）			
2	山森	方法の読み方	研究デザイン、PICOについて			
3	山森	結果の読み方	表とグラフの読み方について			
4	山森	討論と序論の読み方	討論に書かれている項目数。序論の展開のパターン			
5	山森	質問の創出	質問をグループ学習で考えることで書かれている内容の理解を深める			
6	山森	解説①	論文中に出てきた難しい英文の文構造を解説し、DiscussionやIntroductionなどを読みすすめる。			
7	山森	解説②	論文中に出てきた難しい英文の文構造を解説し、DiscussionやIntroductionなどさらに深く読みすすめる。			

8	山森	総括	授業の総括をおこなう。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題・小テスト	●	●	●	●	40	①②③④
	筆記試験	●	●	●		60	①②③
評価の 特記事項	授業内で行う演習課題の取り組み、授業後に提出する課題と単語テスト等の小テストで40％、筆記試験60％で評価する。課題等の評価方法の詳細については授業中に説明する。再試験は、すべての評価方法の合計点数が100点中の60点に達しなかった場合に実施する。再試験は補充した課題40％と定期試験時と同じ範囲の筆記試験60％で評価する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
電子辞書や、ライフサイエンス辞書、英辞郎等のオンライン辞書を手間を惜しまずに引くこと。授業で取り扱った重要語彙はクラウド上に載せておくので、次回の単語小テストに向けて、スキマ時間を使って正しい発音とともに覚えること。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
小テスト・授業内演習・課題等に関するフィードバックは授業中に行う。筆記試験に関する総括と、全体へのフィードバックはGoogle Classroomで行う。また個別のフィードバックについてや質問は随時受け付ける。							
教科書							
課題論文やその演習問題は印刷して授業で配布する。							
参考図書							
意欲的に発展学習をしたい学生に対して、参考図書と推奨動画を授業中に随時紹介する。							
備考：履修者への要望							
「英語で医療語彙」は日本語/英語/発音の語彙リストを作成してクラウド上に載せた教材を用意する。英語論文を効率的に読むためのAI翻訳や生成AIの適切な活用方法についても論ずる。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
6	心理学基礎	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
松田 裕美						
実務経験のある教員						
松田 裕美：公認心理師として認知行動療法に基づくカウンセリングの実務経験を有する。臨床経験をもとに、本授業にカウンセリング理論・実習を導入し、学生自身の自己理解や障害受容などリハビリテーションの対象者への支援等に関する知識・技能の学修を促進する。						
授業概要						
本科目は、目に見えない人間の「心」の諸相を心理学の立場から把握することを目的とする。「心」とは一体何なのかという疑問を心理学の歴史を概観することによって知り、代表的な心理学の知見を実際の日常生活上の事象と関連付けながら学修していく。リハビリテーションにおける心理学の役割や心理職との連携など臨床現場での具体例を基に教示する。また、受講生の大半は青年期の学生であるため、青年期の発達課題であるアイデンティティ確立を見据え、学生自身の自己理解や自己洞察、メタ認知を促すことを目的に、適宜グループディスカッションや演習を実施し、他者との違いや多様性について学びを深めていく。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2○	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①理学療法士・作業療法士国家試験の心理学分野の用語や定義を説明できる ②リハビリテーション対象者の心理的葛藤、受容の過程について説明できる					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度	③グループディスカッションや演習にて他者との違いや多様性を知ることができる ④目には見えない、答えのない事象について他者との違いを感じながら受け入れることができる					
授業形態						
講義	教科書や補足資料、スライドを用いた講義を行う。また、Googleformsで授業の疑問、次回授業の目標を聴取しICTを活用した双方向授業を行う。適宜グループディスカッションや演習を実施し、他者との違いや多様性について学びを深めていく。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松田	オリエンテーション 心理学とは？	シラバス、科目試験等の説明 心理学や心理職に対するイメージ調査 心理学と哲学の歴史の概観			
2	松田	知覚と認知の心理	認知・感覚・知覚—物理的な刺激とその反応の関連 認知心理学、行動主義、認知行動療法との関連 記憶の不思議なメカニズム—短期記憶、長期記憶、忘却曲線			
3	松田	行動と学習の心理	学習とはなにか？—古典的条件づけと試行錯誤学習 やる気スイッチはどこにある？—動機づけの種類			
4	松田	社会や集団の心理	第一印象は大切?!—印象の初頭効果とバイアス 人はどうやって説得されるのか？—信憑性と心理的リアクタンス			
5	松田	成長と発達の心理	人は一生成長し続ける?!—障害発達と各種発達段階 相手の気持ちはいつからわかるのか—情動発達と共感性 子どもは遊びが仕事なのか？—子どもの遊びと発達段階			
6	松田	パーソナリティと性格の心理	パーソナリティとは？—類型論と特性論 場面によって性格は変わるのか？—生まれ育ちの相互作用 男らしさ、女らしさって何だろう？—社会によって作られる性差			

7	松田	心の病と臨床の心理	どうしてストレスを感じるの？—ストレッサーとストレス反応 心の病とは？—各種疾患の特徴 心理職って何をしているの？—認知行動療法など各種療法について					
8	松田	まとめ	国家試験の過去問を用いた本科目の知識や理解の確認 本科目の要点の振り返り					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				70	①②
	感想・質問フォームの内容 内容		●			●	20	①②③④
	参加貢献度					●	10	③④
評価の 特記事項	筆記試験（70％）、感想・質問フォームの内容（20％）、参加貢献度（10％）で評価する。合計得点が60点の未満の場合は、再試験を行う。再試験は本試験と同様の成績評価を用いる。 毎回の授業後に感想、質問フォームを実施する。参加貢献度は、フォームが未提出の場合減点となるため、回答を忘れないよう心掛ける。感想・質問フォームの内容は、別紙ループブックを用いて評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
毎週の授業資料を元に予習・復習に努める。予習復習の要点がわからない場合は相談に乗る。 日々の生活の中で起こる事象を心理学の概念に当てはめて考えていると授業の内容理解が深まる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
感想・質問フォーム、筆記試験に関して希望者には随時フィードバックする。								
教科書								
「入門心理学：実験室からフィールドまで」水原幸夫　ナカニシヤ出版								
参考図書								
「ビジュアル図解心理学」植木理恵　著　中経出版								
備考：履修者への要望								
心理学は普段の生活で起こる出来事に名前をつけることのできる学問である。用語などは英語が多く難しく感じるかもしれないが、実際の生活に落とし込んで考えていけるようディスカッションや演習を用いながら実施する。その際は楽しんで、積極的に参加する。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
7	人間関係論	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
金子 幾之輔						
実務経験のある教員						
金子 幾之輔：大学の相談機関等でカウンセリング心理士・スーパーバイザーとしてカウンセリングの実務経験のある教員が、人間関係（とくに援助的人間関係）に関する知識・技能の学修を促進する。						
授業概要						
対象者との良好な人間関係を形成したり、職場（施設・病院等）における人間関係を円滑化したりするために、社会人として、医療従事者として、或いは個人として、どのように行動すればよいのかについて客観的、科学的に考察し、その行動を実践できるようになることを目的とし、講義形式を中心に一部演習形式を取り入れた授業形態で学修する。具体的には、日常生活上の事例を検討するなどして人間関係に関する基礎的な理論を把握するとともに、体験学習やグループワーク等を通じ援助的人間関係において必要な基本的態度やコミュニケーション技法に関する知識・技能について学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①人間関係に関する基礎的な理論を説明できる。 ②援助的人間関係において必要な基本的態度について述べることができる。 ③援助的人間関係において必要なコミュニケーション技法を適用できる。					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度	④技法修得に関心を抱き、そのための体験学習やグループワークに意欲的に参加し討議することができる。					
授業形態						
講義	自作の資料に基づいて平易に解説するとともに、体験学習やグループワークも導入する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	金子	オリエンテーション	本授業の目的、到達目標、授業計画等について学修する。			
2	金子	人間関係の基礎的な理論	(1) 人間関係の定義、人間関係に関する問題の社会的背景、好ましい人間関係について学修する。			
3	金子	人間関係の基礎的な理論	(2) 人間関係の要因、 (3) 人間関係の場面について学修する。			
4	金子	援助的人間関係において必要な基本的態度	態度の定義、個人的態度の捉え方(心理検査の体験学習)、援助的態度等について学修する。			
5	金子	援助的人間関係において必要な基本的態度	援助者に望まれる6つの態度(無防衛、共感、受容、熱意、間、距離)についてグループワーク等を通じ学修する。			
6	金子	援助的人間関係において必要なコミュニケーション技法	前述の6つの態度を実現するためのコミュニケーション技法の基礎である (1) 促しの技法、(2) 繰り返しの技法についてグループワーク等を通じ学修する。			
7	金子	援助的人間関係において必要なコミュニケーション技法	同様に(3) 要約の技法、(4) 解釈の技法、(5) 共感の技法、(6) 保証の技法、(7) 沈黙の技法、(8) 明確化の技法、(9) 質問の技法、(10) 対決の技法について学修する。			

8	金子	総括	これまでの授業の振り返り(リフレクション)を行う。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合(%)	到達目標	
		レポート	●			80	①②③	
		振り返り度	●			10	①②③	
		参加貢献度				●	10	④
評価の 特記事項	・レポートは、最終試験のみとする。 ・振り返り度は、毎回の授業の終わりにリフレクション(省察・振り返り：ミニッツペーパーの導入)を行い評価する。 ・参加貢献度は、体験学習やグループワーク等における発言頻度によって評価する。 以上3つの評価点を総合して評価する。評価基準については授業内で説明する。 なお、前記リフレクションは出欠確認も兼ねているので注意すること。 *本科目では、当該レポートを締切り日時までに提出しなかった場合、原則として不合格とし、合格点(60%)に満たなかった場合と同様に再試験(レポート)を実施する。その際も振り返り度及び参加貢献度を含んだ評価をする。							
準備学習(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間								
(予習) 心理学辞典や人間関係学および社会心理学の参考文献等を参照し、毎回の授業テーマや内容について検討しておくこと。 (復習) 授業で扱った内容を配布用スライドを参照するなどして自分なりにまとめること。 また、援助の人間関係において必要な基本的態度・コミュニケーション技法を向上させるために日常生活場面においてもその態度や技法の訓練に取り組むこと。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題(試験・レポート等)に対するフィードバックの方法								
課題(レポート、振り返り)に関する質問は適宜受け付ける。								
教科書								
授業に必要な自作の資料を配布する。								
参考図書								
授業の中で適宜紹介する。								
備考：履修者への要望								
援助の人間関係において必要な基本的態度・コミュニケーション技法を修得するために体験学習等で積極的にその態度や技法を訓練することを期待する。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
8	倫理学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	選択	2単位	30時間
担当教員名						
後藤 謙治						
実務経験のある教員						
後藤 謙治：医療機関側代理人弁護士としての実務経験を有する教員が、医療現場における倫理的葛藤を有する問題について、講義を行う。						
授業概要						
理学療法士・作業療法士は医療人としての高い倫理観を持つことが求められている。「倫理」の意味は「人倫の道のこと、社会生活で人の守るべき道理のこと」であり、人が普段の生活や社会で行動する際に善悪の判断において普遍的な基準となるものである。しかし、現代の生活においては何が正しいのかを決めることが難しい状況にあり、リハビリテーションにおいても判断することが容易でない場面もある。本科目では、日常の生活、医療・福祉・リハビリテーション等における倫理的葛藤の事例(再生医療、安楽死・尊厳死、患者の自己決定、終末期医療、ジェンダー、性的マイノリティなど)をグループにて検討し、自ら課題を発見し、探求・分析する力、自身の見解を論述する力を身につけることを目指し学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①医療現場における倫理的葛藤が生じる場面について、その問題点を指摘することができる。 ②倫理的な問題に関して前提となる知識を自らの言葉で説明することができる。					
思考・判断 ・表現	③倫理的葛藤が生じる場面について、複数の立場・考え方で論じることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④グループ討論や発表で、他者の意見を受け入れ、討論し、自分を意見を述べるすることができる。					
授業形態						
講義	教員作成資料による学修と、ブレインストーミング、グループワークなどのアクティブラーニングを組み合わせ、医療現場における倫理問題を理解する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	後藤	医療倫理の基礎	講師紹介、授業の進め方・評価方法の説明。 医療倫理の基礎を理解する。			
2	後藤	小テスト グループ討論	小テストの実施と解説。 医学的進歩に関する例題を用いたグループ討論の実施。			
3	後藤	グループ発表 医療情報の基礎	グループ発表。 医療情報の取扱いと守秘義務、インフォームドコンセント等について学ぶ。			
4	後藤	小テスト グループ討論	小テストの実施と解説。 医療情報に関する例題を用いたグループ討論の実施。			
5	後藤	グループ発表 安楽死・尊厳死の基礎	グループ発表。 生命倫理と安楽死・尊厳死について、理解を深める。			
6	後藤	小テスト グループ討論	小テストの実施と解説。 安楽死・尊厳死に関する例題を用いたグループ討論の実施。			
7	後藤	グループ発表 終末期医療の基礎	グループ発表。 終末期医療について、理解を深める。			

8	後藤	小テスト グループ討論	小テストの実施と解説。 終末期医療に関する例題を用いたグループ討論の実施。					
9	後藤	グループ発表 自己決定権の基礎	グループ発表。 自己決定権と治療選択について学ぶ。					
10	後藤	小テスト グループ討論	小テストの実施と解説。 自己決定権に関する例題を用いたグループ討論の実施。					
11	後藤	グループ発表 ジェンダーの基礎	グループ発表。 ジェンダーに関する一般的知識・問題点について学ぶ。					
12	後藤	小テスト グループ討論	小テストの実施と解説。 医療現場におけるジェンダーに関する例題を用いたグループ討論の実施。					
13	後藤	グループ発表 性的マイノリティの基礎	グループ発表。 性的マイノリティに関する一般的知識・問題点について学ぶ。					
14	後藤	小テスト グループ討論	小テストの実施と解説。 性的マイノリティに関する例題を用いたグループ討論の実施。					
15	後藤	グループ発表 医療現場における 倫理的諸問題	グループ発表。 医療現場における倫理的諸問題について、網羅的に学ぶ。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			40	①②③
	小テスト		●				35	①②
	グループ発表		●	●		●	25	①③④
評価の 特記事項	小テスト及びグループ発表の評価基準は、講義内で詳細を示す。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。 再試験を行う場合、筆記試験の点数のみでの評価とする。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）必要に応じて参考図書を熟読したり、取り扱うテーマに関する情報収集を行い、学習の目的を理解する。 （復習）授業の資料等を振り返り、各自でまとめ直すなど、取り扱ったテーマについて理解を深める。 その他、必要に応じて授業時間外に発表準備等を行う。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
授業に対する疑問点や質問は、随時受け付ける。 筆記試験は全体もしくは個別に閲覧・フィードバックをする。								
教科書								
特になし								
参考図書								
「医師が知っておきたい倫理学・医療倫理」川畑信也 中外医学社 「生命倫理への招待」塩野寛 ほか 南山堂 「ケースブック医療倫理」赤林朗 ほか 医学書院								
備考：履修者への要望								
臨床現場において直面し得る倫理的葛藤について、単なる知識の習得ではなく、立場や考え方の違いを深く理解することで、高い倫理観を備えた医療従事者として幅広く活躍するためのきっかけにしていきたい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
9	教育学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
牧 謙治						
実務経験のある教員						
牧 謙治：愛知県立高等学校教諭・校長・県立校長会理事、愛知県教育委員会主任主査、高校・官庁・大学での勤務経験のある教員が、医療分野と関連のある教育心理学の原理・方法・実践について紹介する。						
授業概要						
まず1) 幼年期・児童期・青年期における親子関係・生徒教師関係など、自分自身の印象に残る教育体験を振り返る。 次に2) 近現代の諸外国の代表的な教育思想家と教育改革について、時代背景・教育方法・教育成果の観点から振り返る。 さらに3) 現在進行形の教育の現状を知り、今後の行方を考える。また、その行方を過去の教育方法・教育成果と比較する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①人間形成の理念思想・学校と社会の歴史・現在進行中の教育について、幼年期・児童期・青年期における自己の教育体験（親子関係・生徒教師関係・学校社会体験など）と関連付けて、応用することができる。					
思考・判断 ・表現	②人間形成の理念思想・学校と社会の歴史・現在進行中の教育について、自己の教育体験と関連づけてワークシートで説明したり、課題レポートとして纏めて発表することができる。					
技能	③人間形成の理念思想・学校と社会の歴史・現在進行中の教育について、講義での活動において積極的に情報交換するために、関連図書や関連サイトなどを活用して情報収集することができる。					
関心・意欲 ・態度	④人間形成の理念思想・学校と社会の歴史・現在進行中の教育について、自己の教育体験から推測して、講義での活動について積極的かつ適切に意見交換をすることができる。					
授業形態						
講義	1) テキストの各省のテーマ・内容に沿った解説を行うとともに、各章の課題に取り組む。 2) 自分自身の家庭・学校・社会生活を振り返りながら、ワークシートの設問に取り組む。 3) 講義内の活動やレポート課題作成などにより他者理解を深め自らの感想・意見をまとめる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	牧	第1・2章 教育学とは 教えることの思想史	ソクラテス、プラトン（不知の知、イデア論） キリスト教に見る教育、コメニウス、ヘルバルト(教授学、教職の科学)			
2	牧	第3章 子どもが育つということ	ロック、ルソー、フレーベル、ピアジェ、ヴィゴツギー、ブルーナー(子ども観、 発達観、幼児教育と遊び、自ら学ぶ)			
3	牧	第4章 学校という難問	デューイ(近代学校の誕生、学校教育の目標、近代学校批判)			
4	牧	第5章 日本における近代学校の始 まり	学制、学年制、知育と徳育、教育勅語、モノとコト			
5	牧	第1・2・3・4・5章まとめ	序章・1・2・3・4・5章の学習理解度を把握するため、単元テストを行い、また ワークシートならびにレポートを用い、他者の考えを知り、意見や感想をまとめ る。			
6	牧	第6章 大衆化する教育	義務教育の普及、良妻賢母、大正新教育、生活綴方			
7	牧	第7章 戦時下の教育、そして 戦後へ	皇国民の錬成、戦後教育改革、教育における保守と革新			

8	牧	第8章 成長する経済、その時 若者は	高度経済成長期、人的能力開発政策、環境破壊に抗する教育					
9	牧	第9章 問われる学校の価値	教育問題、臨時教育審議会、新しい教育基本法					
10	牧	第6・7・8・9章まとめ	第6・7・8・9章の学習理解度を把握するため、単元テストを行い、またワークシートならびにレポートを用い、他者の考えを知り、意見や感想をまとめる。					
11	牧	第10章 学力/能力を教育学する	学力論、資質・能力/コンピテンシー、教育格差					
12	牧	第11章 学校と地域を教育学する	震災と復興、子どもの貧困、人口減少					
13	牧	第12章 ジェンダーとセクシュアリティを 教育学する	ジェンダー、基本的人権と性教育、セクシャリティの多様性					
14	牧	第13章 テクノロジーを教育学する	令和の日本型教育、公教育、ヒューマン・エンハンスメント					
15	牧	第10・11・12・13章まとめ	第10・11・12・13章の学習理解度を把握するため、単元テストを行い、またワークシートならびにレポートを用い、他者の考えを知り、意見や感想をまとめる。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	ワークシート		●	●		●	30	①②④
	単元テスト		●	●			30	①②
	レポート		●	●	●	●	20	①②③④
	意見・感想		●	●	●	●	20	①②③④
評価の 特記事項		・本科目では、ワークシート、単元テスト、レポート、意見・感想の評価点を合計して全体の評価とし、60点以上を合格とする。合格基準を満たさなかった場合は、対象者に別途説明する。 ・各評価方法の詳細については、講義内で説明する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
○事前学習：テキストの該当範囲を予習し、概要（疑問点）を把握しておくこと。（2時間程度） ○事後学習：授業で扱った内容を整理し、単元テスト・レポート発表に備えること。（2時間程度） （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出されたワークシート、レポート、意見・感想についての単元ごとの評価は個別に開示する。								
教科書								
「y-knot これからの教育学」神代健彦ほか 有斐閣								
参考図書								
必要に応じて授業内で紹介する。								
備考：履修者への要望								
予習の段階でしっかり教科書を読んでおくこと。また、ワークシートで自分の学習の振り返りを行うこと。単元テストで既習の内容を整理し、知識を積み重ねること。ワークシート課題において、自分の考え・他者の考えを比較検討すること。教養基礎科目であることを意識して、学びの基本を想起して、実行し、専門科目の学びを高める基礎とすること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
10	教育心理学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	選択	2単位	30時間
担当教員名						
牧 謙治						
実務経験のある教員						
牧 謙治：愛知県立高等学校教諭・校長・県立校長会理事、愛知県教育委員会主任主査、高校・官庁・大学での勤務経験のある教員が、医療分野と関連のある教育心理学の原理・方法・実践について紹介する。						
授業概要						
乳幼児期から青年期にかけての人間の精神・知能の発達や人格形成などについて、教育心理学の基本的なテーマ（心理発達、学習と評価、学級集団、教育相談、適応の改善・病理、特別支援、発達障害など）を家庭教育や学校教育の場面を中心にして扱うことで、様々な年齢層の患者と関わる理学療法・作業療法の場面にも通じるであろう人間理解を深める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①乳幼児期から青年期までの心理的・精神的発達に関する諸理論について、自らの経験を振り返り、他者と比較しつつ、家庭・学校・社会における教育的取組とその成果について、応用することができる。					
思考・判断 ・表現	②乳幼児期から青年期までの心理的・精神的発達に関する諸理論について、自らの経験を振り返り、他者と比較しつつ、家庭・学校・社会における教育的取組とその成果について、説明することができる。					
技能	③乳幼児期から青年期までの心理的・精神的発達に関する諸理論および検査方法や適用分野について理解を深め、グループ内で医療分野での有効性を検討することができる。（例 知能検査、性格検査、精神検査など）					
関心・意欲 ・態度	④乳幼児期から青年期までの心理的・精神的発達に関する諸理論について、他者の考えを知る中で自らの経験を振り返り、相互理解や協調性を高め、医療人として社会に貢献する素地を育むことができる。					
授業形態						
講義	1) テキストの各章のテーマ・内容に沿った解説を行う。 2) 自分自身の家庭・学校・社会生活を振り返りながら、ワークシートの設問に取り組む。 3) 講義内の活動やレポート課題作成などにより他者理解を深め自らの感想・意見をまとめる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	牧	序章 教職と教育心理学	・講義者の自分史（幼小中高の教育、教職と教育心理学） ・教育心理学の歴史や研究領域を学ぶ ・発達に対する心理学的な接近法を知る（医療への応用可能性は？）			
2	牧	第1章（前半） 小学生～高校生の発達	・小学生、中学生、高校生の心理発達の特徴を理解する Q 親子関係の心理的結びつきは何か？どう測定するか？			
3	牧	第1章（後半） 小学生～高校生の発達	・発達を説明する代表的理論であるピアジェ、フロイト、エリクソン、コールバーグの諸理論（説）を学ぶ Q 初期親子関係に重要なものは？ Q 親の養育態度と子の発達とは？			
4	牧	第2章 学習と動機づけ	・心理学からみた学習（連合説と認知説） ・外発的動機づけと 内発的動機づけ ・学習性無力感、自己効力感、記憶と忘却			
5	牧	第3章 学習指導法	・教室での授業形態 ・ブルーナーの発見学習と仮説実験授業 ・オーズベルの有意味受容学習 ・スキナーのプログラム学習 ・キルパトリックのプロジェクト法			
6	牧	序章・1・2・3章 まとめ	序章・1・2・3章の学習理解度を把握するため、単元テストを行い、またワークシートならびにレポートを用い、他者の考えを知り、意見や感想をまとめる。			
7	牧	第4章 教育評価	・教育評価 ・評価時期と評価基準 ・客観式テスト・論文体テスト ・ポートフォリオ評価 Q 学習指導要領と指導要録とは？ Q PISA学力調査とTIMSS学力調査とは？			

8	牧	第5章（前半） 学級経営と学級集団	・ 集団種類と凝集性・ 集団特徴の把握と心理検査（ソシオメトリック） ・ 集団力学（競争場面と同調行動、差別と偏見、ステレオタイプ） Q 人格の類型学とは？ Q YG性格検査、MMPI、エゴグラムとは？					
9	牧	第5章（後半） 学級経営と学級集団	・ 教師-生徒関係（教師のリーダーシップ、教師の期待＝ピグマリオン効果）・ 態度評価と教師評価のゆがみ Q 投影法による人格検査（ロールシャッハテスト、TAT（主題統覚検査）内田クレベリン精神検査）とは？					
10	牧	第6章 教育相談	・ 教育相談の一般的手続き・ ケース会議（事例検討）の進め方 ・ カウンセリングの技法・ 校内外との連携/コンサルテーション ・ 教師のカウンセリングマインド					
11	牧	第4・5・6章 まとめ	第4・5・6章の学習理解度を把握するため、単元テストを行い、またワークシートならびにレポートを用い、他者の意見を知り、意見や感想をまとめる。					
12	牧	第7章 生徒指導と進路指導	・ 生徒指導の目的と原理・ 問題行動・ 不登校(自己指導能力) ・ いじめ・ 進路指導の意義 ・ 進路発達理論・ 進路適正と指導（スーパーの理論・ 特性因子論）					
13	牧	第8章 適応の改善と病理	・ 青年期の心理学的特徴・ 児童生徒の不適応/適応機制（A.フロイト） ・ 予防的な心理療法（エンカウンターグループ、ロールプレイ） ・ 専門的な心理療法（精神分析、遊戯療法、箱庭療法、認知行動療法）					
14	牧	第9章 特別支援の理解・ 心理	・ インクルーシブ教育・ 発達障害の理解と指導・ LDの理解と支援・ AD/HD（注意欠如多動性障害）とASD（自閉症スペクトラム障害）の理解と支援 ・ 場面緘黙、摂食障害、パニック症、PTSD(心的外傷後ストレス障害)					
15	牧	第7・8・9章 まとめ	第7・8・9章の学習理解度を把握するため、単元テストを行い、またワークシートならびにレポートを用い、他者の意見を知り、意見や感想をまとめる。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連		評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
		ワークシート	●	●		●	30	①②④
		単元テスト	●	●			30	①②
		レポート	●	●	●	●	20	①②③④
		意見・感想	●	●	●	●	20	①②③④
評価の 特記事項		・ 本科目では、ワークシート、単元テスト、レポート、意見・感想の評価点を合計して全体の評価とし、60点以上を合格とする。合格基準を満たさなかった場合は、対象者に別途説明する。 ・ 各評価方法の詳細については、講義内で説明する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
○事前学習：テキストの該当範囲を予習し、概要（疑問点）を把握しておくこと。（2時間程度） ○事後学習：授業で扱った内容を整理し、単元テスト・レポート発表に備えること。（2時間程度） （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出されたワークシート、レポート、意見・感想についての単元ごとの評価は個別に開示する。								
教科書								
「ガイドライン学校教育心理学」大野木裕明ほか ナカニシヤ出版								
参考資料								
必要に応じて授業内で紹介する。								
備考：履修者への要望								
教育心理学の基礎知識を修得するために、家庭生活や学校/社会生活の中での心理学的事象について興味・関心を抱き、心理学に関する資料等を活用するなどして、興味・関心を掘り下げることを期待する。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
11	英語 I	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
山森 孝彦						
実務経験のある教員						
山森 孝彦：医学部において英語での問診指導等、医学英語教育の実績(20年間)のある教員が医療に関する英語の4技能を伸ばす指導を行う。						
授業概要						
怪我や病気で医療機関を訪れた海外からの旅行者が日本語を全く話せない場合でも英語なら通じる場合は多い。そんな時、医療人に必要となるコミュニケーションの道具としての英語を授業では学ぶ。また毎週、医療に関する基本的な語彙を正しい発音とともに習得する。海外からの旅行者の診療で対応することのみならず、現場に出てから海外での勤務や学会でも対応できるようにする。						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①身体の部位や動作に関する基本的な英語語彙の理解と伝達ができる。					
思考・判断 ・表現	②診療場面でよく使う英語表現を使うことができる。					
技能	③英語で主訴を尋ねて相手の訴えを理解することができる。					
関心・意欲 ・態度	④異なる文化や言葉のを持つ人の価値観を尊重し、共感的な態度で接し、声かけをすることができる。					
授業形態						
講義	アクティブラーニング(ペアワーク、演習プリント、復習小テスト)を中心に、スライドによる講義を組み合わせで行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山森	ガイダンス	授業の進め方と教材紹介と評価方法　英語で医療語彙01			
2	山森	初回の挨拶をしよう	Lesson 1　(p. 2～) 英語で医療語彙02			
3	山森	痛む部位を開いてみよう	Lesson 2　(p. 8～) 英語で医療語彙03			
4	山森	痛みの種類や程度を聞いて見よう	Lesson 3　(p. 14～) 英語で医療語彙04			
5	山森	Lesson 1-3の復習	Lesson 1-3　(p. 2～p. 19) 英語で医療語彙05			
6	山森	痛みの経過を聞いて見よう	Lesson 4　(p. 20～) 英語で医療語彙06			
7	山森	基本的な肢位を指示してみよう	Lesson 5　(p. 26～) 英語で医療語彙07			

8	山森	応用的な肢位を指示してみよう	Lesson 6 (p. 32～) 英語で医療語彙08					
9	山森	Lesson 4-6の復習	Lesson 4-6 (p. 20～p. 39) 英語で医療語彙09					
10	山森	バイタルサインを確認しよう	Lesson 7 (p. 40～) 英語で医療語彙10					
11	山森	自動可動域を測定してみよう	Lesson 8 (p. 46～) 英語で医療語彙11					
12	山森	他動可動域を測定してみよう	Lesson 9 (p. 52～) 英語で医療語彙12					
13	山森	Lesson 7-9の復習	Lesson 7-9 (p. 40～p. 57) 英語で医療語彙13					
14	山森	発表会1	前期に学んだ英語表現を組み合わせPT, OPと患者との会話を演じる					
15	山森	発表会2	前期に学んだ英語表現を組み合わせPT, OPと患者との会話を演じる					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合 (%)	到達目標
	課題・小テスト		●	●	●	●	40	①②③④
	筆記試験		●	●	●		60	①②③
評価の特記事項	授業内で行う演習課題の取り組み、授業後に提出する課題と単語テスト等の小テストで40%、筆記試験60%で評価する。課題等の評価方法の詳細については授業中に説明する。再試験は、すべての評価方法の合計点数が100点中の60点に達しなかった場合に実施する。再試験は補充した課題40%と本試験時と同じ範囲の筆記試験60%で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
授業中に解説した重要ポイントの復習し、習った単語の発音を練習し小テストへ向けた学習をすることに1時間ほど時間をかけること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テスト・授業内演習・課題等に関するフィードバックは授業中に行う。筆記試験に関する総括と、全体へのフィードバックはGoogle Classroomで行う。また個別のフィードバックについて知りたい場合や質問は随時受け付ける。								
教科書								
「PT・OTが書いたリハビリテーション英会話」 三木貴弘ほか メジカルビュー社								
参考図書								
教科書と並行して、最新の医療ニュース記事や、医療関係の海外の動画を、授業中に随時紹介する。								
備考：履修者への要望								
「英語で医療語彙」は一般的な医療語彙の中で使用頻度の高いものから優先的に、日本語/英語/発音の語彙リストを作成してクラウド上に載せるので、スキマ時間に自学自習をすること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
12	英語Ⅱ	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
山森 孝彦						
実務経験のある教員						
山森 孝彦：医学部において英語での問診指導等、医学英語教育の実績(20年間)のある教員が医療に関する英語の4技能を伸ばす指導を行う。						
授業概要						
医療に関する最新情報は世界中で英語で発信されており、英語はその世界への扉をあける鍵である。海外におけるphysical therapistやoccupational therapistについて英語で発信される記事や動画等を紹介する。授業では医療に関する基本的な語彙をさらに習得し、医療現場をシチュエーションにした英語表現を数多く練習する。特にリハビリテーションにおける英語表現に重点をおいて繰り返し練習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①身体の部位や動作に関する基本的な英語語彙の理解と伝達ができる。					
思考・判断 ・表現	②診療場面でよく使う英語表現を使うことができる。					
技能	③英語で主訴を尋ねて相手の訴えを理解し動作の指示をすることができる。					
関心・意欲 ・態度	④異なる文化や言葉のを持つ人の価値観を尊重し、共感的な態度で接し、声かけをすることができる。					
授業形態						
講義	アクティブラーニング(ペアワーク、演習プリント、復習小テスト)を中心に、スライドによる講義を組み合わせで行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山森	ガイダンス	授業の進め方と評価方法 英語で医療語彙14			
2	山森	体幹の可動域を測定してみよう	Lesson 10 (p.58～) 英語で医療語彙15			
3	山森	頸部の可動域を測定してみよう	Lesson 11 (p.64～) 英語で医療語彙16			
4	山森	筋力を測定してみよう	Lesson 12 (p.70～) 英語で医療語彙17			
5	山森	Lesson 10-12の復習	Lesson 10-12 (p.58～75) 英語で医療語彙18			
6	山森	触覚検査をしてみよう	Lesson 13 (p.76～) 英語で医療語彙19			
7	山森	バランス検査をしてみよう	Lesson 14 (p.82～) 英語で医療語彙20			
8	山森	歩行評価をしてみよう	Lesson 15 (p.88～) 英語で医療語彙21			

9	山森	Lesson 13-15の復習	Lesson 13-15（p.76～93）英語で医療語彙22					
10	山森	ホームエクササイズを指導してみよう	Lesson 16（p.94～）英語で医療語彙23					
11	山森	RICE処置を指導してみよう	Lesson 17（p.100～）英語で医療語彙24					
12	山森	Lesson 16-17の復習	Lesson 16-17（p.94～107）英語で医療語彙25					
13	山森	台本作成	後期に学んだ英語表現を組み合わせ、PT, OTと患者との会話台本を考える					
14	山森	発表会1	後期に学んだ英語表現を組み合わせ、PT, OTと患者との会話を演じる					
15	山森	発表会2	後期に学んだ英語表現を組み合わせ、PT, OTと患者との会話を演じる					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題・小テスト		●	●	●	●	40	①②③④
	筆記試験		●	●	●		60	①②③
評価の 特記事項	授業内で行う演習課題の取り組み、授業後に提出する課題と単語テスト等の小テストで40％、筆記試験60％で評価する。課題等の評価方法の詳細については授業中に説明する。再試験は、すべての評価方法の合計点数が100点中の60点に達しなかった場合に実施する。再試験は補充した課題40％と本試験時と同じ範囲の筆記試験60％で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
授業中に重要ポイントの解説、次回の単語小テストの発音練習を行う。毎回の授業の復習と小テストの勉強に1時間ほどかけること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テスト・授業内演習・課題等に関するフィードバックは授業中に行う。筆記試験に関する総括と、全体へのフィードバックはGoogle Classroomで行う。また個別のフィードバックについてや質問は随時受け付ける。								
教科書								
「PT・OTが書いたリハビリテーション英会話」三木貴弘ほか　メジカルビュー社								
参考図書								
教科書と並行して、最新の医療ニュース記事や、医療関係の海外の動画を、授業中に随時紹介する。								
備考：履修者への要望								
「英語で医療語彙」はリハビリテーションの場面での使用頻度が高い医療語彙について、日本語/英語/発音の語彙リストを作成してクラウド上に載せ、スキマ時間で自学自習ができる教材を用意する。授業では英文作成作業における生成AIの適切な活用方法についても論ずる。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
13	英語Ⅲ	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	選択	2単位	30時間
担当教員名						
山森 孝彦						
実務経験のある教員						
山森 孝彦：医学部において20年間、English as Medical Purpose、論文講読授業等の教育実績のある教員が、医療に関する英語の語彙力、読解力、聴解力と、口演発表へとつながる英語による発信力を育てる授業を行う。						
授業概要						
最新の医療記事を読解し、医療に関する動画を視聴し、そこで使われる医療関連の語彙と医学用語を次々の習得していく授業を行う。また後半では英語で書かれている医学論文の基本構造を解説し、要約版の短い医学論文を使って読む訓練も行う。毎週の小テストで課される単語数も多く、英語学習が好きな学生が英語力を伸ばすための選択授業である。医療英文購読を受講するための準備段階の授業内容にもなっている。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①理学療法や作業療法の対象となる疾患に関する英文を読んだり、聞いたりして概略を説明することができる。					
思考・判断 ・表現	②医療に関する記事を読んだり動画を視聴して自分の意見を持ち、それを簡単な英語で述べることができる。					
技能	③医療に関する記事を読んだり動画を視聴して概略を説明することができる。					
関心・意欲 ・態度	④海外の医療に関する情報に関心と意欲を持って調べることができる。					
授業形態						
講義	動画の視聴、医療ニュース記事等の読解演習プリントを中心に、アクティブラーニングと、スライドによる解説講義を組み合わせて行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山森	移乗動作の練習を してみよう	Lesson 18 (p.108～) 英語で医療語彙26			
2	山森	食事の評価と指導を してみよう	Lesson 19 (p.114～) 英語で医療語彙27			
3	山森	適切な歩行補助具を 選択してみよう	Lesson 20 (p.120～) 英語で医療語彙28			
4	山森	自宅のトイレを 改修してみよう	Lesson 21 (p.126～) 英語で医療語彙29			
5	山森	退院後の生活指導を してみよう	Lesson 22 (p.132～) 英語で医療語彙30			
6	山森	脳梗塞	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙31			
7	山森	パーキンソン病	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙32			
8	山森	脊椎損傷	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙33			

9	山森	リウマチ	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙34					
10	山森	骨折	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙35					
11	山森	手足の切断	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙36					
12	山森	肺炎	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙37					
13	山森	喘息	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙38					
14	山森	心臓疾患	最新の医療記事を読む 英語で医療語彙39					
15	山森	疾病例の復習	授業で扱った医療記事の総復習					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題・小テスト		●	●	●	●	40	①②③④
	筆記試験		●	●	●		60	①②③
評価の 特記事項	授業内で行う演習課題の取り組み、授業後に提出する課題と単語テスト等の小テストで40％、筆記試験60％で評価する。課題等の評価方法の詳細については授業中に説明する。再試験は、すべての評価方法の合計点数が100点中の60点に達しなかった場合に実施する。再試験は補充した課題40％と本試験時と同じ範囲の筆記試験60％で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
授業中は電子辞書、ライフサイエンス辞書、英辞郎を手間を惜しまずに引くこと。授業で取り扱った重要語彙はクラウド上に載せておくので、次回の単語小テストに向けて、スキマ時間を使って正しい発音とともに覚えること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テスト・授業内演習・課題等に関するフィードバックは授業中に行う。筆記試験に関する総括と、全体へのフィードバックはGoogle Classroomで行う。また個別のフィードバックについてや質問は随時受け付ける。								
教科書								
「PT・OTが書いたリハビリテーション英会話」 三木貴弘ほか メジカルビュー社								
参考図書								
意欲的に発展学習をしたい学生に対して、参考図書と推奨動画を授業中に随時紹介する。								
備考：履修者への要望								
教科書以外にも、最新の医療記事を題材にとりあげて、演習問題を加えたハンドアウトを授業で毎週配布する。「英語で医療語彙」は日本語/英語/発音の語彙リストを作成してクラウド上に載せた教材を用意する。英語力を鍛えるための生成AIの適切な活用方法についても論ずる。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
14	健康科学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
松村 仁実・渡邊 豊明・横山 剛・宮津 真寿美・高橋 圭						
実務経験のある教員						
松村 仁実:理学療法士として医療機関での実務経験のほか、名古屋市の地域高齢者を対象とした運動教室や体力測定会の実施などに従事する教員が健康維持に関わる事項の授業を担当する。 渡邊 豊明:作業療法士として医療機関での実務経験のほか、清須市他地域の健康増進活動に従事し、研究等を行っている。また、日本スポーツボール連盟のメンタル・コンディショニングコーチとして、健康管理やトレーニング指導などの経験がある教員が健康に関わる事項の授業を担当する。 横山 剛:精神科臨床における作業療法士としての実務経験や、作業療法士養成校における学生の心理社会的発達についての研究・指導経験がある教員が現代社会におけるストレスについておよびストレスコーピングについての講義を担当する。 宮津 真寿美:医療機関で理学療法士の実務経験のある教員が、運動と身体反応の概論に関する講義を行う。 高橋 圭:管理栄養士として、病院給食および病棟栄養管理へ計3年間従事していた。また、2022年から稲沢市のフレイル予防事業の訪問栄養指導などに従事している。						
授業概要						
(概要) 理学療法士・作業療法士の主たる業務対象となるのが疾病治療や障害克服ではあるが、近年その役割は予防医学の分野にも求められている。予防医学の原点にあるのが“健康”の概念である。 (オムニバス方式／全15回) (松村 仁実／4回) 講義形式に加え、一部実技やグループによる演習にて行う。姿勢や体力などについての理解やその計測方法、健康の維持向上のための運動について学びます。この講義を通し、健康の維持向上を実践できる能力を身に付ける。 (渡邊 豊明／4回) 講義形式に加え、一部グループによる演習を取り入れながら、健康の定義、健康に関わる社会的、医学的問題と、健康の維持・増進、疾病・障害予防についての基本的事項を学び、生活活動において健康の維持向上について学習し、実践的な演習を通して、健康について考察する。 (横山 剛／2回) 講義形式で行う。ストレスの概念、それによる心身への影響について学修し、人がそのストレスにどのように対処しているのかを学習する。そして自身がどのようなコーピングスタイルを持っているのかを演習を通して確認し精神の健康について理解する。 (宮津 真寿美／2回) 講義形式で行う。運動と身体反応の概要として、全身の各器官がどのように連携しているのかをこの講義を通して、対象者の全身を診る能力を身に付ける。 (高橋 圭／2回) 講義形式で行う。健康の維持・増進に必要な「健康の3本柱」の1つである食事(栄養)の基礎について学び、健康について多角的に理解する。この講義を通して、食事(栄養)の役割や重要性、栄養素の働き、食品表示について理解を深め、適切な食品選択ができる実践能力を身に付ける。 (松村 仁実／1回・渡邊 豊明／1回・横山 剛／1回・宮津 真寿美／1回) (共同) 各講義を通して学んだことを踏まえ、理学療法士、作業療法士として健康のためにすべきことを考える。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2○	DP3	DP4	(●:強い関連がある ○:関連がある)	
知識・理解	①健康についての基本的概念について説明することができる。 ②予防医学と健康増進についての基本的事項について説明することができる。 ③リハビリ・運動に対する栄養の関わり、各栄養素の役割や食品選択の注意点について述べるすることができる。					
思考・判断 ・表現	④健康に関する諸問題について多角的に考え、自分の意見を説明することができる。					
技能	⑤健康増進のための運動療法の基本的な方法について指導することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥健康に関する様々な情報を収集し、自主的に考察することができる。					

授 業 計 画			
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容
1	渡邊	健康を知る	健康の定義、生活習慣病、健康政策ほかについて学ぶ
2	渡邊	ライフスキルを知る	運動（スポーツ）とメンタルヘルスの関連を学ぶ 健康にかかわる社会的問題について学ぶ ヘルスプロモーションについて学ぶ
3	宮津	動きを知る①	運動と身体反応 概論
4	宮津	動きを知る②	運動と身体反応 呼吸と循環
5	松村	身体を知る①	体格、体型、姿勢などについて学ぶ
6	松村	身体を知る②	体力測定、身体計測、簡易姿勢分析
7	横山	行動を知る①	ストレスと健康について学ぶ
8	横山	行動を知る②	健康的なストレスとの付き合い方（ストレスコーピング）
9	松村	健康づくりのための運動①	健康づくりのためのストレッチングの実際
10	松村	健康づくりのための運動②	体力づくりのためのエクササイズの実際
11	高橋	栄養と5大栄養素について	栄養で出来ること・出来ないこと 理学療法・作業療法との関わりについて バランスの良い(一汁三菜の)食事と各栄養素について
12	高橋	食事選択の実践	食品表示・強調表示の見方や注意点について 運動と栄養について 食品の分類(糖尿病食事療法のための食品交換表)について
13	渡邊	健康づくりのための運動③	健康の維持向上のための生活活動①
14	渡邊	健康づくりのための運動④	健康の維持向上のための生活活動②
15	松村・渡邊・宮津・横山	まとめ	理学療法士、作業療法士として健康のためにすべきこと

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●	●		72	①②④⑤
	レポート課題	●	●	●	●	8	①②④⑤⑥
	小テスト	●				20	③

評価の特記事項	(松村ほか) 知識の確認のために、筆記試験 (72%)・レポート課題 (8%) を行う (松村・渡辺・宮津・横山分80%)。レポートは講義内で詳細を示す。実技などを含めて積極的な取り組みを求める。 (高橋) 授業後の確認問題 (小テスト) で評価を行う。(20%) 筆記試験・レポート課題80%と小テスト20%の合計が6割未満の場合には、再試験を実施する。再試験は筆記試験のみで評価する。
準備学習 (予習・復習等) の具体的な内容及びそれに必要な時間	
(松村ほか) 健康に関する事項について、各成書やインターネットなどを用いて情報を収集することを予習および復習に含める。毎回の講義テーマに関連した事項についての関連学習をしてください。 また、この科目は、解剖学Ⅰ、解剖学Ⅱ、生理学Ⅰ、生理学Ⅱの知識が必要である。これらの科目内容を事前に必ず復習しておいてください。 (高橋) 【事前・予習】今までの食育などで栄養について学んできたことを振り返る (20分)。普段の食事内容や食事時間などを振り返る (20分)。【事後・復習】授業の重要項目について復習する (各回20分)。また、Webで実施の確認問題の解説をみて復習する (各回5分)。自身の食生活で問題のある部分を考え、見直す (各回20分)。 (1コマあたりの準備学習時間：1時間)	
課題 (試験・レポート等) に対するフィードバックの方法	
(松村ほか) 筆記試験については、担当教員に事前に連絡の上、確認することができる。 (高橋) Web上で小テストを行い、回答後Web上で問題の正答・解説が出るため、各自で確認する。	
教科書	
使用しない	
参考図書	
(松村ほか) 健康、保健にかかわる成書、雑誌等 (高橋) 特になし	
備考：履修者への要望	
(松村ほか) 現代社会において、理学療法士や作業療法士は、地域社会において1次予防活動に対しても積極的に関わるニーズが高まっている。健康に対する意識を持ち、関係する知識の修得とともに、対象者に直接指導ができることを目指してほしい。 (高橋) 授業後の確認問題 (小テスト) は必ず期限内に実施すること。	

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
15	レクリエーション	理学療法専攻 作業療法専攻	1学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
加藤 真々美						
実務経験のある教員						
加藤 真々美:医療機関、介護老人保健施設、保健センター、通所介護事業所において作業療法士として勤務し、集団療法としてのレクリエーション指導の実務経験を有する教員が、レクリエーションの基礎についての講義および実技指導を行う。						
授業概要						
人が生活する上で、遊び・余暇活動は基本的かつ重要な「作業」である。本科目は、この遊び・余暇活動の一形態である集団レクリエーションについて、その概念や意義、分類、有効性、留意事項などを学修する。その上で、少人数グループに分かれ、集団レクリエーションの企画、計画書の作成、実施、振り返り、報告書の作成という一連の流れを演習を通して体験的に学び、医療・福祉分野における集団レクリエーションの実践能力の基礎を獲得する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①レクリエーションの分類を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	②医療・福祉現場におけるレクリエーションの意義を討議することができる。					
技能	③グループで協力して計画を立て、同級生に対して実施することができる。 ④レクリエーションを受ける立場を体験し、レクリエーションを受ける人の気持ちを感じ、それを記述することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤グループ活動で自身の役割を果たすことができる。また自身のグループワークでの特性を内省し、それを記述することができる。 ⑥提出物を遅滞なく、かつ内容の不足なく提出することができる。					
授業形態						
演習	グループワークによるアクティブ・ラーニング（演習、レポート作成）を主体とし、一部講義形式を交えて行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤	オリエンテーション アイスブレイキング	授業の内容および進行について説明する。グループでの遊びを通してアイスブレイキングを行う。			
2	加藤	レクリエーションの概論	レクリエーションの考え方やリハビリテーションとの関連性について学ぶ。（第1章）			
3	加藤	レクリエーションの計画立案	レクリエーションの計画の立て方について学ぶ。（第2章） グループごとに集団レクリエーションを計画し、計画書を作成する。（第6章）			
4	加藤	集団レクリエーション実践	各グループ15分間程度の集団レクリエーションを、他グループの学生に対して実践する。導入から収束までの一連の流れを、レクリエーション主催者として体験する。 またその成果を学生相互に評価し合う。			
5	加藤					
6	加藤					
7	加藤	レクリエーションの振り返り	集団レクリエーションの他者評価結果をまとめ、グループおよび個人で振り返りを行う。			

8	加藤	障害特性に応じたレクリエーション	施設や障害特性に応じたレクリエーションの工夫について検討する。（第3, 4, 5, 7章）				
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実技評価		●	●	●	30	②③④⑤
	レポート（グループ）	●	●	●	●	40	①②③⑥
	レポート（個人）		●		●	20	②⑤
	参加貢献度				●	10	⑤⑥
評価の特記事項	・実技評価は、集団レクリエーション実践後のルーブリックによる他者評価で採点する。 ・レポート（グループ）及びレポート（個人）は、担当教員がルーブリックを用いて採点する。 ・レポート（グループ）は授業時間内において十分な内容となるようフィードバックを行う。 ・参加貢献度は、グループワーク当日に果たした役割の有無で採点する。 ・各種評価の合計点が60%に満たない場合は、基準点に達するまで個人レポートの再提出を求める。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
・図書館でレクリエーション関連の書籍を調べ、授業で実施可能なレクリエーションを選択する。（グループ活動） ・レクリエーション実施計画書・報告書および個別レポートについて、授業内で作成しきれなかった部分を、授業時間外で作成する。各種レポートは、図書館の書籍やインターネットの情報などを参考に、根拠に基づいて作成する。（グループあるいは個別活動） ・レクリエーション実施の準備・予行演習について、授業内で準備しきれなかった部分を、授業時間外で行う。（グループ活動） （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・レポート（計画書・報告書）は、グループごとに口頭でフィードバックする。また、ルーブリックで採点する。 ・発表内容は、授業内に受講生同士でルーブリック評価を行う。							
教科書							
使用しない。							
参考図書							
「レクリエーションー活動と参加を促すレクリエーションー」 寺山久美子 中村春基 監修 三輪書店							
備考：履修者への要望							
実習を円滑に行うため、登録希望者数によっては定員を設けることがある。 レクリエーション実施者としての素養を磨くため、受講者には受け身ではなく、授業を自分たちで作り上げ積極的に楽しもうとする姿勢を求める。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
16	生物と環境	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
森谷 和司						
実務経験のある教員						
授業概要						
地球上に誕生した生物は、環境との相互作用で多様な生物に進化し、それらは互いに関連し合って生態系を構築している。私たちヒトがどのように環境に適応し生活しているかを学ぶとともに、私たちの生活が生態系のバランスと生物の多様性によって支えられていることに気づき、その恵みを持続させることの重要性を学ぶ。また、生物の多様性や生態系のバランスを保全し、地球の環境を維持するといった視点をもって環境問題を考える。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①地球上には多様な生物が生存し、生態系内で生物群集として互いに関連し共存して生きている。その成り立ちと仕組みについて説明することができる。 ②ヒトがどのように環境からの刺激を受け取り、応答し、環境に適応して生活しているかについて説明することができる。					
思考・判断 ・表現	③生態系のバランスと生物多様性の保持の重要性を、科学的に思考し判断することができる。 ④ヒトが外界からの刺激に応答し、環境に適応して生活していることの重要性について科学的に思考することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤生態系と生物多様性の保持の重要性を認識し、持続可能な社会の実現に向かって主体的に考え、判断し、行動しようとする ことができる。 ⑥自らの体で起こる刺激への応答、環境への適応について、課題をもって主体的に考え、判断することができる。					
授業形態						
講義	配付資料とスライドを用いた講義を行い、グループワークも導入する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	森谷	地球環境と生物の変遷 ー共通性と多様性ー	地球の環境変化に伴って生物が進化し、多様化した歴史、また、生物と環境の相互作用について学修する。			
2	森谷	生物の進化とヒトの進化	進化の証拠、進化のしくみとヒトの進化について学修する。			
3	森谷	ヒトの環境応答① ー受容器と感覚ー	人体の外界からの刺激の受容と伝導の仕組みについて学修する。			
4	森谷	ヒトの環境応答② ー視覚器ー	人体の光刺激への応答のしくみについて学修する。			
5	森谷	ヒトの環境応答③ ー聴覚器・平衡感覚器ー	物理的、化学的刺激への応答のしくみについて学修する。			
6	森谷	植物の環境応答	環境変化に対する植物の反応のしくみについて学修する。			
7	森谷	地球の環境を知る ー生態系と人との関わりー	生態系、食物連鎖による物質の流れ、ヒトと多様な生物との関わりなどについて学修する。			

8	森谷	地球環境を守る	地球環境問題の今日的課題について理解し、地球環境を守るという視点で、自分たちにできることとは何かを考える。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●			60	①②③④
	課題	●	●		●	20	①②③④⑤⑥
	授業の振り返り				●	20	⑤⑥
評価の 特記事項	課題、授業の振り返りは授業ごとに評価する。なお、評価基準は授業内で説明する。 全評価の合計が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。その際は、筆記試験で評価する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
（予習）学習の目的を理解し、内容を調べる。 （事後）授業中に指示された課題を解答する。 （復習）授業プリントを振り返り、まとめ直して十分に理解する。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
毎回授業の終わりに簡単な課題を提示し、コメントペーパーを回収する。 次回の授業の冒頭で課題の講評やコメントペーパーの質問対応等を行う。							
教科書							
使用しない。授業用のプリント・資料を配布する。							
参考図書							
参考図書は授業の中で紹介する。							
備考：履修者への要望							
今までに学んだ生物の知識を深め、新たな見方・考え方を身に付け、身近な自然や新聞等の記事にも関心をもってもらいたい。そして、間違った情報に流されず、正しく科学的に考え判断し、持続可能な社会の実現のため、主体的に行動できるようになってもらいたい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
17	現代社会の理解	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
蔵本 紗知						
実務経験のある教員						
授業概要						
この授業では社会学の基礎を学ぶ。自分が向き合っていく「社会」とは何かを、社会学の視点から理解する。授業のはじめに社会学の基本的考え方を学び、次に「医療と福祉」「AI（人工知能）」「新型コロナウイルス」などの身近なテーマを通して、現代社会を分析する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①身近な社会現象について、社会的に説明することができる。					
思考・判断 ・表現	②身近な社会現象について、社会学の枠組みをもとに自分なりの考えを述べることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③身近な社会現象に興味・関心をもち、問題意識をもって情報を調べ、まとめることができる。					
授業形態						
講義	毎回、講義の内容と関連したコメントシートの提出を求める。次回の授業の冒頭でフィードバックを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	蔵本	イントロダクション： 「社会学」とは何か？	現代社会をどう読み解くか、様々な切り口を紹介する。			
2	蔵本	医療と福祉のゆくえ	近年、格差社会という言葉をよく耳にする。社会格差や経済格差は、健康や福祉に影響を及ぼすのだろうか。社会と医療・福祉との関わりを考える。			
3	蔵本	マスメディアのゆくえ	マスメディアがうつす社会は、現実を忠実に反映しているのだろうか。マスメディアの特性を理解し、メディア・リテラシーについて考える。			
4	蔵本	プライバシーのゆくえ	情報化の進展により、個人情報を保護するよりも活用することが当たり前になってきた。もはやプライバシーは不要な概念となりつつあるのだろうか。プライバシーとは何かを知り、その価値を再考する。			
5	蔵本	AIとロボットのゆくえ	AIは、その性能の高さから社会に不可欠な存在となった。AIの普及は社会に変化をもたらすのだろうか。また、AIと人間は共生できるのだろうか。AIと社会のこれからを考える。			
6	蔵本	情報化のゆくえ	テレビを見る人が減り、インターネットを利用する人が増えている。そうした状況の中、SNS上では政治的な議論が活発化しつつある。SNSは民主主義を発展させ、社会に影響を与えるのだろうか。インターネットと社会の関係を考える。			
7	蔵本	少子化のゆくえ	日本は少子高齢化社会である。少子高齢化に伴う人口減少は悲観すべき事態なのだろうか。人口減少が社会に与える影響を検討し、日本社会のゆくえを考える。			

8	蔵本	新型コロナウイルスと社会のゆくえ	新型コロナウイルスの流行を経て、社会はどのように変化したのだろうか。また、これからどのように変化するだろうか。ポストコロナの社会について考える。				
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	参加貢献度	●	●		●	30	①②③
	筆記試験	●	●		●	70	①②③
評価の特記事項	参加貢献度の評価基準は授業内で説明する。授業内で使用するコメントシートについては、提出の有無だけでなく、授業内容を踏まえた上で、受講者自身の考えが記述されているかどうかを評価する。「参加貢献度」と「筆記試験」の評価合計点数が6割に達しなかった場合には再試験を実施する。再試験の評価は、「参加貢献度」ならびに「筆記試験」の結果を含めて総合的に評定する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
①テレビやインターネット、新聞などでニュースに触れる。その際、社会で起こっている出来事について、講義で学んだキーワードで分析を試みること。 ②講義では毎回、コメントシートで記述問題に解答する。講義終了後、他の受講生と記述問題について話し合ったり、インターネットや新聞・雑誌・書籍等で関連する事柄について調査を行い、自らの答えを振り返る。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
毎回の授業では、復習も兼ねて前回のコメントシートについて取り上げ、フィードバックを行う。							
教科書							
特になし。							
参考図書							
講義中に紹介する。							
備考：履修者への要望							
みなさんがこれから出会い、向き合っていく社会は、ときに面白く豊かで、ときに厳しく難解なものである。この講義を通して社会を読み解く力を身につけ、社会の中で生き抜く力を養ってほしい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
18	国際協力論	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
濱田 光佑						
実務経験のある教員						
濱田 光佑:理学療法士として国際協力経験（JICA青年海外協力隊）を持つ教員が国際協力の歴史、社会・文化的背景、国際社会が抱える課題、特に医療保健に関する活動を教授する。						
授業概要						
近年、グローバル化の波は医療や介護分野にも及び、国境を越えて活躍するリハビリテーション専門職が増えてきている。アジア圏を中心とした開発途上国では日本の医療、福祉、並びにリハビリテーション技術・知識に対する期待は拡大している。今後さらに加速するグローバル化の中で、リハビリテーション専門職、教養人として国際的な視野を持つ必要がある。本科目では、国際協力の歴史、社会・文化的背景、国際社会が抱える課題、特に医療保健に関する活動を学び、医療従事者として国際的に活動できる方法について学修する。講義を通じてリハビリテーション専門職として広い視野を持って国際社会に貢献できる人材を育成することを目標とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2○	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①国際的視野を持つ教養人・医療従事者となることを念頭に置き、開発途上国の開発をめぐり実践されてる国際協力の実際について理解できる。 ②開発途上国を中心とした各国を取り巻く社会的・文化的背景を理解した上で、医療従事者としてどの様に国際協力に携わっていくべきかを考察できる。					
思考・判断 ・表現	③開発途上国で生じている社会問題について、意見を持ち解決策を提案することができる。 ④開発途上国の「障害と開発」に関わる問題を、リハビリテーション専門職の視点で考察することができる。 ⑤把握した国際的な課題に対し、医療従事者の視点を持ち自身の考えを示すことができる。					
技能	⑥医療従事者の立場から、開発途上国の保健、医療の問題を把握し解決策を提案することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑦アクティブラーニング、グループワークに対し積極的な姿勢で参加することができる。 ⑧国際課題について関心を持ち、聞き、発言することができる。					
授業形態						
講義	講義、参加型ワークショップ、グループディスカッション、Think, pair&Share					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	濱田	オリエンテーション /国際協力、国際開発	当科目の目的を理解し、授業のスケジュールや課題について把握する。 また、国際協力とは何か、開発援助の歴史を踏まえ国際協力を学ぶことの意味や役割について考える。			
2	濱田	SDG s /多様なグローバルイ シュー	SDG s の誕生と歴史的背景を理解する。SDG s の基本的な枠組みについて確認し、日本や世界での取り組みの状況について学修する。			
3	濱田	産業発展と貧困問題	参加型ワークショップ（貿易ゲーム）を行う。世界で経済格差が拡大していく仕組みを現実の自由貿易システムと対比しつつ討議を行う。			
4	濱田	環境問題と公衆衛生	Think, pair&Share学習を通じ、産業発展に伴う環境問題について思考を深める。また、環境問題から生じる公衆衛生上も問題について理解しを促すための討議を行う。			
5	濱田	グローバルヘルス /プライマリ・ヘルス・ケ ア	国際保健における基本的な知識（PHC、ヘルスプロモーション、非感染症疾患、リプロダクティブヘルス）を学修する。また、国家・地域間の健康格差と国際協力活動について学修する。			

6	濱田	開発と障害/CBID	障害理解の変遷から、人間の安全保障、ケイパビリティ・アプローチなど「障害インクルーシブな開発」について学修する。また、地域に根ざしたインクルーシブ開発（CBID）について討議し理解を深める。					
7	濱田	リハビリテーションと国際協力	国際協力に関わるリハビリテーション専門職（JICA, NGO, 大学教員等）の活動を参考に、医療従事者として国際課題に対してどのように向き合うことができるのかを学修する。					
8	濱田	リハビリテーションと国際協力/総括	医療従事者・教養人として国際保健を中心としたグローバルイシューにどの様に向き合うべきかを討議し、発表を行う。					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		60	①②③④⑤⑥
	レポート		●	●	●		30	①②③④⑤⑥
	参加貢献度					●	10	⑦⑧
評価の特記事項	参加貢献度は、個人もしくはグループにて積極的に発言し、その内容・回数に基づき評価する。 レポートに関しては、講義内で詳細を説明しルーブリックを事前に提示した上でそれに従い評価する。 全ての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験は筆記試験のみで評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
国際社会で起こっている諸問題について、日頃から関心を持ち情報に触れること。講義で学んだキーワードについて分析を試みること。 復習として、講義中に学んだ事・疑問に思った事について書籍等を利用し、自身の考えをまとめポートフォリオを作成すること。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
試験は研究室にて内容を確認することができる。または後日、全体へのフィードバックの時間を設定する。 レポートについては、提出されたものを採点し返却する。								
教科書								
授業用のプリント（資料）を使用する。								
参考図書								
「リハビリテーション国際協力入門」久野研二 三輪出版 「国際リハビリテーション学」河野真 羊土社 「国際保健医療学」日本国際保健医療学会 杏林書院 「SDGsを学ぶ：国際開発・国際協力入門」高柳彰夫 法律文化社								
備考：履修者への要望								
国際社会において、地球的視野に立って国際的課題に対し主体的に行動するための態度、能力の基礎を獲得して頂きたい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
19	経営学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
安藤 信雄						
実務経験のある教員						
安藤 信雄：上場電子部品メーカーで在庫管理や購買業務の経験がある教員が経営学について講義を行う。						
授業概要						
これからの医療産業は、社会環境の変化に応じて診療報酬体系の改定や医療法人における経営改革が進み、福祉医療の事業間では患者のニーズに対応しようと競争も激しくなっている。多くの医療機関では、経営的危機に直面していることから経営の基礎知識を持った人材が求められるようになってきた。また、リハビリテーション関連の仕事でも、その専門知識や技能を持つと同時に、市場経済における企業経営の知見から得られた経営の基礎知識をもった人材が重視されている。以上の社会的要請に応えられるように、本科目では、初めて経営学を学ぶ学生が、経営学の基礎知識を身につける目的とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①マスコミ等でよく使用される経営に関する基本的用語を理解し説明することができる。					
思考・判断 ・表現	②福祉医療機関が直面する経営上の課題を見つけることができる。 ③一般企業での事例を参考にして、福祉医療機関での問題解決のための仮説や主張を示すことができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④グループワークや発表で、他者の意見を受け入れ、討議し、自分の意見を持つことができる。					
授業形態						
講義	学生が、教科書や副教材を活用して経営学の基礎知識を習得し、その知識を使用してブレインストーミングやグループワークなどのアクティブラーニングを実施する。学生が、経営上の課題について意見を述べ、解決にむけて協働することを理解する。課題はICTで提出する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	安藤	授業の進め方と講義の概要 病院経営の概要/富の生産力と分業など	「生産」に対する科学的考察方法と、分業による他者との協力について理解する。生産活動の本質から、産業、企業によらない本質的な一般的法則を理解し、その視点から経営理論を理解し、異なった職種の協力が経営にとって与える影響をグループで議論する。学習用アプリゲームを活用した思考訓練の実施。			
2	安藤	第4章：利益と費用、収穫低減の法則 第6章：生産性と作業の合理化	利益の導き方を理解し、生産性を高める仕組みについてのワークシートを作成しながら理解する。ビデオ「ひよっこ」機械化ビデオなどによる理解の促進。			
3	安藤	第7章：標準化 第9章：トヨタ生産方式 第10章：トヨタ生産方式の発展型	第1回小テスト(発表形式)の実施。現代の経営原理をトヨタ生産方式を事例に理解する。 学習用アプリゲームを活用した思考訓練の実施。			
4	安藤	第5章：比較優位論と生産性	集団活動に対する古典的理論とその問題点を理解し、現代的経営理論による人間理解の基礎を理解する。事例による異なった職種の協力についてブレインストーミング。			
5	安藤	第8章：人間の発見 第11章：モチベーション理論	インフォーマル組織の影響とモチベーション理論について理解し、ビデオ「ひよっこ」での再確認と事例によるブレインストーミング。			

6	安藤	第12章：経営戦略論 第13章：イノベーションによる企業成長と経営戦略	第2回小テスト(発表形式)の実施。戦略に関する理論を理解したうえで、市場競争のなかでイノベーションがなぜ必要であるかを理解し、これから医療現場で求められるイノベーションについてブレーストーミングをする。					
7	安藤	第14章：人的資源管理論 第15章：組織に関する諸理論	人財を活かす理論を使ってブレーストーミングによるグループ討論をする。その知識を使って事例の課題と、その持続可能な解決策をグループ討論でまとめ発表する。					
8	安藤	第16章：多様性と持続可能性の視点で経営学を考える	多様性の必要性和有効性を理解し、各自が授業で学んだことをまとめる。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	準備学習		●				15	①
	レポート			●			15	②③
	発表					●	30	④
	筆記試験		●				40	①
評価の 特記事項	準備学習、レポート及び発表の評価基準は、授業内で示す。すべての評価方法の合計点が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。その際も、準備学習、レポート及び発表点を含んだ評価をする。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
(予習)教科書または事前配布されたプリントを読む。(復習)授業の内容を振り返り、ノートにまとめる。 その他、必要に応じて授業時間外に、レポート作成、発表準備などを行う。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
予習でまとめたノートを提出する。復習でまとめたノートを提出する。疑問点や質問は、随時受け付ける。 予習・復習およびその他の課題の提出は、Google ClassroomなどICTを使用して個別にフィードバックする。								
教科書								
「基礎経営学 多様性と持続可能性の視点で考える」安藤信雄 現代図書								
参考図書								
「多様性と持続可能性の視点で考える中小企業論」安藤信雄 同友館 (ISBN978-4-496-05532-4) その他、必要に応じてプリントを配布する。								
備考：履修者への要望								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
20	法学入門	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
森澤 史郎・田中 伸明・笹尾 菜穂子						
実務経験のある教員						
森澤 史郎・田中 伸明・笹尾 菜穂子：弁護士として実務経験のある教員が、法の概要および様々な法的諸問題について解説し、講義を行う。						
授業概要						
権利を保障する法の概要についてを解説し、講義を行う。また、現代社会において生起している様々な法的諸問題を取り上げ、それらの法的諸問題を考えることを通して、現代社会を生きる者として知見を深め、問題解決能力の習得を目指す。また、実務家教員として現在生じている法的な問題についても適宜解説する。 (オムニバス方式／全8回) (森澤 史郎／4回・田中 伸明／1回・笹尾 菜穂子/3回) 権利を保障する法の概要や社会における法の役割ならびに現在生じている法的な問題についても教授する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①学生が、社会における法の役割について説明することができる。					
思考・判断 ・表現	②学生が、社会の出来事を法的に考え、異なる考えも踏まえた上で、自らの考えを説得的に述べることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③学生が、法に興味・関心を持ち、実務での法的思考能力、問題解決能力を習得する意欲を持つことができる。					
授業形態						
講義	教科書に掲載されている内容或いはその内容に関連する実際の法律問題や判例等を学習し、法的思考能力、問題解決能力を培う。あわせて、グループワーク（ディスカッション）を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	森澤	法と裁判	教科書第1章及び第2章を解説し、現代社会における法や裁判の役割を考える。			
2	森澤	犯罪と刑罰、被害者救済	教科書第4章及び第7章を解説し、刑事事件の基本概念や民事上の被害者救済について講義を行う。			
3	森澤	医療と法（医療過誤及び生命倫理の問題）	教科書第11章-1及び11章-2を解説し、医療過誤及び生命倫理に関連する法的知識の講義を行う。			
4	田中	差別と法	講師作成のレジュメを解説し、障害者に対する差別について国際条約及び国内法制度についての理解を深める。			
5	笹尾	労働と生活保障	今後、働く皆さんは、労働者としてどのような権利を有しているのか、権利を保障する法の概要について講義する。また、格差社会における生活の保障についても触れる。			
6	笹尾	政治参加と法	国と地方公共団体（県や市町村）の政治機構や、私たちが国民・住民としていかなる権利を有するのかについて講義する。			
7	笹尾	家庭生活と法	教科書第3章に沿って出生から死亡するまで、私たちがどのように法と関わっているのか、また、どう関わっていくべきかを考える。家庭生活を巡る法が、時代によって、どう変化して来たのかについて考える。			

8	森澤	まとめ	課題レポートの内容について、ディスカッションし、講評する。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題レポート①	●	●		●	30	①②③
	課題レポート②	●	●		●	30	①②③
	参加貢献度		●		●	40	②③
評価の 特記事項	授業への参加貢献度、課題レポート、総合的に評価する。評価基準は授業内で説明する。 なお、課題レポート①②は異なる内容を題材にするものとし、随時又は纏めて提示するものとする。 再試験はすべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、実施する。なお、評価方法は実施時に対象学生に説明する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習は、テキストを精読後、新聞の社会面、政治面、経済面などから、テキストに掲載された法律問題に関する問題について考えること。 疑問点があれば、講師に質問すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
学生が提出した課題レポートの内容は講義の中で講評する。							
教科書							
「私たちと法」平野武　ほか　法律文化社							
参考図書							
教科書内で引用されている法令や判例については適宜授業内で紹介し、必要に応じて資料等の補助教材を配布する。							
備考：履修者への要望							
ニュースや新聞などで報道されている大きな事件から身近な出来事まで、皆さんの身の回りの出来事に関心を持つように心がける。また、多様な考え方も目を配り、自身の考え方と比較検討できるように心がける。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
21	社会福祉学	理学療法専攻 作業療法専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
伊藤 正明						
実務経験のある教員						
伊藤 正明：高齢者福祉施設、NPO法人等でソーシャルワーカーとして勤務経験(15年)のある教員が、社会福祉の価値・社会保障の知識・対人援助技術について講義する。						
授業概要						
社会福祉の理念（目標）は、だれもが住み慣れた地域でいきいきと暮らし続けることができる社会をともにつくることである。それには、福祉の専門職だけでなく、保健・医療等の専門職、ボランティア等の地域住民がともに問題解決にあたることが求められる。本科目では、地域で暮らす人々の生活課題とその解決のためのネットワークの形成を取り上げ、社会福祉についての概念・歴史・制度・課題について学び理解する。 また、ともに考えるための価値観・知識・技術を身につけることを意図したグループでの演習も取り入れる。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①社会福祉を取り巻く環境を生活者としての視点で説明できる。 ②社会保障の仕組みが説明できる。					
思考・判断 ・表現	③演習課題についての省察を整理して表現することができる。 ④他者の意見を聴き、ともに考えることの意味について説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤対人援助職視点を意識して演習と課題に取り組むことができる。					
授業形態						
講義	講義形式を中心にしながら、必要に応じ視聴覚教材の活用、グループワーク、演習形式で講義を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	伊藤	社会福祉って何？	オリエンテーション、社会福祉の考え方			
2	伊藤	社会福祉に関する諸問題	社会福祉を取り巻く環境を「生活者」としての視点から見る、「貧困」とは			
3	伊藤	社会福祉援助技術演習①	基本的コミュニケーションとして「聴くこと」について演習			
4	伊藤	社会福祉の担い手	社会福祉専門職とインフォーマルな社会福祉の担い手、地域福祉を支える機関・団体			
5	伊藤	児童家庭福祉	児童福祉の基本理念とその変遷、児童福祉関連法の概要、児童虐待に関する対策			
6	伊藤	低所得者福祉	所得保障と生活保護			
7	伊藤	社会福祉の仕組み	社会福祉を支える行政、社会福祉サービスの利用の仕組み			

8	伊藤	高齢者福祉	高齢者福祉の動向と介護保険制度					
9	伊藤	社会福祉援助技術演習②	多職種連携の実際、社会福祉施設相談員へのインタビュー					
10	伊藤	社会保障①	年金保険制度、労働保険制度、社会保障制度の動向					
11	伊藤	社会保障②	医療保険の仕組み、医療ソーシャルワーカーとは					
12	伊藤	障害者福祉	障害とは何か？障害者の歴史、障害者福祉の動向、障害者関連各法の概要					
13	伊藤	利用者保護制度	利用者保護の背景、成年後見制度、日常生活自立支援事業など					
14	伊藤	地域福祉	地域福祉の意義、地域福祉活動の内容					
15	伊藤	社会福祉の歴史	社会福祉の歴史、社会福祉学全体の振り返り					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	70	①②④⑤
	レポート		●	●		●	10	①③④⑤
	小テスト		●	●		●	10	②③⑤
	講義ふりかえり		●	●		●	10	①③⑤
評価の 特記事項	講義終了時に「講義ふりかえり」（10％）を作成し提出することで講義内容の理解度の確認をする。「レポート」（10％）と「小テスト」（10％）の内容および筆記試験（70％）で評価する。「講義ふりかえり」「レポート」の評価基準は講義内で詳細を示す。再試験は、すべての評価方法の合計点数が60点に達しなかった場合に実施し、レポート・小テスト・講義振り返りを含め評定する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
【復習】各講義の配布レジュメを振り返り、適宜実施する「小テスト」を解答できるように準備する(1時間程度)。また、新聞等で現在の社会福祉の動向を把握し、社会問題としてどのようなことが顕在化しているのかを理解する（例：ヤングケアラーの生活問題、障害者の置かれている現状からノーマライゼーションについて考えるなど）。 その他、必要に応じて授業時間外にレポート作成、発表準備などを行う。 (1コマあたりの準備学習時間：1時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
試験の返却方法は、講義の中で指示する。 課題(試験、小テスト、レポート課題)に対する疑問点や質問は随時受付ける。								
教科書								
使用しない								
参考図書								
参考資料等を適宜配布する。								
備考：履修者への要望								
復習を中心に、日常の中の出来事や気になるニュースがどのように社会福祉と関わっているのかを考えるよう努めてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
22	スタートアップセミナー	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
山田 和政・加藤 真弓・林 尊弘・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・齊藤 誠・山田 南欧美・濱田 光佑・藤本 大介 岩井 和子・横山 剛・加藤 真夕美・廣渡 洋史・渡邊 豊明・清水 一輝・外倉 由之・松田 裕美						
実務経験のある教員						
授業概要						
本学での導入科目である。大学にて円滑かつ適切に学修するための基本的な技術、態度、学修方法を身につけ、主体的に学べるようになることを目指す。全体への講義、グループでの活動を通して、本学の建学の精神やポリシー等を踏まえて医療従事者を目指す者としての心構え、大学生としての学びのスキルを身につける。また、大学の中での人間関係の構築や自己を治療的に応用していくためには、自己の理解とともに他者理解が必要であるため、ワークを通してその基盤をつくる。さらに教員へのインタビュー等から大学生活・キャリアについて考え意欲的に学習に臨めるようにする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①愛知医療学院大学の歴史・建学の精神・教育の理念・各ポリシーを理解し、説明できる。 ②大学での学修、大学生活を円滑・適切に進める方法を計画できる。					
思考・判断 ・表現	③理想とする理学療法士、作業療法士像を考え、説明でき、達成のための学修計画を立てることができる。					
技能	④パソコン、ICTを使用・活用や学習のスキルを身につけることができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤自己理解・他者理解に努め、よりよき学習者、医療者になるための態度を養うことができる。					
授業形態						
演習	講義およびグループワークを取り入れる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・臼井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	愛知医療学院大学を知る	・本科目のオリエンテーション ・愛知医療学院大学の歴史、建学の精神、教育の理念、各ポリシーを理解する ・大学生活を円滑・適切に送るため、適切に学修するために、大学のルールを理解する			
2～5	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・臼井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	チームビルディング	・自己の成長と他者との協働のための自己理解・他者理解 ・同じ目標に向かって学ぶ仲間(チーム)の基盤を作る			
6	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・臼井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	自己の学力を客観的に把握する	プレイスメントテスト			
7	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・臼井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	学内利用方法	・附属図書館の利用 ・学内施設の利用			

8	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・白井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	パソコンスキルの基礎	・ノートパソコンを使用してICT活用を学ぶ(Google) ・ポータルサイトの利用方法 ・メール活用 ・情報リテラシー					
9～11	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・白井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	学習のスキル等	・大学授業の形態、授業の受け方・態度、ノートの取り方 ・レポート作成の方法(日本語表現、論述する) ・時間管理、学習計画、自己調整 ・社会人基礎力					
12～13	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・白井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	キャリアを考える	・教員の話聞く経験を通して、キャリアを考える					
14～15	山田(和)・P加藤・林・松村・宮津・白井・木村・齊藤・山田(南)・濱田・藤本・岩井・横山・O加藤・廣渡・渡邊・清水・外倉・松田	地域を知る	・清須を知る					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合(%)	到達目標
	参加貢献度		●	●	●	●	60	①②③④⑤
	レポートおよびポートフォリオ		●	●	●	●	40	①②③④⑤
評価の特記事項	・参加貢献度は、グループワークの過程や成果を、課題ごとに評価前に提示する、評点を定めたルーブリックを用いて評価する。 ・レポートおよびポートフォリオは、課題ごとに評点を定めたルーブリックを用いて評価する。 ・レポートおよびポートフォリオは、提出の遅滞や内容の不足があった場合に減点する。内容によっては再提出を求める。Google Formsにて提出を求める場合もある。 ・参加貢献度とレポートおよびポートフォリオの合計点が6割未満の場合には、基準点に達するまでレポートやポートフォリオの再提出を求める。							
準備学習(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間								
学修の手引きを事前に確認し、疑問点がある場合は整理し、質問ができる準備をしておくこと。 学んだことを記述し、整理する。 (1コマあたりの準備学習時間：1時間)								
課題(試験・レポート等)に対するフィードバックの方法								
・セルフモニタリングシートは、定期面談時に担当教員が面談資料として用いながら個別にフィードバックを行う。 ・グループ発表は、教員がグループごとにコメントするなどしてフィードバックを行う。								
教科書								
「学修の手引き」								
参考図書								
必要に応じ紹介する。								
備考：履修者への要望								
4年間の大学生活および学修を円滑かつ適切に実施するための重要な科目である。不必要な私語を慎み、居眠りなどのないように、積極的な受講態度で臨むこと。学生生活を送る上で、知らなかった、聞いていなかった、教えてもらっていないは通じないため、しっかりと聴き、理解するよう努力することを求める。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
23	医療職教養演習	理学療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
林 尊弘・松村 仁実						
実務経験のある教員						
林 尊弘・松村 仁実：医療機関で理学療法士としての勤務経験のある教員が、理学療法対象者や多職種と関わる上で医療従事者として必要な接遇、コミュニケーション、社会人基礎力など講義や演習等を通して教授する。						
授業概要						
医療人は、様々な社会的背景を持つ患者を対象とする。その対応にあたっては、対象者一人ひとりの背景についての理解を含めた全人的な医療が求められている。そのため、医療人には、幅広い教養を持った感性豊かな人間性、人間性への深い洞察力、社会ルールについての理解、コミュニケーション能力、問題解決能力などを持つことが求められている。医療職としての行為は、対象者やその関係者との間の信頼関係に基づくものでなければならず、これは医学的な知識・技術だけでなく、誠実さ、礼節、清潔さ、謙虚さなどの人格による。本科目では、医療職として望ましい姿を考え、医療職として必要なコミュニケーションや接遇、そして社会人としての態度(社会人基礎力)を理解し、医療職としての基本的態度を身につけることを目指す。 (オムニバス方式／全7回) (林 尊弘／4回・松村 仁実／3回) 医療従事者として必要な教養、接遇、コミュニケーション、必要なスキルについて教授する。 (林 尊弘／1回・松村 仁実／1回) (共同) 総括を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①医療従事者として必要な教養、接遇、コミュニケーション等について述べるができる。					
思考・判断 ・表現	②医療従事者に求められる力について考え、説明することができる。					
技能	③医療従事者として必要なスキルを身につけるために、自身の課題を把握し改善することができる。課題レポートを作成することができる。					
関心・意欲 ・態度	④医療従事者として必要な基礎的な接遇・マナーを理解し、自身の問題を解決するための行動をとることができる。また、信頼関係を築くための行動をとることができる。					
授業形態						
演習	グループディスカッションを取り入れたアクティブ・ラーニングや演習が中心となる。一部、資料を用いた講義やオンライン (Google ClassroomやForm) での課題の提出を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	林	医療人に必要な「教養」を考える	・オリエンテーション ・教養を身につけるための基礎的事項、医療従事者に必要な「教養」を考える ・開講科目と理学療法との関連について考える (カリキュラムマップ、カリキュラムツリーとの関連)			
2	林	医療人に必要な「教養」を考える	・大学と高校での学びの違いを学修する ・医療従事者としてのプロフェッショナルリズムを考える			
3	林	社会で働くために必要な力を考える	・社会人基礎力 ・コミュニケーションの導入である第一印象を理解する ・自己認識と客観的指標との関連について考える			

4	松村	社会で働くために必要な力を考える	・医療従事者、社会人として求められる能力、選ばれる人材に必要な能力について学修する					
5	松村	接遇・コミュニケーション	・医療従事者、社会人としての基本的接遇態度について学修する ・医療従事者、社会人として必要なコミュニケーションスキルを学修する					
6	松村	接遇・コミュニケーション マナー・リスク管理	・コミュニケーションについて場面・目的別に考える ・SNSのマナー、ネットリテラシー、個人情報保護について学修する					
7	林	情報管理・利用	・医療従事者として、情報管理の重要性を学修する ・正しい情報の調べ方、調べた情報を正しく伝えるための方法について学修する ・医学論文の種類や読み方を学修する					
8	林・松村	全体のまとめ	・調べた医学論文の情報をグループ間で共有する ・まとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	参加貢献度		●	●	●	●	30	①②③④
	課題		●	●		●	30	①②④
	レポート		●	●			40	①②
評価の 特記事項	参加貢献度は、グループディスカッションにおける積極性や意見交換（8コマ目のグループ間での共有も含む）を評価する（講義内で詳細を示す）。 課題については、授業中に提示し、期限内に提出されない場合は0点とする。 レポートのテーマについては、授業中に発表するため、そのテーマに沿って取り組むこと。提出期日にレポートが提出されない場合は0点とする。 なお、すべての評価基準の合計点数が6割満たない場合、追加のレポートを課す（再試験扱い）。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
授業に事前に提示された課題があった場合には確認し、不明点を明らかにしておく。授業中に出された課題を実施し、自己を振り返る。さらに、各回で学んだことを実践できるよう心掛け、医療人また社会人としての素養を身につけること。加えて、本学のアドミッションポリシーとディプロマポリシーをよく理解し、自身の成長に繋がる行動を実践すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
口頭もしくは書面にて行う。								
教科書								
なし								
参考図書								
随時提示する。								
備考：履修者への要望								
医療人を目指す学生として、より良い医療人になれるよう、考え、行動すること。 教養を身につける為には広い視点で世の中の情勢を知ろうとする必要がある。講義時間以外の生活でも、幅広い方法でアンテナを張り、様々な情報を得られるように取り組むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
24	医療職教養演習	作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
横山 剛						
実務経験のある教員						
横山 剛：心理社会的な発達課題に関する研究を行ってきた教員が、学生の心理社会的な発達を促進させながら対人サービスの領域における社会人となるための講義を行う。自身の特性や他者の特性について理解を進める中でより良いコミュニケーションに努める事を通して、医療職社会人としての言葉遣い、態度を実践的に学ぶ。						
授業概要						
接遇・コミュニケーションを中心に医療職そして社会人としての態度などを学ぶ。具体的には、リハビリテーションチームの一員として作業療法士は、様々な社会的背景の患者を対象とし、患者一人一人の背景についての理解を含めた全人的な対応が求められている。そのため、広い教養を持った豊かな人間性、社会ルールについての理解、コミュニケーション力、問題発見能力、問題解決能力等が必要であり、これらの力が専門的な知識・技術を支える。 本科目では、作業療法士に求められる基礎的事項を講義や演習を通して学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1●	DP2	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①他者と円滑なコミュニケーションを取り信頼関係を築くための知識を説明できる。 ②学習する際にこれまでに使用したことがない学習方法について説明できる。					
思考・判断 ・表現						
技能	③他者と信頼関係を築くための基礎的な技術を習得し実践できる。 ④新しい学習方略を習得し実践できる。					
関心・意欲 ・態度	⑤他者から信頼されるための自身の課題を整理し表現できる。					
授業形態						
演習	講義、演習（小グループでの討論、発表、授業時間内に口頭で問いを投げかける、啓発ビデオ視聴後の自身の振り返り、など）					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横山	コミュニケーション	コミュニケーションとは何か（授業時間内に口頭で問いを投げかける）			
2	横山	信頼関係	信頼関係とは何か（授業時間内に口頭で問いを投げかける）			
3	横山	言葉遣い・態度1	医療従事者に必要な言葉遣い、態度はどのようなものか。（授業時間内に口頭で問いを投げかける） 各自が自身の言葉遣い、態度について振り返り整理する。			
4	横山	言葉遣い・態度2	文書の書き方、メールの書き方、話しの聴き方、臨床で起こり得る事柄についての啓発ビデオを視聴			
5	横山	円滑なコミュニケーション	交流分析の紹介			
6	横山	自身の特性について1	エゴグラムを用いて自身の特性を知る			
7	横山	自身の特性について2	自身の特性についてまとめる			

8	横山	学習の仕方	授業時のノートの取り方、学習事項のまとめ方について講義する 学習方略の使用				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	参加貢献度	●		●	●	50	②④⑤
	レポート	●		●	●	50	①③⑤
評価の 特記事項	参加貢献度（50％）、レポート（50％）で評価する。レポートの課題については授業内で詳細に伝える。成績は参加貢献度、レポートともにルーブリック評価に基づいて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。基準点の60点に満たない場合は、再度レポートを課す。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
授業の中で配布した資料を用いて予習、復習を行うこと。言葉遣いや、態度は常日頃から気をつけ信頼関係の構築に努めること。後半の学習方略の使用については試験に備えての学習のために継続すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
レポートは採点后、希望者には返却する。成績の評価の内容については随時フィードバックする。							
教科書							
使用しない							
参考図書							
適宜紹介する。							
備考：履修者への要望							
医療従事者として信頼関係を築くための人間性を磨いていくために、挨拶の習慣、約束を守ること、その他報告・連絡・相談は必須である。恥ずかしがらずにチャレンジして欲しい。授業時間内に口頭で問いを投げかける。正答に至るプロセスを経験するが、間違えたりすることを恐れずにチャレンジして欲しい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
25	解剖学Ⅰ	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	60時間
担当教員名						
中野 隆						
実務経験のある教員						
中野 隆：医学部において、解剖学とくに臨床医学の理解に重要な臨床解剖学の教育と研究に携わってきた。さらに、40年以上に渡ってリハビリテーション教育にも関わってきた。リハビリテーション医学に必須の内容に的を絞った講義を行う。						
授業概要						
解剖学用語の単なる暗記ではなく、解剖学的知識をリハビリテーション医学に応用できることを主眼とした教育を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①中枢神経系、末梢神経系、運動器系の正常構造について、臨床医学とくに病態生理の理解に応用できる。					
思考・判断 ・表現	②解剖学の知識を応用して、中枢神経系疾患，末梢神経系疾患，運動器系疾患および外傷の病態を説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③中枢神経系疾患、末梢神経系疾患、運動器系疾患および外傷のメカニズムについて、臨床解剖学的に考察できる。					
授業形態						
講義	学生自らの思考過程を重視し、理解を深めるように講義を進める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	中野	解剖学総論	人体の解剖学的系統、区分			
2	中野	神経系総論	中枢神経系および末梢神経系の構成、機能			
3	中野	中枢神経系	総論（灰白質と白質、脳室系、髄膜、脳脊髄液）			
4	中野	中枢神経系	脊髄			
5	中野	中枢神経系	脳幹			
6	中野	中枢神経系	小脳			
7	中野	中枢神経系	間脳			

8	中野	中枢神経系	大脳皮質の外景および内景、大脳皮質の機能局在
9	中野	中枢神経系	脳硬膜（板状突起、静脈洞）
10	中野	中枢神経系	中枢神経系の脈管
11	中野	中枢神経系	錐体路
12	中野	中枢神経系	錐体外路系
13	中野	中枢神経系	表在覚伝導路
14	中野	中枢神経系	意識型深部覚伝導路、非意識型深部覚伝導路
15	中野	中枢神経系	視覚伝導路、聴覚伝導路、平衡覚伝導路
16	中野	末梢神経系・運動器系	頭蓋、脳神経
17	中野	末梢神経系・運動器系	頭蓋、脳神経
18	中野	末梢神経系・運動器系	上肢
19	中野	末梢神経系・運動器系	上肢
20	中野	末梢神経系・運動器系	上肢
21	中野	末梢神経系・運動器系	上肢
22	中野	末梢神経系・運動器系	胸部・腹部
23	中野	末梢神経系・運動器系	胸部・腹部
24	中野	末梢神経系・運動器系	骨盤部・下肢
25	中野	末梢神経系・運動器系	骨盤部・下肢
26	中野	末梢神経系・運動器系	骨盤部・下肢
27	中野	末梢神経系・運動器系	骨盤部・下肢

28	中野	末梢神経系・運動器系	背部					
29	中野	末梢神経系・運動器系	背部					
30	中野	末梢神経系・運動器系	頭頸部					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	80	①②③
	受講態度		●	●		●	20	①②③
評価の 特記事項	全ての評価方法を合計した評点が60点未満の場合、再試験を行う。 受講態度は、講義中の態度だけでなく、振り返りシートの提出状況および随時実施する課題（練習問題、「サブノート」のMISSION）など学習への自主的な取り組みを評価する。振り返りシートおよび課題の提出が期限内にできない場合は、受講態度を減点する。評価基準は別途説明する。 再試験の評価においては、本試験までの受講態度を含めない。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
講義内容について教科書を用いて復習し、解剖学実習および他教科で学んだ知識を有機的に結び付けて理解を深める。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
試験内容について質問を受け付け、必要に応じて解説する。								
教科書								
「臨床解剖学サブノート」 「機能解剖で斬る神経系疾患」中野隆 編著 メディカルプレス 「プロメテウス解剖学エッセンシャルテキスト」中野隆 監訳 医学書院 「骨学のすゝめ」中野隆 編集 南江堂								
参考図書								
特になし								
備考：履修者への要望								
知識は実際に使ってみなければ身に付かない。断片的な知識の暗記ではなく、知識を自ら応用して問題を解決する学習姿勢が必須である。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
26	解剖学Ⅱ	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
中野 隆						
実務経験のある教員						
中野 隆：医学部において、解剖学とくに臨床医学の理解に重要な臨床解剖学の教育と研究に携わってきた。リハビリテーション医学に必須の内容に的を絞った講義を行う。						
授業概要						
解剖学的知識の単なる暗記ではなく、解剖学的知識をリハビリテーション医学の理解に応用することを主眼とした講義を行う。換言すれば、問題解決能力を重視する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①循環器系、内臓系、感覚器系の正常構造と機能について、臨床医学とくに病態生理の理解に応用できる。					
思考・判断 ・表現	②解剖学的知識を応用して、循環器系、内臓系、感覚器系疾患の病態を説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③循環器系、内臓系、感覚器系のメカニズムについて、臨床解剖学的視点で考察できる。					
授業形態						
講義	学生自らの思考過程を重視し、理解を深めるように講義を進める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	中野	循環器系	心臓、大循環			
2	中野	循環器系	小循環、リンパ系			
3	中野	消化器系	口腔、食道			
4	中野	消化器系	胃、小腸、大腸			
5	中野	消化器系	肝臓、門脈系			
6	中野	消化器系	胆路、膵臓			
7	中野	呼吸器系	鼻腔、副鼻腔、咽頭			

8	中野	呼吸器系	喉頭、嚥下反射					
9	中野	呼吸器系	気管、気管支、肺					
10	中野	泌尿器系	腎臓					
11	中野	泌尿器系	尿管、膀胱、尿道、排尿反射					
12	中野	男性生殖器系	精巣、精巣上体、付属生殖腺					
13	中野	女性生殖器系	卵巣、卵管、子宮、膣、性周期					
14	中野	感覚器系	視覚器					
15	中野	感覚器系	平衡聴覚器、皮膚					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	80	①②③
	受講態度		●	●		●	20	①②③
評価の 特記事項	全ての評価方法を合計した評点が60点未満の場合、再試験を行う。 受講態度は、講義中の態度だけでなく、振り返りシートの提出状況および随時実施する課題（練習問題、「サブノート」のMISSION）など学習への自主的な取り組みを評価する。振り返りシートおよび課題の提出が期限内にできない場合は、受講態度を減点する。評価基準は別途説明する。 再試験の評価においては、本試験までの受講態度を含めない。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
講義内容について教科書を用いて復習し、解剖学実習および他教科において学んだ知識を有機的に結び付けて理解を深める。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
試験内容について質問を受け付け、必要に応じて解説する。								
教科書								
「臨床解剖学サブノート」 「機能解剖で斬る神経系疾患」中野隆 編著 メディカルプレス 「プロメテウス解剖学エッセンシャルテキスト」中野隆 監訳 医学書院 「骨学のすゝめ」中野隆 編集 南江堂								
参考図書								
特になし								
備考：履修者への要望								
知識は実際に使ってみなければ身に付かない。断片的な知識の暗記ではなく、知識を自ら応用して問題を解決する学習姿勢が必須である。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
27	解剖学実習	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
清島 大資・木村 菜穂子						
実務経験のある教員						
清島 大資：医学部及び歯学部にて献体による解剖実習と肉眼解剖の研究に携わっており、死体解剖資格を有する。 木村 菜穂子:理学療法士としての臨床経験、また名古屋大学人体解剖トレーニングセミナーへ複数回参加経験を有する。 以上の教員が、骨格標本を用いて筋骨格系を、さらに解剖見学実習において内臓器も含めた人体の三次元的理解を教授する。						
授業概要						
人体の構造の理解は、解剖学成書による知識だけでは不十分で、構造を実際に三次元的に理解し、その触感、重さ、硬さなどを体験することによって知識として身に付くものである。本科目では、骨格の形態、筋肉の形態、その他人体の構造を実際に見学することによって解剖学的知識を深め、確実な知識とすることを目的とする。基本的には、前期を中心に骨格標本を使って筋骨格系を学ぶと共に、解剖学Ⅰ・Ⅱの内容についてより実践形式で学ぶ。また、1年次後期に実施する解剖見学実習では、解剖学・解剖学実習でそれまでに学習した知識を基に献体に触れ、骨格構造・筋構造・人体の臓器・神経・血管系その他の構造を確認する。 (オムニバス方式／全20回) (木村 菜穂子／18回) 筋骨格系、神経系ならびに内臓系の構造について教授する。 (清島 大資／2回) 解剖学を学ぶ上で必要な組織学・発生学、生物学的・運動学的知識を教授する。 (木村 菜穂子／3回・清島 大資／3回) (共同) 人体解剖に関連する内容ならびに解剖見学実習をとおして骨格構造、筋構造、人体の臓器・神経系・血管系その他の構造を教授する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①骨格構造を三次元的に理解したうえで、説明することができる。 ②筋の構造や走行、働きを三次元的に理解したうえで、説明することができる。 ③人体の臓器・神経・血管系その他の構造、配置などを三次元的に理解したうえで、説明することができる。					
思考・判断 ・表現	④三次元的な骨格構造を説明することができる。 ⑤三次元的な筋の構造や走行、それらの働きを説明することができる。 ⑥人体の臓器・神経・血管系その他の構造、配置などを三次元的に説明することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑦解剖学実習を通して命の尊さを実感することができる。					
授業形態						
実習	解剖学Ⅰ・Ⅱで学ぶ知識と結び付けるため、骨格標本を使って実際の筋骨格系の構造を三次元的に学ぶと共に、骨デッサンを行いながら構造のイメージ化を行う。また、神経系・内臓系の構造について、模型・参考書等を用いて三次元的に学ぶ。基本的には骨標本等を用い、グループワークを中心とした実習形式を取る。 解剖見学実習を通して解剖学講義で学習した知識の確認および骨格構造・筋構造・人体の臓器・神経・血管系その他の構造を確認する。ただし、昨今の状況により解剖見学実習を実施できなかった場合、解剖見学実習に代わる課題を提示することがある。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	木村	オリエンテーション 解剖学を学ぶ意味と命の尊厳	授業概要を理解する。 医療者として解剖学を学ぶ上での心構えを学ぶ。			
2	清島	解剖学を学ぶ上で 必要な基礎知識 ：組織	解剖学を学ぶ上で必要な組織学・発生学、生物学的・運動学的知識を確認する。			

3	清島	解剖学を学ぶ上で 必要な基礎知識 ：発生	解剖学を学ぶ上で必要な組織学・発生学、生物学的・運動学的知識を確認する。
4	木村	骨格・関節の基本構造と役割	骨・関節の基本構造と役割を学ぶ。
5	木村	筋・靭帯等の基本構造と役割	筋・靭帯等の基本構造と役割を学ぶ。
6	木村	胸郭・脊柱の骨格・関節・ 筋・脈管	胸郭・脊柱の骨格・関節・筋・脈管の構造と役割を学ぶ。
7	木村	胸郭・脊柱の三次元的構造 (骨デッサン含む)	胸郭・脊柱の骨格・関節等の三次元的構造を他組織と関連付けて学ぶ。
8	木村	上肢の骨格・関節・筋・脈 管	下肢の骨格・関節・筋・脈管の構造と役割を学ぶ。
9	木村	上肢の三次元的構造 (骨デッサン含む)	下肢の骨格・関節等の三次元的構造を他組織と関連付けて学ぶ。
10	木村	下肢の骨格・関節・筋・脈 管	下肢の骨格・関節・筋・脈管の構造と役割を学ぶ。
11	木村	下肢の三次元的構造 (骨デッサン含む)	下肢の骨格・関節等の三次元的構造を他組織と関連付けて学ぶ。
12	木村	頭蓋部の骨格	頭蓋部の骨格の構造と役割を、内部構造と関連付けて学ぶ。
13	木村	頭蓋部の筋・神経	頭蓋部の筋・神経の構造と役割を、内部構造と関連付けて学ぶ。
14	木村	前期まとめ	第1回～第13回の講義内容について、他との関連を含めて確認する。
15	木村	口頭試問(前期)	第1回～第14回の講義内容について、口頭試問を実施する。
16	木村	循環器系・呼吸器系	循環器系・呼吸器系の構造と役割を骨格系との関連を中心に学ぶ。
17	木村	消化器系・その他内臓	消化器系・その他内臓の構造と役割を骨格系との関連を中心に学ぶ。
18	木村	内臓系と神経・脈管の 構造	各内臓と神経・脈管の関係性を三次元的に確認する。
19	木村	人体の三次元的構造	人体の三次元的構造について、他との関連を含めて確認する。
20	木村	口頭試問(後期)	第16回～第19回の講義内容について、口頭試問を実施する
21	清島・木村	解剖見学実習 ガイダンス	解剖見学実習前に、人体解剖に関連する内容(法的根拠、献体について、尊厳とは等)を学び、解剖見学実習の準備を行う。
22	清島・木村	解剖見学実習	解剖見学実習を通して、骨格構造、筋構造、人体の臓器・神経系・血管系その他の構造を確認する。

23	清島・木村	解剖見学実習	解剖見学実習を通して、骨格構造、筋構造、人体の臓器・神経系・血管系その他の構造を確認する。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●				50	①②③
	口頭試問	●	●		●	40	①②③④ ⑤⑥⑦
	レポート・ ポートフォリオ	●	●		●	10	①②③④ ⑤⑥⑦
評価の 特記事項	・筆記試験において、6割に満たなかった者を、再試験対象とする。 ・口頭試問は範囲を区切って2回実施し(ルーブリック評価)、それぞれ6割に満たなかった者は再度口頭試問を実施する(各1回のみ)。 再試験を実施する場合、その評価・判定方法は、本試験と同じである。 ・筆記試験、口頭試問それぞれで6割に満たなかった者は、単位認定されない。 ・レポートは解剖見学実習前後で作成し、実習後に提出し、評価を行う。ポートフォリオは課題や骨デッサンの実施状況について、少なくとも1回評価する。各評価は、講義内で提示・説明するルーブリックにて行う。 ・解剖見学実習において、ガイダンスを正当な理由なく無断欠席した者、課題等の提出状況が著しく悪いものは解剖見学実習への参加を認めない場合がある。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習：次回授業の教科書該当ページを読み、理解できない箇所を確認しておく→授業内で解決を図る。 復習：授業範囲の教科書該当ページを再度読み、理解した内容をまとめる。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
骨デッサンについては、教員がチェックをし、必要に応じてフィードバックを行う。筆記試験は返却しないが、希望者には個別に開示する（事前連絡必要）。口頭試問に関する疑義は、適宜受け付ける（事前連絡必要）。							
教科書							
解剖学Ⅰ・Ⅱにて使用する教科書に準ずる。							
参考図書							
解剖学Ⅰ・Ⅱにて使用する教科書に準ずる。							
備考：履修者への要望							
解剖学を含めて医学を学ぶ者は、その知識や技術が歴史的に多くの命の上に成り立っていることを自覚する必要がある。その一つとして、ご献体下さった故人やその家族に対する感謝の気持ちと、命に対する尊厳の意を持って受講することを義務とする。将来、人の命を預かる職域に就く者としての当然の心構えと態度、積極性を求める。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
28	生理学 I	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
長谷川 昇						
実務経験のある教員						
長谷川 昇：理学療法士、作業療法士、看護師、管理栄養士の養成施設において、正常な体の機能の理解に重要な生理学・生理学実習の教育に携わってきた教員が、リハビリテーション医学に必須の内容に絞って講義を行う。						
授業概要						
生理学は、人体諸器官の正常な機能（働き）を理解する科目である。生理学 I では、基本的な細胞の構造と機能を学習した後、主に神経系を介する生体の情報処理について学習する。まず神経や筋を構成する興奮性細胞の刺激受容や興奮、神経を通じた情報伝達と中枢での情報処理、筋細胞の収縮機序などを学び、次いで、本科目が理学療法士、作業療法士を志す学生を対象とすることに鑑み、神経・筋・感覚等の動物性機能の総合としての反射機能や運動の調節に重点を置いて学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①ヒトの器官における各器官の特徴と正常な機能が説明できる。					
思考・判断 ・表現	②ヒトの正常な機能を理解し、疾病の原因、薬の作用点について説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③学修ポイントを理解し、授業後、質問や問題提起することができる。					
授業形態						
講義	授業テーマの理解を深めるため、問を投げかけ答えを導く形式で講義を進める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	長谷川	生体の階層性と生体情報処理	情報伝達と信号処理の大枠と神経細胞の形態について学ぶ。			
2	長谷川	神経の基本的機能	イオンチャネル、静止電位、活動電位による制御について学ぶ。			
3	長谷川	情報の伝達	興奮の伝導と伝達のしくみについて学ぶ。神経損傷や麻酔について考える。			
4	長谷川	シナプス伝達	シナプスの構造と化学伝達について学ぶ。神経系の薬の作用機序について考える。			
5	長谷川	感覚の特性と視覚	感覚の一般的性質、視覚について学ぶ。色盲について考える。			
6	長谷川	内耳の感覚	聴覚と平衡感覚について学ぶ。聴力検査や乗り物酔いについて考える。			
7	長谷川	化学感覚、体性感覚	嗅覚と味覚、体性感覚、内臓感覚について学ぶ。			

8	長谷川	中枢神経系の構造と機能	中枢神経系の一般構造、脳循環と大脳の機能局在、睡眠および大脳の神経連絡について学ぶ。					
9	長谷川	中枢神経系の高次機能	新皮質連合野の機能、辺縁系と視床下部、脳幹の機能について学ぶ。脳死について考える。					
10	長谷川	骨格筋の基本的機能	骨格筋の基本構造とその収縮機構について学ぶ。					
11	長谷川	骨格筋の収縮特性	骨格筋の収縮の仕方、筋肉の長さや張力の関係、運動単位、収縮タイプについて学ぶ。					
12	長谷川	骨格筋のファイバタイプ	骨格筋収縮時のエネルギー代謝によるファイバタイプの分類について学ぶ。					
13	長谷川	心筋・平滑筋の基本的機能	心筋、平滑筋の収縮の仕方の特徴について学ぶ。					
14	長谷川	脊髄の機能と筋感覚	脳-脊髄神経の構成、筋感覚、反射と反射弓、運動機能、内臓反射について学ぶ。					
15	長谷川	運動の調節	脳幹、小脳、大脳基底核の姿勢制御や運動機能の調節について学ぶ。脳卒中の片麻痺について考える。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			95	①②
	レスポンスペーパー		●	●		●	5	①②③
評価の 特記事項	・毎回の授業のポイントと質問・疑問点をレスポンスペーパーとして提出する。感想だけの記載や極端に字数が少ないものは加点しない。 ・筆記試験は範囲を区切り、2回に分けて実施する。詳細は授業内で告知する。 ・すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、期末試験の範囲で再試験を実施し、筆記試験のみの点数で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
(予習) シラバス中に提示されている授業内容に対応した教科書の該当箇所を読み、理解しておく。 (復習) 授業のノートを作成し、各自で調べたことを追加することにより理解を深める。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
・必要に応じて、試験結果・採点基準については授業内で説明する。 ・質問や疑問は、連絡の上、授業時間外でも受け付ける。								
教科書								
「標準理学療法学・作業療法学 生理学」岡田隆夫 ほか 医学書院 「スラスラわかる薬のメカニズム」鈴木正彦 監修 サイオ出版								
参考図書								
「トートラ 人体解剖生理学」丸善出版								
備考：履修者への要望								
生理学では、正常な人体の機能について学ぶ。正常な機能が理解できていれば、疾患や治療、投与されている薬物について容易に理解できるようになる。したがって、各自で予習復習を行い、知識の定着と統合に努めてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
29	生理学Ⅱ	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
長谷川 昇						
実務経験のある教員						
長谷川 昇：理学療法士、作業療法士、看護師、管理栄養士の養成施設において、正常な体の機能の理解に重要な生理学・生理学実習の教育に携わってきた教員が、リハビリテーション医学に必須の内容に絞って講義を行う。						
授業概要						
生理学Ⅱでは、血液と免疫、心臓と血液循環、呼吸とガス交換、消化と吸収、尿の生成と排出など諸臓器の植物性機能について学習する。さらに、単に個々の臓器の機能を理解するのみではなく、異なる臓器相互の関係を学び、自律神経やホルモンにより調節されている体液や電解質などホメオスタシス維持のために統合的に組み立てられている仕組みについて理解することを目標とする。さらに、正常な機能が失われた場合の疾患や使用薬物の理解に繋げる。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①ヒトの器官における各器官の特徴と正常な機能が説明できる。					
思考・判断 ・表現	②ヒトの正常な機能を理解し、疾病の原因、薬の作用点について説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③学修ポイントを理解し、授業後、質問や問題提起することができる。					
授業形態						
講義	授業テーマの理解を深めるため、問を投げかけ答えを導く形式で講義を進める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	長谷川	血液の生理（Ⅰ）	血液の機能と組成、赤血球、ヘモグロビンの働きについて理解する。 貧血について考える。			
2	長谷川	血液の生理（Ⅱ）	血小板と止血機構、血液型、生体防御について理解する。 アレルギー症状と抗凝固薬、抗ヒスタミン薬、抗リウマチ薬の作用機序について考える。			
3	長谷川	心臓と循環	心臓の構造と心筋の基本的性質、血液循環、冠循環、刺激伝導系と心電図について理解する。 不整脈の成因と心不全治療薬、抗不整脈薬の作用機序について考える。			
4	長谷川	心周期と心機能の調節	心臓内の血液の流れと心機能の調節について理解する。 狭心症の成因と狭心症治療薬の作用機序について考える。			
5	長谷川	血管系と血圧	血管の構造と働き、血圧と血圧測定、毛細血管での物質移動について理解する。 高血圧、浮腫の成因と降圧薬の作用機序について考える。			
6	長谷川	循環調節機構	自律神経系、内分泌系、筋ポンプによる循環調節の仕組みについて理解する。			
7	長谷川	呼吸機能と換気の仕組み	呼吸器系の構成と換気の仕組みについて理解する。			

8	長谷川	ガスの運搬	ガス交換の原理、ヘモグロビンによる酸素の運搬、酸素解離曲線について理解する。					
9	長谷川	呼吸調節	呼吸の調節と呼吸の異常について理解する。COPDについて考える。					
10	長谷川	尿の生成	腎臓の基本的構造と尿生成過程（糸球体ろ過と尿細管での再吸収、分泌）について理解する。					
11	長谷川	尿量の調節と腎機能評価	尿の濃縮と尿量の調節、排尿反射、クリアランスについて理解する。血圧や貧血と腎臓の関係、利尿薬の作用機序について考える。					
12	長谷川	体液の調節と体温調節	体液の調節、酸塩基平衡、浸透圧調節の仕組みについて理解する。呼吸性、腎性代償反応について考える。					
13	長谷川	栄養素と代謝、消化管の運動と分泌機能	栄養素とエネルギー代謝、消化管の構造、消化管運動と調節、消化液の分泌について理解する。中枢の神経伝達物質と消化器症状との関係について考える。血糖値の維持と糖尿病治療薬の作用機序について考える。					
14	長谷川	消化吸収と肝機能	消化と吸収機能および肝臓の機能について理解する。					
15	長谷川	生殖機能、内分泌	男性、女性の生殖機能と加齢変化、骨代謝と血漿カルシウム濃度の調節について理解する。 骨粗鬆症の成因と骨粗鬆症治療薬の作用機序について考える。					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			95	①②
	レスポンスペーパー		●	●		●	5	①②③
評価の特記事項	・毎回の授業のポイントと質問・疑問点をレスポンスペーパーとして提出する。感想だけの記載や極端に字数が少ないものは加点しない。 ・筆記試験は範囲を区切り、2回に分けて実施する。詳細は授業内で告知する。 ・すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、期末試験の範囲で再試験を実施し、筆記試験のみの点数で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）シラバス提示の学習する内容に対応した教科書の該当箇所を読み、内容を理解しておく。 （復習）授業のノートを作成し、各自で調べたことを追加することにより理解を深める。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
・必要に応じて、試験結果・採点基準については授業内で説明する。 ・質問や疑問は、連絡の上、授業時間外でも受け付ける。								
教科書								
「標準理学療法学・作業療法学 生理学」岡田隆夫 ほか 医学書院 「スラスラわかる薬のメカニズム」鈴木正彦 監修 サイオ出版								
参考図書								
「トートラ 人体解剖生理学」丸善出版								
備考：履修者への要望								
生理学では、正常な人体の機能について学ぶ。正常な機能が理解できていれば、疾患や治療、投与されている薬物について容易に理解できるようになる。したがって、各自で予習復習を行い、知識の定着と統合に努めてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
30	生理学実習	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
長谷川 昇						
実務経験のある教員						
長谷川 昇：理学療法士、作業療法士、看護師、管理栄養士の養成施設において、正常な体の機能の理解に重要な生理学・生理学実習の教育に携わってきた教員が、リハビリテーション医学に必須の内容に絞って講義を行う。						
授業概要						
健康と疾患の知識を深めるために、実験・実習を通して基本的な測定技術や記録方法、データの扱い、結果のまとめ方を修得し、生体の基本的な機能と仕組みについて理解する。具体的には、学生自身を被験者として、ヒトの血圧、心電図、呼吸、筋電図、感覚機能に関する実習を行う。また、動物の血液を用いた血球の観察や凝固試験、シミュレーションソフトを用いた動物（ネコ前脛骨筋、モルモット腸管）の骨格筋や平滑筋の神経伝達物質や電気刺激による収縮に及ぼす受容体作動薬、遮断薬などの薬理作用についても理解を深める。さらに、透析チューブを用いて、毛細血管や腎糸球体での水の移動について理解を深めるための実習を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①実習課題に関する生体情報のメカニズムを正しく説明できる。					
思考・判断 ・表現	②実習から得られた結果を記録し、資料や文献による調査結果を加えてレポートを作成できる。実習から得た知識や情報を整理し、要約して他人に説明できる。					
技能	③実習課題で用いた測定方法が、臨床現場で生理機能検査や検体検査として用いられている意義を理解できる。					
関心・意欲 ・態度	④実習内容をわかりやすくまとめ、発表内容についての疑問点や示唆があれば、積極的に討議することができる。					
授業形態						
実習	グループワーク（結果のまとめと考察）を行い、プレゼンテーションを行う。発表会では、他のグループの発表に対し、ディスカッションを行う。ネコ骨格筋収縮とモルモット回腸の組織標本を用いた薬理学のシミュレーションパッケージを用いる（Strathclyde大学）。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	長谷川	オリエンテーション	・授業の進め方、レポート作成、発表会について			
2	長谷川	実習講義①	・血圧、脈拍、心電図			
3	長谷川	血圧測定	・血圧測定（収縮期血圧・触診、拡張期血圧、体位による違い＝受動的体位変換）			
4	長谷川	脈拍測定	・脈拍測定（心拍数の部位、左右差、息こらえ、冷水刺激による変化）			
5	長谷川	発表会Ⅰ 実習講義②	・血圧・脈拍（4班） ・呼吸			
6	長谷川	実習講義③	・誘発筋電図（運動神経刺激VTR学習）・骨格筋収縮・平滑筋収縮 ・感覚			

7	長谷川	【前半の班】心電図① 【後半の班】呼吸機能①	・（心電図）時間軸、心拍数、電気的心軸（呼吸との関係） ・（呼吸）スパイロメトリー：排気量分画、1秒率
8	長谷川	【前半の班】心電図② 【後半の班】呼吸機能②	同上
9	長谷川	【前半の班】呼吸機能① 【後半の班】心電図①	・（呼吸）スパイロメトリー：排気量分画、1秒率 ・（心電図）時間軸、心拍数、電気的心軸（呼吸との関係）
10	長谷川	【前半の班】呼吸機能② 【後半の班】心電図②	同上
11	長谷川	【前半の班】筋収縮① 【後半の班】感覚①	・（筋収縮）シュミレーションソフトを利用した電気刺激（神経・筋）と伝達物質による骨格筋・平滑筋収縮、受容体遮断薬などの薬理作用 ・（感覚）皮膚感覚（盲点、神経密度、温度、2点閾値）、深部感覚（weberの法則）、聴覚（伝音性・感音性）
12	長谷川	【前半の班】筋収縮② 【後半の班】感覚②	同上
13	長谷川	【前半の班】感覚① 【後半の班】筋収縮①	・（筋収縮）シュミレーションソフトを利用した電気刺激（神経・筋）と伝達物質による骨格筋・平滑筋収縮、受容体遮断薬などの薬理作用 ・（感覚）皮膚感覚（盲点、神経密度、温度、2点閾値）、深部感覚（weberの法則）、聴覚（伝音性・感音性）
14	長谷川	【前半の班】感覚② 【後半の班】筋収縮②	同上
15	長谷川	発表会Ⅱ	・心電図（2班）、呼吸（2班） 骨格筋・平滑筋（3班）
16	長谷川	発表会Ⅲ 実習講義④	・感覚（3班） ・血液、毛細血管を通した水の移動（膠漆浸透圧）
17	長谷川	【前半の班】筋電図① 【後半の班】血液①	・（誘発筋電図）M波の確認、伝導速度の計算、温度による影響 ・（血液）ヘマトクリット値、赤血球浸透圧抵抗（血液内での細胞内外への水の移動）、血液凝固試験、白血球像
18	長谷川	【前半の班】筋電図② 【後半の班】血液②	同上
19	長谷川	【前半の班】血液① 【後半の班】筋電図①	・（血液）ヘマトクリット値、赤血球浸透圧抵抗（血液内での細胞内外への水の移動）、血液凝固試験、白血球像 ・（誘発筋電図）M波の確認、伝導速度の計算、温度による影響
20	長谷川	【前半の班】血液② 【後半の班】筋電図②	同上
21	長谷川	膠質浸透圧の差による水の移動①	半透膜における膠漆浸透圧による水の移動（末梢組織での水の移動のシミュレーション、未知検体）
22	長谷川	膠質浸透圧の差による水の移動② 発表会Ⅳ	同上 ・誘発筋電図（3班）
23	長谷川	発表会Ⅴ	・血液（2班） 膠質浸透圧未知検体の同定（2班） 考察部分（2班）

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能		割合（％）	到達目標
	実習レポート	●	●	●	●	60	①②③④
	発表	●	●	●	●	40	①②③④
評価の 特記事項	レポートは、考察の部分を各自記載とし、発表は、グループ単位で評価する。評価は得られた結果の説明が矛盾なく論理的に考察されているかどうかを基準とする。 発表会での発言には、加点する。 合格点に満たない場合でも、再試験は実施しないが、実習の範囲で課題を出し、提出された課題が出題の意図に従って記述されているかどうかを基準として評価する。 評価基準は講義内で詳細を示す。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
（予習）事前学習の内容は、実習レポートの基礎知識として記載する。 （復習）実習レポートの作成、発表準備は、できるだけ授業時間内で行うこととし、授業時間内でできない分は授業時間外で行う。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
必要に応じて、レポート・発表内容に関して教員とディスカッションする。 質問や疑問は、連絡の上、授業時間外でも受け付ける。							
教科書							
使用しない。適宜資料を配布する。							
参考図書							
1年次の生理学で使用した教科書を持参し、他多くの生理学の成書を参考にすること。							
備考：履修者への要望							
結果のまとめの際には協力して取り組み、他班の結果を情報共有し考察するようにしてほしい。考察のために参考にした文献は、参考文献としてレポートに記載すること。 グループメンバーに迷惑になるので、正当な理由なき欠席、遅刻は、厳禁である。また、レポートの提出は期限を厳守すること。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
31	運動学総論	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
齊藤 誠						
実務経験のある教員						
齊藤 誠：医療機関で理学療法士として実務経験を有する教員が、運動力学や運動学の理解に必要な基礎知識について講義する。						
授業概要						
運動学は理学療法士、作業療法士にとって治療計画作成や運動療法を実施する上で基礎となる学問である。運動学総論においては、初学者が運動学の概要を理解し、今後の学習の基礎となる知識を習得することを目標に講義を実施する。具体的には「理学療法・作業療法国家試験出題基準 3. 運動学 A. 総論」に準じたテーマで講義を行い、特に基本的かつ重要と思われる用語の理解に重点を置く。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①身体運動のしくみが説明できる。 ②骨、神経、筋、関節に関する基礎的な専門用語を正しく理解し、使用できる。					
思考・判断 ・表現	③運動力学の基礎を把握し、単純な力学モデルであれば運動によって生じる力や重心位置などを求めることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④身体の運動に関する興味関心を持つことができる。					
授業形態						
講義	講義時間中は問題演習、小テスト、グループワークを行う。 各授業テーマの説明についてはGoogle Classroomよりオンデマンド形式で資料を配信するので必要に応じて視聴すること。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	齊藤	オリエンテーション 運動にかかわる用語の理解	講義に関するオリエンテーションを行う。 運動にかかわる専門用語（運動方向）を理解する。教科書 P213-296から基本的用語を抜粋			
2	齊藤	骨と関節の役割	骨と関節の役割に関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P29-40			
3	齊藤	骨格筋の役割①	骨格筋、特に筋収縮、弛緩の基本的性質に関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P41-58			
4	齊藤	骨格筋の役割②	筋線維の種類、二関節筋、運動単位などに関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P41-58			
5	齊藤	神経の役割	神経の役割、伝導路に関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P58-86			
6	齊藤	反射	筋紡錘やゴルジ腱器官、反射などに関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P87-95			
7	齊藤	感覚器の構造と機能	感覚の性質・分類、伝導路に関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P95-108			

8	齊藤	姿勢と歩行	支持基底面や重心、歩行周期、歩行時の筋活動や重心移動に関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P299-332					
9	齊藤	姿勢と歩行	支持基底面や重心、歩行周期、歩行時の筋活動や重心移動に関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P299-332					
10	齊藤	生体力学の基礎 (運動法則、力の合成・分解)	運動法則、力の合成・分解などに関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P159-192					
11	齊藤	生体力学の基礎 (モーメント、重心、滑車)	モーメント、重心、滑車などに関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P159-192					
12	齊藤	生体力学の基礎 (関節運動とてこ、仕事)	関節運動とてこ、仕事などに関する問題演習、小テストを行い、必要に応じて説明する。教科書 P159-192					
13	齊藤	呼吸・循環・代謝	安静時と運動時の呼吸器、血液と循環、代謝などについて実習とグループワークを通して理解する。教科書 P108-158					
14	齊藤	呼吸・循環・代謝	安静時と運動時の呼吸器、血液と循環、代謝などについて実習とグループワークを通して理解する。教科書 P108-158					
15	齊藤	呼吸・循環・代謝	安静時と運動時の呼吸器、血液と循環、代謝などについて実習とグループワークを通して理解したことをまとめ、発表する。教科書 P108-158					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	70	①②③④
	小テスト		●	●		●	30	①②③④
評価の 特記事項	小テスト+筆記試験の点数が基準点に満たない場合には再試験を実施する。再試験は小テスト+筆記試験を合わせた全範囲を対象とする。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前学習：事前配信資料と教科書を利用して学習を進めること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験の回答用紙は採点后に返却する。小テストはGoogle Formを利用して実施するため、即時返却する。								
教科書								
「基礎運動学」藤澤宏幸 ほか編 医歯薬出版								
参考図書								
なし								
備考：履修者への要望								
本科目は多くの科目の基礎となる内容であるため、積極的な受講態度を期待する。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
32	運動学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	2単位	60時間
担当教員名						
松田 文浩						
実務経験のある教員						
松田 文浩：医療機関で理学療法士の実務経験のある教員が、日常生活活動制限の障害構造を運動学的観点から講義を行う。						
授業概要						
・身体障害を科学的に分析するために必要な身体運動の基本的知識を身につける。 ・日常生活活動制限の障害構造を運動学的観点から考察し、専門用語を用いて表現する能力を身につける。 ・解剖学・生理学で学んだ知識を応用し、身体運動を構成する多様な要因を考察する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①関節の構造と機能を説明できる。 ②正常運動を構成する骨格筋の役割について説明できる。					
思考・判断 ・表現	③開放性及び閉鎖性運動連鎖を考慮してヒトの運動を説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④運動学に関わる最新の知見を知り、説明できる。					
授業形態						
講義	スクリーンを用い、資料画像等の解説を主体として講義を進める。身体運動をイメージするため、少人数制のグループワークを行う。また、自身や他者の身体を動かしながら確認する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松田	導入	1. 本講義について 2. 運動学に関わる基本的事項の整理			
2	松田	肩関節複合体1	1. 肩関節複合体を構成する骨 2. 胸鎖・肩鎖関節の関節学			
3	松田	肩関節複合体2	1. 肩甲胸郭関節の関節学 2. 肩甲上腕関節の関節学（包括的な外転の運動学）			
4	松田	肩関節複合体3	1. 肩複合体の筋の機能 2. 肩甲胸郭関節の筋 3. その他・まとめ			
5	松田	肘関節と前腕1	1. 肘関節・前腕を構成する骨 2. 肘関節・前腕の関節学 3. 前腕骨間膜の機能			
6	松田	肘関節と前腕2	1. 肘関節の筋の機能 2. 回外および回内筋の機能 3. まとめ			
7	松田	手関節1	1. 手関節を構成する骨 2. 手関節の構造と靱帯 3. 手関節の運動学			

8	松田	手関節2	1. 手根不安定症 2. 手関節の筋の機能 3. まとめ
9	松田	手部1	1. 手部を構成する骨 2. 手部を構成する関節の構造
10	松田	手部2	1. 手の筋の機能 2. 指の外在筋と内在筋の相互作用 3. 手の変形
11	松田	上肢まとめと演習	1. 上肢主要関節の動きの確認 2. 上肢における開放性及び閉鎖性運動連鎖の考え方 3. まとめ
12	松田	股関節1	1. 股関節を構成する骨 2. 股関節の機能解剖
13	松田	股関節2	1. 骨運動と関節包内運動 2. 股関節の筋機能
14	松田	股関節3	1. 関節疾患の例と外科的治療介入 2. まとめ
15	松田	膝関節1	1. 膝関節を構成する骨 2. 膝関節アライメントの考察 3. 関節包と補強靱帯
16	松田	膝関節2	1. 滑膜と滑液包 2. 脛骨大腿関節の関節学 3. 膝蓋大腿関節の関節学
17	松田	膝関節3	1. 関節の筋機能 2. 膝関節の異常アライメント 3. まとめ
18	松田	足関節と足部1	1. 足関節と足部を構成する骨 2. 運動表現に関わる用語 3. 足関節・足部に関わる関節の構造と機能
19	松田	足関節と足部2	1. 筋の解剖と機能 2. 足のアーチ
20	松田	足関節と足部3	1. 足の変形 2. まとめ
21	松田	体幹1	1. 体幹を構成する骨 2. 全体としての脊柱 3. 脊柱の局所形態特徴と椎間結合
22	松田	体幹2	1. 脊柱の局所解剖と運動学 (頭頸部、胸部、腰部)
23	松田	体幹3	1. 脊柱運動学のまとめ 2. 仙腸関節の運動学
24	松田	下肢・体幹の まとめと演習	1. 下肢・体幹の動きの確認 2. 下肢における開放性及び閉鎖性運動連鎖の考え方 3. まとめ
25	松田	歩行の身体運動学1	1. 歩行分析の歴史 2. 歩行の空間的・時間的指標 3. 重心の移動と制御
26	松田	歩行の身体運動学2	1. 歩行時の関節の運動学 2. 歩行中の筋活動
27	松田	歩行の身体運動学3	1. 運動力学 2. 歩行のエネルギー消費 3. 異常歩行

28	松田	走行の身体運動学		1. 歩行と走行の違い 2. 歩行・走行のまとめ				
29	松田	顔面筋		1. 顔面の筋学				
30	松田	運動学習		1. 運動技能学習の3段階 2. 行動変化に関わる要因 3. 学習の転移と練習法				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	70	①②③④
	小テスト		●	●		●	30	①②③④
評価の 特記事項	筆記試験および小テストの結果を合算し、60％以上を合格とする。 60％に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験の評価方法は、対象者に別途説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前学習：講義範囲に該当するテキストを熟読する 事後学習：講義内容を確認し、理解する （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テスト実施後、全体に向けて解説を行う。筆記試験のフィードバックは個別に対応する。（場所：教室または研究室）								
教科書								
「基礎運動学」中村隆一　ほか　医歯薬出版								
参考図書								
講義中に随時紹介する。								
備考：履修者への要望								
1. テキストを主体として解説を行うので、内容を講義前、後に必ず確認すること。 2. グループワークおよび自身や他者の身体を動かしながらの確認時は積極的に行うこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
33	運動生理学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
臼井 晴信						
実務経験のある教員						
臼井 晴信：医療機関で理学療法士として心臓リハビリテーションや呼吸リハビリテーションに携わるとともに、大学院博士前期課程および博士後期課程では運動生理学分野を研究する講座（生体機能理学療法解析学）に所属し、運動生理学に関する研究を行っていた教員が、理学療法や作業療法において必要な運動生理学に関する知識及び理論を講義する。						
授業概要						
運動時の生体が起こす反応や運動を継続することによる生体の変化について学修する。特に運動による自律神経活動の変化とそれに伴う心血管系、呼吸器系、体温や腎機能の反応、運動が骨格筋に及ぼす影響や脳活動が運動に及ぼす影響について学修する。また運動負荷試験の方法及び理論を学び、根拠を持った理学療法、作業療法の評価および治療に必要な運動生理学的考え方について学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①運動時の自律神経活動の変化と、それに伴う生体の反応について説明できる。 ②運動時の骨格筋の反応、脳活動が運動に及ぼす影響について説明できる。 ③運動継続による長期的な生体への影響について説明できる。					
思考・判断 ・表現	④生体における変化または単純な病態を運動生理学的観点から説明できる。 ⑤心肺運動負荷試験の結果を解釈し説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	スライドを使用した講義やグループワークを行う。講義中に示した事例に対してディスカッションを行う。担当教員が作成しYouTubeで無償公開している動画を学修の補助に用いる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	臼井	運動生理学概要	運動生理学とは何かを学修する。ホメオスタシスの概念について学修する。			
2	臼井	運動による循環系の反応	運動によって生じる自律神経活動の変化および循環系の反応について学修する。			
3	臼井	運動による呼吸器系の反応	運動による呼吸器系の反応について学修する。			
4	臼井	運動による腎機能の反応 運動による体温の変化	運動によって生じる自律神経活動の変化が引き起こす体温の変化および腎機能の反応について学修する。			
5	臼井	運動時の骨格筋の反応 運動と脳活動	運動時の骨格筋の反応と脳活動の変化が運動時の自律神経活動に及ぼす影響について学修する			
6	臼井	運動の長期的効果	運動習慣が生体に及ぼす影響を学修する。			
7	臼井	運動負荷試験	運動負荷試験の種類、目的、方法を学修する。			

8	臼井	運動負荷試験の解釈	運動負荷試験の結果について考察する。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●			80	①②③④⑤
	レポート		●			10	④⑤
	小テスト	●				10	①②③
評価の 特記事項	全ての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。小テストは第2回以降、講義内に行う。レポートは講義時間内および講義後（時間外）に作成する。レポートの評価基準は初回講義時に説明する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
生理学で学修した内容を復習しておく。復習する範囲は事前に提示する。復習した内容に関する小テストを第2回以降の講義開始時に実施する。また講義内容について次回講義までに復習しておく。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
レポートは返却し、内容について次回講義で解説する。 試験は事前に連絡の上、内容を確認することができる。							
教科書							
「標準理学療法学・作業療法学 生理学」岡田隆夫 ほか 医学書院 「基礎運動学」 中村隆一 ほか 医歯薬出版 適宜必要な資料を配布する。							
参考図書							
適宜紹介する。							
備考：履修者への要望							
常に疑問を持って講義に臨むこと。 生理学Ⅰ・Ⅱ、運動学総論、運動学の講義資料及び教科書の内容を十分に復習して授業に臨むこと。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
34	運動学実習	理学療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
宮津 真寿美・濱田 光佑						
実務経験のある教員						
宮津 真寿美・濱田 光佑：医療機関で理学療法士の実務経験のある教員が、運動学で学修した内容の理解を深めるために、自ら体験しながら生理学、解剖学、生体力学、動作分析学的に考察しながら、実習形式で教授する。						
授業概要						
理学療法士は対象者の身体運動を理解することが重要である。 本科目では、運動学で学修した内容の理解を深めるために、運動学に関する課題を自ら体験し、生理学、解剖学、生体力学、動作分析学的に考察しながら、実習形式で学修する。観察や測定を行い、データを解析し、実習目的に沿って考察を加え、最終的にそれらをレポートとして文書化する。さらに、実習内容をまとめて発表し、質疑応答を行う。担当教員が共同で別課題を担当することで、複数の課題に取り組めるように進める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①実習課題に関する基礎知識を述べることができる ②実習の目的・方法を理解し実践できる					
思考・判断 ・表現	③実習で得られた体験や事実をわかりやすく説明することができる ④基礎知識を使用し自分の意見を主張することができる					
技能	⑤得られたデータを集計、加工、整理することができる ⑥レポート作成において、資料や文献を調査することができる					
関心・意欲 ・態度	⑦実習課題に積極的に参加し、レポートを期限内に提出することができる ⑧発表では、分かりやすい発表と質疑応答ができる					
授業形態						
実習	グループに分かれ実習、データ解析をし発表を行う。 スライドによる講義も含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	宮津・濱田	オリエンテーション	オリエンテーション 実習課題内容を知り、レポートの書き方を学修する。			
2	宮津・濱田	実習準備①	担当課題のデータ整理や発表の仕方を学修する。 実習準備、機器操作の確認、予備実習、データ収集のひな型を作成する。			
3	宮津・濱田	実習準備②				
4	宮津・濱田	実習準備③				
5	宮津・濱田	実習、レポート作成	筋活動、姿勢、生体力学等に関する実習課題をグループごとに実施。 実習課題のデータ整理、レポート作成 ※実習内容、使用機器等はオリエンテーション時に説明する。			
6	宮津・濱田	実習、レポート作成				
7	宮津・濱田	実習、レポート作成				
8	宮津・濱田	実習、レポート作成				

9	宮津・濱田	実習、レポート作成	筋活動、姿勢、生体力学等に関する実習課題をグループごとに実施。 実習課題のデータ整理、レポート作成 ※実習内容、使用機器等はオリエンテーション時に説明する。					
10	宮津・濱田	実習、レポート作成						
11	宮津・濱田	発表スライド作成方法・発表方法の学習	実習課題を発表する際のスライド作成方法、発表方法について学修する。					
12	宮津・濱田	発表スライド・発表原稿作成	発表用スライドを作成し、発表原稿の作成と発表の練習を実施する。					
13	宮津・濱田	発表スライド・発表原稿作成						
14	宮津・濱田	発表	各課題ごとの結果発表と質疑応答を実施する。					
15	宮津・濱田	発表・総まとめ						
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			50	①②④
	レポート		●	●	●	●	20	①②③④⑤⑥⑦
	発表		●	●		●	30	①③④⑧
評価の特記事項		レポートはルーブリックを使用し、発表は、「発表内容」、「わかりやすさ」、「質疑応答」の3項目に対して5段階評価を行う。 合格点は、すべての評価方法の合計点数が6割以上である。6割に達しなかった場合、筆記試験のみ再試験を実施し、レポート点と発表点を合算して評価する。 レポート及び発表の評価基準、再試験の実施内容は、初回授業で説明する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）有意義な実習を行うために、実習課題の基礎知識、方法を理解し、実習を行う前に根拠ある仮説を立てる。 （復習）実習を振り返りデータの整理やレポート作成する。また、学生同士・教員がディスカッションし考察を深める。他人に伝わるレポート作成・発表の準備をする。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートは後日返却する。必要に応じてレポート内容に関して教員とディスカッションする。質疑は連絡の上、講義時間以外でも受け付ける。								
教科書								
プリントを配布する。								
参考図書								
「基礎運動学」中村隆一 医歯薬出版 「臨床運動学」中村隆一 医歯薬出版								
備考：履修者への要望								
実習課題は、グループで行う。正当な理由なき欠席や遅刻は厳禁である。 また、レポートは期限内の提出を厳守すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
35	運動学実習	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
清水 一輝・外倉 由之						
実務経験のある教員						
清水 一輝・外倉 由之：医療機関において作業療法士として勤務し、身体障害領域の作業療法の経験を有する教員が、運動学実習について講義を行う。						
授業概要						
作業療法士に関わることの多い、日常生活活動の一部を運動学的に分析し、運動学で学修した肢体の構造、人間の動きに関して理解を深めることを目的とする。 本科目では、実習により、基本動作やADL動作についてグループで観察や測定、グループディスカッションを行い、その結果をレポートとしてまとめる。レポートを作成することにより、論理的思考や文章力を養い、作業療法士にとって必要な表現力を向上させることも目的である。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①姿勢や動作を観察する際に着目するべき視点を説明できる。					
思考・判断 ・表現	②観察したことを専門用語を用いて適切に表現することができる。 ③レポートの目的を理解し、他者に分かりやすいレポートを書くことができる。					
技能	④運動学的視点で動作を観察し、分析することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤課題の提出期限を守り、担当教員のフィードバックを受けることができる。 ⑥積極的に授業への参加・協力ができる。					
授業形態						
実習	グループワークを中心に行う。適時、動画の撮影と分析を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	清水・外倉	オリエンテーション レポートの作成方法	レポートの作成方法について学習する			
2	清水・外倉	上肢帯および上肢	肩関節の運動を観察し、肩甲骨リズムについて学習する ：教科書pp.100-120			
3	清水・外倉	肘・前腕	肘と前腕による日常生活動作について肩の可動域と共に理解する ：教科書pp.121-145			
4	清水・外倉	手関節・手	手関節と手の構造を確認する。手関節と手の動きを観察し動作を分析する ：教科書pp.146-181			
5	清水・外倉	骨盤帯・股	骨盤周辺の構造を確認する。骨盤と股関節の運動を観察し、動作を分析する。 ：教科書pp182-212			
6	清水・外倉	脊柱	脊柱の構造を確認し、脊柱各部位の動作を観察し分析する ：教科書pp.283-321			
7	清水・外倉	姿勢（静的座位・立位姿勢）	座位・立位姿勢の評価 ：教科書pp.343-366			

8	清水・外倉	寝返り・起き上がり	寝返り・起き上がり動作を観察し分析する ：教科書pp. 465-479					
9	清水・外倉	立ち座り-起立着座動作	立ち座りの動作観察と分析する ：教科書pp. 480-498					
10	清水・外倉	運動連鎖とバランス	運動連鎖とバランスの評価を実施する ：教科書pp. 322-342					
11	清水・外倉	歩行・杖歩行	歩行を観察し分析する ：教科書pp. 367-392					
12	清水・外倉	発表前準備①	各班の担当内容について発表準備を行う					
13	清水・外倉	発表前準備②	各班の担当内容について発表準備を行う					
14	清水・外倉	発表①	各グループの発表と評価を行う					
15	清水・外倉	発表②	各グループの発表と評価を行う					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●	●	●	●	40	①②③④⑤
	発表		●	●	●	●	40	①②③④⑤
	参加貢献度					●	20	⑥
評価の 特記事項	レポート・発表はルーブリックで評価を行う。 全ての評価基準の合計が6割を満たさない場合、追加のレポートを課すことがある。 参加貢献度は、実習中の学習態度やグループワークへの貢献度、また発表の際の聴講態度と質問の質や量をルーブリックで評価する。 ルーブリックは授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前に教科書の指定範囲をよく読み、実習の目的・方法を理解する。 実習後は結果のまとめを速やかに行い、レポート作成にとりかかる。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートは、フィードバックコメントを記載し、講義の中で返却する。								
教科書								
「PT・OTのための運動学テキスト 基礎・実習・臨床」小柳磨毅ほか編 金原出版 「基礎運動学」中村隆一ほか 医歯薬出版								
参考図書								
「解剖学・生理学・運動学に基づく動作分析」奈良勲ほか編 医歯薬出版								
備考：履修者への要望								
グループで実習するので、各自がグループ内の役割を遂行し、有意義な実習が行えるよう努めること。 レポートは提出期限を守って提出し、提出前に担当教員に質問に行く等、積極的に取り組むこと。 実習では、運動のしやすい服装で参加すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
36	人間発達学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
内藤 通孝						
実務経験のある教員						
内藤 通孝：大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有する教員が講義を行う。						
授業概要						
ヒトの生命は、誕生前の受胎時から始まり老いに終わる。人間発達学はこの広範な成長・成熟過程、変遷過程を学ぶ学問であり、医学的な基礎生理の変化に基づいて、各年齢段階における特徴的な病態を理解しなければならない。 加えて、人それぞれの生活環境、社会環境に修飾された個人を考慮する必要がある、個性・特性に根差した医療を行う上で、身体・運動・心理・社会性を含めた発達学的な視点が欠かせない。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①胎児期・新生児期の標準的発達を理解し、その特徴を説明できる。また、この時期の代表的障害について説明できる。 ②幼児期から思春期までの発達段階を理解し、この時期の代表的障害について説明できる。 ③成年期以降から老年期にいたるまでの成熟段階を理解し、説明できる。また、発達学的評価について説明できる。					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度	④個々人だけでなく、疾病とそれを取り巻く環境にも関心を払いながら、医療を考慮できる。					
授業形態						
講義	スライドを中心に講義する。適宜Q&Aを口頭で行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	内藤	発達概念	発達と成長の概念（教科書：第1章）			
2	内藤	人間発達の発達理論	発達理論の概要（教科書：第2章）			
3	内藤	発達検査	種々の発達検査とその意義（教科書：第3章）			
4	内藤	姿勢反射／反応	姿勢反射/反応の出現と統合（教科書：第4章）			
5	内藤	運動発達Ⅰ	生後0～3か月の運動発達（教科書第5章）			
6	内藤	運動発達Ⅱ	生後4～6か月の運動発達（教科書第6章）			

7	内藤	運動発達Ⅲ	生後7～9か月の運動発達（教科書第7章）					
8	内藤	運動発達Ⅳ	生後10～12か月の運動発達（教科書第8章）					
9	内藤	運動発達Ⅴ	生後13～18か月の運動発達（教科書第9章）					
10	内藤	姿勢反射／反応と6歳までの発達	6歳までの発達（教科書第10章）					
11	内藤	上肢機能の発達	上肢機能発達の経過（教科書第11章）					
12	内藤	ADLの発達	ADL（日常生活動作）の発達の推移（教科書第12章）					
13	内藤	感覚・知覚・認知・社会性の発達／学童・青年・成人期	その他の発達、学童期から成人期までの発達（教科書第13～14章）					
14	内藤	老年期	老年期の発達（教科書第14章）					
15	内藤	復習、補足とまとめ	復習、補足事項とまとめ（教科書全般）					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				90	①②③
	参加貢献度					●	10	④
評価の特記事項	毎回の授業終了後にGoogleClassroomを用いて確認テストを実施する。確認テストの期限内提出をもって参加貢献度を評価する。評価の合計が6割未満の場合、再試験を実施する。再試験の評価・判定方法は、本試験と同じである。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
講義スライドをGoogleClassroomを用いて事前に配信し、それに沿ってスライドを用いて講義するので、予習に役立ててください。さらに講義終了後には、Q&A等を踏まえて必要な加筆修正をしたスライドを再度配信するので、復習に役立ててください。授業で学んだことを配布されたスライドに自ら加筆・修正して「マイ・スライド」を作成すれば、自家薬籠中の物にすることが出来、国家試験まで役立つ。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
各授業開始時に簡単な復習を行う。								
教科書								
「イラストでわかる人間発達学」上杉雅之 監修 医歯薬出版								
参考図書								
「標準理学療法学・作業療法学 人間発達学」岩崎清隆 医学書院 「解剖生理学入門」内藤通孝 昭和堂 本学図書館には発達学に関連する多くの書籍が所蔵されており、学習態勢は整っている。								
備考：履修者への要望								
復習の習慣をつけ、講義内容で疑問点や不明点があれば、積極的に自己学習、あるいは遠慮なく質問すること。 講義スライドはGoogleClassroomを用いて配信するので、各自パソコンやタブレットを準備しておくこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
37	病理学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
下郷 和雄						
実務経験のある教員						
下郷 和雄（歯科医師）が専門分野である口腔顎顔面外科医としての実務経験をもとにヒトの病理、病態について授業を行う。						
授業概要						
病理学は、疾病の原因とその成り立ちを明らかにする学問であり、医学・医療の基本的な学問である。理学療法士・作業療法士が生活機能の障害を対象とし、適切に対応するためには、疾病の原因はどのようなものであり、組織にどのような変化が生じ、その結果どんな機能障害が出現するのかを理解する必要がある。さらに、その機能は回復するのか否か、生活機能障害にどのような対応が必要となるかを考える必要がある。このような力をつけるために、本科目では 病因論、退行性病変、進行性病変、感染、炎症、免疫、腫瘍、呼吸/循環障害、廃用症候群など、疾病に共通する病変に関する知識を身につける。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	（●：強い関連がある　○：関連がある）	
知識・理解	① 急性慢性疾患の基になる病理学的な変化の進行を細胞、組織、器官レベルで述べることができる。 ② 病理学的な変化の基本をなす病態を分類することができる。 ③ 医学的に頻発する疾患について病態を分類することができる。 ④ 生物学的に特徴のある疾患の例を挙げて病態を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	⑤ 授業項目を統合して、疾病状態の改善に向けてのリハビリテーション学の方策を考察し、選択できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	授業時間内に直接問いを投げかける。授業項目によってはプレテスト、ポストテストを併用して形成的評価を行い、ごく一部は総括的評価にも反映させる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	下郷	病理学導入 病因論	1) 基本生物学：遺伝、遺伝子　DNAと蛋白合成 2) 病因論：公害病、医原病、素因			
2	下郷	組織の防御、反応、修復	1) 退行性病変、進行性病変（変性、萎縮、肥大、化生） 2) 壊死とアポトーシス 3) 分化と増殖、修復と再生 4) 創傷治癒と異物の処理、肉芽組織			
3	下郷	炎症、感染症	炎症の概念 ● 炎症の定義と、炎症性細胞の種類と働き 感染症、伝染病、風土病について ● 主な感染症の概念、種類、急性/慢性感染症、病原微生物			
4	下郷	免疫とアレルギー	免疫の概念 1) 抗原と抗体、免疫のなりたち 2) 免疫反応による組織障害とアレルギーについて。 3) 自己免疫疾患、免疫不全症候群について。			
5	下郷	腫瘍	腫瘍の定義、発生原因および特徴と治療法。 1) 腫瘍の定義、発生原因、その多様性 2) 分類（良性/悪性、上皮性/非上皮性、固形/液性） 3) 造血系の疾患、白血病、悪性リンパ腫			

6	下郷	損傷/外傷 廃用萎縮 老化と死	1) 損傷の原因の分類（外傷、熱傷、凍傷、放射線損傷、化学傷） 2) 廃用萎縮の原因（局所/全身安静、運動量の減少、運動能力の低下、長期臥床、無重力）と進行および予防の重要性 3) 加齢的变化と関連する病変					
7	下郷	循環障害	循環障害の成因、病態およびその転帰。 A. 虚血、充血、うっ血の徴候、原因 B. 出血、血栓症、塞栓症、梗塞の原因、種類、転帰 C. 水腫（浮腫）、脱水症、ショック+高血圧症の原因、分類、転帰					
8	下郷	奇形と代謝疾患	1) 先天性奇形と後天性変形 2) 頻出代謝性疾患（糖尿病, 甲状腺機能/副腎機能/下垂体機能の異常等）					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				60	①②③④
	プレイスメントテスト		●				10	②③
	レポート			●			10	⑤
	小テスト		●	●			20	②③④⑤
評価の 特記事項	レポートは横書き400字詰め原稿用紙2枚以上の自筆文書に図を添えて提出する。詳細は授業内で説明する。 全ての評価の標点の合計が6割に至らない場合は再試験を行い、この評価は筆記試験のみで行なう。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）次回の予定範囲の関連項目を教科書で確認して概要を掴み、学習の目的を理解して授業に臨む。 （復習）授業中にとったノートなどの記録を振り返り、まとめ直し、必要に応じて参考書を精読するなどして、十分に理解する。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
授業中に時に行う小テストや前回授業の振り返りを通じて、次回以降の授業時間にフィードバックを行う。								
教科書								
「病理学」（標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野）横井豊治 監修 医学書院								
参考図書								
「カラーで学べる病理学」渡辺照男 ほか編 ヌーヴェルヒロカワ								
備考：履修者への要望								
動物の生体の反応様式は大まかに捉えると共通点が多い。伝統的な病理学の考え方に沿って講義内容を分けて進めるので、教科書類を軸において全体像を理解してほしい。講義の中では新たな考え方も紹介するので、科学生物学の面白さも感じてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
38	公衆衛生学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
横尾 和久						
実務経験のある教員						
横尾 和久：複数の大学病院での臨床および教育、研究の経験を有する教員が講義を行う。						
授業概要						
新型コロナウイルス感染症、少子高齢化、地球温暖化、生活習慣病等々、我々の身近な健康に関する問題は、全て公衆衛生学で取り上げられるテーマである。すなわち、公衆衛生とは、「みんなの健康」のことであり、公衆衛生学とは、「みんなの健康」を守るために、組織化された地域社会の努力によって、疾病予防、寿命延長、身体的・精神的健康の増進を図る学問である。その具体的な内容としては、環境衛生、感染症対策、衛生教育、保健医療制度、社会保障制度等がある。臨床医学が個人を対象としているのに対し、公衆衛生は集団を対象としている点が大きく異なる。日常的な医療活動の基盤となる医療制度やシステムの維持・改善等も公衆衛生の対象となる。公衆衛生は狭い意味での保健活動だけでなく、医療活動の展開にとっても基盤となるものである。 公衆衛生学は、将来、OT、PTとして臨床の現場で働くものにとっては必須の科目と言える。本授業では、国際レベル、国レベル、並びに地域における様々な健康課題を、生物学的な視点だけでなく、社会や環境との視点から俯瞰的に理解し、集団の健康を維持・改善するための制度や施策の概要についても修得することを目指す。 各授業の範囲内で、特に最近話題になっている重要テーマについては時間を取って学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①主たる保健統計（人口、出生、死亡統計など）を説明できる。 ②疾病予防と健康管理について説明できる。 ③主な疾病についてその予防法について説明できる。 ④環境保健（環境汚染、環境問題）について説明できる。 ⑤保健行政（母子保健、学校保健、産業保健、高齢者保険）について説明できる。 ⑥わが国の保健医療福祉制度について説明できる。 ⑦われわれを取り巻く健康課題の現状について説明できる。					
思考・判断 ・表現	⑧身近な公衆衛生問題に対して何ができるか考えることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑨日々世の中で起こっている公衆衛生に関する問題に関心を持つことができる。 ⑩それらの問題に医療人として自分事として取り組むことができる。					
授業形態						
講義	毎回、パワーポイントによるスライドと配布資料（ファイル）を用いて講義する。毎講義後にレポート形式による振り返りを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横尾	はじめに。担当教員の自己紹介。公衆衛生とは？	担当教員の自己紹介。医療人としての心構え、求められる資質について学ぶ。公衆衛生と健康の概念について学ぶ。			
2	横尾	保健統計と疫学の基礎。疫 病予防と健康管理。【少 子高齢化】	人口、出生、死亡統計など、公衆衛生の基本である疫学（人間集団における疾病の分布とその発生原因を研究する学問）の基礎について学ぶ。 予防医学、健康管理、健康増進などについて学ぶ。 【少子高齢化】については時間を取って学習する。			
3	横尾	主な疾病の予防-感染症。 【最近の感染症事情】	感染症の予防対策一般、予防接種などについて学ぶ。 【最近の感染症事情】については時間を取って学習する。			

4	横尾	主な疾病の予防-内部疾患。【生活習慣病】	がん、メタボリック症候群、心疾患などの予防対策について学ぶ。 【生活習慣病】については時間を取って学習する。					
5	横尾	環境保健。【地球温暖化】	環境汚染、物理的環境因子、化学的環境因子、環境問題などについて学ぶ。 【地球温暖化】については時間を取って学習する。					
6	横尾	地域保健と保健行政。保健行政の各論（１）。	地域保健活動、保健行政の全般について学ぶ。 母子保健、学校保健などについて学ぶ。					
7	横尾	保健行政の各論（２）。健康寿命	産業保健、高齢者保健、精神保健などについて学ぶ 【健康寿命】については時間を取って学習する。					
8	横尾	国際保健医療。SDG s。保健医療福祉と関係法規。まとめ	保健医療福祉制度と関係法規などについて学ぶ。まとめ。					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	振り返りレポート		●	●		●	40	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩
	筆記試験		●	●			60	①②③④⑤ ⑥⑦⑧
評価の特記事項	振り返りレポートの評価基準は授業内で説明する。 振り返りレポートと筆記試験の合計で60%に満たない場合は、再試験対象とする。 再試験の評価方法は、対象者に個別に説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
毎回、あらかじめ次週の講義内容の資料をファイルで配信する。テキストから重要箇所を抜粋したものが中心だが、各テーマについて必要と思われる追加の資料を加えてある。事前の予習用に活用すること。 講義の振り返りとして、毎回レポートを課す。公衆衛生に関して医療従事者として理解すべき必須の項目のため、レポートは、学習をした翌週の授業開始前に提出すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
振り返りレポートは順次返却する。講義の中で要点や記載方法について解説を加える。								
教科書								
「シンプル衛生公衆衛生学」鈴木庄亮 監修 南江堂								
参考図書								
図書館に多数あるので、積極的に活用すること。 （例：「Crosslink basic リハビリテーションテキスト 公衆衛生学」安村誠司 監修 メジカルビュー社）								
備考：履修者への要望								
本授業（本教科書）で学ぶことは、日頃の時事問題で取り上げられることが多く、将来、医療人として社会に出た時、最低限必要になる知識ばかりである。 社会人・医療人として必要な公衆衛生学の知識を習得すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
39	臨床心理学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
金子 幾之輔						
実務経験のある教員						
金子 幾之輔：大学の相談機関等でカウンセリング心理士・スーパーバイザーとしてカウンセリングの実務経験のある教員が、その関連科目である本授業においてカウンセリング理論・技法の体験学習やグループワーク等を遂行することによって、臨床心理学の基礎的な理論や実践的知識・技能に関する学修を促進する。						
授業概要						
臨床心理学とは、心の問題に対して心理学的な見地からどのように対処するかを研究し、支援活動を実践していくための学問である。本科目では、心の障害を有する人に対してのみならず、理学療法士・作業療法士自身の健康管理の観点からも心理臨床活動のあり方を考察し、その活動を実践できるようになることを目的とする。具体的には、講義内容に応じた体験学習やグループワーク等を遂行したりするなどし、臨床心理学の基礎的な理論および実践的知識・技能を修得して、心の障害を有する人や自分自身に適切な対応ができるようになることを目指す。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①臨床心理学に関する基礎的な理論を説明できる。 ②臨床心理学の実践的知識・技能を心の障害を有する人や自分自身に適用できるようになる。					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	自作の資料に基づいて平易に解説するとともに、体験学習やグループワークも導入する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	金子	臨床心理学とは何か	臨床心理学の内容・方法・歴史等について概観し、臨床心理学の概念や特徴を把握する。			
2	金子	不適応行動	欲求と欲求不満のメカニズムを説明し、不適応行動について学修する。			
3	金子	心の障害の特徴と対応 (1)統合失調症 (2)気分障害	統合失調症、うつ病や双極性などの気分障害の特徴、対応の留意点について学修する。			
4	金子	心の障害の特徴と対応 (3)不安障害 (4)適応障害	不安を主因とする不安障害やストレス因による適応障害の特徴と対応の留意点について学修する。			
5	金子	心の障害の特徴と対応 (5)パーソナリティ障害 (6)認知症	パーソナリティ障害や認知症の特徴や対応の留意点について学修する。			
6	金子	心の障害の特徴と対応 (7)発達障害	自閉スペクトラム症などの発達障害の特徴や対応の留意点について学修する。			
7	金子	ストレスの本質と原因および対処法	日常生活上のストレス事例を通じて、ストレスの本質と原因、その対処法について学修する。			

8	金子	心のアセスメント (1)意義 過程 種類	心理アセスメントの意義、過程、種類について学修する。					
9	金子	心のアセスメント (2)臨床心理学的面接	面接法の特徴、留意点について学修する。					
10	金子	心のアセスメント (3)行動観察	観察法の特徴、留意点について学修する。					
11	金子	心のアセスメント (4)心理検査	心理検査の種類と代表的な心理検査について学修する。MPI等による自己分析を実施。（体験学習）					
12	金子	カウンセリングとは何か	カウンセリングの考え方、基礎技法について学修する。役割演技によるカウンセリング技法の基本的訓練の実施。（グループワーク）					
13	金子	各種心理療法 (1)精神分析療法 (2)来談者中心療法	精神分析療法と来談者中心療法の理論的背景と技法について学修する。					
14	金子	各種心理療法 (3)行動療法 (4)遊戯療法	行動療法と遊戯療法の理論的背景と技法について学修する。					
15	金子	理学療法士と作業療法士の 健康管理、総括	理学療法士と作業療法士の健康管理の一方法としてストレス・コントロール法の一 種である「自律訓練法」を実施する。（体験学習）					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●				85	①②
	振り返り度		●				15	①②
評価の 特記事項		・レポートは、最終試験のみとする。 ・振り返り度は、毎回の授業の終わりにリフレクション（省察・振り返り：ミニツツペーパーの導入）を行い評価する。 以上2つの評価点を総合して評価する。評価基準については授業内で説明する。 なお、前記リフレクションは出欠確認も兼ねているので注意すること。 ＊本科目では、当該レポートを締切り日時までに提出しなかった場合、原則として不合格とし、合格点(60%)に満たなかつ た場合と同様に再試験（レポート）を実施する。その際も振り返り度を含んだ評価をする。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）臨床心理学辞典や臨床心理学の参考文献等を用いて、毎回の授業テーマや内容について検討しておくこと。 （復習）授業で扱った内容を配布用スライドを参照するなどして自分なりにまとめておくこと。 また、臨床心理学の実践的知識・技能を向上させるために日常生活場面においてもその技能の訓練に取り組むこと。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題（レポート、振り返り）に関する質問は適宜受け付ける。								
教科書								
授業に必要な自作の資料を配布する。								
参考図書								
授業の中で適宜紹介する。								
備考：履修者への要望								
臨床心理学の実践的知識・技能を修得するために体験学習等で積極的にその技能を訓練することを期待する。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
40	内科学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
内藤 通孝						
実務経験のある教員						
内藤 通孝：大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有する教員が講義を行う。						
授業概要						
高齢化は一段と進み、在宅・地域リハビリテーションへの社会的ニーズは不可欠のものとなり、それに対する適確な医療知識や技能習得が求められている。内科学は疾病の成因・病態を考える上で基本骨格をなすものであり、解剖学や生理・生化学などの基礎医学を土台にした臨床内科学への深い理解を目的とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①医療人として患者（と家族）に対する関心と敬意を持つことができる。 ②基礎的医学知識に根ざした各疾患への診療法、対処法を修得することができる。 ③高齢化社会における疾病構造の変化を理解し、それに対応するリハビリテーション学を議論できる。					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度	④関連する最近の話題を提供し、その意義、関心について議論できる。					
授業形態						
講義	スライドを中心に講義する。適宜Q&Aを口頭で行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	内藤	診断・治療と症候Ⅰ	病態・疾患の診断と症候の概要 教科書：1～3章			
2	内藤	診断・治療と症候Ⅱ	病態・疾患の診断と症候の各論 教科書：1～3章			
3	内藤	循環器系疾患Ⅰ	循環器系疾患の症候と診断、主要な循環器系疾患（高血圧、虚血性心疾患など） 教科書：4章			
4	内藤	循環器系疾患Ⅱ	主要な循環器系疾患（弁膜症、先天性心疾患、心不全、不整脈など）と心臓リハビリテーション 教科書：4章			
5	内藤	呼吸器系疾患	主要な呼吸器疾患（COPD、肺癌など）と呼吸リハビリテーション 教科書：5章			
6	内藤	消化器系疾患	主要な消化管および肝胆膵疾患 教科書：6～7章			
7	内藤	血液・造血器系疾患	主要な血液・造血器系（赤血球・白血球・血小板など）およびリンパ系の疾患 教科書：8章			

8	内藤	代謝性疾患Ⅰ	糖尿病、高尿酸血症、肥満など 教科書：9章					
9	内藤	代謝性疾患Ⅱ	メタボリックシンドローム、脂質異常症、栄養障害、骨粗鬆症 教科書：9章					
10	内藤	内分泌系疾患	主要な内分泌系（ホルモン）の疾患 教科書：10章					
11	内藤	腎・泌尿器系疾患	主要な腎・泌尿器系の疾患 教科書：11章					
12	内藤	水・電解質代謝異常	水・電解質の異常と病態・疾患との関わり 教科書：11章					
13	内藤	アレルギー・免疫疾患	主要なアレルギー・免疫疾患 教科書：12章					
14	内藤	感染症	主要な感染症 教科書：13章					
15	内藤	復習、補足とまとめ	復習、補足事項とまとめ 教科書：全般					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				90	①②③
	参加貢献度					●	10	④
評価の 特記事項	毎回の授業終了後にGoogleClassroomを用いて確認テストを実施する。確認テストの期限内提出をもって参加貢献度を評価する。 評価の合計点が6割未満の場合、再試験を実施する。再試験の評価・判定方法は、本試験と同じである。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
講義スライドをGoogleClassroomを用いて事前に配信し、それに沿ってスライドを用いて講義するので、予習に役立てること。さらに講義終了後には、Q&A等を踏まえて必要な加筆修正をしたスライドを再度配信するので、復習に役立てること。授業で学んだことを配布されたスライドに自ら加筆・修正して「マイ・スライド」を作成すれば、自家薬籠中の物にすることが出来、国家試験まで役立つ。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
各講義の開始時に簡単な前回の復習を行う。								
教科書								
「標準理学療法・作業療法学 専門基礎分野 内科学」前田眞治 編 医学書院								
参考図書								
「新・病理学入門 疾病の成り立ち」 内藤通孝 昭和堂 多数の関連書籍を当大学図書館に所蔵。積極的な活用を望む。								
備考：履修者への要望								
患者ケアをより充実させるためには、医療に関する社会の動向も注視し、より親身な幅広い診療を目指す気構えを持つこと。講義スライドはGoogleClassroomを用いて配信するので、各自パソコンやタブレットを準備しておくこと。また、疑問点などは放置せず、積極的に質問すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
41	整形外科学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
長谷川 幸治						
実務経験のある教員						
長谷川 幸治：複数の大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有し、現役の整形外科医である教員が講義する。						
授業概要						
整形外科が扱う疾患は人体の運動に関わる骨・軟骨・筋・神経などの運動器の疾患である。運動器疾患は多岐にわたり、小児から高齢者まで、体幹から四肢に及び、脊椎、脊髄、関節、末梢神経、手・足の障害などが挙げられる。講義では全身の各運動器疾患について、臨床実習で必要となる病態、症状、診断、治療、リハビリテーションについて理解する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①主な整形外科疾患、外傷について病因、病態、治療法、リハビリテーションを述べることができる。 ②整形外科に必要な検査法について述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③病名と患者情報、重症度などから、その疾患の治療と予後を予測し説明することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④整形外科領域に関心を持ち、医師（担当教員）と療法士を目指す学生の関係のもと、意見を述べることができる。					
授業形態						
講義	講義を中心とするが、適宜Q&Aを口頭で行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	長谷川	整形外科の学び方と運動器 についての総論	骨関節・筋肉・神経などの運動器のしくみ			
2	長谷川	整形外科の基本的知識	運動器（上肢・脊椎・下肢）の特徴			
3	長谷川	運動器疾患の身体所見と治 療総論	可動域・筋力・知覚・運動、運動療法、切断			
4	長谷川	整形外科の診断と治療総論	治療方法、感染、関節リウマチ、人工関節、画像診断			
5	長谷川	整形外科疾患の診断	痛風、大腿骨頭壊死症、離断性骨軟骨炎、創外固定、骨腫瘍			
6	長谷川	免疫炎症性疾患	関節リウマチ、リウマチ類似疾患			
7	長谷川	上肢の疾患	肘関節、手関節の疾患の診断と治療			

8	長谷川	股関節疾患・膝関節疾患	股関節疾患の診断と治療、骨切り術、人工関節					
9	長谷川	膝関節疾患	下肢アライメント、靱帯損傷、半月板損傷					
10	長谷川	脊椎疾患の診断	脊椎の解剖、頸椎・腰椎疾患、腰椎椎間板ヘルニア					
11	長谷川	脊椎脊髄疾患	腰痛症の原因と治療、脊柱管狭窄症、側弯症の診断・治療					
12	長谷川	外傷総論	骨折・脱臼、骨折治療原則、軟部組織損傷、大腿骨近位部骨折					
13	長谷川	外傷下肢骨折と脊髄損傷	人工骨頭とガンマーネイル、足関節骨折、脊髄損傷					
14	長谷川	転倒・ロコモ予防対策	神経・筋疾患、転倒の原因と予防対策					
15	長谷川	転倒・ロコモ予防対策とまとめ	高齢者活性化フレイルとロコモ予防対策とまとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			90	①②③
	参加貢献度					●	10	④
評価の 特記事項	参加貢献度は、積極的発言、確認テストを持って参加貢献度を評価する。参加貢献度の評価方法は授業で説明する。 筆記試験と参加貢献度の合計が60%以上で合格とする。再試験は60%に達しなかった場合に実施する。再試験の評価は筆記試験のみで行う。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
運動器の病的状態を理解するためには解剖学（特に局所解剖）の知識が不可欠である。予め講義予定部位の解剖を予習してくる。また、教科書や配布資料を使用して学習すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
フィードバックとして試験問題の解説の時間を設ける。								
教科書								
「標準整形外科学」田中 栄 ほか編 医学書院								
参考図書								
「TEXT整形外科学」大鳥精司 ほか編 南山堂								
備考：履修者への要望								
講義中の私語は禁止。国家試験を突破するためには日々の学習が重要である。学習の効果を上げるためには見る、聞く、書くの3つの方法の併用が有用とされる。講義中には講義内容の理解に努め、講義で重要と思われる部分に各自マーカーペンで着色することが勧められる。記憶するためには同じことを何度もやる必要がある。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
42	神経症候学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
石井 文康						
実務経験のある教員における科目						
石井 文康：医療機関および大学院医学研究科神経内科学研究員に所属して実務経験を有する教員が、神経内科の総論と神経疾患各論を講義する。						
授業概要						
神経内科を学ぶ基礎として総論の部が設けられている。神経系解剖学である。症候論の部では高次脳機能障害等を扱う。神経疾患では脳血管障害、変性疾患、脱髄疾患、感染疾患、筋疾患等を学び、病名としては脳出血、脳梗塞、パーキンソン病、認知症、脊髄小脳変性症、多発性硬化症、ギランバレー症候群、脳炎、筋ジストロフィー、脳性麻痺等を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①神経系を構成する神経系の区分を説明できる。 ②脳の変性部位と病名を対応させて分類できる。					
思考・判断 ・表現	③脳血管の走行から病巣の部位別症候を予測できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④神経内科領域に興味を持つことができる。					
授業形態						
講義	クラス形式の講義を中心とするが、適宜Q&Aを行う。レポート課題を通して振り返りを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	石井	総論Ⅰ：神経系解剖学の基礎	中枢神経では大脳、脳幹、小脳、脊髄等に構成されていることを理解し、位置関係等を学ぶ。			
2	石井	総論Ⅱ：神経系解剖学の基礎	末梢神経では脳神経、脊髄神経等に構成されていることを理解し、位置関係等を学ぶ。			
3	石井	総論Ⅲ：神経系解剖学の基礎	中枢神経の大脳、脳幹、小脳、脊髄等について脳画像による位置関係等を学び、CT画像、MRI画像の特徴について理解をする。			
4	石井	総論Ⅳ：神経系解剖学の基礎	中枢神経の大脳の前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉、大脳基底核等について脳画像による位置関係等を学ぶ。			
5	石井	症候論Ⅰ：高次脳機能	左大脳半球病変での失語、失行の種類など、具体的例を用いて高次脳機能の基本を理解する。			
6	石井	症候論Ⅱ：高次脳機能	右大脳半球病変での半側空間無視、病態失認など、具体的例を用いて高次脳機能の基本を理解する。			
7	石井	神経疾患Ⅰ：脳血管障害	脳血管障害の臨床病型について学ぶ。脳出血、くも膜下出血、脳梗塞などを違いを理解する。脳梗塞はさらに血栓性、塞栓性、血行力学性に分類できることを理解する。			

8	石井	神経疾患Ⅱ：脳血管障害	脳梗塞の発生機序による分類。脳梗塞の臨床病型による分類。脳梗塞の血管別の症候の基本を理解する。					
9	石井	神経疾患Ⅲ：変性疾患	大脳基底核障害を呈する疾患の代表として、パーキンソン病を学ぶ。パーキンソン病の主要徴候と治療方法について理解する。					
10	石井	神経疾患Ⅳ：変性疾患	アルツハイマー型認知症の脳の構造変化と生化学機序を学ぶ、認知症の症状を中核症状と周辺症状に分けて学ぶ、診断基準について学ぶ。					
11	石井	神経疾患Ⅴ：変性疾患	脊髄小脳変性症の疾患概念・主要徴候を理解する。非遺伝性のものと遺伝性のものに分類できることを理解し、具体例を交えて学ぶ。					
12	石井	神経疾患Ⅵ：脱髄疾患、感染性疾患	脱髄疾患では多発性硬化症、ギランバレー症候群について学び、感染性疾患では髄膜炎、脳炎、神経梅毒について学ぶ。					
13	石井	神経疾患Ⅶ：筋疾患	Duchenne型、Becker型、肢帯型筋ジストロフィーなどを扱い、筋疾患の基礎を学ぶ。					
14	石井	神経疾患Ⅷ：脳性麻痺	脳性麻痺の痙直型、アテトーゼ型、失調型などについて学ぶ。					
15	石井	まとめ	神経系解剖学、症候論、神経疾患のまとめを行う。					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	70	①②③④
	レポート		●	●		●	30	①②③④
評価の特記事項	全ての評価方法を合計した評点が60点未満の場合、再試験を実施する。 再試験の際は、全ての評価方法の合計点数で評価する。 レポートは記述内容（まとめ方など）で評価、配点など評価方法は授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
・各単元の授業に配布されたレポート課題を作成する。 ・各単元の授業テーマ・内容に関連した教科書の該当ページを読み込む。 ・授業での配布資料やレポートを整理し、ポートフォリオを作成する。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題の振り返りを予定。								
教科書								
「神経内科学」（標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野） 川平和美 編集 医学書院								
参考図書								
「リハビリテーションのための神経内科学」安藤一也・杉村公也 医歯薬出版 「標準神経病学」水野三邦 監修 医学書院								
備考：履修者への要望								
積極的な授業参加を希望。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
43	精神医学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
古井 景						
実務経験のある教員						
古井 景：精神保健指定医、精神科専門医であり、精神分析的療法医、公認心理師、臨床心理士の資格も有し、臨床精神医学の実務経験がある教員が、精神医学について講義する。						
授業概要						
こころと身体結びつきが医療において強調されるようになるに伴い、全人的医療、心身相関、bio-psycho-socialといった言葉をよく耳にする。しかし、その意味するところを理解し、実践することは簡単ではない。本授業では、生物学的精神医学に力動精神医学的視点を加えることで、心身の理解を深めていく。精神疾患のみならずメンタルヘルス不調といった広範囲の精神障害について学び、患者の精神・心理状態を理解していくことが、理学療法や作業療法を学び、実践していくための礎となると考える。 本授業では、器質的・大脳生理学的視点のみならず、力動的、心理・社会的視点を交え、幅広い視点から精神障害（性格の偏りも含め）を理解し、作業療法士・理学療法士として臨床に従事する際のスキルの習得・向上を図っていく。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①精神障害（性格の偏りも含め）に含まれる様々な分類、症状を理解し、各精神障害について区別して、述べることができる。 ②関連法規を理解し、精神障害者（性格の偏りも含め）の社会的自立について述べる事ができる。					
思考・判断 ・表現	③精神障害（性格の偏りも含め）を学び、患者の心理・社会的要因も踏まえた理学療法・作業療法の臨床実践の在り方を説明することができる。 ④精神障害（性格の偏りも含め）を有する人の社会的自立支援の在り方について説明することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤疑問点や自身の考えなどを積極的に述べ、意欲的に学習に取り組むことができる。					
授業形態						
講義	パワーポイントを用いて講義を行う。平易な知識の記憶ではなく、理解力・判断力を高めるため、講義では、様々な実例を交えて、実際の状況が想像できるよう、分かり易く説明するよう努める。パワーポイントの内容は、資料として配付する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	古井	総論：精神医学概論・関連法規	精神医学を学ぶ上での概論を学ぶ。併せて、理学療法士・作業療法士として法令遵守の立場から、関連法規について学ぶ。（教科書 第1章）			
2	古井	総論：疾病分類	古典的精神病の分類（精神病理学）および現行の精神障害の分類（操作性診断）について触れる。（教科書 第2章・第5章・第6章）			
3	古井	総論：神経生理学	精神疾患、精神症状を理解するための基礎知識として脳生理学の基礎知識を紹介する。（教科書 第3章・第7章）			
4	古井	総論：精神症状・所見	精神症状・所見の基礎知識を説明する。（教科書 第3章・第4章）			
5	古井	総論：治療計画	精神障害への治療の在り方を解説する。（教科書 第16章・第19章）			
6	古井	総論：精神保健	精神科保健医療について概説する。（教科書 第20章）			
7	古井	総論：心身症・メンタルヘルス	心身医学、心理社会的障害について説明する。（教科書 第6章・第12章・第17章・第21章）			

8	古井	各論：児童期・発達障害の臨床	児童期に好発する精神障害、てんかん、および、発達障害について解説する。（教科書 第7章・第8章・第11章・第14章・第15章・第18章）				
9	古井	各論：思春期・青年期・成人期の害の臨床①	神経症性障害、成人の人格障害などについて説明する。（教科書 第11章・第12章・第13章・第18章）				
10	古井	各論：思春期・青年期・成人期の害の臨床②	統合失調症、双極性感情障害、大うつ病などの疾患を説明する。（教科書 第9章・第10章・第18章）				
11	古井	各論：老年期の精神障害	認知症、老年精神病について説明する。（教科書 第5章・第18章）				
12	古井	各論：嗜癖・中毒性障害	中毒・依存について説明する。（教科書 第7章）				
13	古井	各論：心理査定	心理査定について説明、紹介する。（教科書 第4章）				
14	古井	各論：精神科臨床の実際	事例を提示して理解を深める。				
15	古井	まとめ	質疑応答を通じて、学習内容のまとめを行う。				
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
		●	●			70	①②③④
					●	30	⑤
評価の特記事項	筆記試験70点満点、参加貢献度30点満点の計100点満点で評価を行う。得点が60点に達しなかった場合、再試験を行う。筆記試験は、選択式35問、資料持ち込み可で実施する。参加貢献度は、各授業内でリアクションペーパーを作成、提出し評価する。リアクションペーパーは、各自の意見を重視し評価する。評価基準は、授業内で説明する。再試験は本試験同様、筆記試験と参加貢献度で評定する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
（予習）事前に、授業内容に示された教科書の該当章を読み、授業テーマに関連する内容を事前に理解しておくこと。 （復習）配布された資料をもとに知識を整理すること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
疑問点、質問は随時受け付ける。							
教科書							
「標準理療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学」上野武治 編 医学書院							
参考図書							
「ICD-10精神および行動の障害 臨床記述と診断ガイドライン」 融道男 ほかに監訳 医学書院 「DSM-5-TR精神疾患の分類と診断の手引き」 高橋三郎 ほかに監訳 医学書院 「理学療法士 作業療法士 PT OT 基礎から学ぶ精神医学ノート」 中島雅美 ほかに監訳 医歯薬出版株式会社							
備考：履修者への要望							
将来、理学療法士、作業療法士として臨床に従事するに当たり、臨床の場で役立たせることをイメージしながら学習すること。 また、授業内では、臨床実践の話に加えて、国家試験対策にも触れることがあるので、将来の臨床実践に加えて国家試験対策も意識して、整理・学習することが望ましい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
44	小児科学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
内藤 通孝						
実務経験のある教員						
内藤 通孝：大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有する教員が講義を行う。						
授業概要						
先天異常や発達障害、運動機能障害などを持つ子どもの支援には、理学療法や作業療法は不可欠な医療であり、大きな威力を発揮する。そのためには、患児、患者一人ひとりに見合った適切かつ細やかなケアが求められる。本講義では、出生前期から新生児、乳幼児、学童、思春期へとつながる継続性のある小児医学一般を習得、併せて疾病の背景や家族を含めた援助について理解を深める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①小児疾患の特徴を説明できる。 ②出生前から思春期に至る成長、発達を説明できる。 ③各発達段階での代表的疾患について説明できる。 ④小児予防医学、保健医学の重要性を説明できる。 ⑤家族を含めた疾病を有する子どもへの支援について議論できる。					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度	⑥講義に加え関連するトピックスなどを提供し、話題の意義、関心を議論できる。					
授業形態						
講義	スライドを中心に講義する。適宜Q&Aを口頭で行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	内藤	総論、診断と治療Ⅰ	小児疾患の総論と診断・治療 教科書：1～2章（1～38ページ）			
2	内藤	診断と治療Ⅱ	小児疾患の診断・治療 教科書：1～2章（1～38ページ）			
3	内藤	新生児・未熟児	新生児・未熟児の疾患 教科書：3章（39～77ページ）			
4	内藤	新生児・未熟児／先天性疾患・遺伝病	新生児・未熟児の疾患、主要な先天性疾患と遺伝病 教科書：3～4章（39～77ページ）			
5	内藤	先天性疾患・遺伝病	主要な先天性疾患と遺伝病 教科書：4章（39～77ページ）			
6	内藤	神経・筋・骨・関節疾患	主要な神経・筋・骨格・関節疾患 教科書：5～7章（78～114ページ）			
7	内藤	神経・筋・骨・関節疾患	主要な神経・筋・骨格・関節疾患 教科書：5～7章（78～114ページ）			

8	内藤	中間のまとめ	前半の復習、補足、まとめ					
9	内藤	循環器系・呼吸器系疾患	主要な循環器・呼吸器疾患 教科書：第8～9章（130～150ページ）					
10	内藤	感染症	主要な感染症 教科書：第10章（151～164ページ）					
11	内藤	消化器疾患／内分泌代謝疾患	主要な消化器疾患および内分泌代謝疾患 教科書：第11～12章（165～186ページ）					
12	内藤	血液疾患／免疫・アレルギー疾患、膠原病	主要な血液疾患、免疫・アレルギー疾患と膠原病 教科書：第13～14章（187～206ページ）					
13	内藤	泌尿器系・生殖器系・腫瘍性疾患	主要な腎・泌尿器系、生殖器系、腫瘍性疾患 教科書：第15～16章（207～217ページ）					
14	内藤	その他の疾患など	その他の疾患・病態、外傷など 教科書：第17～21章（218～244ページ）					
15	内藤	復習、補足とまとめ	復習、補足事項とまとめ 教科書：全般					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				90	①②③④⑤
	参加貢献度					●	10	⑥
評価の特記事項	毎回の授業終了後にGoogleClassroomを用いて確認テストを実施する。確認テストの期限内提出をもって参加貢献度を評価する。評価の合計点が6割未満の場合、再試験を実施する。再試験の評価・判定方法は、本試験と同じである。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
講義スライドをGoogleClassroomを用いて事前に配信し、それに沿ってスライドを用いて講義するので、予習に役立ててください。さらに講義終了後には、Q&A等を踏まえて必要な加筆修正をしたスライドを再度配信するので、復習に役立ててください。授業で学んだことを配布されたスライドに自ら加筆・修正して「マイ・スライド」を作成すれば、自家薬籠中の物にすることが出来、国家試験まで役立つ。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
各講義の開始時に簡単な前回の復習を行う。								
教科書								
「標準理療法学・作業療法学：専門基礎分野 小児科学」前垣義弘 編集 医学書院								
参考図書								
図書館内には多数の小児科疾患関連蔵書があるので活用すること。								
備考：履修者への要望								
不明な点は労を惜まず、教科書や他の医学書などを参考にして、自身での理解に務めること。自己学習の能力を高める姿勢は、問題発見にもつながり将来大きな力となる。講義スライドはGoogleClassroomを用いて配信するので、各自パソコンやタブレットを準備しておくこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
45	リハビリテーション医学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
長谷川 幸治						
実務経験のある教員						
長谷川 幸治：複数の大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有し、現役の整形外科医である教員が、臨床実習前に治療としてのリハビリテーションが必要となる頭部疾患、運動器疾患、神経筋疾患、内部疾患などの基礎知識を教授する。						
授業概要						
臨床実習での学習成果をあげるために、臨床実習前に治療としてのリハビリテーションが必要となる頭部疾患、運動器疾患、神経筋疾患、内部疾患などの基礎知識を学習する。各疾患において病因、病態、治療、リハビリテーションの基本を学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①主な頭部疾患、運動器疾患、神経筋疾患、内部疾患について病因、病態、治療法、リハビリテーションを述べることができる。 ②各疾患の評価基準に基づいて対象者の状態の評価について述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③病名と患者情報、重症度などから、必要となる治療とリハビリテーション項目を説明することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④医師（担当教員）と療法士を目指す学生の関係のもと、意見を述べることができる。					
授業形態						
講義	講義を中心とするが、適宜Q&Aを口頭で行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	長谷川	リハビリテーション医学入門	リハビリテーションの定義 健康福祉政策を考える			
2	長谷川	運動機能の評価	歩行機能評価、人間発達学、障害学、骨関節・中枢神経障害、筋力			
3	長谷川	運動機能評価 PT・OTの役割	可動域の計測、下肢長・周囲径、性格検査、ADL、FIM、QOL			
4	長谷川	障害者とスポーツ参加	障害領域の検査、心理療法、薬物療法・手術療法、補装具・義肢			
5	長谷川	脳血管障害のリハビリテーション	脳梗塞・脳卒中、脊髄損傷、在宅治療、神経疾患			
6	長谷川	知的障害・発達障害、高齢者の骨折	注意欠如・多動性障害（AD/HD）、自閉症、脳性麻痺、脆弱性骨折、内部疾患			
7	長谷川	運動器疾患のリハビリテーション	筋力強化、可動域の維持、運動機能の維持向上			

8	長谷川	運動療法のすすめ まとめ	早期リハの重要性とまとめ				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●			90	①②③
	参加貢献度				●	10	④
評価の 特記事項	参加貢献度は、積極的発言、確認テストを以って参加貢献度を評価する。参加貢献度の評価方法は授業で説明する。 全ての評価方法の合計が6割に満たない場合、再試験を実施する。再試験の評価は筆記試験のみで行う。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
講義の前にプリント配布を行うので、それを予習と復習すること。（1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
フィードバックとして試験問題の解説の時間を設ける。							
教科書							
使用しない							
参考図書							
「標準リハビリテーション学」上田敏 監修 医学書院							
備考：履修者への要望							
講義中の私語は禁止。学習の効果を上げるためには見る・聞く・書くの3つの方法の併用が有用とされる。講義中には講義内容の理解に努め、講義プリントに講義で重要と思われた部分にマーカーペンで着色することやメモ書きすることが勧められる。復習では講義プリントを見て学習すると効率が上がる。知識を自分のものとするためには同じことを何回もやる必要がある。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
46	医療安全学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
長谷川 幸治・横尾 和久						
実務経験のある教員						
長谷川 幸治・横尾 和久：現役の医師が患者安全を守るために医療施設で取られている具体的な対応策について講義する。						
授業概要						
（概要） この授業では医療スタッフに求められる危機管理、特に、医療安全について学ぶ。すべての医療施設に求められる最も重要なテーマは『患者安全と医療の質向上』である。医療スタッフとして患者安全の重要性を理解するとともに、それを守るための対処法について学ぶ。医療の現場で最も起こりやすい医療事故について学ぶ。さらには、患者安全を守るために医療施設で取られている具体的な対応策についても学ぶ。 医療人として必要な応急処置法や心肺蘇生法について学ぶ。特に、リハビリスタッフとして必要となる緊急時の判断及びその救急対応、およびリスク管理について学ぶ。特に緊急時の判断としてバイタルサインの重要性について学ぶ。 （オムニバス方式／全8回） （横尾 和久／4回） 各医療施設で実施されている医療事故を予防する対策について教授する。 （長谷川 幸治／4回） 医療人として必要な応急処置法・心肺蘇生法 B L S（Basic Life Support）について教授する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	（●：強い関連がある　○：関連がある）	
知識・理解	①医療の現場で起こりうる医療事故の原因、予防、対策について説明できる。 ②患者の急変について状況、対応について説明できる。					
思考・判断 ・表現	③医療現場で起こりうる危険予知について考えることができる。					
技能	④バイタルサインを測定できる。 ⑤応急処置法を実施できる。 ⑥心肺蘇生法を実施できる。					
関心・意欲 ・態度	⑦医療の現場で起こりうる医療事故に関心を持つことができる。 ⑧リハビリスタッフとして医療施設で起こりうるリスク管理について関心を持つことができる。					
授業形態						
講義	講義を中心とするが、適宜Q&Aを口頭で行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横尾	医療安全学入門	医療安全対策マニュアル（理念、医療事故、ハインリッヒの法則）			
2	横尾	医療事故防止	医療事故防止の原則、チーム医療、インシデント・アクシデント報告書			
3	横尾	救急医療	バイタルサインの評価、AED、心マッサージ（実習あり）			
4	横尾	災害医療	感染予防、トリアージ、気管内挿管、海外旅行の安全管理			
5	長谷川	病院の医療安全	手術室の安全対策、医療安全研修会、院内感染予防			

6	長谷川	医療事故の対策	針刺し事故、労務管理、熱中症、大規模災害に対する準備					
7	長谷川	応急処置法・心肺蘇生法	医療人として必要な応急処置法・心肺蘇生法B L S（Basic Life Support）について学ぶ。					
8	長谷川	まとめ	インシデントレポートの書き方とまとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・ 表現	技能	関心・意欲・ 態度	割合（%）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		90	①②③④⑤⑥
	参加貢献度					●	10	⑦⑧
評価の 特記事項	参加貢献度は、積極的発言、確認テストを以って参加貢献度を評価する。参加貢献度の評価方法は授業で説明する。 全ての評価方法の合計が6割に満たない場合、再試験を実施する。再試験の評価は筆記試験のみで行う。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
前の週までに講義資料を配布するので予習すること。また、本科目の単位修得には1 コマあたり 4 時間の準備学習時間が必要であることを踏まえ、配布資料と一緒に復習すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
フィードバックとして試験問題の解説の時間を設ける。								
教科書								
使用しない								
参考図書								
「医療安全のキホン」大坪陽子 ほか 秀和システム 「リハビリテーションリスク管理ケーススタディ」宮越浩一 MEDICAL VIEW 「写真でわかる急変時の看護アドバンス」松月みどり インターメディカ 「医療安全学」日本医学教育学会と医療の質・安全学会の2団体の合同ワーキンググループ 監修 篠原出版新社								
備考：履修者への要望								
医療人としての道を選んだ初心を忘れずに、医療人として必要な医療安全学・救急医学についての知識を習得すること。社会人、組織人、医療人として将来、社会に貢献できる人材になれるように自覚をもって本授業を受講すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
47	臨床検査・画像診断学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
内藤 通孝・長谷川 幸治						
実務経験のある教員						
内藤 通孝：大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有する教員が、重症度を確認するための検査法や、神経系以外の疾患を含めた中枢系症候学と検査法等を教授する。 長谷川 幸治：複数の大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有し、現役の整形外科医である教員が整形外科疾患、脳・脊髄疾患、内臓疾患の各種画像診断法を講義する。						
授業概要						
患者を診るとは、まず訴えがどのようなものでそれがどう症状として表れているのか、つまり主観的な訴えを客観的に認識し評価することから始まり、それを解剖学、生理学、免疫学などを活用して病態生理の分析を進め、更に血液検査や心電図などの機能検査、レントゲンやCT/MRIなど画像検査による各臓器の病態解析等を行うことであり、適切な治療を行う上で重要な要素である。本科目では、この最初の症状の捉え方を、1年次に学んだ解剖学、生理学などの知識を応用し、症状の分析方法を教授する。 (オムニバス方式／全15回) (内藤 通孝／7回) 重症度を確認するための検査法や、神経系以外の疾患を含めた中枢系症候学と検査法等を教授する。 (長谷川 幸治／8回) 画像診断学では、単純X線像、CT、MRIを中心に、脳疾患、脊髄疾患、関節疾患、外傷、胸部疾患、内臓疾患などの画像を理解を深める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①主な検査方法や、整形外科疾患、外傷、脳・脊髄疾患の画像所見を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	②病名と現病歴、重症度などから、適切な検査方法・画像診断方法の選択を説明することができる。					
技能	③実際の検査方法や単純X線像、CT画像、MRI画像を見て異常部位を指摘することができる。					
関心・意欲 ・態度	④医師（担当教員）と療法士を目指す学生の関係のもと、意見を述べるすることができる。					
授業形態						
講義	対面授業とし、スライドを中心に講義する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	内藤	末梢血・血栓止血検査	末梢血（赤血球、白血球、血小板など）や凝固・線溶系の検査とその意義（教科書①：第1～2章）			
2	内藤	血漿蛋白質、酵素等検査	血漿蛋白質（アルブミンなど）や酵素の検査とその意義（教科書①：第3～5章）			
3	内藤	糖代謝・脂質代謝検査	糖質・脂質に関する検査とその意義（教科書①：第6～7章）			
4	内藤	電解質・酸塩基平衡検査	電解質、酸塩基平衡に関する検査とその意義（教科書①：第8～9章）			
5	内藤	免疫・アレルギー、腫瘍マーカー検査	免疫・アレルギー、腫瘍マーカーの検査および、病態に対するそれら検査の意義（教科書①：第10～11章）			
6	内藤	内分泌検査、尿・便等検査	内分泌（ホルモン）に関する検査、尿・便を用いた検査、およびそれら検査の意義（教科書①：第12～13章）			

7	内藤	補足とまとめ	臨床検査の復習、補足事項とまとめ（教科書①：全般）					
8	長谷川	画像診断学入門	単純X線、CT、MRI、超音波、核医学検査などの適応と活用法					
9	長谷川	画像診断総論	画像診断の原理と適応、画像診断の限界・禁忌					
10	長谷川	脳・脊椎・脊髄疾患	脳卒中、脳腫瘍、脊椎損傷、脊椎変性の診断					
11	長谷川	骨・関節疾患 1	側弯性、先天股脱、変形性股関節症、大腿骨頭壊死の診断					
12	長谷川	骨・関節疾患 2	変形性膝関節症、半月板・靱帯損傷、骨髄炎の診断					
13	長谷川	四肢、体幹の外傷 1	大腿骨近位部骨折、大腿骨・脛骨骨折の診断					
14	長谷川	四肢、体幹の外傷 2	肩関節脱臼・骨折、橈骨遠位端骨折の診断					
15	長谷川	内臓疾患・まとめ	内部疾患（胸部、腹部疾患）とまとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		90	①②③
	参加貢献度					●	10	④
評価の 特記事項	（内藤）毎回の講義終了後にGoogleClassroomを用いて確認テストを実施する。確認テストの期限内提出をもって参加貢献度を評価する。 （長谷川）確認テストを以って参加貢献度を評価する。 全ての評価方法の合計が6割に満たない場合、再試験を実施する。再試験の評価・判定方法は、本試験と同じである。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（内藤）講義スライドをGoogleClassroomを用いて事前に配信し、それに沿ってスライドを用いて講義するので、予習に役立てること。授業で学んだことを配布されたスライドに自ら加筆・修正して「マイ・スライド」を作成すれば、自家薬籠中のものにすることが出来、国家試験、さらには社会に出てからも役立つ。 （長谷川）講義内容はプリントとして配布する。画像については臨床との関連を意識して習得し、理解の向上を図るとともに、重要な画像については、診断の要点を中心に予習・復習を行うこと。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
（内藤）フィードバックとして確認テスト解説の時間を設ける。 （長谷川）プリント内の小テストは解説の時間を設ける。								
教科書								
「異常値の出るメカニズム」 山田俊幸 編 医学書院 「PT,OTのための画像診断マニュアル」 百島祐貴 医学教育出版社								
参考図書								
「新・病理学入門 疾病の成り立ち」 内藤通孝・箕越靖彦 昭和堂 「標準整形外科学」 井樋栄二 医学書院 「標準神経病学」 水野美邦 医学書院								
備考：履修者への要望								
（内藤）教科書に沿って講義をするので、必ず教科書を持ってくる。講義スライドはGoogleClassroomを用いて配信するので、各自パソコンやタブレットを準備しておくこと。 （長谷川）画像診断のポイントを1時間は繰り返し予習復習すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
48	総合リハビリテーション学	理学療法学専攻 作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
廣渡 洋史・横山 剛・長谷川 昇・山田 南欧美						
実務経験のある教員						
長谷川 昇：理学療法士、作業療法士、看護師、管理栄養士の養成施設において、正常な体の機能の理解に重要な生理学・生理学実習の教育に携わってきた教員が、リハビリテーション医学に必須の内容に絞って講義を行う。 横山 剛：精神科病院で対象者の作業所の利用など就労支援に携わった作業療法士として実務経験のある教員が、心理社会的発達について理解することを通して、学生が働くことの意味について考え、自身が職業人と働くことの意味を整理する授業である。 山田 南欧美：リハビリテーション工学を専門に研究を行い、リハビリテーション機器の開発や工学系研究者との共同研究の実務経験を有する教員が、リハビリテーションに関する医工連携や工学技術の実用例についての講義を行う。 廣渡 洋史：都道府県JRAT構築と隊員として被災地支援の実務経験のある教員が、JRAT隊員、防災士としての視点と経験より災害支援の基本から実際までを事例を通して講義を行う。						
授業概要						
科学・薬剤等の目覚ましい発展とともにリハビリテーションが取り扱う内容・領域も広がっている。また、阪神淡路大震災以降、リハビリテーション専門職の介入は必要不可欠となっている。そこで本科目では、リハビリテーションに関わる超急性期の後療法、薬理、工学とIT、災害支援、就労支援を取り上げ最新の知識と療法士の役割と意義を総合的に学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （廣渡 洋史／6回） 超急性期リハビリテーションの意義・役割について学ぶ。 災害と災害リハビリテーションについて過去の災害を知り、それに関わるリハビリテーション専門職（JRAT等）の役割・活動を学ぶ。そして、発災時に必要な避難所運営についてシミュレーションを通して学ぶ。 （長谷川 昇／4回） 薬理では薬剤の基本的な知識と作用、療法士として注意すべき点について学ぶ。 （山田 南欧美／2回） リハビリテーション工学とは何かについてその概要を知り、意義と重要性を学ぶ。また、その工学技術の医工連携について実用例を学ぶとともに一部体験をする。 （横山 剛／3回） 障がい者の就労支援の仕組みに対し、その雇用と現状について講義し、各グループで支援のあり方を探求する。また、現在、リハビリテーション専門職に求められている役割について学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3○	DP4	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①多職種連携を有効に機能させるため、臨床の場で使用されている薬物の作用機序や相互作用を理解し、薬物療法における有害事象、服薬過誤について指摘することができる。 ②リハビリテーション工学の意義・重要性について説明することができる。 ③障がい者雇用の現状・政策および支援について説明できる。 ④急性期リハビリテーション医療の目的・効果及び実施上のリスク管理、多職種との連携を説明することができる。 ⑤過去の大規模災害と影響を理解し、JRAT結成やリハビリテーション支援のあり方を説明することができる。					
思考・判断 ・表現	⑥使用されている薬物の効果をアセスメントし、疾患の治療状況を予測することができる。 ⑦リハビリテーション工学の実用例について説明することができる。 ⑧災害支援の事例（シミュレーション等）を通し、支援方法を知り、説明することができる。					
技能	⑨災害発生時に必要な道具を作ることができる。					
関心・意欲 ・態度	⑩リハビリテーション工学の実用例について学び、自ら応用方法を提案することができる。 ⑪自身の職業意識を高めることができる。 ⑫リハビリテーション職として、平時の防災、減災について意識した行動を模索できる。					

授業形態			
講義		各教員によるオムニバス形式で講義を行う（グループワーク含む）。 避難所運営では、市の防災訓練に参加し、避難所設営や運営に関わる道具の作成等を各グループワークで行う。	
授 業 計 画			
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容
1	廣渡	超急性期リハビリテーションに関わる後療法	超急性期リハビリテーションの意義とその役割について学ぶ。
2	長谷川	医薬品の取り扱い	医薬品の分類、医薬品の名称、医薬品の安全管理について学ぶ。
3	長谷川	薬物動態と作用点	薬物の体内動態、剤型の特徴と吸収過程、作用点、相互作用、小児、高齢者、妊婦・授乳婦への投与時の注意点について学ぶ。
4	長谷川	主な薬物の作用と副作用 1神経系疾患治療薬、抗菌薬	向精神薬（睡眠薬、抗認知症薬）の作用機序と適正は抗菌薬の選択について学ぶ。
5	長谷川	主な薬物の作用と副作用 2. 抗悪性腫瘍薬	抗悪性腫瘍薬、麻薬と副作用（吐き気、上部消化管障害）の作用機序について学ぶ。
6	山田	リハビリテーション工学とは	リハビリテーション工学の概要を知り、その意義・重要性を学ぶ
7	山田	リハビリテーションにおける 医工連携の実例	リハビリテーション領域における工学技術の実用例を学び、その一部を体験する
8	廣渡	災害とは何か、過去の災害 事例を学ぶ	本邦における過去の災害について事例を通してその概要を知る
9	廣渡	災害とリハビリテーション	JRATの結成と災害におけるJRATの活動のと都道府県レベルのJRATの構築と活動の概要を知る
10	廣渡	災害とリハビリテーション の実例と準備	災害リハビリテーションの活動における準備と実例を事例を通して学ぶ
11	廣渡	避難所運営を考える	避難所における療法士の活動を事例を通して学び、グループワークで避難所内でのリハビリテーションを考察する
12	廣渡	災害時に必要な道具等の知識と制作	平時の防災・減災と発災後に必要な道具等について知り、制作する
13	横山	障がい者の就労支援の仕組み①	障がい者の雇用の現状について（講義とグループワーク）
14	横山	障がい者の就労支援の仕組み②	障がい者の雇用の政策について（講義とグループワーク）
15	横山	障がい者の就労支援とリハビリ職の役割	リハビリテーション専門職に求められている役割

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●			70	①②③④⑤⑥⑦ ⑧
	レポート			●	●	30	⑨⑩⑪⑫
評価の 特記事項	知識等の確認として筆記試験70%、技能や関心等についてはレポート30%で評価する。 レポートのルーブリックは講義内で提示する。 筆記試験とレポートの結果が60点を満たない場合、再試験の対象とし、評価方法は対象者へ個別に説明する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
テキスト・配布資料を事前に確認すること （1コマあたりの準備学習時間：1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
筆記試験後、希望すれば個別にフィードバックする。レポート類は授業の中で返却する。							
教科書							
長谷川担当分：「スラスラわかる薬のメカニズム」 鈴木正彦 監修 サイオ出版 その他教員：随時資料を配布する							
参考図書							
特になし							
備考：履修者への要望							
本科目は3年次前期までの基本的な知識をベースとして、専門職として最新の知識と療法士の役割を総合的に学ぶ。よって、これまで修得した知識を整理してから臨むこと。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
49	リハビリテーション概論	理学療法学専攻 作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
山田 和政						
実務経験のある教員						
山田 和政: 医療・介護保険分野において理学療法士としての臨床経験のある教員が、リハビリテーションの概念、理念、定義などの講義を通して必要な知識を教授する。						
授業概要						
リハビリテーションの概念・理念・定義を理解した上で、日本におけるリハビリテーション医療を理学療法士、作業療法士の視点から学ぶ。内容として、健康の概念、疾病と障害の構造、ヒトの発達、リハビリテーションの過程、リハビリテーションの諸段階、リハビリテーション専門職種とチームアプローチ、日常生活活動（以下、ADL）と生活の質（以下、QOL）の概念、医療・福祉制度と関係法規などについて学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3○	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①リハビリテーションの概念、語源、理念、定義を理解し、説明することができる ②リハビリテーションの対象となる障害を国際生活機能分類（以下、ICF）の概念に基づいて理解し、説明することができる ③リハビリテーションの過程や諸段階、チームアプローチ、関係する保険制度・法規などについて説明することができる					
思考・判断 ・表現	④これから学ぶ理学療法学および作業療法学がリハビリテーションの中でどのような位置付けになっているかを理解し、それぞれの役割を説明することができる					
技能						
関心・意欲・態度	⑤リハビリテーション、医療、介護、予防、理学療法、作業療法、高齢者、障がい者等に関するニュースや記事を読み、自身の意見を述べることができる					
授業形態						
講義	基本的に講義資料と教科書を中心とした講義形式であるが、グループでのディスカッションも行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田	リハビリテーションの概念・理念・定義	リハビリテーションの概念、語源、理念、定義について学ぶ			
2	山田	健康・疾病・障害の概念	健康、疾病、障害の概念について学ぶ			
3	山田	疾病と障害の構造	国際疾病分類（ICD）、国際障害分類（ICIDH）、国際生活機能分類（ICF）、障害を引き起こす疾病について学ぶ			
4	山田	障害の理解	ICFの概念を踏まえ、具体的な事例を通して「障害」について考える			
5	山田	障害受容	病(障害)の心理、防衛機制、障害受容について学ぶ			
6	山田	ヒトの発達と評価	発達と成長、発達の時期と特徴、発達の評価、小児のリハビリテーションについて学ぶ			

7	山田	リハビリテーションの過程	評価(検査・測定、問題点の抽出、ゴールの設定、プログラムの立案)のプロセスについて学ぶ					
8	山田	リハビリテーションの諸段階①	医学的リハビリテーションについて学ぶ					
9	山田	リハビリテーションの諸段階②	職業的リハビリテーション、社会的リハビリテーション、教育的リハビリテーションについて学ぶ					
10	山田	リハビリテーションに関わる職種	リハビリテーション専門職種とその役割について学ぶ					
11	山田	チームアプローチ	チーム医療、連携医療、ケースカンファレンス、クリニカルパスについて学ぶ					
12	山田	ADL、QOLの概念と評価法	ADL、手段的日常生活活動（IADL）、QOLの概念、項目、評価法について学ぶ					
13	山田	医療・福祉制度および関係法規	医療保険制度、介護保険制度、福祉関連法規について学ぶ					
14	山田	高齢者とリハビリテーション	地域リハビリテーションの概念、地域包括ケアシステムについて学ぶ					
15	山田	リハビリテーションを取り巻く問題と対策	リハビリテーションから見た高齢化問題と高齢者対策、少子化問題と少子化対策、健康寿命と健康対策について考える					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③④
	ポートフォリオ		●	●		●	20	①②③④⑤
評価の 特記事項	期末試験（筆記試験）を実施する。中間試験は実施しない。 ポートフォリオ（20点）と期末試験（80％）にて評価する。 ポートフォリオについては、事前に提示するルーブリックを用いて評価する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施し、筆記試験のみで評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
毎回、配布する「予習・復習プリント」を活用し、取り組むこと。 予習：シラバスに記載されている授業内容を確認し、教科書の当該部分に目を通す（1時間）。 復習：教科書および配布した講義資料を参考に授業内容を整理し、理解が不十分な部分については、次回の講義までに解決する（3時間）。 その他として、ニュースや新聞記事などでリハビリテーション、医療、介護などに関する情報を収集し、それらの記事に対する自身の意見等をまとめる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出課題（学習成果物）は、評価後に返却する。 筆記試験の答案は返却しないが、希望者には個別に開示する（事前連絡必要）。								
教科書								
「リハビリテーション概論」 田島文博 編著 永井書店								
参考図書								
関係成書								
備考：履修者への要望								
これから理学療法士、作業療法士を目指す者としての心構えをしっかりとった受講態度を求める。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
50	多職種連携	理学療法学専攻 作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
外倉 由之・加藤 真弓						
実務経験のある教員						
外倉 由之・加藤 真弓：作業療法士・理学療法士として臨床経験のある教員が、地域における実際の多職種連携の意義や各職種の役割などについて講義をする。						
授業概要						
1～2年次で学習した各職種の役割、多職種連携の総括として、実際の地域における多職種連携を説明し、多職種連携の方法・課題などを検討する。具体的には、授業の前半には講義形式で実例をふまえて、多職種連携の目的・方法・意義などを理解する。後半では、両専攻の横断的なグループワークを通じて、多職種連携における知識だけでなく考え方、協働のあり方について理解を深めていく。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①多職種連携の意義、あり方について理解し、説明できる。 ②多職種連携に参加する職種が列挙でき、各職種の役割を説明できる。					
思考・判断 ・表現	③グループワークで討論したことを専門用語を用いて適切に表現することができる。 ④事例について、多職種連携の視点で分析し、チーム医療の治療計画を作成することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤課題の提出期限を守り、担当教員のフィードバックを受けることができる。 ⑥積極的に授業への参加・協力ができる。					
授業形態						
講義	講義を中心に実施し、適宜グループワークを実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	外倉・加藤	多職種連携とは	多職種連携の経緯、目的、内容などを事例をもとに講義および少人数制のグループワークを実施する。 教科書：p．2－46			
2	外倉・加藤	各職種の理解	多職種連携における、各職種の仕事内容、役割などを事例をもとに講義する。その後、グループワークにて各職種がどのような役割をもって、チーム医療を実践するべきか討議し、理解を深める。 教科書：p．55－92			
3	外倉・加藤	多職種連携の実際（1）	ゲストスピーカーとして医師を招き、医師がどのような役割をもってチーム医療を実践しているのか、実際の事例を通じて講義していただく。その後、グループワークを通じて、望ましい多職種連携と協働の在り方について理解を深める。			
4	外倉・加藤	多職種連携の実際（2）	ゲストスピーカーとして看護師を招き、看護師がどのような役割をもってチーム医療を実践しているのか、実際の事例を通じて講義していただく。その後、グループワークを通じて、望ましい多職種連携と協働の在り方について理解を深める。			
5	外倉・加藤	多職種連携の実際（3）	ゲストスピーカーとして理学療法士を招き、理学療法士がどのような役割をもってチーム医療を実践しているのか、実際の事例を通じて講義していただく。その後、グループワークを通じて、望ましい多職種連携と協働の在り方について理解を深める。			

6	外倉・加藤	多職種連携の実際（４）	ゲストスピーカーとして作業療法士を招き、作業療法士がどのような役割をもってチーム医療を実践しているのか、実際の事例を通じて講義していただく。その後、グループワークを通じて、望ましい多職種連携と協働の在り方について理解を深める。					
7	外倉・加藤	多職種連携の実際（５）	ゲストスピーカーとして社会福祉士を招き、社会福祉士がどのような役割をもってチーム医療を実践しているのか、実際の事例を通じて講義していただく。その後、グループワークを通じて、望ましい多職種連携と協働の在り方について理解を深める。					
8	外倉・加藤	総括	これまでの講義、グループワークなどによる討論の内容をもとに総括し、各学生は多職種連携について内容をレポートにまとめる。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●	●		●	60	①②③④⑤⑥
	討議・発表内容		●	●		●	40	①②③④⑤⑥
評価の 特記事項	レポートならびに討議・発表はルーブリックで評価を行う。詳細は授業内で説明する。 全ての評価基準の合計が6割を満たさない場合、追加のレポートを課す。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前に教科書の指定範囲をよく読み、実習の目的・方法を理解する。（1時間程度） 復習として、講義内容やグループワーク内容を振り返り、理解する。（3時間程度） （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートは、フィードバックコメントを記載し、講義の中で返却する。								
教科書								
「はじめての I P - 連携を学びはじめる人のための I P 入門 ラーニングシリーズ I P インタープロフェッショナル 保健・医療」大嶋信雄 編 協同医書出版								
参考図書								
授業中に、適宜、資料を配布する								
備考：履修者への要望								
グループワーク時は、各自がグループ内の役割を遂行し、有意義な討論が行えるよう努めること。 レポートは提出期限を守って提出し、提出前に担当教員に質問に行く等、積極的に取り組むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
51	障がい者スポーツ概論	理学療法学専攻 作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
加藤 真弓 ・ 鳥居 昭久						
実務経験のある教員						
加藤 真弓：日本パラスポーツ協会公認上級パラスポーツ指導員の資格を有し、全国障害者スポーツ大会への選手団役員としての帯同や地域での障がい者スポーツ大会及び練習会での支援、クラス分け委員などの経験のある教員が科目を担当する。 鳥居 昭久：日本パラスポーツ協会公認上級パラスポーツ指導員、同公認パラスポーツトレーナーとして、パラリンピックなどの障がい者スポーツ総合競技大会での支援やパラスポーツアスリートの指導経験が多数ある教員が科目を担当する。						
授業概要						
障がい者スポーツの歴史、社会的背景またその内容についての概要を理解する。障がい者が社会参加できる手段としての障がい者スポーツの理解を深め、理学療法士・作業療法士の知識の上に、どのような関わりができるかを知ることが目標となる。また、障がい者スポーツ現場に参加し、多くの障がい者スポーツの愛好者と交流するとともに、障がい者スポーツにおける様々な工夫を体験し、理学療法士・作業療法士の視点から理解を深める。 (加藤真弓／7回) 障がい者がスポーツに関わることの意義、参加可能な大会、制度などについて学ぶとともに地域における障がい者スポーツの普及について考える。また、指導者に求められる資質について学ぶ。 (加藤真弓／8回・鳥居昭久／8回)（共同） 各障害とスポーツによる影響、スポーツ指導上の注意点、各競技のルール理解やスポーツ活動の工夫などを体験的に学ぶ。また、段階的な練習方法や障害に合わせた新しいスポーツの検討等を考える。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2●	DP3	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①障がい者の社会参加の一つのスポーツの意義について説明できる ②障がい者のスポーツの目的や効果（心理的、身体的、社会的）について説明できる ③障がい者のスポーツの種類やルール、クラス分けなどの基本事項について説明できる					
思考・判断 ・表現	④障がい者がスポーツに取り組む際の注意点や工夫などについて、障害特性にあわせて考えることができる ⑤障害に応じたスポーツの方法について分かりやすく説明できる					
技能	⑥初級指導員として障がい者とともにスポーツに取り組むことができる ⑦授業で体験した障がい者のスポーツについて、基本的なルールや記述を説明できる					
関心・意欲 ・態度	⑧障がい者がスポーツに取り組むためには何が必要であるかを探求することができる					
授業形態						
講義	知識面は指定教科書を中心に講義形式で学ぶ。また、障がい者スポーツ体験は学内での実習と、名古屋市障害者スポーツ大会など障がい者がスポーツに取り組んでいる現場に参加する。一部において、グループワークやペアワークを取り入れる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤	障がい者スポーツ（パラスポーツ）の意義と理念	障がい者スポーツ（パラスポーツ）の意義と理念について学ぶ。 障がい者がスポーツを通して社会参加することと共生社会の在り方の意味を学ぶ。 リハビリテーションの意義との関連性を学ぶ。			
2	加藤	スポーツ指導者としての素養1	スポーツにおけるインテグリティを理解し、スポーツ指導者としての必要な資質について学ぶ、また、プレーヤーズファーストの意味を理解し、スポーツを通じた学びの姿勢を理解する。 ボランティアの意味を理解し実践のための基礎知識を学ぶ。			
3	加藤	スポーツ指導者としての素養2	障がい者スポーツ指導者として必要なコミュニケーションスキルやソーシャルスキルの基礎を学ぶ。 障がい者の状態に応じて理解しやすいプレゼンテーションスキルについて学ぶ。			

4	加藤	全国障がい者スポーツ大会 概要	全国障がい者スポーツ大会の概要、意義、開催の目的などを学ぶ。 また、それに関連して理学療法士や作業療法士がどのように貢献しているかを学ぶ。
5	加藤	障がい者スポーツ（パラスポーツ）の普及	各都道府市町村などにおける障がい者スポーツ（パラスポーツ）の振興の現状を理解し、障がい者が地域でスポーツに取り組む際の課題について考える。 障がい者スポーツ（パラスポーツ）関連資格制度について学ぶ。
6	加藤	地域における障がい者スポーツ（パラスポーツ）の 実際	この地域で開催されている障がい者スポーツ（パラスポーツ）イベントの目的や意義を学ぶ。また、それに関わる練習会などに参加し、障害がある人たちと交流しながら共にスポーツを体験する。 障害がある人がスポーツを実施することの効果や課題を考える。
7	加藤	障がい者スポーツ（パラスポーツ）関連政策	障がい者福祉施策や関係法規、障がい者スポーツ（パラスポーツ）関連法規について学び、障がい者を取り巻く社会情勢や環境などについて考える。
8	鳥居・加藤	障がい者スポーツ（パラスポーツ）科学 1	各種障害の理解とスポーツ実施による影響について学ぶ。 障がい者スポーツ（パラスポーツ）における、心理、体力などの特徴について学ぶ。
9	鳥居・加藤	障がい者スポーツ（パラスポーツ）科学 2	パラリンピック、デフリンピック、スペシャルオリンピックスその他の障がい者スポーツ（パラスポーツ）競技大会について学び、クラス分けや医学的支援など、理学療法士や作業療法士がどのように関係するかを学ぶ。障がい者スポーツ（パラスポーツ）におけるトレーニング方法、コンディショニングについて学び、適正な指導プログラムについて考える。
10	加藤・鳥居	スポーツ外傷、障害の予防 と安全管理	障がい者スポーツにおけるスポーツ外傷や障害の発生メカニズムと指導上の注意点について学ぶ。 スポーツを安全に行うための基本事項を学ぶ。
11	加藤・鳥居	障がい者スポーツ（パラスポーツ）の実際と障害に応じたスポーツの工夫 1	障がい者スポーツ（パラスポーツ）を体験し、その上で障がい者スポーツのルールを理解、審判法などの実務を学ぶ。これらの競技における障害に応じたスポーツ活動の工夫点について学ぶ。 体験したスポーツを参考に、既存のスポーツに障がい者が取り組むために必要な工夫点を競技、障害に応じて考える。 また、既存のスポーツを参考に障がい者が取り組める新しいスポーツについて検討する。（グループワーク）
12	加藤・鳥居	障がい者スポーツ（パラスポーツ）の実際と障害に応じたスポーツの工夫 2	障がい者スポーツ（パラスポーツ）を体験し、その上で障がい者スポーツのルールを理解、審判法などの実務を学ぶ。これらの競技における障害に応じたスポーツ活動の工夫点について学ぶ。 体験したスポーツを参考に、既存のスポーツに障がい者が取り組むために必要な工夫点を競技、障害に応じて考える。 また、既存のスポーツを参考に障がい者が取り組める新しいスポーツについて検討する。（グループワーク）
13	加藤・鳥居	障がい者スポーツ（パラスポーツ）の実際と障害に応じたスポーツの工夫 3	障がい者スポーツ（パラスポーツ）を体験し、その上で障がい者スポーツのルールを理解、審判法などの実務を学ぶ。これらの競技における障害に応じたスポーツ活動の工夫点について学ぶ。 体験したスポーツを参考に、既存のスポーツに障がい者が取り組むために必要な工夫点を競技、障害に応じて考える。 また、既存のスポーツを参考に障がい者が取り組める新しいスポーツについて検討する。（グループワーク）
14	加藤・鳥居	障がい者スポーツ（パラスポーツ）の実際と障害に応じたスポーツの工夫 4	障がい者スポーツ（パラスポーツ）を体験し、その上で障がい者スポーツのルールを理解、審判法などの実務を学ぶ。これらの競技における障害に応じたスポーツ活動の工夫点について学ぶ。 体験したスポーツを参考に、既存のスポーツに障がい者が取り組むために必要な工夫点を競技、障害に応じて考える。 また、既存のスポーツを参考に障がい者が取り組める新しいスポーツについて検討する。（グループワーク）
15	加藤・鳥居	まとめ	これまで学んできたことについての振り返りを行い、障がい者スポーツにおいて理学療法士や作業療法士が果たせる役割についてディスカッションを行う。 それを通して、今後の学ぶべき専門性を明らかにする。

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●	●		50	①②③④⑦
	レポート	●	●	●	●	50	①②④⑤⑥⑦⑧
評価の 特記事項	筆記試験（50％）とレポート（障がい者スポーツイベント参加後の活動レポート）（50％）で評価する。 活動レポートの評価については授業内にて説明する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験は、筆記試験のみを100％として実施する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
各講義内容について、テキストを十分に予習・復習しておくこと。 学内講義だけではなく、障がい者スポーツイベント（競技会・練習会など）へ指定回数参加することを義務とする（参加後は活動レポートを作成する）。対象となる障がい者スポーツイベントについては、別途案内する。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
レポートは基本的に、提出後に個別にフィードバックをする。試験のフィードバックは、全体的には掲示にて行う。必要に応じ個別対応をする。							
教科書							
「改訂版 障がいのある人のスポーツ指導教本（初級・中級）2020年改訂カリキュラム対応」日本パラスポーツ協会 編 ぎょうせい							
参考図書							
スポーツ医学関連成書、スポーツ生理学関連成書、スポーツ指導関連成書など							
備考：履修者への要望							
この科目の受講により、日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員資格（初級）の登録申請ができる。 障がい者スポーツの現場で活動するための知識や技術を得るために、積極的で、真摯な受講態度で臨み、是非とも障害を有する人たちの支援につながるような学びにしていきたい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
52	理学療法概論	理学療法学専攻	1学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
加藤 真弓						
実務経験のある教員						
加藤 真弓：医療機関や介護保険分野で理学療法士としての臨床経験のある教員が、理学療法についての講義を行う。						
授業概要						
理学療法の歴史的な流れやその意味、理学療法士の役割、理学療法士に求められる基本的態度、法的義務、リハビリテーションと理学療法の違い、障害の捉え方、理学療法評価と治療手段、各病期における理学療法の意義や目的、多職種連携、職業倫理、理学療法教育、理学療法の職域等について学び、自ら目指す職業について他者に説明ができるようにする。また、本科目は1年後期に開講するため、入学当初に描いた自身のキャリアや大学での学修計画について振り返り、今後の自己研鑽に繋げる。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①理学療法の定義と概要、理学療法士の役割、必要な知識や対象を説明することができる。					
思考・判断 ・表現	②理想の理学療法士になるための学修計画ができる。 ③理学療法を理解した上で、理学療法士の仕事をわかりやすく発表できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④グループワークや発表で、他者の意見を受け入れ、討論し、自分を意見を持つことができる。					
授業形態						
講義	教科書を中心とした学修と、一部においてブレインストーミング（集団発想法）、グループワークなどのアクティブラーニングを組み合わせる。講義終了後に、振り返りシートをGoogle Formsにて配信する。質問等への回答を次の講義時にフィードバックする。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤	理学療法を考える	理学療法を理解し、どのような能力が必要であるのかを考える。ブレインストーミング。理学療法士になるために、どのような学習が必要であるのかを考える。ブレインストーミング。			
2	加藤	理学療法概要－理学療法の概要とリハビリテーションにおける理学療法の役割	理学療法の定義と概要、理学療法とリハビリテーションの関係、理学療法士に求められる人間性 ：Lecture 1			
3	加藤	・理学療法概要－理学療法の概要とリハビリテーションにおける理学療法の役割 ・理学療法に必要な知識と実習	理学療法の定義と概要、理学療法とリハビリテーションの関係、理学療法士に求められる人間性 ：Lecture 1 理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則、標準的な科目（基礎分野、専門基礎分野、専門分野）、学習への取り組み ：Lecture 5			
4	加藤	理学療法の背景（1）－障害の概念・分類、保険制度	障害のとらえ方（国際障害分類（ICIDH）、国際生活機能分類（ICF））、障害の受容、保険制度（医療保険、介護保険）、超高齢社会と理学療法の今後 ：Lecture 2			
5	加藤	理学療法の背景（1）－障害の概念・分類、保険制度	障害のとらえ方（国際障害分類（ICIDH）、国際生活機能分類（ICF））、障害の受容、保険制度（医療保険、介護保険）、超高齢社会と理学療法の今後 ：Lecture 2			
6	加藤	理学療法の背景（2）－歴史・法律、職業倫理、日本理学療法士協会	理学療法の歴史、理学療法士及び作業療法士法、日本理学療法士協会、理学療法士の職業倫理ガイドライン ：Lecture 3			

7	加藤	理学療法の構成	運動療法、物理療法、障害分類、理学療法の流れ、理学療法の主対象、病期別および専門分野・職域別の理学療法 ：Lecture 4					
8	加藤	理学療法の主対象-中枢神経系	脳血管疾患、脳損傷、神経難病、脊髄損傷、小児疾患に対する理学療法の概要を学習する。 ：Lecture 6					
9	加藤	理学療法の主対象-運動器系	骨折、関節リウマチ、関節疾患、末梢神経損傷、脊椎疾患、スポーツ障害、スポーツ外傷に対する理学療法の概要を学習する。 ：Lecture 7					
10	加藤	理学療法の主対象-内部障害系	呼吸器疾患、循環器疾患、代謝疾患に対する理学療法の概要を学習する。 ：Lecture 8					
11	加藤	理学療法的主対象 -がん、介護予防	がんの疫学と治療、がんに対する理学療法、介護予防（サルコペニア、フレイル）に対する理学療法の概要を学習する。 ：Lecture 9					
12	加藤	病期・職域別の理学療法	医療施設の分野で働く理学療法士の特徴を学習する。グループワーク ：Lecture 10～15					
13	加藤	病期・職域別の理学療法	介護施設や在宅の分野で働く理学療法士の特徴を学習する。グループワーク ：Lecture 10～15					
14	加藤	病期・職域別の理学療法	健康や予防の分野で働く理学療法士の特徴を学習する。グループワーク ：Lecture 10～15					
15	加藤	病期・職域別の理学療法	教育や研究の分野で働く理学療法士の特徴を学習する。グループワーク ：Lecture 10～15					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				60	①
	小テスト		●				20	①
	レポート、態度・発表		●	●		●	20	①②③④
評価の特記事項	レポート、態度・発表の評価基準は、授業内で示す。 上記の3種の評価が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験においても小テストとレポート、態度・発表点を加味し評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）教科書内の各Lectureの「この講義を理解するために」を熟読し、学習の目的を理解する。 （復習）授業のプリントなどを振り返り、各自でまとめ直すなど、十分に理解する。 上記の予習・復習を実施したノートやプリント類の提出を求める場合がある。 その他、必要に応じて授業時間外に、レポート作成、発表準備などを行う。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
授業に対する疑問点や質問は、随時受け付ける。 筆記試験は全体もしくは個別に閲覧・フィードバックをする。								
教科書								
「理学療法概論」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト）浅香満 責任編集 中山書店								
参考図書								
理学療法概論テキスト（南江堂）、理学療法概論（医歯薬出版）、理学療法概論（羊土社）、基礎理学療法概論（メジカルビュー社）などの理学療法概論の成書や、その他「理学療法」「リハビリテーション」に関連する多数の成書。								
備考：履修者への要望								
理学療法について様々な観点から学び、各自が「理想の理学療法士になるために何を学ぶべきなのか」を考え、今後の学習につなげていただきたい。積極的に学ぶ姿勢を期待する。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
53	理学療法研究法Ⅰ	理学療法専攻	2学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
宮津 真寿美						
実務経験のある教員						
宮津 真寿美：医療機関で理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法研究についての講義を行う。						
授業概要						
医療の専門職である理学療法士は、高い問題解決能力が必要である。本科目と理学療法研究法Ⅱと卒業研究を通し、これまでの学習で抱いた疑問や気付いた矛盾を明らかにするための、思考過程と問題解決能力を修得する。この科目では、まず、理学療法における研究の意義を理解し、理学療法研究法Ⅱにおいて研究計画を立案するため、研究の意義や過程・種類、先行研究の調べ方を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①研究の意義、過程、研究デザインが説明できる。					
思考・判断 ・表現	②研究発表を聞き、質問できる。					
技能	③必要な先行研究が検索できる。					
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
演習	スライドなどによる講義と演習、パソコンを使った文献検索の方法を学ぶ。また、卒業研究計画発表会に参加し、研究の流れの実際を知るとともに、疑問や批判的吟味から質問する。					
授　業　計　画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	宮津	研究の意義や種類	オリエンテーション、理学療法研究法Ⅰ、理学療法研究法Ⅱ、卒業研究の流れ、研究の意義、研究の過程（研究テーマの発生→研究計画→データ収集→発表→論文）について学ぶ。			
2	宮津	研究の意義や種類	研究の種類(観察的研究、介入研究、縦断研究、横断研究、コホート研究、症例-対照研究、無作為化比較対照試験、系統的総説など)			
3	宮津	先行研究の検索	文献の検索方法			
4	宮津	研究を知る	卒業研究計画発表会で討論に参加する。			
5	宮津	研究を知る	卒業研究計画発表会で討論に参加する。			
6	宮津	研究を知る	教員の研究、指導研究領域			
7	宮津	研究を知る	教員の研究、指導研究領域			

8	宮津	研究を知る	教員の研究、指導研究領域				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	小テスト	●				20	①
	課題		●	●		80	②③
評価の 特記事項	課題：卒業研究計画発表会に参加し、疑問や批判的吟味から発表に関するコメントや質問をする。 課題に対する評価にはルーブリックを用いる。 合格点は、すべての評価方法の合計点数が6割以上である。合格点に達しなかった場合でも、再試験は実施しない。 課題に対する評価、および、再試験を実施しないことは、授業内で説明する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
講義の理解、検索方法の練習、課題の遂行などの復習が必要である。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
質問や疑問は、授業時間外でも受け付ける。							
教科書							
適宜、必要な資料を配布する。							
参考図書							
理学療法研究法に関する成書							
備考：履修者への要望							
この科目は、理学療法研究法Ⅱ、卒業研究とつながっている。3科目を通じて、理学療法士に必要な問題解決能力を向上させるつもりで受講して欲しい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
54	理学療法研究法Ⅱ	理学療法専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
宮津 真寿美・加藤 真弓・山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・木村 菜穂子・松村 仁実・臼井 晴信・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑						
実務経験のある教員						
宮津 真寿美・加藤 真弓・山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・木村 菜穂子・松村 仁実・臼井 晴信・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑：医療機関で理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法士として就労する上で必要になる研究の手法について講義する。						
授業概要						
医療の専門職である理学療法士は、高い問題解決能力が必要である。本科目では、これまでの学習で抱いた疑問や気付いた矛盾を明らかにするための、思考過程と問題解決能力を修得する。具体的には、各教員の指導のもと、研究計画を立案、研究計画の発表を行う。 (オムニバス方式／全4回) (宮津 真寿美／3回) コースオリエンテーション、研究計画までの研究の過程、先行研究の調査、研究計画の発表・報告を教授する。 (林 尊弘／1回) 研究倫理を教授する。 (宮津 真寿美／11回・加藤 真弓／11回・木村 菜穂子／11回・松村 仁実／11回・臼井 晴信／11回・山田 南欧美／11回・齊藤 誠／11回・濱田 光佑／11回・山田 和政／11回・林 尊弘／11回・松田 文浩／11回) (共同) 研究テーマの決定、研究計画の発表・報告書の指導をする。問題点を整理しながら研究目的・方法の修正を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①研究計画を立てる上での、研究の過程、論文の種類が説明でき、論文の検索ができる。					
思考・判断 ・表現	②研究計画の発表ができる。					
技能	③先行研究の調査ができる。 ④研究倫理の基本原則を知った上で、研究計画を立てることができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤指導教員と討論し、研究計画を立てることをができる。					
授業形態						
演習	スライドなどによる講義や演習（1、2、6、13回）と、担当教員によるゼミ形式（3-5、7-11、14-15回）、研究計画の発表を行う（12回）。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	宮津	オリエンテーション	オリエンテーション、研究の過程（「研究テーマの発生」から「具体的な実験計画まで」前半）、文献レビュー			
2	宮津	研究テーマの決定	論文の種類、論文検索の実際、文献リスト作成			
3	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	先行研究を検索し整理し、文献レビューなど机上の検討を行う。			

4	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	先行研究を検索し整理し、文献レビューなど机上の検討を行う。					
5	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	先行研究を検索し整理し、文献レビューなど机上の検討を行う。					
6	宮津	研究テーマの決定	研究の過程（「研究テーマの発生」から「具体的な実験計画まで」後半）、予備検討（予備実験、プロトコルの実践など）、研究計画の発表、研究計画報告書の作成					
7	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	予備実験を行い、具体的な研究計画を作成する。					
8	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	予備実験を行い、具体的な研究計画を作成する。					
9	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	予備実験を行い、具体的な研究計画を作成する。					
10	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	研究計画を作成し、公開討論のための発表準備を行う。					
11	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの決定	研究計画を作成し、公開討論のための発表準備を行う。					
12	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究計画の公開討論	研究計画の公開検討を行う。					
13	林	研究倫理	研究倫理を学ぶ。					
14	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの修正	公開討論を受けて、研究計画を修正する。					
15	宮津・加藤・木村・松村・臼・山田(南)・齊藤・濱田・山田(和)・林・松田	研究テーマの修正	卒業研究発表会の討論に参加し、研究計画を修正する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	先行研究調査報告書		●		●		20	①③
	研究計画発表		●	●	●	●	40	①②③⑤
	研究計画報告書		●	●	●	●	40	①②④⑤
評価の 特記事項	先行研究報告書20%、研究計画発表40%、研究計画報告書（研究倫理を含める）40% 報告書及び発表に対する評価は、ルーブリックを用いる。第1回、第6回、第13回授業で、具体的な評価内容を示す。 なお、合格点は、すべての評価方法の合計点数が6割以上である。6割に満たない場合でも、再試験等は実施しない。初回授業で、説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
指導教員のもと、必要があれば授業時間外の時間を使って行う。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
成績評価点の詳細は伝える。疑問点は随時受け付ける。								

教科書
講義形式の授業は適宜プリントを配布する。
参考図書
研究法に関しては、「理学療法研究法（医学書院）」など多数ある。
備考：履修者への要望
研究を行うのは学生自身である。教員の指導を受けながら、各自の積極的な行動によって、目標が達成できる。

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
55	人体触察法実習	理学療法学専攻	1学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
木村 菜穂子・松村 仁実・藤本 大介						
実務経験のある教員						
木村 菜穂子・松村 仁実・藤本 大介：医療機関で理学療法士として勤務し、患者に対して臨床経験のある教員が、人体触察法についての実習を行う。						
授業概要						
理学療法士は、患者を直接触察して評価し、治療を行う能力が必要である。解剖学や運動学で学んだヒトの立体的（三次元的）構造や運動を理解し、それを実際に触察できなければ、正確な評価や効果的な治療の提供はできない。 そこで本科目では、皮膚を介して内部組織を視察・触察する技術を身につけることを目的として実習形式で学修する。 筋・骨・神経等の運動器系の構造を体表から正確に触察することにより、その位置、形、固さ、大きさなど、人体の構造を三次元的視点から確実なものとし、徒手筋力テストや神経学検査法などの評価法等の基礎を構築する。さらに、触察体験をすることにより、被治療者の気持ちを理解し、実際の臨床場面で対象者に不快感を与えない対応の方法を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①筋の起始・停止・神経支配を述べることができる。 ②筋の触察に関係する骨指標を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③触察に関する基礎事項について説明することができる。					
技能	④身体各部の筋、骨、神経、血管を皮膚を通して視察・触察し、皮膚に投影できる。					
関心・意欲 ・態度	⑤被治療者役にあたる相手に対して、配慮することができる。					
授業形態						
実習	学生数名でグループをつくり、互いの体表面上に指定項目を描くことを中心とした実習を行う。 基礎知識については、毎回筆記小テストと前回の範囲の実技小テストで、知識習得を確認する。					
授　業　計　画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	木村・松村・藤本	肩周囲の触察①	肩甲骨・鎖骨・三角筋の触察法を学修する			
2	木村・松村・藤本	背面上部の触察	僧帽筋・肩甲挙筋の触察法を学修する			
3	木村・松村・藤本	上腕の触察	上腕三頭筋・上腕二頭筋・（烏口腕筋）・上腕筋の触察法を学修する			
4	木村・松村・藤本	前頸部・前胸部の触察	大胸筋・小胸筋・胸鎖乳突筋・斜角筋群の触察法を学修する			
5	木村・松村・藤本	肩甲骨周囲筋の触察①	（棘上筋）・棘下筋・小円筋・大菱形筋・小菱形筋の触察法を学修する			
6	木村・松村・藤本	肩甲骨周囲筋の触察②	大円筋・広背筋・肩甲下筋の触察法を学修する			
7	木村・松村・藤本	胸郭・前腹部の触察	胸郭・前鋸筋・腹直筋・腹斜筋群の触察法を学修する			
8	木村・松村・藤本	腰背部筋の触察	腸肋筋・最長筋・腰方形筋・（多裂筋・頭板状筋・頸板状筋・頭半棘筋）の触察法を学修する			

9	木村・松村・藤本	骨盤・臀部の触察	骨盤・大殿筋・中殿筋・（外旋六筋）の触察法を学修する					
10	木村・松村・藤本	大腿後面の触察	大腿二頭筋・半腱様筋・半膜様筋・（大内転筋）の触察法を学修する					
11	木村・松村・藤本	大腿前面の触察	大腿四頭筋・縫工筋・薄筋・大腿筋膜張筋・長内転筋の触察法を学修する					
12	木村・松村・藤本	下腿部の触察	腓腹筋・ヒラメ筋・前脛骨筋・長短腓骨筋・（他下腿筋）の触察法を学修する					
13	木村・松村・藤本	前腕前面の触察	腕橈骨筋・円回内筋・長掌筋・橈側手根屈筋・尺側手根屈筋・（指屈筋）の触察法を学修する					
14	木村・松村・藤本	前腕後面の触察	尺側手根伸筋・総指伸筋・小指伸筋・長短橈側手根伸筋・（指伸筋）の触察法を学修する					
15	木村・松村・藤本	まとめ	講義全体のまとめ・復習					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			35	①②③
	口頭試問		●	●	●	●	35	①②③④⑤
	小テスト・事前課題		●	●	●	●	30	①②③④⑤
評価の特記事項	毎回の授業時に触察・投影技術を確認する実技小テストと、筋や触察法の基礎知識を問う筆記小テストを行う。2回目以降の講義において基礎事項確認の小テストを実施する。基礎事項確認小テストは、基準に達するまで行う。ただし、受ける回数が増えるごとに得点は減少する方式を採用する。4回目以降は得点にならない。 科目試験として口頭試問と筆記試験を行い、以下の配分で総合的に評価する。 評価配分：筆記試験（100点満点）＋口頭試問（100点満点）＋筆記・実技・基礎事項の小テスト・事前課題（80点満点）の計280点満点の総合点のうち168点以上（60％以上）を合格とする。ただし、筆記試験、口頭試問はそれぞれ60％以上の得点を必須とする。 筆記試験、口頭試問、総合点がそれぞれ60％に満たない場合は再試験を実施することがある。 なお、著しく受講態度が悪い場合は受講を認められないことがある。（詳細については別途ガイダンス等で示す。）							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
受講に授業を受けるにあたり事前課題として筋図の作成と提出を求める。提出物は期限の厳守や内容について評価する。 （予習）教科書にある触察方法を読み、ポイントを確認する。また、筋の基礎知識を覚える。 （復習）授業を振り返り、触察の仕方を復習する。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テストと試験の答えは返却しない。ただし、得点は提示する。またそれぞれの答えは担当教員の研究室にて保管しており、希望者には個別で開示する（事前連絡必要）。								
教科書								
「改訂 骨格筋の形と触察法」河上敬介・磯貝香 大峰閣								
参考図書								
「分担解剖学 第一巻」森於菟 ほか 金原出版 「日本人体解剖学 上巻」金子丑之介 南山堂 「頭・頸部の筋の形と位置」河上敬介 ほか 大峰閣 ほか 解剖学成書 「図解 四肢と脊柱の診かた」野島元雄 監訳 医歯薬出版								

備考：履修者への要望

学生が2人ないし3人一組になり、パートナーの体表面上で指定項目を触察し、それを投影するという方法で実習を行うが、無断欠席や無断遅刻および予習不足により、パートナーに迷惑をかけることのないよう心がけること。

また、お互いに直接触れることになるため、相手に対し思いやりのある態度で接しなくてはならず、特に手指は清潔な状態を保つようにしておくこと。

なお、皮膚のトラブル（アトピー性皮膚炎など）や外傷痕、手術痕等の理由で、皮膚の接触や露出について何らかの問題がある場合、事前に必ず科目担当教員(学年担任及び学習アドバイザー教員でも可)に相談すること。ただし、装飾品などを身につけたままの状態などを含め、医療職としてふさわしくないとされる容姿・皮膚状態などが見られる場合には受講を認めないことがあるため注意すること。

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
56	臨床運動学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
松村 仁実・濱田 光佑						
実務経験のある教員						
松村 仁実・濱田 光佑:医療機関で理学療法士として臨床経験のある教員が、運動学、運動学実習で学修した内容の理解を深め適切な解釈を実施できるために、自ら体験しながら生理学、解剖学、生体力学、動作分析学的に考察しながら、実習形式で教授する。						
授業概要						
理学療法士は、障害を有する対象者の姿勢や動作を評価し理解する必要がある。運動学の中の「姿勢（座位・立位）、動作（立ち上がり・歩行）」の観点から、臨床における対象者の筋骨格系、神経系の異常を捉える力を養う。 本科目では、筋電図装置や3次元動作解析装置等の動作分析装置を使用した演習を通して正常な姿勢、動作を再確認した上で、姿勢観察・動作分析を実践して正常から逸脱した所見を抽出し、その原因を説明できるよう学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①臨床運動学の観点を述べることができる。 ②健常者の姿勢、動作について運動学的視点を持ち観察する事ができる。 ③疾患者の姿勢、動作について運動学的視点を持ち観察する事ができる。					
思考・判断 ・表現	④動作分析・歩行分析の方法を説明することができる。 ⑤疾患者の姿勢、動作（特に起居、立ち上がり、歩行）を説明することができる。 ⑥姿勢分析、動作分析を通して対象者の機能障害を予測することができる。					
技能	⑦姿勢分析、動作分析を実施することができる。 ⑧動作解析装置を使用し、姿勢、動作分析を行うことができる。					
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
実習	講義、実習を交えながら進める。 グループ学習による実習も含む。 動作分析の結果をまとめ発表を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松村・濱田	オリエンテーション/運動力学の基礎	コースオリエンテーション 臨床運動学の位置づけ、その方法について学修する。生体力学を理解し、力学的視点で姿勢・動作を捉えることを学修する。動作時の筋活動、床反力、関節モーメントについて学修する。			
2	松村・濱田	姿勢観察・分析 (立位・座位)	立位姿勢について観察・分析を行う。姿勢分析を実施する上での必要な視点を学修した上で、自己・他者の姿勢分析を行う。また、グループワークを用い討議、情報の共有を行う。			
3	松村・濱田	姿勢観察・分析 (立位・座位)	端坐位姿勢について観察・分析を行う。姿勢分析を実施する上での必要な視点を学修した上で、自己・他者の姿勢分析を行う。また、グループで討議、情報の共有を行う。			
4	松村・濱田	動作観察・分析 (椅子からの立ち上がり)	立ち上がり動作の分析の方法を学修する。グループにて椅子からの立ち上がり動作の写真、動画を撮影し分析を行う。また、動作解析装置等を用い経時的な身体運動を解析する。			
5	松村・濱田	動作観察・分析 (椅子からの立ち上がり)	各グループにて椅子からの立ち上がり動作の写真、動画を撮影し分析を行う。また動作解析装置を用い経時的な身体運動を解析する。各グループで行った動作分析の発表を行う。また、情報共有した上で討議を行う。			
6	松村・濱田	動作観察・分析 (起居動作)	起居動作の分析の方法を学修する。グループにて起居動作の写真、動画を撮影し分析を行う。また、動作解析装置を用い経時的な身体運動を解析する。			
7	松村・濱田	動作観察・分析 (起居動作・発表)	各グループにて起居動作の写真、動画を撮影し分析を行う。また動作解析装置を用い経時的な身体運動を解析する。各グループで行った動作分析の発表を行う。また、情報共有した上で討議を行う。			

8	松村・濱田	歩行について	歩行について修学する。歩行の力学的特徴、意義、歩行周期における心身の変化、動作観察・分析の視点や考え方を理解する。					
9	松村・濱田	動作観察・分析 (歩行分析)	各グループにて歩行動作の写真、動画を撮影し分析を行う。また動作解析装置を用い、経時的な身体運動を解析する。小テストを実施する。					
10	松村・濱田	動作観察・分析 (歩行分析)	各グループに歩行動作の写真、動画を撮影し分析を行う。また動作解析装置を用い、経時的な身体運動を解析する。					
11	松村・濱田	動作観察・分析 (歩行分析)	各グループで行った動作分析の発表を行う。また、情報共有した上で討議を行う。					
12	松村・濱田	動作観察・分析 (疾患者の動作分析)	疾患者の歩行観察・分析の方法を修学する。疾患者の身体運動の特徴を理解し動作分析から機能障害を推測する方法を修学する。					
13	松村・濱田	動作観察・分析 (疾患者の歩行分析)	疾患者（中枢神経疾患・整形外科疾患）の歩行観察・分析を動画資料をもとに実施する。分析は各グループにて行う。					
14	松村・濱田	動作観察・分析 (疾患者の歩行分析・発表)	疾患者（中枢神経疾患・整形外科疾患）の歩行観察・分析を動画資料をもとに実施する。分析は各グループにて行う。					
15	松村・濱田	発表・総括	各グループで行った動作分析の発表を行う。また、情報共有した上で討議を行う。理学療法士として、動作分析をどの様に臨床実践していくのかを踏まえ総括を実施する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標	
		●	●			60	①②③④⑤⑥	
		●	●			20	①②③④⑤⑥	
		●	●	●		20	③④⑤⑥⑦⑧	
評価の 特記事項	すべての評価方法との合計点が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。なお、再試験の評価方法は、実施時に対象学生に説明する。 ※発表の評価基準は、講義内で詳細を示す。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）正常な姿勢、立ち上がり、起居、歩行について調べ、用語の意味を調べる。 用語の理解などを確認するために、小テストを実施する。 （復習）授業を振り返り、動作分析がどのように行われているのかを理解する。また、実践してみる。 グループごとに発表用の資料の作成をし、それに沿った発表を実施する。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テスト・試験は研究室に保管する。事前に連絡の上、確認することができる。 発表資料については、講義内で内容についてフィードバックを行う。								
教科書								
必要に応じて資料を配布する。								
参考図書								
「基礎運動学」中村隆一　ほか　医歯薬出版 「臨床運動学」中村隆一　ほか　医歯薬出版								
備考：履修者への要望								
運動学の単位が修得できている者の受講が望ましい。 正当な理由なき欠席・遅刻・早退は厳禁とする。必要に応じ証明書の提出を求める。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
57	運動療法総論	理学療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
松田 文浩						
実務経験のある教員						
松田 文浩：医療機関で理学療法士として勤務し、患者に運動療法を実施経験のある教員が講義を行う。						
授業概要						
運動療法は、理学療法の中心的な治療方法である。まず、運動が生体に与える影響を十分に理解し、運動の功罪を理解した上で各種障害に対して適切な運動療法ができるように基礎的な知識とその技術を習得するために以下の目標を設定する。 1. 理学療法の中心的方法である運動療法の総論を学ぶ。 2. 各種障害に対する基本的運動療法を学ぶ。（関節可動域維持拡大・筋力・筋持久力向上・協調性改善・バランス改善・基本動作能力向上、疼痛改善など） 3. 運動療法機器について学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①運動療法の概念、目的を説明できる。 ②運動療法を行うための基礎知識を説明できる。					
思考・判断 ・表現	③基本的な運動療法を解剖学、生理学、運動学、病理学的に説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④最新の知見をふまえた運動療法を説明できる。					
授業形態						
講義	スクリーンにテキストの図表等を表示し解説を行う事を主体として講義を進める。また、理解を深めるため、一部実習によるアクティブラーニングを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松田	イントロダクション	1. 運動療法とは			
2	松田	運動療法概論1	1. 運動療法の概要 2. 運動療法の目的 3. 基本的身体動作機能と運動学			
3	松田	関節可動域の改善1	1. 関節可動性とその障害 2. 関節可動域運動の方法			
4	松田	関節可動域の改善2	1. 関節運動学を用いた関節可動域運動 2. ストレッチング			
5	松田	筋力・筋持久力の改善1	1. 筋の生理学と筋力			
6	松田	筋力・筋持久力の改善2	1. 筋力増強運動 2. 筋持久力増強運動			

7	松田	協調性の改善	1. 協調性とは 2. 協調性運動の原則 3. その他					
8	松田	バランスの改善1	1. 姿勢・バランスとは 2. 姿勢・バランスと運動療法					
9	松田	バランスの改善2	1. 平衡機能訓練 2. ポジショニング 3. その他					
10	松田	基本動作練習1	1. 基本動作とは 2. 基本動作練習の実際					
11	松田	基本動作練習2	1. 歩行練習の実際 2. 代表的な異常歩行					
12	松田	義肢装具と運動療法	1. 義肢装具の意義 2. 義肢装具と運動療法					
13	松田	ADL練習	1. 動作獲得に必要な姿勢 2. ADL練習の実際					
14	松田	その他の運動療法	1. 疼痛に対する運動療法 2. バイオフィードバック療法 3. その他					
15	松田	リスク管理	1. リスクとは 2. 運動療法に関わるリスクとその管理					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	70	①②③④
	小テスト		●	●		●	30	①②③④
評価の 特記事項	小テストおよび筆記試験の結果を合算し、60%以上を合格とする。 60%に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験の評価方法は、対象者に別途説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）講義範囲に該当するテキストの熟読 （復習）講義内容の確認と理解 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テスト実施後、全体に向けて解説を行う。筆記試験のフィードバックは個別に対応する。（場所：教室または研究室）								
教科書								
「運動療法学」（Crosslink 理学療法テキスト）対馬栄輝 編 メジカルビュー社								
参考図書								
講義中に適宜紹介する								
備考：履修者への要望								
理学療法の主体となる知識や手技の総論となるので、解剖学、生理学、運動学の知識を整理して講義に臨むこと。 講義時間内で身体を動かして体験する際は積極的に行うこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
58	運動療法演習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
松田 文浩・藤本 大介						
実務経験のある教員						
松田 文浩・藤本 大介：医療機関で理学療法士として勤務し、患者に運動療法を実施経験のある教員が、運動療法についての演習を行う。						
授業概要						
運動療法は臨床における理学療法の治療手技の1つであり、適切な理学療法評価を前提に問題となる身体機能に対して処方される身体の運動である。運動を処方する際、解剖学、生理学、運動学、病理学を土台にし、医学的な根拠に基づいた運動の種類、内容、負荷、回数等を選択することが重要である。本科目では、身体機能の問題を有する対象に処方する代表的な運動療法の具体的な方法について、演習を通して学修し、臨床場面で対象者に運動療法を具体的に提示できることを目指す。 (オムニバス方式／全3回) (松田 文浩／1回) 運動療法の概要について (藤本 大介／2回) 症例検討、講義全体のまとめ (松田 文浩・藤本 大介／5回) (共同) 全身持久力増強運動、関節可動域運動、筋力増強運動、筋持久力増強運動、協調性運動・バランス練習について						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①対象の身体機能の問題に応じた適切な運動療法を選択することができる。					
思考・判断 ・表現	②対象の身体機能の問題や個人因子に応じた適切な運動療法の内容、負荷、回数等を提示することができる。					
技能	③運動療法の具体的な手法を実践することができる。 ④対象者に運動療法の手法を具体的に提示できる。					
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
演習	グループでの演習を中心とし、適宜スライドを用い、講義を進める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松田	運動療法の概要	「運動療法の理学療法上の位置づけ」、「運動療法と理学療法評価・病態・病期・対象者の目標とのつながり」、「運動療法処方に考慮すべき事項」について解説する。			
2	松田・藤本	全身持久力増強運動	全身持久力増強運動の演習を行う。また、模擬症例の症例検討を通して、全身持久力増強運動の処方の要諦を理解する。			
3	松田・藤本	関節可動域運動	関節可動域運動の演習を行う。また、模擬症例の症例検討を通して、関節可動域運動の処方の要諦を理解する。			
4	松田・藤本	筋力増強運動	筋力増強運動の演習を行う。また、模擬症例の症例検討を通して、筋力増強運動の処方の要諦を理解する。			

5	松田・藤本	筋持久力増強運動	筋持久力増強運動の演習を行う。また、模擬症例の症例検討を通して、筋持久力増強運動の処方の要諦を理解する。					
6	松田・藤本	協調性運動・バランス練習	協調性運動・バランス練習の演習を行う。また、模擬症例の症例検討を通して、協調性運動・バランス練習の処方の要諦を理解する。					
7	藤本	症例検討	模擬症例を題材に、理学療法プログラムとしての運動療法を立案する。					
8	藤本	まとめ	症例検討に対するフィードバック、全体の復習・まとめを行う。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	小テスト		●				30	①
	レポート		●	●	●		30	①②③④
	筆記試験		●	●	●		40	①②③④
評価の 特記事項	小テスト、レポート、筆記試験の合計が60点に満たない場合、再試験の対象となる。 レポートはルーブリックを用いて採点する。採点基準は、授業内でレポート課題を提示する際に説明する。 再試験は小テスト、レポート、筆記試験の試験範囲を統合した1回の筆記試験とし、再試験の点数が60点以上であれば単位を認定する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
【予習】当該授業テーマの事前学習を行うこと。 【復習】2回以降は講義中に模擬症例の検討を行い、最終的に総合的な模擬症例の検討に対するレポートを作成する。レポートの作成として講義後の復習時間が必要と考えている。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テストおよびレポートは返却する。筆記試験は、各自の答案用紙を閲覧する機会を設ける。								
教科書								
「運動療法学」（Crosslink 理学療法テキスト）対馬栄輝 編 MEDICALVIEW								
参考図書								
「“臨床思考が身につく” 運動療法Q&A」高橋哲也 編 医学書院								
備考：履修者への要望								
解剖学、運動学、生理学、症候学の知識を融合させ、積極的に演習に参加し、運動療法処方の質が向上することを期待している。 2回以降は、実技を行うため動きやすい服装で授業に臨むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
59	理学療法管理学	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
山田 和政						
実務経験のある教員						
山田 和政：医療・介護保険分野において管理職（理学療法士）としての臨床経験のある教員が、管理・運営の講義を通して必要な知識を教授する。						
授業概要						
臨床現場では、理学療法部門の合理的な管理・運営がなされるよう当該部門のスタッフの一員として協力的かつ的確な行動が取れる資質が求められている。本講義は、理学療法部門における運営・管理を多角的な視点から捉え、臨床現場において理学療法の質を向上させるための管理・運営のありかたや職業倫理等について学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①組織の管理・運営に関する専門用語を説明できる ②臨床現場での管理・運営の重要性を説明できる					
思考・判断 ・表現	③理学療法管理学の内容とその必要性を自身の言葉で述べることができる					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	講義とグループワークおよびプレゼンテーションを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田	理学療法管理学とは	理学療法士を取り巻く環境（保健医療福祉制度を含む）を踏まえ、理学療法管理学の必要性について学ぶ			
2	山田	病院の分類と組織	医療施設の分類、病院の分類、病院の組織・部門とその役割について学ぶ			
3	山田	診療・介護報酬と収益構造	診療報酬・介護報酬の支払いの仕組みを理解し、リハビリテーション分野における収益の構造について学ぶ			
4	山田	医療の質とその取り組み方法	良質な医療を提供するための方法と質の評価について学ぶ（グループワーク・プレゼンテーション）			
5	山田	医療安全とリスク管理	「医療安全」とリスク管理（感染予防を含む）について学ぶ（グループワーク・プレゼンテーション）			
6	山田	権利擁護と職業倫理	理学療法士として必要な患者の権利擁護と職業倫理について学ぶ（グループワーク・プレゼンテーション）			
7	山田	職場教育・職場管理	職場における教育管理、業務・労務管理、人事管理について学ぶ（グループワーク・プレゼンテーション）			
8	山田	管理者に求められるスキル	管理職として組織をリードするために求められるスキルについて学ぶ（グループワーク・プレゼンテーション）			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●			70	①②③
	プレゼンテーション	●	●			20	①②③
	ポートフォリオ	●	●			10	①②③
評価の 特記事項	期末試験（筆記試験）を実施する。中間試験は実施しない。 ポートフォリオ（10点）、プレゼンテーション（20点）、期末試験（70点）にて評価する。 プレゼンテーションとポートフォリオについては、事前に提示するルーブリックを用いて評価する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施し、筆記試験のみで評価する。						
配布する「予習・復習プリント」を活用し、取り組むこと。 予習：グループワークが多いため、シラバスに掲載されている授業内容を確認し、教科書の当該部分に目を通し、しっかり事前準備する（40分）。 復習：授業内容を整理し、理解が不十分な部分については、次回の講義までに解決する（20分）。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
提出課題（学習成果物）は、評価後に返却する。 筆記試験の答案は返却しませんが、希望者には個別に開示する（事前連絡必要）。							
教科書							
「15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト／理学療法管理学」石川朗　ほか　中山書店							
参考図書							
「理学療法管理学」植松光俊　南江堂 「リハビリテーション管理・運営実践ガイドブック」金谷さとみ　ほか　メジカルビュー社							
備考：履修者への要望							
積極的な態度で授業に臨み、授業内容の理解を深めるよう努めること。懸命に学びたいと考えている周囲の学生の妨げになるような態度（講義中の私語、グループワークでの非協力的な取り組み）は、厳禁とする。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
60	理学療法管理学演習	理学療法専攻	4学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
山田 和政						
実務経験のある教員						
山田 和政：医療・介護保険分野において管理職（理学療法士）としての臨床経験のある教員が、管理・運営について演習を行う。						
授業概要						
臨床現場では、理学療法部門の合理的な管理・運営がなされるよう当該部門のスタッフの一員として協力的かつ的確な行動が取れる資質が求められている。本講義は、理学療法部門における運営・管理を多角的な視点から捉え、臨床現場において理学療法の質を向上させるための管理・運営の在り方や職業倫理等を、学内で学習したことならびに臨床現場での体験を基に、グループワークを中心に検討をする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①臨床現場での管理・運営を理解できる。					
思考・判断 ・表現	②理学療法管理学の必要性、要点を自身の言葉で述べることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③課題に対し、理学療法管理・運営の在り方を様々な角度から討議することができる。					
授業形態						
演習	主にグループワークを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田	臨床現場における管理場面	臨床現場での体験から、個人・部門・病院（施設）等に関わる管理・運営について考える。			
2	山田	臨床現場における管理場面	臨床現場での体験から、個人・部門・病院（施設）等に関わる管理・運営について考え、検討課題を抽出する。			
3	山田	課題検討	グループワーク			
4	山田	課題検討	グループワーク・発表			
5	山田	課題検討	グループワーク			
6	山田	課題検討	グループワーク・発表			
7	山田	課題検討	グループワーク			

8	山田	課題検討 まとめ	グループワーク・発表 全体のまとめ				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	参加貢献度	●	●		●	40	①②③
	プレゼンテーション	●	●		●	40	①②③
	ポートフォリオ	●	●			20	①②
評価の 特記事項	参加貢献度は、積極的に発言し、その内容・回数に基づき評価する。 プレゼンテーションの評価については、事前に提示するルーブリックを用いる。 ポートフォリオについては、学習成果物を指定期日までに提出すること。未提出、遅延、内容不十分の場合はいずれも0点とする。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかったとしても、再試験(再評価)は実施しない。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
復習：各課題についての知識不足を補う。また、自身の考えをノートにまとめる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
提出課題は、評価後に返却する。							
教科書							
「15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト／理学療法管理学」石川 朗・種村留美 中山書店							
参考図書							
「理学療法管理学」植松光俊 南江堂 「リハビリテーション管理・運営実践ガイドブック」金谷さとみ・高橋仁美 メジカルビュー社							
備考：履修者への要望							
「理学療法管理学」の学習事項と臨床現場体験を関連づけ、積極的な態度で授業に臨むよう努めて下さい。懸命に学びたいと考えている周囲の学生の妨げになるような態度（講義中の私語、グループワークでの非協力的な取り組み）は、厳禁とします。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
61	検査測定法	理学療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
木村 菜穂子・山田 南欧美・藤本 大介						
実務経験のある教員						
木村 菜穂子・山田 南欧美・藤本 大介：医療機関等で理学療法士として勤務し、患者に対し理学療法・理学療法評価の臨床経験のある教員が、検査測定法の講義・演習を行う。						
授業概要						
本科目では、理学療法を行う上で重要となる、対象者の障害把握の手段の一つである検査測定についての種類、目的、方法について講義形式で学修する。また多くの検査測定方法の中でも特に臨床において用いられることの多い形態測定、関節可動域（ROM）測定、徒手筋力検査法（MMT）の検査方法や測定技術を中心に、その他評価（反射検査・感覚検査・協調性検査・筋緊張評価・痛み評価等）について学ぶ。 （オムニバス方式／全6回） （木村 菜穂子／4回・藤本 大介／2回） 形態測定・関節可動域測定、徒手筋力検査およびその他評価の意義、目的を教授する。 （木村 菜穂子／9回・山田 南欧美／9回・藤本 大介／9回）（共同） 実際の実技を用いて形態測定・関節可動域測定・徒手筋力検査法およびその他評価を教授する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	（●：強い関連がある　○：関連がある）	
知識・理解	①理学療法評価の意義と、検査測定法の種類、目的、方法を説明することができる。 ②形態測定・関節可動域測定・徒手筋力検査法の意義、方法を理解し、説明することができる。					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	講義・演習 スライドを用いての講義と、少人数グループによる演習（実技を用いて確認）を組み合わせで行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	木村	授業オリエンテーション 理学療法評価とは	授業概要等のオリエンテーション 理学療法評価、検査測定の意義（講義）			
2	木村	形態測定①	形態測定の意義、目的、原則、測定方法（講義）			
3	木村・山田・ 藤本	形態測定②	形態測定の方法／測定時のランドマークの位置確認と触察方法（演習）			
4	木村	関節可動域測定①	関節可動域測定の意義、目的、原則、測定方法（講義）			
5	木村・山田・ 藤本	関節可動域測定②	肩・肩甲骨・肘・前腕・手関節・手指の関節可動域測定（演習）			
6	木村・山田・ 藤本	関節可動域測定③	下肢（股・膝・足関節）・頭頸部・体幹の関節可動域測定（演習）			

7	木村	徒手筋力検査法①	徒手筋力検査法の意義、目的、原則（講義）				
8	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法②	上肢の徒手筋力検査法（演習）				
9	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法③	下肢の徒手筋力検査法（演習）				
10	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法④	頭頸部・体幹・顔面の徒手筋力検査法（演習）				
11	藤本	その他の検査・評価①	反射検査・感覚検査・協調性検査・筋緊張評価の意義、目的、原則（講義）				
12	木村・山田・藤本	その他の検査・評価②	反射検査・感覚検査・協調性検査・筋緊張評価（演習）				
13	藤本	その他の検査・評価③	痛みの評価・バランス検査等の意義、目的、原則（講義）				
14	木村・山田・藤本	その他の検査・評価④	痛みの評価・バランス検査等（演習）				
15	木村・山田・藤本	まとめ	全体のまとめ				
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
		筆記試験	●			90	①②
		小テスト	●			10	①②
評価の特記事項	単位取得には、筆記試験で60%以上、かつ最終成績(筆記試験90%+小テスト10%)の60%以上の得点が必要である。 筆記試験(科目試験)で60%未満となった場合、再試験を実施する。 再試験を実施する場合、その評価・判定方法は、本試験と同じである。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習：各回の講義内容を確認し、該当する範囲の意義、各検査・測定方法を確認し、理解できないところを明確にする。 特に、徒手筋力検査法の範囲では教科書に付属している動画を参考にして行う。（1時間程度） 復習：講義で確認した内容をふまえ、実技に結び付けられるよう努める。（3時間程度） （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
小テストと試験の答案は返却しない。ただし、得点は提示する。またそれぞれの答案は担当教員の研究室にて保管しており、希望者には個別で開示する(事前連絡必要)。							
教科書							
「理学療法評価学テキスト」細田多穂 監修 南江堂 「新・徒手筋力検査法」津山直一 訳 協同医書出版社							
参考図書							
「骨格筋の形と触察法」河上敬介 ほか編集 大峰閣 その他、補足資料を講義中に配布することがある。また、数多くの成書が出版されているため、自分に合ったものを活用してもよい。							
備考：履修者への要望							
この講義で学習するのは臨床現場で最も実施頻度の高い検査・測定項目であり、理学療法士にとって必須の技術である。短期間で多くの内容を理解するため、予習・復習は必須となる。講義中は自分の理解度を高めるための時間として、真摯で積極的な受講態度を求める。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
62	検査測定法実習	理学療法専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
木村 菜穂子・山田 南欧美・藤本 大介						
実務経験のある教員						
木村 菜穂子・山田 南欧美・藤本 大介：医療機関等で理学療法士として勤務し、患者に対し理学療法・理学療法評価の臨床経験のある教員が、検査測定法の実習を行う。						
授業概要						
検査測定法で学習した検査方法や測定技術を、実習形式で学修し、その技術を確実に実施できる能力を習得する（形態測定、関節可動域測定（ROM）・徒手筋力検査法（以下、MMT）・反射検査を中心に）。また、各検査結果について考察し、検査や測定結果の持つ意味を検証する。同時に、対象者への接し方、触れ方、理学療法士としての身体の使い方についても学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	（●：強い関連がある　○：関連がある）	
知識・理解	①理学療法評価の意義と、検査測定法の種類、目的、方法を述べることができる。 ②形態測定・関節可動域測定・徒手筋力検査法・反射検査の意義、方法を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③形態測定・関節可動域測定・徒手筋力検査法等の検査結果から、測定方法や結果の持つ意味を説明することができる。					
技能	④形態測定・関節可動域測定・徒手筋力検査法・反射検査を、健常者を対象として正確に実施することができる。					
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
実習	実技（一部、内容補足のための講義あり）、学生数名でグループをつくりディスカッションをしながら行う。					
授　業　計　画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	木村・山田・ 藤本	形態測定①	形態測定の意義、目的、原則等の振り返り 形態測定　測定時のランドマーク触察、形態測定			
2	木村・山田・ 藤本	形態測定②	形態測定、ランドマーク触察の反復練習			
3	木村・山田・ 藤本	反射検査	反射検査の意義、目的、原則等の振り返り 反射検査の練習			
4	木村・山田・ 藤本	関節可動域測定①	関節可動域測定の意義、目的、原則等の振り返り 肩・肩甲帯・肘・前腕の関節可動域測定			
5	木村・山田・ 藤本	関節可動域測定②	下肢（股・膝・足関節）の関節可動域測定			
6	木村・山田・ 藤本	関節可動域測定③	頭頸部・体幹・手関節・手指の関節可動域測定			
7	木村・山田・ 藤本	関節可動域測定④	ROM測定のまとめ			
8	木村・山田・ 藤本	徒手筋力検査法①	徒手筋力検査法の意義、目的、原則等の振り返り 肩甲骨・肩関節の徒手筋力検査法			

9	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法②	肘・前腕・手関節・手指の徒手筋力検査法					
10	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法③	股関節・膝関節の徒手筋力検査法					
11	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法④	足関節・足部の徒手筋力検査法					
12	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法⑤	頭頸部・体幹・顔面の徒手筋力検査法					
13	木村・山田・藤本	徒手筋力検査法⑥	徒手筋力検査法のまとめ					
14	木村・山田・藤本	その他検査	その他検査の確認					
15	木村・山田・藤本	まとめ	講義全体のまとめ／模擬患者データの検討 等					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実技試験 （口頭試問含む）		●	●	●		90	①②③④
	参加貢献度				●		10	④
評価の 特記事項	・実技試験は、本講義担当教員がそれぞれの検査法の実施にあたり必要な知識を口頭試問にて評価し、その後技能を評価する（講義内で提示・説明するルーブリックにて評価）。各個人の評価（可否）は、実技試験担当教員の合議により決定する。 ・参加貢献度は、積極性（提出物の提出状況と完成度・リアクションペーパーの提出頻度等）を評価する。 ・実技試験で合格に至らなかった場合、再試験を実施する。 再試験を実施する場合、その評価・判定方法は、本試験と同じである。 ★検査測定法実習の単位認定には、検査測定法の単位取得が必須条件となる。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
予習：各回の講義内容を確認し、該当範囲の意義、各検査・測定の方法を確認し、理解できないところを明確にする。 特に、MMTでは教科書に付属している動画を参考にして行う。 復習：講義で確認した内容をふまえ、実技練習を行う。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
希望者に対して、実技試験のフィードバックを行う（事前連絡必要）。								
教科書								
「理学療法評価学テキスト」細田多穂 監修 南江堂 「新・徒手筋力検査法」津山直一 訳 協同医書出版社								
参考図書								
「骨格筋の形と触察法」河上敬介 ほか編集 大峰閣 その他、補足資料を講義中に配布することがある。また、数多くの成書が出版されているため、自分に合ったものを活用してもよい。								
備考：履修者への要望								
この講義で学習するのは臨床現場で最も実施頻度の高い検査・測定項目であり、理学療法士にとって必須の技術である。短期間で多くの内容を理解するため、予習・復習は必須となる。講義中は自分の理解度を高めるための時間として、真摯で積極的な受講態度を求める。 なお、検査測定法実習の単位認定には、検査測定法の単位取得が必須条件となる。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
63	理学療法評価法	理学療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
松田 文浩・臼井 晴信						
実務経験のある教員						
松田 文浩・臼井 晴信：医療・福祉機関で理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法を実施する上で重要な項目である理学療法評価法について講義する。						
授業概要						
本科目は、情報収集、医療面接、検査測定、統合と解釈、目標設定、問題点の抽出、治療方針の決定および治療効果の判定までの一連の理学療法評価と臨床意思決定過程、臨床推論について、グループワークによる討論やロールプレイを取り入れて学修する。動作分析によるトップダウン型臨床推論についても演習する。情報収集は、医用画像や臨床検査値などの情報をもとに意思決定をすることも目標とする。また、理学療法評価の記載方法やリスク管理および情報保護についても学修する。多職種連携による医療や福祉を実践する上で、理学療法士の役割を再度考え、理学療法評価を応用できるようにする。 (オムニバス方式／全15回) (松田 文浩／5回) 動作分析、統合と解釈、問題点の抽出、全体像の把握、多職種連携を教授する。 (臼井 晴信／10回) 理学療法評価概論、臨床推論、情報収集、検査・測定、障害分類、記録と情報保護、医療面接、画像と評価法、リスク管理を教授する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①理学療法評価の目的と臨床意思決定過程について説明できる。					
思考・判断 ・表現	②情報収集をもとに評価項目を選定することができる。 ③障害モデルに基づいた統合と解釈について理解し、問題点の抽出について説明できる。 ④記録と報告の方法と注意事項について説明できる。 ⑤対象者の障害像および全体像を説明できる。 ⑥理学療法評価を行う上でのリスクを想定し、対処法を説明できる。					
技能	⑦対象者の情報や理学療法評価結果をもとに目標設定ができる。 ⑧SOAP形式を用いて記録ができる。					
関心・意欲 ・態度	⑨チームの一員として理学療法評価について討議できる。					
授業形態						
講義	グループワークによるアクティブ・ラーニングを行う。一部、教科書と配付資料による講義を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	臼井	理学療法評価概論	コースオリエンテーション 理学療法評価の概要、目的を学修する 教科書3章			
2	臼井	臨床推論	臨床意思決定過程（臨床推論）について学修する 教科書3章			
3	臼井	情報収集	情報収集の目的と方法を説明し実践する 医学的情報の種類、扱い方、解釈について学修する 教科書3章			
4	臼井	検査・測定	検査・測定の目的と方法を学修する 検査・測定の選択について学修し実践する 教科書3章			
5	松田	動作分析	動作分析の目的および方法について学修する 動作分析を用いたトップダウン型臨床推論を実践する 教科書3章			

6	臼井	障害分類	国際生活機能分類（以下、ICF）の理論と理学療法評価における位置づけについて学修する ICFを用いた障害分類を実践し、理学療法評価に応用する。教科書3章					
7	臼井	記録と情報保護	記録の目的および方法を学修する 情報保護の目的および方法を学修する 教科書3章					
8	松田	統合と解釈	評価結果の統合と解釈の方法を学修する 教科書3章					
9	松田	問題点の抽出	統合と解釈から問題点を抽出する 対象者の生活機能と障害をICFに基づいて分類する 教科書3－6章					
10	松田	全体像の把握	対象者の障害や個人因子・環境因子の関連をまとめ、患者の全体像を把握し目標を設定する 教科書3－6章					
11	臼井	医療面接	医療面接で得るべき情報について学修する 医療面接の演習を行う 教科書3章					
12	臼井	画像と評価法	画像検査データの種類と読解について学修する 教科書2章					
13	臼井	画像と評価法：発表	画像検査データの理学療法評価としての応用について討論し発表する 教科書2章					
14	松田	多職種連携	チーム医療、地域リハビリテーションに携わる多職種の専門性について学修する 理学療法士の役割を考え、理学療法評価の応用について演習する					
15	臼井	リスク管理	理学療法におけるリスクを想定し、対処法を学修する 教科書2章					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		50	①②③④⑤ ⑥⑦⑧
	レポート		●	●	●	●	50	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨
評価の 特記事項	グループワークの内容をグループレポートとしてまとめ、発表する（30点）。グループレポートとは別に個人レポートを課す（20点）。レポートの評価基準は初回講義時に説明する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
グループワークによるディスカッションと、資料、教科書による講義を行う。レポートの作成を通して講義、グループワークの内容を振り返ること。また本講義の受講にあたり解剖学・運動学・生理学・検査測定法・基礎統計学および疾患別理学療法学の授業内容を復習すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートはルーブリック評価表により採点し返却する。								
教科書								
「統合と解釈がよくわかる 実践！理学療法評価学」上杉雅之 監修 医歯薬出版								
参考図書								
適宜紹介する。								
備考：履修者への要望								
グループワークでは積極的に参加すること。臨床実習に向け疑問を持ちながら講義やグループワークに臨むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
64	理学療法評価法実習	理学療法専攻	3学年	必修	2単位	60時間
担当教員名						
臼井 晴信・松村 仁実・齊藤 誠						
実務経験のある教員						
松村 仁実・臼井 晴信・齊藤 誠：医療機関で理学療法士として勤務し、患者に対して理学療法評価の臨床経験がある教員が、理学療法評価法についての実習を行う。						
授業概要						
理学療法評価法で学修した臨床思考過程を、模擬症例における演習と実習と症例検討を通して実践する。中枢神経系、運動器系、内部障害系疾患の分野を中心に、対象者の疾患や病態を理解し必要な情報を収集し、それから検査測定項目を挙げるための力を養う。さらに、関連図を用いた統合と解釈を行い、評価結果をまとめ、国際生活機能分類（ICF）に基づいて問題点を抽出する方法を学修する。 授業はグループワーク形式で討論し、その結果を発表する。 臨床実習では十分な基礎知識、応用力、コミュニケーション能力、測定技術が備わっているかどうか問われる。そのため、本科目における試験ならびに成績評価は理学療法士の資格を有する教員全員で行う。 （オムニバス方式／全21回） （臼井 晴信／7回） 内部疾患系障害患者についての症例検討、臨床推論および評価計画について （齊藤 誠／7回） 運動器系障害患者についての症例検討、臨床推論および評価計画について （松村 仁実／7回） 中枢神経系障害患者についての症例検討、臨床推論および評価計画について （松村 仁実・齊藤 誠／2回）（共同） 患者への配慮事項の演習について （臼井 晴信・齊藤 誠／2回）（共同） リスク管理について （臼井 晴信・松村 仁実・齊藤 誠／5回）（共同） 医療面接の理論と技術、模擬症例についての症例検討、臨床推論に関する発表と討論						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3●	DP4○	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①臨床推論過程を理解し、収集した対象者の情報から理学療法評価項目を適切に抽出できる。					
思考・判断 ・表現	②統合と解釈を実践し問題点および対象者の全体像を説明できる。 ③医療面接および検査測定結果から治療プログラムを立案できる。					
技能	④対象者へのオリエンテーションと医療面接から必要な情報を収集できる。 ⑤検査測定を正確な方法で実践できる。 ⑥SOAP形式で記録できる。					
関心・意欲 ・態度	⑦チームの一員として対象者の障害像について討議することができる。 ⑧医療者として適切な態度で対象者、他職種に接することができる。					
授業形態						
実習	グループワークによるアクティブ・ラーニングにて講義を進める。必要な実技演習を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松村・齊藤	理学療法評価に必要な患者への配慮	理学療法評価に必要な患者への配慮事項について考える			
2	松村・齊藤	理学療法評価に必要な患者への配慮・演習	理学療法評価に必要な患者への配慮事項について演習する			

3	臼井・齊藤	理学療法評価に必要なリスク管理	理学療法評価に必要なリスク管理について考える
4	臼井・齊藤	理学療法評価に必要なリスク管理・演習	理学療法評価に必要なリスク管理について演習する
5	臼井・松村・齊藤	医療面接基礎	医療面接の方法と態度を学修する。
6	臼井・松村・齊藤	医療面接演習	医療面接の実際を演習する。
7	臼井	内部疾患系障害の臨床推論	内部疾患系障害の模擬症例について、必要な情報を収集し得られた情報から臨床推論に基づき問題点の仮説を立てる。
8	臼井	内部疾患系障害の評価計画	内部疾患系障害の模擬症例について、問題点の仮説を検証する方法を考え評価計画を立案する。
9	松村	中枢神経系障害の臨床推論	中枢神経障害の模擬症例について、必要な情報を収集し得られた情報から臨床推論に基づき問題点の仮説を立てる。
10	松村	中枢神経系障害の評価計画	中枢神経障害の模擬症例について、問題点の仮説を検証する方法を考え評価計画を立案する。
11	齊藤	運動器系障害の臨床推論	運動器系障害の模擬症例について、必要な情報を収集し得られた情報から臨床推論に基づき問題点の仮説を立てる。
12	齊藤	運動器系障害の評価計画	運動器系障害の模擬症例について、問題点の仮説を検証する方法を考え評価計画を立案する。
13	臼井	内部疾患系障害の検査測定	内部疾患系障害の模擬症例について、立案した評価計画に沿って検査測定を実践する。
14	臼井	内部疾患系障害の統合と解釈	内部疾患系障害の模擬症例について、検査結果を統合し解釈する。
15	臼井	内部疾患系障害の問題点の整理	内部疾患系障害の模擬症例について、問題点を関連図を用いて整理する。
16	臼井	内部疾患系障害の治療計画	内部疾患系障害の模擬症例について、治療計画を立案する。
17	松村	中枢神経系障害の検査測定	中枢神経系障害の模擬症例について、立案した評価計画に沿って検査測定を実践する。
18	松村	中枢神経系障害の統合と解釈	中枢神経系障害の模擬症例について、検査結果を統合し解釈する。
19	松村	中枢神経系障害の問題点の整理	中枢神経系障害の模擬症例について、問題点を関連図を用いて整理する。
20	松村	中枢神経系障害の治療計画	中枢神経系障害の模擬症例について、治療計画を立案する。
21	齊藤	運動器系障害の検査測定	運動器系障害の模擬症例について、立案した評価計画に沿って検査測定を実践する。
22	齊藤	運動器系障害の統合と解釈	運動器系障害の模擬症例について、検査結果を統合し解釈する。
23	齊藤	運動器系障害の問題点の整理	運動器系障害の模擬症例について、問題点を関連図を用いて整理する。
24	齊藤	運動器系障害の治療計画	運動器系障害の模擬症例について、治療計画を立案する。
25	臼井	内部疾患系障害の症例報告	内部疾患系障害の模擬症例について、評価結果を関連図およびレジュメにまとめ報告する

26	松村	中枢神経系障害の症例報告	中枢神経系障害の模擬症例について、評価結果を関連図およびレジュメにまとめ報告する					
27	齊藤	運動器系障害の症例報告	運動器系障害の模擬症例について、評価結果を関連図およびレジュメにまとめる。					
28	臼井・松村・齊藤	重複する障害に対する理学療法評価	運動器系障害、神経筋障害、内部疾患系障害が重複した症例に対する理学療法評価と障害像について討論する。					
29	臼井・松村・齊藤	症例発表	模擬症例の評価結果を発表し討論する。					
30	臼井・松村・齊藤	症例発表	模擬症例の評価結果を発表し討論する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実技試験		●	●	●	●	70	①②③④ ⑤⑥⑦⑧
	レポート・発表		●	●	●		30	①②③④⑥
評価の 特記事項		実技試験は、臨床実習Ⅲにおいて理学療法評価を行う上で必要な技能・態度（接遇態度、対人技能、オリエンテーション能力、検査測定手技）が修得されているかを確認する。また臨床推論に必要な知識（専門基礎科目（解剖学、生理学、運動学）、症候学（整形外科学、神経学、内科学）、理学療法治療学（検査測定、日常生活活動（ADL）、物理療法学、義肢装具学などを含む）が修得されているかを確認する。 レポートは、各疾患の症例レポートにて評価する。レポートの評価基準は講義内で説明する。 また、この科目試験は、臨床実習Ⅲを履修する者が対象となる。したがって、本科目開講前に成績判定されている必修科目で単位を修得していない科目がある場合、本科目を履修することができない。また本科目を履修していても、臨床実習Ⅲを履修するために必要な単位を満たさないことが確定した場合、その後の講義および試験を受けることが出来ない。 本科目の試験に合格したが、他の臨床実習Ⅲの履修に必要な単位を修得できなかった場合、本科目の試験結果は無効となる。 合格基準を満たしていない場合、実技の再試験を実施する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
基礎医学（運動学、解剖学、生理学）、臨床医学（症候学、理学療法治療学）の知識を予習、復習すること。 理学療法評価法の講義と合わせ、評価の進め方について復習すること。 医療面接、検査測定手技の実技練習、基本動作介助の実技練習を自主的に進めること。 以上の講義と予習復習の内容を一元的に管理し、思考過程を整理すること。 上記の内容を講義、グループワークの進行に合わせて毎講義ごとに行うこと。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
実技試験、レポートは個別にフィードバックを行う。								
教科書								
「統合と解釈がよくわかる 実践！理学療法評価学」上杉雅之 監修 医歯薬出版								
参考図書								
適宜紹介する。								
備考：履修者への要望								
本講義は理学療法評価法で学修した内容と連動させること。また、グループワークを実施することが多い。グループにおいて自らの意見を主張し、そして相手の意見をよく聞き、自分以外の多くの考え方を役立てるように講義に臨むこと。そして、講義資料に加えて各自で予習復習をし、自身で思考過程を整理するよう努めること。 障害を臓器別、疾患別で捉えるのではなく、常に重複する障害や全身性の障害について考慮しながら授業に臨むこと。 また、本科目開講前に成績判定されている必修科目で単位を修得していない科目がある場合、本科目を履修することができない。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
65	神経筋障害理学療法治療学	理学療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
林 尊弘						
実務経験のある教員						
林 尊弘：医療機関で理学療法士として勤務し、中枢神経障害およびそのたの神経筋疾患患者への臨床経験のある教員が、実際の症例に関する内容を交えて講義を行う。						
授業概要						
神経系である本科目は、講義を通して、脳の機能解剖を理解するとともに、理学療法を考える上で必要な各疾患（脳血管障害、頭部外傷、脳腫瘍、パーキンソン病、運動失調症、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症等）の病態とその障害構造を理解し、日常生活活動（Activity of Daily Living：ADL）および生活環境に注目して、生活の質（Quality of Life）に結びつける運動療法プログラムについて学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4	（●：強い関連がある　○：関連がある）	
知識・理解	①脳の機能解剖を述べることができる。 ②中枢神経疾患(脳血管障害、頭部外傷、低酸素脳症、パーキンソン病、運動失調症、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症、筋疾患、末梢神経障害)の病態を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③脳血管障害の病期別・重症度別リハビリテーションについて説明することができる。 ④脳血管障害に対する理学療法の根拠となる機能回復のメカニズムについて説明することができる。 ⑤運動失調および大脳基底核病変のメカニズムについて説明することができる。					
技能	⑥脳血管障害の予後予測することができる。 ⑦脳血管障害患者に対して必要な評価方法を選択することができる。					
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	教科書やスライドを使用し、適宜グループワークやペアワークによるアクティブラーニングを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	林	神経筋障害について	中枢神経障害と症状、中枢神経と理学療法の関係性について学ぶ。			
2	林	片麻痺の原因と脳血管障害について	脳血管障害の分類、片麻痺の原因、機能回復のメカニズムについて学ぶ。			
3	林	脳血管障害の診断と治療	脳血管障害の診断と急性期の治療、脳卒中ガイドラインについて学ぶ。			
4	林	脳血管障害片麻痺患者の評価①	脳血管障害片麻痺患者の各種評価方法について学ぶ。			
5	林	脳血管障害片麻痺患者の評価②	脳血管障害片麻痺患者の各種評価方法と機能的予後予測について学ぶ。			
6	林	重症片麻痺例に対する理学療法	重症片麻痺例に対する理学療法の考え方について学ぶ。			
7	林	軽症片麻痺例に対する理学療法	軽症片麻痺例に対する理学療法の考え方、片麻痺の合併症の種類とその原因について学ぶ。			
8	林	脳幹病変について	脳幹病変の病態、失調性片麻痺について学ぶ。			

9	林	運動失調症の病態	運動失調症の病態と評価、進行性の運動失調症（脊髄小脳変性症と多系統萎縮症）の病態を学ぶ。					
10	林	小脳性運動失調の理学療法	小脳性運動失調の理学療法について学ぶ。					
11	林	パーキンソン病の病態	大脳基底核の機能とパーキンソン病の病態を学ぶ。					
12	林	パーキンソン病の理学療法	パーキンソン病の理学療法について学ぶ。					
13	林	頭部外傷と低酸素脳症の病態	頭部外傷と低酸素脳症の病態、評価、運動療法について学ぶ。					
14	林	多発性硬化症と筋萎縮性側索硬化症の病態	多発性硬化症と筋萎縮性側索硬化症の病態と理学療法との関係を学ぶ。					
15	林	筋疾患と末梢神経障害の病態	筋ジストロフィー、多発性筋、重症筋無力症、末梢神経障害の病態と理学療法との関係を学ぶ。					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		70	①②③④⑤⑥⑦
	小テスト		●	●			15	①②③④⑤
	ポートフォリオ		●	●		●	15	①②③④⑤⑥⑦
評価の特記事項	ポートフォリオについては、学習成果物を指定期日までに提出すること。未提出、遅延、内容不十分の場合はいずれも0点とする。 筆記試験と小テスト、ポートフォリオを合わせて6割に達しなかった場合、再試験を実施する。 再試験は筆記試験のみの点数で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
この科目の履修者は、受講前に解剖学・生理学で学習した中枢神経系の構造・機能を要点として整理し、講義に臨む前に、講義計画に記載された該当する教科書をしっかりと学修すること。授業冒頭で復習小テストを実施するため、次回の授業までに学修をすること。教科書は読み流すのではなく、他者に内容を説明できるように取組み、予習・復習で勉強したことはノートなどにまとめること。提出を求めることがある。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テストの回答に対する説明は、講義の中で行う。 試験は研究室に保管します。事前に連絡の上確認する方法、もしくは全体へのフィードバック時間を設ける方法で対応する。 質問がある場合は、別途質問を受け付ける。								
教科書								
「神経筋障害理学療法学テキスト」（中枢神経障害理学療法学テキスト）植松光俊 編 南江堂								
参考図書								
「神経障害理学療法学Ⅰ」（15レクチャーシリーズ）石川朗 総編集 中山書店 「神経障害理学療法学Ⅱ」（15レクチャーシリーズ）石川朗 総編集 中山書店 「高次脳機能障害」石合純夫 医歯薬出版 「ベッドサイドの神経の診かた」田崎義昭 ほか 南山堂								
備考：履修者への要望								
・臨床において必ず神経筋疾患の患者さんを担当する。単なる机上の知識ではなく、臨床に使える知識にするため、暗記レベルでの勉強にならず、内容をよく理解すること。そのためには、解剖学・生理学・運動学・神経学他の知識を事前に十分整理し、すでに学習した事柄と関連付けながら授業に臨む必要がある。 ・グループワークを行う場合があるため、授業時間やそれ以外の時間も有効に使うこと。 ・積極的態で集中して受講すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
66	神経筋障害理学療法治療学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
林 尊弘・加藤 真弓						
実務経験のある教員						
林 尊弘・加藤 真弓：医療機関で理学療法士として勤務し、中枢神経障害およびそのたの神経筋疾患患者への臨床経験のある教員が、実際の症例に関する内容を交え、評価・治療展開について教授する。						
授業概要						
理学療法士として多く経験する中枢神経疾患のうち、脳血管障害を中心にパーキンソン病や運動失調症といった各疾患の障害の特徴について理解する必要がある。 本科目は、講義と実習を通して、脳血管障害に伴う身体障害や高次脳機能障害を脳の機能解剖との関連を整理し、評価方法とその解釈、基本的な治療方法について学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①健康成人が人間としての行為を行うメカニズムについて述べることができる。					
思考・判断 ・表現	②頭部画像の読影から出現する可能性のある障害を予測することができる。 ③脳障害による片麻痺や高次脳機能障害、パーキンソニズム、運動失調症の障害について説明することができる。 ④把握した障害像に必要な評価方法と基本的な理学療法を説明することができる。					
技能	⑤疾患者の持つ問題を理解し、理学療法プログラムを立案することができる。 ⑥疾患者に対して必要な評価方法や基本的な理学療法を選択することができる。					
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
実習	教科書や補足資料、スライドを使用した講義およびグループワークによるアクティブ・ラーニングを行う。また、評価と基本的な理学療法については、実技を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	林・加藤	高次脳機能障害の評価とリハビリテーション（理学療法）①～②	高次脳機能障害の評価の考え方を学修する。また、スクリーニングを学修する。失認に対する評価とリハビリテーションについて学修する。中でも、特に半側空間無視について重点的に学修する。			
2	林・加藤		失行、失認に対する評価とリハビリテーションについて学修する。注意機能障害に対する評価とリハビリテーションについて学修する。記憶障害に対する評価とリハビリテーションについて学修する。遂行機能障害に対する評価とリハビリテーションについて学修する。			
3	林・加藤	片麻痺患者の評価①	運動麻痺の理解と評価（ブルンストロームステージ）			
4	林・加藤					
5	林・加藤	片麻痺患者の評価②	運動麻痺の理解と評価（SIAS）、脳神経検査			
6	林・加藤					

7	林・加藤	片麻痺患者の評価③	各種反射検査（表在、深部、病的、姿勢）、筋緊張検査
8	林・加藤		感覚検査（表在感覚、深部感覚）
9	林・加藤	失調症患者の評価と理学療法	失調症検査、バランス検査と理学療法
10	林・加藤		
11	林・加藤	検査方法の実践、実技確認	脳卒中患者に関連する理学療法検査測定の実践、実技の確認
12	林・加藤		
13	林・加藤	片麻痺患者の歩行	歩行障害の理解、評価と理学療法について学修する。
14	林・加藤		
15	林・加藤	神経筋障害症例の理学療法 ①	事例検討（軽症片麻痺患者）を通して、障害像の把握、理学療法プログラムの立案（グループワーク）
16	林・加藤		
17	林・加藤	神経筋障害症例の理学療法 ②	事例検討（軽症片麻痺患者）を通して、障害像の把握、理学療法プログラムの立案（グループワーク）
18	林・加藤		
19	林・加藤	神経筋障害症例の理学療法 ③	事例検討（重症片麻痺患者）を通して、障害像の把握、理学療法プログラムの立案（グループワーク）
20	林・加藤		
21	林・加藤	神経筋障害症例の理学療法 ④	事例検討（重症片麻痺患者）を通して、障害像の把握、理学療法プログラムの立案（グループワーク）
22	林・加藤		
23	林・加藤	神経筋障害症例の理学療法 ⑤	15～22回目の検討した内容について、プレゼンテーション資料を作成し、発表を行う。

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●	●		30	①②③④⑤⑥
	小テスト		●	●		30	④⑥
	グループワーク・発表	●	●	●		40	①②③④⑤⑥
評価の 特記事項	筆記試験が6割に達しなかった場合に、再試験を実施する。再試験は筆記のみ実施し、グループワーク・発表の40％は既得点を引き継ぐ。残り60％は再試験筆記の得点を60％換算して最終成績に合算する。また、神経筋障害理学療法治療学の単位を修得していない場合、本科目の試験は受けられない。 グループワークおよび発表は、事前に提示するルーブリックに基づき評価し、成果物・発表・学修プロセス（参加度、役割遂行、協働姿勢等）を観点として採点する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
神経筋障害理学療法治療学にて学習したことを前提として講義を展開する。講義内容の充実を図るためにも神経筋障害理学療法治療学にて学習した内容を事前に復習する必要がある。 （予習）講義に臨む前に、講義計画に記載された該当する範囲の教科書を読み疑問点を明確にする。その際、教科書を読み流すのではなく、他者に内容を説明できるようにしノートなどにまとめる。（約30分） （復習）授業を振り返り、復習したことをノートにまとめて理解する。学んだ検査法は実技練習し体で覚えるようにすること。その際、検査の意義や目的を確認し、また検査結果の持つ意味などを考えながら行う必要がある。（約1時間） 学修結果を確認のため、授業時間内に実技の小テストを実施する。 予習・復習でまとめたノートの提出を求めることがある。 課題を出すこともある。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
実技の小テストについては、その講義内でフィードバックする。 試験は研究室に保管し、事前に連絡の上確認する方法、もしくは全体へのフィードバック時間を設ける方法で対応する。 提出されたノートや課題については、コメントを付して返却する。							
教科書							
「神経筋障害理学療法学テキスト」（中枢神経障害理学療法学テキスト）植松光俊 編 南江堂							
参考図書							
「神経障害理学療法学Ⅰ」（15レクチャーシリーズ）石川朗 総編集 中山書店 「神経障害理学療法学Ⅱ」（15レクチャーシリーズ）石川朗 総編集 中山書店 「高次脳機能障害」石合純夫 医歯薬出版 「標準理学療法学 専門分野 運動療法学各論」吉尾雅春 医学書院 「神経局在診断」半田肇 文光堂 「ベッドサイドの神経の診かた」田崎義昭 南山堂							
備考：履修者への要望							
障害を臓器別、疾患別で捉えるのではなく、常に重複する障害や全身性の障害について考慮しながら授業に臨むこと。 解剖学、生理学、運動学、神経学ほかの知識を事前に十分理解し、すでに学修した事柄と関連付けるように授業に臨むこと。グループワークを行うこともある。 実技の際は動きやすい服装であること。 本実習は、神経筋障害理学療法治療学に合格することが評価の条件とする。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
67	運動器系障害理学療法治療学	理学療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
松田 文浩・齊藤 誠						
実務経験のある教員						
松田 文浩・齊藤 誠：医療機関で理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法士が治療対象とする整形外科系疾患の病態とそれに対する理学療法評価・治療について講義する。						
授業概要						
理学療法士にとって骨折や変形性関節症といった整形外科系の疾患は治療対象となることが非常に多い。本科目は主に整形外科系疾患の病態と、その理学療法治療について講義形式にて解説を行う。 (松田 文浩／6回) オリエンテーション、組織再生・修復、関節リウマチ、末梢神経障害、肩関節周囲炎・肩の外傷、膝靱帯損傷と半月板損傷、捻挫と肉離れを教授する。 (齊藤 誠／9回) オリエンテーション、骨折、変形性関節症、人工関節置換術、脊髄損傷、腰部頸部疾患、脊椎手術を教授する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①整形外科系疾患の病態理解を深め、適切な理学療法評価・治療を説明できる。					
思考・判断 ・表現	②講義によって得られた知識を整理し、自身の興味をもった内容について発展的に学習をすることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	③自ら積極的に学び、発展的な内容を質問することができる。					
授業形態						
講義	配布する資料を用いた事前学習を求める。講義中は事前学習から生じた疑問を解決するために学ぶ。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松田	オリエンテーション 組織再生・修復 総論	本講義の総括的なオリエンテーションを行う。 組織再生および修復過程（炎症反応）について説明し、組織再生および修復の機序、組織再生過程における理学療法評価および注意点（リスク管理）を理解する。 教科書 第1章			
2	齊藤	オリエンテーション 問題演習	齊藤担当分に関する講義のオリエンテーションを行う。 運動器系障害理学療法に関する問題演習を通して、学習すべき内容や方法を理解する。			
3	齊藤	骨折と脱臼 総論	骨折、脱臼の病態、分類について説明する。また骨折、脱臼の治療、理学療法について説明し、保存的治療、観血的治療および付随する合併症、理学療法評価、治療について理解する。 教科書 第3-7章（主として第3章）			
4	齊藤	骨折 各論	理学療法士が治療対象となることが多い大腿骨頸部骨折、椎体圧迫骨折、橈骨遠位端骨折を中心に解説する。教科書 第4-7章			

5	齊藤	変形性股関節症, 変形性膝関節症	変形性関節症の病態、治療について説明し、分類、整形外科的治療、用いられる理学療法評価、治療について理解する。教科書 第8-9章					
6	齊藤	人工股関節置換術, 人工膝関節置換術	人工関節の構造、適応、リスクについて説明し、各人工関節術後のリスク管理、評価方法について理解する。教科書 第10-11章					
7	松田	関節リウマチ 総論	関節リウマチの病態、治療について説明し、各病期に対する理学療法の選択について理解する。また薬物療法、手術療法の進歩に伴うリハビリテーションの変化についても説明する。教科書 12章					
8	松田	末梢神経障害 総論	末梢神経障害について説明し、病態、原因、臨床症状について理解する。教科書 第14章					
9	齊藤	脊髄損傷 総論	脊髄損傷について説明し、病態、原因、臨床症状を理解する。特に損傷高位の評価方法や獲得可能なADLについて理解する。					
10	齊藤	脊髄損傷	脊髄損傷について説明し、病態、原因、臨床症状を理解する。特に不全損傷の分類や障害される神経伝導路によって症状が変化することを理解する。					
11	齊藤	頸部・腰部疾患	頸部、骨盤、腰椎の機能解剖や運動学について解説する。頸部・腰部疾患の病態生理について解説し、理学療法治療、評価、ADL指導について理解する。教科書 第16-19章					
12	齊藤	脊椎の手術	脊椎手術の基本的な手技について解説する。手術に応じた理学療法の適応について説明し、リスク管理、選択すべき理学療法評価・治療について理解する。教科書 第20-21章					
13	松田	肩関節周囲炎, 肩の外傷 総論	肩関節の機能解剖、運動学、肩関節周囲炎の病態生理について解説し、関節可動域制限、疼痛が生じる要因を関節運動学に関連させて理解する。教科書 第22章 また、腱板損傷などの肩関節障害についても概要を解説する。教科書 第24章					
14	松田	膝靱帯損傷と半月板損傷	靱帯と半月板の機能解剖について解説する。膝関節損傷の病態とメカニズム、標準的治療について解説する。教科書 第26章					
15	松田	捻挫と肉離れ	アキレス腱損傷、足関節捻挫、肉離れの病態について説明し、疾患に付随する機能障害、必要な評価・治療について理解する。教科書 第29章					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				70	①
	小テスト		●				25	①
	参加態度			●		●	5	②③
評価の特記事項	参加態度は、講義ごとに提出する質問や意見を記載するフォームの内容に基づいて評価する。すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前学習：事前に配った資料と教科書を用いて学習し、講義中に学ぶべきことや疑問点を明らかにする。 事後学習：小テスト、講義内容の復習を行う。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験の解答用紙は採点后に返却する。								

教科書
「運動器障害理学療法Ⅰ」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト）石川朗　ほか編　中山書店 「運動器障害理学療法Ⅱ」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト）石川朗　ほか編　中山書店
参考図書
「標準整形外科」井樋栄二　ほか　医学書院
備考：履修者への要望
本科目は臨床実習など実践的な学びへの基礎となる内容であるため、積極的な受講態度を期待する。

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
68	運動器系障害理学療法治療学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
松田 文浩・齊藤 誠						
実務経験のある教員における科目						
松田 文浩・齊藤 誠：医療機関で理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法士が治療対象とする整形外科系疾患の病態とそれに対する理学療法評価・治療について講義や実技指導、グループワークを通して指導する。						
授業概要						
本講義は模擬症例に関する症例検討を通して、理学療法プログラムを立案するための基本的な考え方を身に着けることを目標とする。また、実際の患者を可能な限り想定した上で、リスク管理を重視した検査測定方法も検討・実施できるようになることも目標とする。 （オムニバス方式／全13回） （松田 文浩／7回） 組織再生・修復、関節リウマチ、肩関節疾患、靱帯・半月板損傷のグループ学習と小テストを担当する。末梢神経障害、捻挫・肉離れ、アキレス腱断裂の評価と治療を教授する。 （齊藤 誠／6回） 上肢・下肢骨折、変形性関節症、頸部腰部疾患、脊髄損傷のグループ学習と小テストを担当する。慢性疼痛の評価と治療を教授する。 （松田 文浩・齊藤 誠／10回）（共同） 上肢・下肢骨折、変形性関節症、関節リウマチ、頸部腰部疾患、脊髄損傷、肩関節疾患、靱帯・半月板損傷の評価と治療について教授する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①運動器系疾患の病態理解を深め、適切な理学療法評価・治療を説明できる。					
思考・判断 ・表現	②グループワークを通して、疾患特性と理学療法治療を選択することができる。					
技能	③症例に応じた適切な検査測定、理学療法治療を理解し、健常者を対象に実施することができる。					
関心・意欲 ・態度	④理学療法プログラムを立案するために必要な資料を検索し、自ら学ぶことができる。					
授業形態						
実習	実技および講義で基礎知識や考え方を学習し、グループワークを通して治療についての理解を深める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松田・齊藤	組織再生・修復 評価と治療	組織修復・再生、特に炎症に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第1～2章			
2	松田	組織再生・修復 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。			
3	松田・齊藤	上肢骨折 評価と治療	上腕骨近位部骨折や橈骨遠位端骨折などの上肢骨折に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第3～7章			
4	齊藤	上肢骨折 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。			

5	松田・齊藤	下肢骨折 評価と治療	大腿骨近位部などの下肢骨折に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第3～7章
6	齊藤	下肢骨折 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。
7	松田・齊藤	変形性関節症 評価と治療	変形性関節症に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第8～12章
8	齊藤	変形性関節症 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。
9	松田・齊藤	関節リウマチ 評価と治療	関節リウマチに対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第13～14章
10	松田	関節リウマチ 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。
11	松田・齊藤	頸部・腰部疾患 評価と治療	頸部・腰部疾患に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第16～21章
12	齊藤	頸部・腰部疾患 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。
13	松田・齊藤	脊髄損傷 評価と治療	脊髄損傷に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書
14	齊藤	脊髄損傷 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。
15	松田・齊藤	肩関節疾患 評価と治療	肩関節周囲炎や腱板損傷など理学療法対象となることが多い肩関節疾患に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第24～25章
16	松田	肩関節疾患 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。
17	松田・齊藤	靱帯・半月板損傷 評価と治療	前十字靱帯損傷をはじめとする靱帯損傷や半月板損傷に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書第26～28章
18	松田	靱帯・半月板損傷 評価と治療	与えられたテーマに対してグループで調べ学習を行い、理解を深める。 小テストによって定着度を把握する。
19	齊藤	慢性疼痛	腰痛を中心とした慢性疼痛に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。
20	松田	末梢神経障害	末梢神経障害に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第14～15章
21	松田	捻挫・肉離れ	捻挫・肉離れに対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第29～30章
22	松田	アキレス腱断裂	アキレス腱断裂に対する基本的な理学療法評価・治療を理解し、実施する。教科書 第29～30章
23	松田・齊藤	まとめとテスト	試験を行い、知識の定着を確認する。 試験問題に関する解説や全体のまとめを行う。

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●		●	70	①②④
	小テスト	●	●	●	●	30	①②③④
評価の 特記事項	すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施する。 本科目の筆記試験を受験するためには、運動器系障害理学療法治療学の単位を修得していることを必須条件とする。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
運動器系障害理学療法治療学にて学習したことを前提として講義を展開する。講義内容の充実を図るためにも運動器系障害理学療法治療学にて学習した内容を事前に復習する必要がある。 （1コマあたりの準備学習時間：30分）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
小テスト、筆記試験とも必要に応じて解説する。試験問題、解答の閲覧機会を設ける。							
教科書							
「運動器障害理学療法学Ⅰ」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト）石川朗 編集 中山書店 「運動器障害理学療法学Ⅱ」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト）石川朗 編集 中山書店							
参考図書							
「標準整形外科」井樋栄二 ほか 医学書院 「理学療法ハンドブック」細田多穂 協同医書出版 「図解 四肢と脊柱の診かた」野島元雄 監訳 医歯薬出版							
備考：履修者への要望							
実技練習を行うため、動きやすい服装で参加すること。 グループワークを行うことが多いため、積極的な参加を期待する。 なお、「運動器系障害理学療法治療学」の単位を既に修得していることを本科目の履修要件とする。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
69	内部疾患系障害理学療法治療学	理学療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
臼井 晴信						
実務経験のある教員						
臼井 晴信：医療機関で理学療法士として勤務し、心臓リハビリテーション、呼吸リハビリテーションの臨床経験のある教員が、内部障害に関する理学療法についての講義・演習を行う。						
授業概要						
本科目は、主に循環器疾患、呼吸器疾患に関する病態生理学から理学療法評価と治療の原理と根拠を学修する。また各疾患の理学療法学の学修に先立ち、日本と世界の内部障害の現状、各臓器間の連関、エネルギー代謝についても学修する。循環器理学療法の応用として腎機能障害の理学療法についても学修する。授業は資料を用いた講義の他、グループワークを通じた討論や、動画などを用いた反転授業も取り入れて実施する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①心臓、血管、腎臓の機能・構造および循環器疾患、腎臓病について論じることができる。 ②呼吸器系の機能・構造および呼吸器疾患について論じることができる。 ③内部疾患がある時の運動生理学について説明できる。					
思考・判断 ・表現	④循環器疾患、腎臓病に対する理学療法評価及び治療について説明することができる。 ⑤呼吸器疾患に対する理学療法評価及び治療について説明することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	教科書とスライドによる講義、グループワークを行う。講義中に示した事例に対してディスカッションを行う。担当教員が作成しYouTubeで無償公開している動画を学修の補助に用いる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	臼井	内部障害概論	コースオリエンテーション 内部障害の定義、現状について学修する。 教科書 1章			
2	臼井	ホメオスタシスと臓器連関	ホメオスタシスと臓器連関、それらをつなぐ血管や自律神経について学修する。 教科書 1章			
3	臼井	骨格筋とエネルギー代謝	骨格筋とエネルギー代謝について学修する。 教科書 4章			
4	臼井	循環器の基礎	循環器理学療法の理解に必要な基礎的事項について学修する。 教科書 3章			
5	臼井	循環器疾患の病態	理学療法の対象となる循環器疾患について学修する。 教科書 3章			
6	臼井	循環器疾患に対する理学療法評価1	循環器疾患に対する理学療法評価の基礎と理論を学修する。 教科書 3章			
7	臼井	循環器疾患に対する理学療法評価2	循環器疾患に対する理学療法評価の実践を学修する。 教科書第3章			

8	臼井	循環器疾患に対する理学療法 法の基礎と理論	循環器疾患に対する理学療法の基礎と理論を学修する。 教科書第3章					
9	臼井	呼吸器の基礎	呼吸器理学療法の理解に必要な基礎的事項について学修する。 教科書第2章					
10	臼井	呼吸器疾患の病態	理学療法の対象となる呼吸器疾患の病態について学修する。 教科書第2章					
11	臼井	呼吸器疾患の評価1	呼吸器疾患に対する評価の基礎および理論を学修する。 教科書第2章					
12	臼井	呼吸器疾患の評価2	呼吸器疾患に関する評価の実際を学修する。 教科書第2章					
13	臼井	呼吸器疾患の理学療法	呼吸器疾患に対する理学療法の基礎および理論を学修する。 教科書第2章					
14	臼井	腎機能障害	腎機能障害の理学療法に必要な基礎的事項および腎機能障害の病態について学修する。 教科書第5章					
15	臼井	腎機能障害に対する理学療法	腎機能障害に対する理学療法の基礎および理論を学修する。 教科書第5章					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③④⑤
	レポート		●	●			20	①②③④⑤
評価の 特記事項	講義の中にグループワークや考察課題を取り入れ、レポートを課す。 予習、復習をして講義に臨むこと。予習、復習の内容をレポート課題とする場合もある。 レポートの評価基準は講義時にルーブリック評価表を配布し、説明する。全ての評価基準の合計が6割満たない場合、再試験を実施する。再試験はレポート点と合わせて評価をする。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
教科書や資料を事前に予習し、疑問を持って講義に臨むこと。抽出した疑問点を講義や自主学修で解決するよう努めること。解決できなかった疑問点は必ず質問すること。講義資料や教科書を用いて復習をすること。事前に指定した教材により予習課題を課す場合がある。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートは採点して返却する。試験は実施後、希望者に対して個別にフィードバックをする。								
教科書								
「内部障害理学療法学」（最新理学療法学講座）高橋哲也 編著 医歯薬出版								
参考図書								
適宜紹介します。								
備考：履修者への要望								
解剖学、生理学、運動学および運動生理学の講義内容を整理しておくこと。 疑問を持ち、疑問を積極的に解決する姿勢を大切に、内容を理解するように努めること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
70	内部疾患系障害理学療法治療学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
臼井 晴信・宮津 真寿美						
実務経験のある教員						
臼井 晴信・宮津 真寿美：医療機関で理学療法士として勤務し、心臓リハビリテーション、呼吸リハビリテーションの臨床経験のある教員が、内部障害に関する理学療法についての講義・演習を行う。						
授業概要						
本科目は、循環器疾患、呼吸器疾患、代謝性疾患（糖尿病など）の理学療法評価及び治療について、講義とグループワークを通して学修する。グループワークでは、4週間の持久力運動プログラムを作成し実践する。運動プログラムを通して、内部疾患系障害に関する理学療法評価の測定と解釈を学修するほか、患者の行動変容や健康管理などについても考える。また、フィジカルアセスメント、バイタルサイン測定、喀痰吸引の実技演習も行う。その他、がんリハビリテーションについても学修する。机上演習やグループワーク、データ測定演習、発表などを中心に行うため、臼井、宮津の2名共同で担当する。 （オムニバス方式／全20回） （臼井 晴信／16回） 心肺運動負荷試験、心電図、胸部画像、循環器疾患・呼吸器疾患・ガンに対する理学療法、喀痰吸引理論、重複障害について （宮津 真寿美／4回） 糖尿病に対する理学療法について （臼井 晴信・宮津 真寿美／3回）（共同） 喀痰吸引実技、発表、フィジカルアセスメント実技について						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①循環器疾患の病態と生じる障害を理解し、状態に合わせた理学療法評価と治療を説明できる。 ②呼吸器疾患の病態と生じる障害を理解し、状態に合わせた理学療法評価と治療を説明できる。 ③糖尿病の病態と生じる障害を理解し、状況に合わせた理学療法評価と治療を説明できる。 ④がんに対する理学療法について論じることができる。					
思考・判断 ・表現	⑤エネルギー代謝と運動生理学の観点から運動負荷試験の結果を解釈し、結果を理学療法に応用できる。 ⑥運動負荷試験の目的と禁忌、中止基準を説明し、運動処方に応用できる。					
技能	⑦運動耐容能の評価を適切に実施することができる。 ⑧心電図を含めたバイタルサインの測定を実施することができる。 ⑨喀痰吸引を模型に対して安全に実施できる。					
関心・意欲 ・態度	⑩対象者中心とした運動処方について討議することができる。					
授業形態						
実習	グループワークと実習（データ測定、実技演習）、発表を行う。担当教員が作成しYouTubeで無償公開している動画を学修の補助に用いる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	臼井	心肺運動負荷試験の理論	運動負荷試験の理論を学修する。 運動負荷試験の種類と実践方法を学修する。			
2	臼井	運動負荷試験演習	呼気ガス分析装置を用いて心肺運動負荷試験を実践する。 運動負荷試験の理論および実際を学修する。			
3	臼井	運動処方の理論	内部疾患に対する運動療法の理論を学修する。 運動処方の方法と根拠を学修する。			

4	白井	運動処方演習	運動耐容能の向上を目的とした運動処方を実践する。 運動療法の理論および実際を学修する。
5	白井	心電図	心電図及び不整脈について学修する。 運動中に出現する不整脈に対する対応を学修する。教科書 3章
6	白井	心電図演習	運動負荷心電図測定を実践する。 運動中および運動前後の心電図の読み取りを実践する。 不整脈の読み取りおよび対処法を学修し実践する。
7	白井	循環器理学療法治療学	循環器疾患の理学療法治療理論を学修する。 循環器疾患の理学療法評価を学び、実践する。
8	白井	循環器疾患症例検討	模擬症例を用いて、循環器疾患に対する理学療法評価計画を立案する。 模擬症例の評価結果を解釈および統合を行い、問題点を抽出する。 模擬症例の評価結果から理学療法治療プログラムを立案する。
9	白井	呼吸器疾患理学療法治療学	呼吸器疾患の理学療法治療理論を学修する。 呼吸器疾患の理学療法評価を学び、実践する。
10	白井	呼吸器症例検討	模擬症例を用いて、循環器疾患に対する理学療法評価計画を立案する。 模擬症例の評価結果を解釈および統合を行い、問題点を抽出する。 模擬症例の評価結果から理学療法治療プログラムを立案する。
11	白井	画像・検査応用	胸部X線画像、心エコー、呼吸器生理学的検査の理学療法応用について学修する。
12	白井	ガンの理学療法	ガンの病態について学修する。 ガンに対する理学療法について学修する。 教科書第6章
13	白井	ガンの理学療法演習	ガンの病期別の理学療法について討論し学修する。 模擬症例を用いてがん患者に対する理学療法プログラムを立案する。
14	宮津	糖尿病基礎	糖尿病の病態生理を学修する。教科書 4章
15	宮津	糖尿病に対する理学療法の基礎	糖尿病理学療法の知識を確認する。 教科書 4章
16	宮津	糖尿病に対する理学療法評価	糖尿病の理学療法評価を学修する。評価を実践する。教科書 4章
17	宮津	糖尿病に対する理学療法の応用	糖尿病の運動療法を学修する。糖尿病患者に対する運動療法について討論する。 教科書 4章
18	白井	喀痰吸引基礎	喀痰吸引の理論、実際、リスク管理を学修する。
19	白井・宮津	喀痰吸引実技	吸引モデルを用いて喀痰吸引を実践する。
20	白井	運動療法に関する統合と解釈	運動耐容能の向上を目的とした運動療法の実習を行う。 実習で得られたデータについて統合と解釈を行う。 対象者の行動変容について議論する。

21	臼井・宮津	ポスター発表とディスカッション	実習で得られたデータをポスター形式で発表する。 運動処方の効果および運動負荷試験の結果を解釈しポスターにまとめる。 客観的データを用いて科学的な議論を実践する。					
22	臼井・宮津	フィジカルアセスメント	内部障害に関する視診、触診、聴診、打診の実技を演習する。					
23	臼井	重複する障害を持つ症例の検討	内部疾患系障害に他の疾患が合併した症例に対する理学療法について討論し学修する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●	●	60	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩
	レポート			●	●	●	30	⑤⑥⑦⑧⑨⑩
	発表			●	●	●	10	⑤⑥⑦⑩
評価の 特記事項		実技演習やデータ測定、考察課題に対してレポートを課す。レポート、発表はルーブリック評価表を用いて評価する。評価基準については授業内で説明する。発表は第21回講義時に行うポスター発表が評価対象となる。内部疾患系理学療法治療学を受講していない場合、本科目は受講できない。また、内部疾患系障害理学療法治療学の単位を修得していない場合、本科目の試験は受けられない。すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験ではレポート・発表の点数も含めて評価する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
教科書や配布資料および動画資料を事前に予習し、疑問を持って講義に臨むこと(2時間程度)。抽出した疑問点を講義や自主学修で解決すること。講義で示した重要な点や演習内容をもとに復習をすること（1時間程度）。データ測定や実技演習・ポスター発表の実習も行う。実習やグループワークに積極的に参加し、根拠をもって自分の考えを考察すること。								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
試験は実施後、希望者に対して個別にフィードバックをします。レポートは返却する。発表は総評を伝える。								
教科書								
「内部障害理学療法学」（最新理学療法学講座）高橋哲也 編著 医歯薬出版								
参考図書								
適宜紹介する。								
備考：履修者への要望								
グループワークや実習を多く行う。積極的に参加すること。 障害を臓器別、疾患別で捉えるのではなく、常に重複する障害や全身性の障害について考慮しながら授業に臨むこと。 なお、「内部疾患系障害理学療法治療学」の単位を修得していることを、本科目の履修要件とする。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
71	小児疾患系障害理学療法治療学	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
多田 智美						
実務経験のある教員						
多田 智美：小児専門医療福祉機関において、理学療法士として勤務した経験を有する教員が、基礎となる正常発達の理解を深めるとともに、小児科特有の疾患や障害の特徴と、評価・治療の展開について教授する。						
授業概要						
小児疾患に対する理学療法において、「筋緊張の異常」、「反射の異常を含めた発達」、「姿勢の異常」、「二次障害の予防」、「児の社会参加へのアプローチ方法」、「疾患特有の知識」を理解する必要がある。授業では、これらのキーワードを踏まえ、小児疾患の理学療法に必要な正常発達・原始反射の理解を深める。また、定型発達児の特徴、各疾患の病態を土台に、評価、治療展開に応用できる内容を展開する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①小児理学療法において正常運動発達の知識を活用できるように理解し、論じることができる					
思考・判断 ・表現	②小児理学療法の対象となる疾患の特徴と支援について理解し、論じることができる					
技能						
関心・意欲 ・態度	③小児理学療法に興味を持ち、自分の意見や疑問を積極的に発信することができる					
授業形態						
講義	教科書とスライドを中心とした講義、実技を実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	多田	小児リハビリテーション概論	小児リハビリテーション概論			
2	多田	疾患①	知的発達と知的障がいの理解と評価(教科書 第2章7・8 第3章7)			
3	多田	正常運動発達①	実技：仰臥位の発達と理解(教科書 第2章5・6)			
4	多田	疾患②	発達障害の理解（教科書 第3章7)			
5	多田	正常運動発達②	実技：伏臥位の発達と理解（教科書 第2章5・6)			
6	多田	疾患③	新生児理学療法の評価と治療（教科書 第3章1)			
7	多田	疾患④	遺伝性疾患・筋疾患の評価と治療（教科書 第3章5)			

8	多田	まとめ	まとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標	
		筆記試験	●	●		90	①②	
		提出物		●		●	10	②③
評価の 特記事項	筆記試験は最終試験のみ。再試験は定期試験（筆記試験+提出物）で6割に達していなかった場合に実施し、評価は筆記試験のみで行う。 提出物は、授業中の発表などによって総合的に判断する。提出物の評価基準は講義内で説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
人間発達学については再確認後授業に臨むこと。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
授業中に随時質問を受け付ける。								
教科書								
「小児理学療法学」（CrossLink 理学療法学テキスト）藪中良彦 ほか編 MEDICALVIEW								
参考図書								
「イラストでわかる 小児理学療法」上杉雅之 監 医歯薬出版 他講義時に示す								
備考：履修者への要望								
授業には積極的に自身の意見を発信すること。また、他人の意見を聞き、その意見に対して自身の意見を発信し、知識を定着させることを望む。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
72	小児疾患系障害理学療法治療学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
多田 智美・川村 皓生						
実務経験のある教員						
多田 智美：小児専門医療福祉機関において、理学療法士として勤務した経験を有する教員が、基礎となる正常発達の理解を深めるとともに、小児科特有の疾患や障害の特徴と、評価・治療の展開について教授する。 川村 皓生：小児リハビリテーション科を有する医療機関において、理学療法士として勤務した経験を有する教員が、小児科特有の疾患や障害の特徴と、評価・治療の展開について教授する。						
授業概要						
小児科領域の理学療法を展開できるようになるために、基礎となる正常発達の理解を深めるとともに、小児科特有の疾患や障害の特徴と、評価・治療の展開について理解する。定型発達児と障がい児の姿勢や動作の確認を行い治療展開に応用できるようにする。また、近年、ニーズが高くなっている新生児への理学療法や小児科領域で使用される福祉用具についても触れ、小児疾患に対する理学療法の特殊性を理解できる内容を展開する。 (オムニバス方式／全15回) (多田 智美／8回) 小児理学療法概論、脳性まひ児の動作姿勢観察法・中枢神経系の診方・実技、胎生期の発達の概論、発達障害の評価と治療、重症心身障害呼吸器疾患を有する児の評価と理学療法、新生児理学療法の評価と治療、小児領域で使用する機器、小児理学療法の特殊性 (川村 皓生／7回) 正常運動発達、脳性まひの概論と評価と治療、遺伝性疾患・筋疾患の評価と治療、小児整形疾患の評価と治療、染色体異常知障害の評価と治療						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①小児理学療法の対象となる疾患の特徴とその理学療法について理解し、論じることができる					
思考・判断 ・表現	②小児理学療法の対象となる疾患の特徴とその理学療法について理解し、説明することができる					
技能	③小児理学療法における正常発達の応用に関する実技を実施することができる					
関心・意欲 ・態度	④プレゼンテーションにおいてグループ内で協調し発表することができる					
授業形態						
実習	教科書とスライドを中心とした講義、及び学生の発表を中心に、実習指導を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	多田	小児理学療法概論	小児理学療法概論			
2	川村	疾患①	脳性まひの概論と評価法について（教科書 第3章2）			
3	多田	評価学：実技	実技：脳性まひ児の動作姿勢観察法・中枢神経系の診方(教科書 第2章3)			
4	多田	正常運動発達③	胎生期の発達の概論(教科書 第2章3)			

5	川村	正常運動発達①	実技：正常運動発達の復習					
6	川村	疾患②	脳性まひの評価と治療②（教科書 第3章2、第2章6）					
7	川村	疾患③	脳性まひの評価と治療②（教科書 第3章2）					
8	川村	疾患④	小児整形疾患の評価と治療（教科書 第3章4）					
9	川村	正常運動発達②	実技：正常運動発達の復習②					
10	川村	疾患⑤	染色体異常知障害の評価と治療（教科書 第3章6）					
11	多田	治療学：実技	実技：正常運動発達の治療への活用					
12	多田	疾患⑥	重症心身障害の理解と評価（教科書 第3章3）					
13	多田	疾患⑦	重症心身障害呼吸器疾患を有する児の評価と理学療法のまとめ（教科書 第3章3）					
14	多田	まとめ①	小児領域で使用される機器					
15	多田	まとめ②	小児理学療法の特殊性とまとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			90	①②
	提出物			●	●	●	10	②③④
評価の 特記事項	筆記試験は最終試験のみ。再試験は定期試験（筆記試験+提出物）で6割に達していなかった場合に実施し、評価は筆記試験のみで行う。 提出物は、授業中の発表などによって総合的に判断する。提出物の評価基準は講義内で説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
正常発達部分で学んだ反射の内容、出現時期、消失時期、統合時期などを再確認して、授業に臨むこと。正常運動発達の実技を行うため、この内容は忘れないように復習をすること（30分程度）。教科書の指定箇所は事前に予習として読んでおくことを推奨する（30分程度）。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
授業中に随時質問を受け付ける。								
教科書								
「小児理学療法学」（CrossLink 理学療法学テキスト）藪中良彦 ほか編 MEDICALVIEW								
参考図書								
「イラストでわかる 小児理学療法」上杉雅之 監修 医歯薬出版 他講義時に示す								
備考：履修者への要望								
授業には積極的に自身の意見を発信すること。また、他人の意見を聞き、その意見に対して自身の意見を発信し、知識を定着させることを望む。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
73	老年期障害理学療法学	理学療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
山田 和政						
実務経験のある教員						
山田 和政：医療・介護保険分野において理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法対象者の多くを占める高齢者の理学療法について講義する。						
授業概要						
理学療法の対象者の多くを高齢者が占める現在、その人たちが持つ問題を理解することは重要である。本講では、加齢に伴う生理機能・運動機能・精神機能の変化について学ぶとともに、老年期に好発する疾患・障害における理学療法評価・治療・リスク管理について学習し、高齢者の理学療法について理解を深める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①高齢期に起こる生理機能・運動機能・精神機能の変化を理解し、説明することができる ②高齢期に多くみられる疾患・病態について理解し、説明することができる					
思考・判断 ・表現	③高齢期の患者に対する理学療法において、問題となるリスク等を予測することができる					
技能						
関心・意欲 ・態度	④高齢期の理学療法に関連する話題に興味を持ち、不足している知識等を補うことができる					
授業形態						
講義	基本的に講義資料と教科書を中心とした講義形式であるが、実技およびケーススタディではグループでのディスカッションも行う。					
授　業　計　画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田	高齢者の理解	高齢者に抱く印象を多方面から捉え、高齢者像について考える			
2	山田	ライフステージと高齢者像	老化、高齢者の定義と分類、『老い』の受容、高齢者の心理について学ぶ			
3	山田	加齢と心身機能変化	高齢者の身体的・精神（認知）的特徴について学ぶ			
4	山田	老年症候群	高齢者疾患の特徴、老年症候群の概要、代表的な老年症候群、高齢者に多い疾患について学ぶ			
5	山田	高齢者の生活機能評価①	運動機能、生活環境の評価について学ぶ			
6	山田	高齢者の生活機能評価②	日常生活動作、認知・精神機能、QOLの評価について学ぶ			
7	山田	健康寿命の延伸	高齢社会の現状と介護予防の取り組みについて学ぶ			
8	山田	フレイル、サルコペニアに対する予防リハビリテーション	フレイル、サルコペニアの診断、テストバッテリー、予防リハビリテーションについて学ぶ（実技を含む）			

9	山田	ロコモティブシンドロームに対する予防リハビリテーション	ロコモティブシンドロームの診断、テストバッテリー、予防リハビリテーションについて学ぶ（実技を含む）					
10	山田	高齢者と転倒・骨折	受傷機転、転倒リスク評価、予防リハビリテーションについて学ぶ					
11	山田	高齢者理学療法の留意事項①	高齢患者の一般的特徴、安静の弊害と廃用症候群、理学療法に伴うリスク管理について学ぶ					
12	山田	高齢者理学療法の留意事項②	低・過栄養と栄養管理、運動と負荷設定方法、NCDs（非感染性疾患）について学ぶ					
13	山田	高齢者の骨・関節障害と理学療法	大腿骨頸部骨折・変形性膝関節症の理学療法評価・治療・リスク管理について保存的および観血的療法を含めて学ぶ（ケーススタディ）					
14	山田	高齢者の中枢神経障害と理学療法	脳卒中・Parkinsonの理学療法評価・治療・リスク管理について学ぶ（ケーススタディ）					
15	山田	高齢者の長期臥床と理学療法	呼吸・循環器疾患による長期臥床高齢者に対する理学療法評価・治療・リスク管理について学ぶ（ケーススタディ）					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③
	ポートフォリオ		●	●		●	20	①②③④
評価の特記事項	期末試験（筆記試験）を実施する。中間試験は実施しない。 ポートフォリオ（20点）と期末試験（80％）にて評価する。 ポートフォリオについては、事前に提示するルーブリックを用いて評価する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施し、筆記試験のみで評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
毎回、配布する「予習・復習プリント」を活用し、取り組むこと。 予習：シラバスに記載されている授業内容を確認し、教科書の当該部分に目を通す（15分）。 復習：教科書および配布した講義資料を参考に授業内容を整理し、理解が不十分な部分については、次回の講義までに解決する（45分）。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出課題（学習成果物）は、評価後に返却する。 筆記試験の答案は返却しないが、希望者には個別に開示する（事前連絡必要）。								
教科書								
「シンプル理学療法学シリーズ 高齢者理学療法学テキスト」 細田多穂 南江堂								
参考図書								
関係成書								
備考：履修者への要望								
積極的な態度で授業に臨み、授業内容の理解を深めるよう努めること。懸命に学びたいと考えている周囲の学生の妨げになるような態度（講義中の私語、グループワークでの非協力的な取り組み）は、厳禁とする。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
74	日常生活活動学	理学療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
加藤 真弓						
実務経験のある教員						
加藤 真弓:医療機関や介護保険分野で理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法対象者と関わる上で重要な概念である日常生活活動の概念、範囲、意義、日常生活活動(以下、ADL)評価ならびに各疾患・障害のADLに対する基本的な考え方について講義する。						
授業概要						
ADLは、理学療法対象者の生活の質（以下、QOL）向上に深く関わる理学療法の重要な概念である。本科目では、ADLの概念・範囲・意義を学ぶとともに、健常者のセルフケアや起居移動動作を構成する主な基本的動作・運動及び心身機能を考え、今後、疾患・障害の特性に応じたADL練習や指導の基礎づくりを目指す。また、バーセルインデックス（以下、BI）や機能的自立度評価法（以下、FIM）等のADL評価、福祉用具の種類や適応、各疾患のADLに対する基本的な考え方について学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①ADLの概念、範囲(セルフケア、生活関連動作、QOL)の説明できる。 ②ADLの評価方法(質的・量的評価、FIM、BI)を説明できる。 ③福祉用具の種類や適応について説明できる。 ④各疾患・障害のADLに対する基本的な考え方を理解し、説明できる。					
思考・判断 ・表現	⑤セルフケアを構成する主な基本動作、工程、必要となる心身機能を説明できる。					
技能	⑥起居動作を運動学的に分析することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑦他者と協働して課題に取り組み、よりよい解決ができる。					
授業形態						
講義	教科書を使用した講義を中心に行う。一部においてグループワーク・発表によるアクティブ・ラーニングを行う。Google Formを用いて、単元ごとに到達目標の自己評価を行い、自身の課題の整理をし、復習・予習に活かす。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤	ADLの概念と範囲	コースオリエンテーション ADLの概念と範囲、生活機能からみたADLの位置づけを学修する。 テキスト:第1章			
2	加藤	ADL評価	ADL評価について(量的・質的評価、「できるADL」と「しているADL」)について学修する。 テキスト:第2章			
3	加藤	ADL評価	代表的なADL評価法のBIとFIMや、IADLの評価について学修する。 テキスト:第2章			
4	加藤	ADLの基盤となる心身機能	ADLの基盤となる心身機能について考え、理学療法を展開する上での基礎的事項を学修する。グループワーク			
5	加藤	ADLの基盤となる心身機能	ADLの基盤となる心身機能について考え、理学療法を展開する上での基礎的事項を学修する。グループワーク			
6	加藤	ADL支援機器	セルフケアを助ける、自助具、日常生活用具について、グループワークにて学習し、まとめる。			
7	加藤	ADL支援機器	セルフケアを助ける、自助具、日常生活用具について、グループワークにて学習しまとめたことをプレゼンテーションする。			

8	加藤	ADLの運動学的分析	起居動作を運動学的に分析し、介助法や訓練法の基礎的知識を学修する。					
9	加藤	疾患・障害別ADLの考え方 ①	脳卒中片麻痺 テキスト:第3章					
10	加藤	疾患・障害別ADLの考え方 ①	脳卒中片麻痺 テキスト:第3章					
11	加藤	疾患・障害別ADLの考え方 ②	脊髄損傷 テキスト:第3章					
12	加藤	疾患・障害別ADLの考え方 ②	脊髄損傷 テキスト:第3章					
13	加藤	疾患・障害別ADLの考え方 ③	パーキンソン病、神経筋疾患 テキスト:第4章					
14	加藤	疾患・障害別ADLの考え方 ④	関節リウマチ、脊椎疾患、人工関節置換術 テキスト:第4章					
15	加藤	疾患・障害別ADLの考え方 ⑤	脳性麻痺、呼吸・循環器疾患 テキスト:第4章					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		60	①②③④⑤⑥
	レポート・発表		●	●		●	20	①②③④⑤⑦
	小テスト		●				20	①②③④
評価の 特記事項	上記3種の評価の合計が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験は筆記試験100%で評価する。 レポート等の提出物が適切に提出されない場合は、該当事項について評価しない。 レポート及び発表に対する評価については、授業内にて説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
受講前に、講義計画に記載された該当する教科書の範囲を学習し、疑問点を整理しておくこと。また、各回の学習目標の到達状況を自己評価し、知識・理解が十分ではなかったことについて復習する。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テストは、実施した次の回に返却及び全体にフィードバックを行う。レポートについては、必要に応じ個別に対応する。筆記試験は全体もしくは個別にフィードバックを行う。								
教科書								
「ADL」(PT・OTビジュアルテキスト) 柴 喜崇 編 羊土社								
参考図書								
「日常生活活動学・生活環境学」（標準理学療法学）鶴見隆正 編集 医学書院 「イラスト わかりやすい移動のしかた」井口恭一 三輪書店 「姿勢と動作」齋藤宏 ほか メヂカルフレンド社 その他、ADL関連成書								
備考：履修者への要望								
グループワークの際は、個々が責任を持ち、他者と協働して課題遂行することを望む。 各疾患学、理学療法治療学で学んだ知識を活用できるように事前に復習し、科目間の横のつながりを考え取り組むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
75	日常生活活動学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
加藤 真弓・濱田 光佑						
実務経験のある教員						
加藤 真弓・濱田 光佑：医療機関や介護保険分野で理学療法士として臨床経験のある教員が、理学療法対象者と関わる上で重要な概念である日常生活活動における疾患・障害別の動作指導等について考え方や技術を教授する。						
授業概要						
移動補助具の基本的な使用方法、起居・移乗・移動動作の基本的介助の知識・技術を身につけることに加え、事例をもとに各疾患・障害の特性に応じた日常生活活動(以下、ADL)練習・指導、介助法、福祉用具の選定、環境調整について学修する。また、対象者がADLを獲得する方法として、障害部位の機能回復、残存機能・潜在的機能の活用、動作の方法・手順の工夫、環境調整や補装具の使用等があるが、対象者の障害特性や、予後予測等から考えることができることを目指す。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①移動補助具の基本的な使用方法を理解し説明できる。 ②疾患・障害の特性や運動学的な知識等を活用した介助方法を説明することができる。 ③各疾患・障害のADL上のリスク管理方法・環境整備について説明できる。					
思考・判断 ・表現	④各疾患の病態を踏まえた上で、事例に応じたADLを考え、発表できる。 ⑤各動作の手順を説明し、必要な介助方法を示すことができる。					
技能	⑥パーセルインデックス（以下、BI）、機能的自立度評価法（以下、FIM）を使用してADL評価が行うことができる。 ⑦各障害に応じた起居・移乗動作の介助・誘導を適切に行うことができる。 ⑧適切な補助具を選択し、動作指導を行うことができる。					
関心・意欲 ・態度	⑨思考力・技術を身につけるために他者と積極的に協働し、課題解決ができる。					
授業形態						
実習	事例に基づいたグループディスカッション・プレゼンテーション、実技を中心に行います。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤・濱田	ADL評価	コースオリエンテーション 事例を通してBIとFIMの採点法を学習する :テキスト 第2章、別途資料			
2	加藤・濱田	ADL評価	事例を通してBIとFIMの採点法を学習する :テキスト 第2章、別途資料			
3	加藤・濱田	基本的な介助・誘導法	寝返り、起き上がり、立ち上がりの基本的な介助・誘導方法を学習する			
4	加藤・濱田	基本的な介助・誘導法	歩行と移乗の基本的な介助・誘導方法を学習する			
5	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL①(検討)	脳卒中片麻痺、骨関節疾患、脊髄損傷、パーキンソン病、呼吸・循環器疾患の症例に応じたADL指導・訓練方法、環境設定等をグループにて検討する。発表に向けてPower Point等にまとめる。			
6	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL①(検討)	脳卒中片麻痺、骨関節疾患、脊髄損傷、パーキンソン病、呼吸・循環器疾患の症例に応じたADL指導・訓練方法、環境設定等をグループにて検討する。発表に向けてPower Point等にまとめる。			
7	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL②(プレゼン)	脳卒中片麻痺、骨関節疾患、脊髄損傷、パーキンソン病、呼吸・循環器疾患の症例に応じたADL指導・訓練方法、環境設定等、グループで検討したものをプレゼンする。			

8	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL②(プレゼン)	脳卒中片麻痺、骨関節疾患、脊髄損傷、パーキンソン病、呼吸・循環器疾患の症例に応じたADL指導・訓練方法、環境設定等、グループで検討したものをプレゼンする。					
9	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL②(プレゼン)	脳卒中片麻痺、骨関節疾患、脊髄損傷、パーキンソン病、呼吸・循環器疾患の症例に応じたADL指導・訓練方法、環境設定等、グループで検討したものをプレゼンする。					
10	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL③(実技)	各疾患・障害に応じた起居・移乗動作の誘導・介助について学ぶ。プレゼンで示されたADL動作の練習・介助について体験的に行う。					
11	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL③(実技)	各疾患・障害に応じた起居・移乗動作の誘導・介助について学ぶ。プレゼンで示されたADL動作の練習・介助について体験的に行う。					
12	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL③(実技)	各疾患・障害に応じた起居・移乗動作の誘導・介助について学ぶ。プレゼンで示されたADL動作の練習・介助について体験的に行う。					
13	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL③(実技)	各疾患・障害に応じた起居・移乗動作の誘導・介助について学ぶ。プレゼンで示されたADL動作の練習・介助について体験的に行う。					
14	加藤・濱田	疾患特性や障害に応じたADL③(実技)	各疾患・障害に応じた起居・移乗動作の誘導・介助について学ぶ。プレゼンで示されたADL動作の練習・介助について体験的に行う。					
15	加藤・濱田	まとめ	模擬症例をもとに、起居・移乗動作を学ぶ。本科目全体を振り返る					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		30	①②③④⑤⑥
	実技試験			●	●		40	④⑤⑦
	グループワーク・プレゼンテーション		●	●	●	●	30	③④⑤⑧⑨
評価の特記事項	筆記試験、実技試験で各6割を得点し、総合点で6割以上の者を合格とする。左記の条件を満たしていない学生は再試験を実施する。再試験は、筆記試験のみ、実技試験のみ、筆記及び実技試験のいずれかのパターンとなる。再試験の評価はグループワーク・プレゼンテーションを除く。 グループワーク・プレゼンテーションの評価は、ルーブリックを使用する。詳細は授業内で説明する。 日常生活活動学の未履修者および不合格者の受講は認めない。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
講義に臨む前に、講義計画に記載された該当する教科書範囲をしっかりと学修するとともに、各疾患の病態・障害について知識を整理しておくこと。動作誘導・介助法については、復習時間を十分にとり、様々な人と練習を重ねること。（1時間程度）事例検討については授業時間外も活用し、よりよい内容となるようにすること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験・実技試験については、個別もしくは全体に対し行う。								
教科書								
「ADL」（PT・OTビジュアルテキスト）柴 喜崇 編 羊土社								
参考図書								
「日常生活活動学・生活環境学」（標準理学療法学）鶴見隆正 編集 医学書院 「イラスト わかりやすい移動のしかた」井口恭一 三輪書店 「姿勢と動作」齋藤宏 ほか メヂカルフレンド社 その他、ADL関連成書								
備考：履修者への要望								
・グループワーク、実技が中心である。個々が責任を持ち、他者と協働して課題遂行することを望む。また、提示されたことだけを行うのではなく、自ら疑問を持ち解決しようとする姿勢で受講すること。 ・事例検討では、グループメンバーとしっかりディスカッションすること。 ・オリエンテーション、対人スキル、人への接触の仕方など、実際の臨床的なことを考え、実技に取り組むこと。 ※日常生活活動学の未履修者および不合格者の受講はできない。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
76	義肢装具学	理学療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
林 尊弘						
実務経験のある教員						
林 尊弘：医療機関で理学療法士として勤務し、装具処方・義肢装具装着訓練の臨床経験がある教員が、義肢装具の処方・評価・調整についての講義を行う。						
授業概要						
義肢装具は、障害児・者が障害を克服し、充実した日常生活を送るために必要不可欠な手段であり、リハビリテーションと密接している。義肢装具の変遷や現況、また義肢装具の構造や機能、それらを必要とする疾患や障害を学修することで、適切な義肢装具を処方するための知識を習得する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①各種装具の名称および意義、目的について述べることができる。 ②切断術について述べることができる。 ③義足の構造や部品、異常歩行について述べることができる。					
思考・判断 ・表現	④各種下肢装具・体幹装具・上肢装具の適応疾患や種類について説明できる。 ⑤下肢装具のチェックアウトの方法について説明できる。 ⑥大腿義足・下腿義足・その他の義足について説明できる。 ⑦義足の異常歩行の原因究明およびその対処法の提案を行うことができる。					
技能	⑧各疾患や障害に対して、適切な義肢装具を処方することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑨グループワークにおいて、大腿義足・下腿義足のアライメント異常と異常歩行の原因について、積極的に討議することができる。					
授業形態						
講義	教科書やレジュメを用いた講義を中心とし、一部、少人数性のグループワークを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	林	装具総論	装具の目的・役割、対象疾患、支給体系、歩行能力との関係について学ぶ。 (Lecture1 p1-10)			
2	林	下肢装具の部品とその機能	下肢装具で使用される部品の名称とその機能について学ぶ。(Lecture2 p11-20)			
3	林	下肢装具1	短下肢装具の目的と対象となる障害、主な短下肢装具の種類について学ぶ。 (Lecture3 p21-30)			
4	林	下肢装具2	長下肢装具の目的と対象となる障害、主な長下肢装具の種類、股装具と膝装具目的と主な各装具の種類について学ぶ。(Lecture4 p31-40)			
5	林	下肢装具3	靴型装具の目的と対応となる疾患、靴の構造と機能、補正の方法について学ぶ。 (Lecture5 p41-52)			
6	林	下肢装具4	長下肢装具およびプラスチック装具のチェックアウトについて学ぶ。 (Lecture6 p53-62)			
7	林	体幹装具	体幹装具の目的と適応疾患、主な体幹装具の種類、側彎症装具について学ぶ。 (Lecture8 p73-84)			

8	林	上肢装具	上肢装具の目的と適応疾患、主な上肢装具の種類について学ぶ。（Lecture9 p85-94）					
9	林	義肢・切断総論①	切断の疫学、切断端、幻肢、義肢の基本構成要素、切断の原因疾患について学ぶ。（Lecture1 p1-10、Lecture10 p93-102）					
10	林	義肢・切断総論②	断端の成熟、アライメントの概念、下肢切断の評価について学ぶ。（Lecture2 p11-20、Lecture8 p73-82）					
11	林	大腿義足・膝義足①	大腿義足の特徴と適合判定について学ぶ。（Lecture3 p22-31、Lecture4 p33-35）					
12	林	大腿義足・膝義足②	大腿義足のアライメント異常と異常歩行の原因と対応方法について学ぶ。（Lecture4 p36-42）					
13	林	下腿義足	下腿義足の特徴と適合判定、アライメント異常と異常歩行の原因とその対応方法について学ぶ。（Lecture5 p43-49、Lecture6 p53-62）					
14	林	股、サイム、足部切断用義足	各種義足の特徴と適合について学ぶ。（Lecture5 p58-62、Lecture7 p63-72）					
15	林	下肢切断と理学療法	義足装着前理学療法と義足装着理学療法について学ぶ。（Lecture9 p83-92、Lecture11 p103-112）					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		70	①②③④ ⑤⑥⑦⑧
	小テスト		●	●	●		20	①②③④ ⑤⑥⑦⑧
	レポート					●	10	⑨
評価の特記事項	筆記試験と小テスト、レポートの合計で6割に満たない場合、再試験の対象となる。 再試験は筆記試験のみの点数で評価する。 レポートは、グループワークにおいてまとめた内容について、自身が調べたものと照らしあせて、まとめたものを提出し、事前に提示するルーブリックに基づき評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
各講義前に必ず教科書の講義範囲を読み、内容を把握し、疑問点等は講義中に確認できるよう、書き出したり、マーカーを引いたりすること。（必要な時間：約2時間）。各講義後には講義中に学んだことを復習し、理解できていない部分については教員に確認をとること。（必要な時間：約2時間）。第2回以降の講義中には小テストで前講義範囲の習熟度を確認する。講義中の資料や講義時間外に復習した内容、その他自主学修で自ら収集した資料を合わせて、ポートフォリオを作成することが望ましい。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題（筆記試験、小テスト、レポート等）についての質問は随時受け付ける。メール、Google Classroom投稿等を積極的に活用すること。								
教科書								
「装具学」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト）佐竹将宏 編 中山書店 「義肢学」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト）永富史子 編 中山書店								
参考図書								
「リハビリテーション義肢装具学」清水順一 ほか編 メジカルビュー社 「義肢装具のチェックポイント」日本整形外科学会 監修 医学書院 「標準理学療法学・作業療法学・言語聴覚障害学 別巻 義肢装具学」佐伯覚 編 医学書院								
備考：履修者への要望								
本講義では初めて学ぶ用語が多く、覚えなければならないことが多いため、各用語の意味をその都度理解するように心掛けること。不明な点があった場合は、すぐに質問をすること。事前にテキストを読んできたことを前提に講義を進める。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
77	義肢装具学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
林 尊弘・山田 南欧美						
実務経験のある教員						
林 尊弘・山田 南欧美：医療機関で理学療法士として勤務し、装具処方・義肢装具装着訓練の臨床経験がある教員が、義肢装具の処方・評価・調整についての講義を行う。						
授業概要						
本講義は、臨床において適切に義肢装具を処方・調整する能力を養うことを目的とする。義肢装具学で学んだことと結びつけながら、疾患別適応を学習することで、より実践的な場面で必要な知識や考え方を習得する。さらに、グループワークを通して、実際の患者の情報や動画を見ながら適切な義肢装具について互いに議論することで、適切な処方や調整に必要な思考過程を学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①各種装具の疾患別適応および適合と評価について述べることができる。 ②各種装具の意義・目的を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③各種装具の適応疾患や種類について説明できる。 ④各種装具の処方および調整とチェックアウトを行うことができる。					
技能	⑤対象者の症状や動作から、適切な義肢装具を処方し、適合性を評価することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥8～13回目のアクティブラーニングにおいて、処方および調整・チェックアウトに必要な知識について積極的にインプット・アウトプットすることができる。					
授業形態						
実習	現役の義肢装具士による、義肢装具の実物を交えた講義・演習も行う。 昨今の状況により、オンライン・オンデマンドで授業を展開する場合がある。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	林・山田	整形外科治療装具	整形外科疾患の治療装具と関節リウマチの装具の種類・特徴について学ぶ。 (Lecture12 p123-132、Lecture13 p133-142)			
2	林・山田	脳卒中片麻痺の装具	脳卒中片麻痺の装具の種類・特徴について学ぶ。(Lecture11 p109-122)			
3	林・山田	小児用装具	小児用装具の種類・特徴について学ぶ。(Lecture14 143-154)			
4	林・山田	長下肢装具の体験	長下肢装具の調節、装着、適合チェックを体験する。			
5	林・山田	短下肢装具の体験	短下肢装具の調節、装着、適合チェックを体験する。			
6	林・山田	補装具の体験	様々な歩行補助具の調節や適合チェックを体験する。			
7	林・山田	断端管理の体験	断端管理で用いられるソフトドレッシングを体験する。			

8	林・山田	脳血管障害障害患者の装具 選定①	実際の患者情報および歩行動画を用いて、歩行の問題点と原因を小グループに分かれて抽出する。					
9	林・山田							
10	林・山田	脳血管障害障害患者の装具 選定②	実際の患者の歩行の問題点と原因から適切な装具の処方を小グループに分かれて検討する。					
11	林・山田							
12	林・山田	脳血管障害障害患者の装具 選定③	8～11回目の検討した内容について、プレゼンテーション資料を作成し、発表の準備および発表を行う。					
13	林・山田							
14	林・山田	義足を構成する部品と義足 歩行体験	義足を構成する各部品について画像と実物を紹介し、模擬義足を用い義足歩行を体験する。					
15	林・山田	プラスチック短下肢装具の 種類と機能	プラスチック短下肢装具の画像と実物を紹介し、種類や機能および特徴を説明する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価方法	評価の観点	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
		筆記試験	●	●			50	①②③④
		発表	●	●	●		40	①②③④⑤
		参加貢献度				●	10	⑥
評価の 特記事項	筆記試験は1～7, 14, 15回の範囲とし、6割に満たない場合、再試験の対象となる。再試験は筆記のみ実施し、発表の40％は既得点を引き継ぐ。残り60％は再試験筆記の得点を60％換算して最終成績に合算する。 発表は、発表資料および発表内容について、事前に配布するルーブリック評価に基づき評価する。 参加貢献度は、8～11回目のグループワーク内の活動に対し、事前に配布するルーブリック評価に基づき評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
義肢装具学にて学習したことを前提として講義を展開する。講義内容の充実を図るためにも義肢装具学にて学習した内容を事前に復習する必要がある。各講義後には講義中に学んだことを復習し、理解できていない部分については教員に確認を取ること。 (1コマあたりの準備学習時間：1時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題（筆記試験、レポート、ポートフォリオ等）についての質問は随時受け付ける。メール、Google Classroom投稿等を積極的に活用すること。								
教科書								
「装具学」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト） 佐竹将宏 編 中山書店 「義肢学」（15レクチャーシリーズ理学療法テキスト） 永富史子 編 中山書店								
参考図書								
「リハビリテーション義肢装具学」清水順一 ほか編 メジカルビュー社 「義肢装具のチェックポイント」日本整形外科学会 監修 医学書院 「標準理学療法学・作業療法学・言語聴覚障害学 別巻 義肢装具学」佐伯覚 編 医学書院								
備考：履修者への要望								
本講義の内容は、身に付けた知識を自分なりに解釈し、応用し、アウトプットすることで学修内容を定着させる。講義中の議論やグループワークに積極的に参加し、自分の中で考えたことをしっかりと他者に伝えるように心掛けること。また、可能な限り実物を紹介して講義を進める。3階の義肢装具等の陳列棚に保管してあるので、実物を使用して学修を深めたい場合は主担当教員に連絡をすること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
78	物理療法学	理学療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
宮津 真寿美						
実務経験のある教員						
宮津 真寿美：医療機関で理学療法士として勤務し、物理療法を用いた臨床経験のある教員が、物理療法に関する講義を行う。						
授業概要						
本科目は、温熱療法、電気刺激療法、超音波療法、水治療法などの物理療法の理論と実践を学修する。具体的には、初めに、概論、物理療法機器の取り扱い、適応と禁忌について概要を学び、各物理療法を実際に体験し、実際に生体におこる反応を観察したのち講義を行う。講義の最後には模擬症例に対して物理療法の適応を考えたグループワークを行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①理学療法における物理療法の位置づけを論じることができる。 ②各物理療法の実施方法と生体への効果を論じることができる。					
思考・判断 ・表現	③各物理療法の適応と禁忌を説明できる。 ④生理学的根拠をもって物理療法を選択できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	教科書とスライドによる講義を行う。実際に物理療法機器を使った実習と一部グループワークを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	宮津	物理療法概論	コースオリエンテーション 物理療法の概要を学修する。理学療法における物理療法の位置づけ、物理療法の種類、物理療法機器を学修する。（教科書　Ⅰ- 1、2）			
2	宮津	物理療法の生理学的基礎、 適応、禁忌	温熱、寒冷、電気刺激、光線、力学、水治の各療法の効果と治療 適応（炎症、痛み、運動制限、筋トーンス）、禁忌（因子、物理療法の禁忌）、物理療法機器の管理、医療事故（教科書　Ⅰ- 1、2）			
3	宮津	疼痛のメカニズム	疼痛の種類と発生機序、抑制機序などについて学修する（教科書　Ⅰ- 3）			
4	宮津	疼痛のメカニズム	疼痛の種類と発生機序、抑制機序などについて学修する（教科書　Ⅰ- 3）			
5	宮津	寒冷療法の実演	寒冷療法を実演し、方法を身につける 寒冷療法による生体の変化について考察する			
6	宮津	寒冷療法	寒冷が生体に及ぼす生理学的変化について学修する 寒冷療法の実際を学修する （教科書　Ⅲ）			
7	宮津	温熱療法の実演	温熱療法を実演し、方法を身につける 温熱による生体の変化について考察する			
8	宮津	温熱療法	熱に関する物理学、生理学を学修する（教科書　Ⅱ） 温熱が生体に及ぼす生理学的変化について学修する （教科書　Ⅱ）			

9	宮津	極超短波療法の実演 超音波療法の実演	極超短波療法、超音波療法を実演し方法を身につける (教科書Ⅱ)					
10	宮津	極超短波療法 超音波療法	極超短波療法、超音波療法が生体に及ぼす生理学的変化について学修する (教科書Ⅱ)					
11	宮津	電気刺激療法の実演	電気刺激療法が生体に及ぼす生理学的変化について学修する (教科書Ⅴ)					
12	宮津	電気刺激療法	電気刺激療法が生体に及ぼす生理学的変化について学修する (教科書Ⅴ)					
13	宮津	水治療法、バイオフィード バック療法、光線療法、牽 引療法	水治療法(教科書Ⅳ)、バイオフィードバック療法(教科書Ⅵ)、光線療法 (教科書Ⅶ)、牽引療法(教科書Ⅸ)について学修する					
14	宮津	ケーススタディ	グループワークによる症例検討を行う					
15	宮津	発表	グループワークによる症例検討の発表・ディスカッションを行う					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合(%)	到達目標
	筆記試験		●	●			70	①②③④
	小テスト		●				10	①②
	レポート		●	●			20	①②③④
評価の 特記事項	レポートは、ルーブリックを使用し評価する。具体的な評価方法は、授業内で示す。 合格点は、すべての評価方法の合計点数が6割以上である。6割に達しなかった場合、筆記試験のみ再試験を実施し、小テストとレポート点を合算して評価する。							
準備学習(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間								
各講義の初めに前回講義の内容および生理学的内容の復習事項についての小テストを行う。生理学の復習をして臨んでほしい。講義の中では物理療法機器などを使った実演を行う。実演を行った際はレポートの提出を求める。積極的に自分の意見を書くようにする。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題(試験・レポート等)に対するフィードバックの方法								
小テスト、レポートは返却する。筆記試験は、希望があれば結果を開示する。								
教科書								
「物理療法学」(標準理学療法学 専門分野) 網本和 監修 医学書院								
参考図書								
物理療法学テキスト(南江堂)、ゴールドマスター・テキスト物療療法学(メジカルビュー社)、クロスリンク理学療法学テキスト物理療 法学(メジカルビュー社)、物理療法学(金原出版)など、物理療法に関するすべての成書								
備考：履修者への要望								
学修内容が多く多岐にわたる。解剖学、生理学、運動学の知識を整理して学修してほしい。質問はいつでも受ける。疑問を持って講義に参加してほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
79	物理療法学実習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
宮津 真寿美						
実務経験のある教員						
宮津 真寿美：医療機関で理学療法士として勤務し、物理療法を用いた臨床経験のある教員が、物理療法に関する実習を行う。						
授業概要						
物理療法は、臨床における理学療法の治療手段の1つであり、各々の物理療法が人体へ及ぼす生理的な反応を理解した上でその適応を考える必要がある。本科目は、物理療法学で学修した寒冷療法、温熱療法、超音波療法、電気刺激療法に関する実験をグループで行い、データを測定し考察する。さらに授業の最後で資料を作成して各グループの実験結果を発表する。実験を通して、物理療法機器の操作、生体へ起こる反応、適応と禁忌を学修し、物理療法によって生じる生理学的変化を考察する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解						
思考・判断 ・表現	①物理療法によって発生した生体反応を説明できる。 ②実験結果からデータを解析し、考察することができる。 ③物理療法の効果について討論することができる。					
技能	④物理療法の安全かつ効果的に実施できる。 ⑤物理療法機器の操作・保守・管理ができる。					
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
実習	物理療法機器を実習し、各種物理療法の人体への反応を様々な測定機器を用いて測定し、結果について考察を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	宮津	オリエンテーション、実習準備	授業の説明と、使用する物理療法機器の説明、注意事項、手順を説明する。文献調査、機器操作、手順の予習を行う。			
2～3	宮津	実習計画をたてる	文献調査を基に、4-11回で行う実習計画をたてる。			
4～5	宮津	寒冷療法の実習	寒冷療法の実習を行い、寒冷療法による生理学的効果を検証する。			
6～7	宮津	温熱療法の実習	温熱療法の実習を行い、温熱療法による生理学的効果を検証する。			
8～9	宮津	超音波療法の実習	超音波療法の実習を行い、超音波療法による生理学的効果を検証する。			
10～11	宮津	電気刺激療法の実習	電気刺激療法の実習を行い、電気刺激による生理学的効果を検証する。			
12～13	宮津	発表準備	測定したデータをまとめ発表できるように資料を準備する。			

14～15	宮津	発表	実習結果の発表と討論を行う。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●	●		60	①②③④⑤
	発表		●	●		30	①②③④
	参加貢献度		●	●		10	①②③④
評価の 特記事項	レポート・発表・参加貢献度の評価は、ルーブリックを使用する。具体的な評価方法は授業内で示す。 参加貢献度は、実習参加態度や貢献度、他者評価を4段階で評価する。 合格点は、すべての評価方法の合計が6割以上である。合格点に満たない場合でも、再試験は実施しない。初回授業で説明する。 本科目の履修は、「物理療法学」の単位が取得できていることが条件である。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
各実習項目の目的、機器の操作方法を予習しておく。（1時間程度） （1コマあたりの準備学習時間：1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
レポートは返却する。							
教科書							
「標準理学療法学 専門分野 物理療法学」網本和 編 医学書院							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
物理療法の実験を体験し、実習からデータを取り、レポート・発表でアウトプットすることで、物理療法に関する考察能力を高めてほしい。また、グループワークは主体的に参加し、互いに議論し考察を深めてほしい。 本科目の履修は、「物理療法学」の単位が取得できていることが条件である。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
80	臨床理学療法総合演習	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士として臨床経験を有する教員が理学療法士として必要な思考過程などを教授する。						
授業概要						
本科目では、臨床実習Ⅲ（評価）で経験した症例検討を通して、理学療法評価法で学修した臨床思考過程を実践する。客観的臨床能力試験（OSCE）の視点を導入することで、臨床で必要とされる「知識・技能・態度」を理解し、実習を通して必要な能力を養うことを目的とする。 授業はグループワーク形式で討論し、まとめる。臨床実習では十分な基礎知識、応用力、コミュニケーション能力、測定技術が備わっているかどうか問われる。そのため、本科目における試験ならびに成績評価は理学療法士の資格を有する教員全員で行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①臨床推論過程を理解し、収集した対象者の情報から理学療法評価項目を適切に抽出できる。					
思考・判断 ・表現	②統合と解釈を実践し問題点および対象者の全体像を説明できる。 ③医療面接および検査測定結果から治療プログラムを立案できる。					
技能	④対象者へのオリエンテーションと医療面接から必要な情報を収集できる。 ⑤検査測定を正確な方法で実践できる。 ⑥SOAP形式で記録できる。					
関心・意欲 ・態度	⑦チームの一員として対象者の障害像について討議することができる。 ⑧慈しみの心を持ち、医療者として適切な態度で対象者に接することができる。					
授業形態						
演習	実技練習やグループワークによるアクティブ・ラーニングにて授業を進める。ただし、一部教科書やスライドによる講義を含める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	内部疾患系障害の臨床推論と評価	臨床実習Ⅲの学びを活かし 1. 内部疾患障害の理学療法評価に必要な情報の内容を整理する。 2. 得られた情報から臨床推論に基づき問題点の仮説を立てる。 3. 問題点の仮説を検証する方法を考える。 4. 各問題点を関連付けて整理する。 5. プレゼンテーションを行い討論する。			
2	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	内部疾患系障害の臨床推論と評価				
3	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	内部疾患障害の検査測定および統合と解釈の実践	臨床実習Ⅲの学びを活かし、 1. 検査測定を実施する。 2. 統合と解釈を実践する。 3. 問題点を整理する。 4. 治療目標を立てプログラムを立案する。			
4	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	内部疾患障害の検査測定および統合と解釈の実践				

5	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	中枢神経障害の臨床推論と評価	臨床実習Ⅲの学びを活かし 1. 神経筋障害の理学療法評価に必要な情報の内容を整理する。 2. 得られた情報から臨床推論に基づき問題点の仮説を立てる。 3. 問題点の仮説を検証する方法を考える。 4. 各問題点を関連付けて整理する。 5. プレゼンテーションを行い討論する。
6	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	中枢神経障害の臨床推論と評価	
7	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	中枢神経障害の検査測定および統合と解釈の実践	臨床実習Ⅲの学びを活かし、 1. 検査測定を実施する。 2. 統合と解釈を実践する。 3. 問題点を整理する。 4. 治療目標を立てプログラムを立案する。
8	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	中枢神経障害の検査測定および統合と解釈の実践	
9	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	運動器系障害の臨床推論と評価	臨床実習Ⅲの学びを活かし 1. 運動器系疾患障害の理学療法評価に必要な情報の内容を整理する。 2. 得られた情報から臨床推論に基づき問題点の仮説を立てる。 3. 問題点の仮説を検証する方法を考える。 4. 各問題点を関連付けて整理する。 5. プレゼンテーションを行い討論する。
10	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	運動器系障害の臨床推論と評価	
11	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	運動器障害の検査測定および統合と解釈の実践	臨床実習Ⅲの学びを活かし、 1. 検査測定を実施する。 2. 統合と解釈を実践する。 3. 問題点を整理する。 4. 治療目標を立てプログラムを立案する。
12	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	運動器障害の検査測定および統合と解釈の実践	
13	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実技演習①	理学療法に必要な実技演習・練習を行う。
14	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実技演習②	理学療法に必要な実技演習・練習を行う。
15	山田（和）・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実技演習③	理学療法に必要な実技演習・練習を行う。

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	発表	●	●	●	●	30	①②③④ ⑤⑥⑦⑧
	レポート	●	●	●	●	30	①②③④ ⑤⑥⑦⑧
	実技試験	●	●	●	●	40	①②③④ ⑤⑥⑦⑧
評価の 特記事項	この科目試験は、4年次に配置されている臨床実習を履修する者が対象となる。したがって、3年次までに開講された本科目以外の必要単位を満たしていない場合は、本科目を履修することができない。また本科目を履修していても、本科目以外の必要単位を満たさないことが確定した場合、その後の講義および試験を受けることが出来ない。 実技試験は、臨床実習において理学療法の実践に必要な技能・態度が修得されているかを確認する。発表は講義内で行うプレゼンテーション及び討論について評価する。レポートの内容は講義内に提示する。発表とレポートはルーブリック評価表により評価し、その基準は講義内で説明する。 本科目の試験に合格したが、必要単位を修得できないことが確定した場合、本科目の試験結果は無効となる。 合格基準を満たしていない場合、実技の再試験を実施することがある。再試験はレポート、発表を含め総合的に評価する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
基礎医学（運動学、解剖学、生理学）、臨床医学（症候学、理学療法治療学）の知識を予習、復習すること。 理学療法評価法の講義と合わせ、評価の進め方について復習すること。 医療面接、検査測定手技の実技練習、基本動作介助の実技練習を自主的に進めること。 以上の講義と予習復習の内容を一元的に管理し、思考過程を整理すること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
実技項目に関して、個別にフィードバックを行う。							
教科書							
資料を配布する。							
参考図書							
特になし							
備考：履修者への要望							
本科目は理学療法評価法で学修した内容と連動させること。グループワークにおいては自らの意見を主張し、相手の意見をよく聞き、自分以外の多くの考え方を臨床の思考過程に取り入れるように臨むこと。講義資料に加えて各自で予習復習をし、自身で思考過程を整理するよう努めること。 また、3年次までに開講された本科目以外の必要単位を満たしていない場合は、本科目を履修することができない。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
81	生活環境論	理学療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
木村 菜穂子						
実務経験のある教員						
木村 菜穂子：医療機関、介護老人保健施設で理学療法士として地域・在宅理学療法の臨床経験のある教員が、理学療法対象者の多くを占める高齢者や障害者を支援する上で重要になる生活環境へのアプローチ方法について講義する。						
授業概要						
高齢者や障害者が、自立した生活や社会参加を図っていくためには、その生活環境へのアプローチが不可欠となる。本科目では、理学療法士がリハビリテーション専門家として対象者に関わっていくために必要な、生活環境に関する基本的な概略を踏まえた上で、街づくりの観点からの生活環境整備、住宅改修を考えたときの評価方法や具体的なアプローチ方法を講義形式にて学ぶ。加えて、これらの整備の前提となる社会福祉制度・社会保障制度を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①生活環境とは何か、生活環境と障害問題について、多角的な考え方を自分の言葉で述べることができる。 ②生活環境整備の前提となる社会福祉制度・社会保障制度について述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③住宅改修を行うために必要な評価を考えることができる。 ④対象者が持つ障害特性や家庭環境を踏まえた住宅改修プランを考えることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤自分の周囲にある「障害者・高齢者の生活に適切でない環境」に多面的な視点で気づくことができる。					
授業形態						
講義	スライドを用いた講義形式が中心となる。一部、グループワークを実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	木村	生活環境の概念①	生活環境とは・福祉的生活環境の展開			
2	木村	生活環境の概念②	生活環境整備に必要な視点			
3	木村	狭義の生活環境＜環境整備に必要な視点＞	狭義の生活環境＝対象者の住宅の整備計画を立てる上で必要な視点			
4	木村	狭義の生活環境＜評価計画①＞	生活環境の評価：評価の視点と調査内容			
5	木村	狭義の生活環境＜評価計画②＞	生活環境の評価：評価手順と問題点の抽出			
6	木村	狭義の生活環境＜改善計画①＞	生活環境の改善計画：計画立案時に重要な視点			
7	木村	狭義の生活環境＜改善計画②＞	生活環境の改善計画：改善指導を進める上でのポイント			

8	木村	狭義の生活環境 ＜住宅改修の実際①＞	住宅改修：移動・移乗に関する環境(幅員、段差、手すり等)					
9	木村	狭義の生活環境 ＜住宅改修の実際②＞	住宅改修：入浴、排泄、睡眠等に関する環境					
10	木村	広義の生活環境 ＜まちづくりの視点＞	高齢者・障害者の住みよいまちづくりの視点と、現在の問題点					
11	木村	広義の生活環境 ＜沿革と関連法規＞	これまでのまちづくりの流れと関連法規					
12	木村	広義の生活環境 ＜環境整備＞	高齢者・障害者を取り巻く生活環境の整備に関する具体的な基準					
13	木村	症例検討①	提示された症例について、生活するために必要なサービス調整、人的・物的資源、環境の調整などを考える(グループワーク)					
14	木村	症例検討②	提示された症例について、生活するために必要なサービス調整、人的・物的資源、環境の調整などを考える(グループワーク)					
15	木村	症例検討③	提示された症例について、生活するために必要なサービス調整、人的・物的資源、環境の調整などを考える(グループワーク)					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③④
	レポート課題		●	●		●	20	①②③④⑤
評価の 特記事項	筆記試験(80%)とレポート課題(20%：内容説明時に提示するルーブリックにより評価)にて成績評価する。 なお、レポート課題は期限内に提出できなかった場合、評価しない。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。 再試験を実施する場合、その評価・判定方法は、本試験と同じである。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
予習：シラバスの授業内容を確認し、教科書の当該部分に目を通す。 復習：毎回、ノート代わりに配布する資料に講義中の学習内容を書き込むため、見直して不足部分を追記するなど整理する。 その上で理解不十分な部分は、次回の講義までに解決する。 (1コマあたりの準備学習時間：1時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験の答案は返却せず、希望者に個別に開示する（事前連絡必要）。レポート課題はコメントを付して返却する。								
教科書								
「日常生活活動学・生活環境学」（標準理学療法学 専門分野）鶴見隆正 監修 医学書院								
参考図書								
「生活環境論」千住秀明 監修 神稜文庫 その他、配布資料（ノート代わり）で必要な内容は補足する。								
備考：履修者への要望								
講義中心となるが、理解を深めるように努め、積極的な態度で講義に臨んでほしい。また、懸命に学びたいと考えている周囲の人の妨げになるような態度（講義中の私語、グループワーク等への非協力的）は、厳禁とする。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
82	予防理学療法学	理学療法学専攻	2学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
林 尊弘						
実務経験のある教員						
林 尊弘：医療・介護施設において理学療法士として勤務し、予防指導を含めたリハビリテーションの臨床経験のある教員が予防分野における理学療法について教授する。						
授業概要						
近年では高齢者を対象とした介護予防だけでなく、勤労者を対象とした心血管疾患や運動器疾患の予防などでも理学療法士の必要性が認識されている。本科目では、①介護予防、②心血管疾患予防、③運動器疾患予防とする。各講義を通して疾患や状態の成因から予防の理論的根拠を学修し、介護予防、疾患予防に関する評価及び方策について講義する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①予防理学療法についてその意義を理解し、説明できる。 ②各疾患の発症に関わるリスクについて理解し、説明できる。 ③理学療法士が実施できる具体的な予防方法を理解し、説明できる。					
思考・判断 ・表現	④対象者や疾患に応じた適切な予防方法を選択できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤予防理学療法に興味・関心を持つことができる。					
授業形態						
講義	適宜グループワークなどのアクティブラーニングを取り入れる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	林	予防理学療法学概論	予防理学療法の定義、領域、関係する制度、発達から老化と予防、研究などについて学ぶ。			
2	林	高齢者の介護予防	要支援・要介護要因を理解し、介護予防における理学療法士の対象、役割、手段について学ぶ。			
3	林	老年症候群の予防概論	フレイル、サルコペニア、ロコモティブシンドロームの定義や概念、診断基準、予防方法について学ぶ。			
4	林	老年症候群の予防 転倒予防	転倒・骨折の危険因子、転倒予防と運動療法について学ぶ。			
5	林	心血管疾患の予防概論	主な生活習慣病の病態と診断基準を学ぶ。メタボリックシンドロームの病態、心血管疾患の発症メカニズムを学ぶ。			
6	林	心血管疾患・脳血管疾患の 予防	心血管疾患の発症予防、脳血管障害、虚血性心疾患の再発予防の方法を学ぶ。			
7	林	運動器疾患の予防概論	理学療法士が運動器疾患を予防の重要性、変形性関節症、骨粗鬆症、骨折予防について学ぶ。			

8	林	運動器疾患の予防 腰痛		腰痛の原因である腰部脊椎管狭窄症や椎間板ヘルニアについて理解する。また、労働関連腰痛および妊婦の腰痛に対する予防理学療法の方策を学ぶ。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●	●		●	20	①②③④⑤
	筆記試験		●	●		●	80	①②③④⑤
評価の 特記事項	筆記試験とレポートの合計点が6割に満たない場合は再試験を実施する。 再試験は筆記試験のみの点数で評価する。 レポートは、事前に提示するルーブリックに基づき評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
講義の復習として、毎回の講義のまとめをA4で1枚程度作成すること（2時間程度）。予習として、講義に関連する領域について2時間程度の学習時間が必要となる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験の回答用紙は指定期間内であれば閲覧可能とする。 レポートについては、採点後に返却する。								
教科書								
「予防理学療法学」（15レクチャー理学療法テキスト）木村雅彦 責任編集 中山書店								
参考図書								
「予防理学療法要論」大淵修一 ほか監修 医歯薬出版 「高齢者理学療法学」島田裕之 総編集 医歯薬出版 その他、必要に応じて講義時間内で紹介する。								
備考：履修者への要望								
授業内で質問・発言を行うなど、積極的な受講態度を望む。予防理学療法学実習で知識を活用できるよう取り組むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
83	予防理学療法学実習	理学療法学専攻	2学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
加藤 真弓・濱田 光佑・山田 南欧美・臼井 晴信						
実務経験のある教員						
加藤 真弓・濱田 光佑・臼井 晴信：医療機関や介護保険領域の施設等における理学療法の臨床経験や地域の介護予防教室等の講師を務めた経験を有する教員が、高齢者に対する予防の必要性及び運動指導、身体機能などの評価について指導する。 山田 南欧美：こども園園児への介入経験や医療機関における理学療法の臨床経験を有する教員が、未就学児の体力評価や発達支援を考慮した運動遊びについて指導する。						
授業概要						
理学療法士が関わる予防には様々あるが、本科目では、高齢者の介護予防及び未就学児の発達支援を中心に学ぶ。 本学が官学連携事業として実施する「清須市民げんき大学」や地域高齢者の体力測定会などへの参加を通して介護予防、認知症予防、フレイル予防、ロコモ予防等への理学療法士の関わりを実践的に学ぶ。 未就学児の発達支援については、近年、子どもの運動器機能異常(子どもロコモ)が注目されていることから、附属こども園において運動遊びや体力測定等の企画・運営・参加を通して子どもの発達の理解と将来的に子どもにも関わることができる素地づくりとして実践的に学ぶ。 対象者や学生同士および教員との関わりから、接遇、コミュニケーション能力、説明力、他者との協働、安全管理などの力も身につけることも目指す。 (加藤 真弓／15回・濱田 光佑／15回・臼井 晴信／15回) (共同) 地域共生社会の実現のために理学療法士がいかに地域包括ケアシステム、介護予防等に関わっていくかを講義を通じ学ぶ。また、清須市民げんき大学の実習を通じ、地域高齢者との交流、体力測定、運動指導を実践する。 (山田 南欧美／8回) こども園の未就学児との運動遊びや体力測定等の関わりの中で、理学療法士としての発達支援方法を学ぶ。また、地域に共生する一員として、地域における理学療法士の役割を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①高齢者の身体的側面や心理的側面を理解することができ、介護予防等の必要性を理解し説明できる。 ②身体機能測定(体力測定)・認知機能測定の方法及び安全面への配慮についてを理解し、説明することができる。 ③地域包括ケアを理解し、介護予防や地域リハビリテーションにおける理学療法士の役割を理解し説明できる。 ④未就学児の発達の理解ができる。					
思考・判断 ・表現	⑤各状況に応じた適切な判断を行うことができ、報告・連絡・相談も行うことができる。					
技能	⑥高齢者に対する基本的な接遇やコミュニケーションをとることができる。 ⑦サポートスタッフの一員として構成員と協力し、状況に応じたサポートができる。 ⑧身体機能測定(体力測定)・認知機能測定の方法を理解した上で、安全面に配慮し正確に測定することができる。 ⑨未就学児に対する、運動やレクリエーションを計画し、他者との協力のもと実施及び指導ができる。 ⑩未就学児とのコミュニケーションをとることができる。 ⑪未就学児の発達を踏まえた体力測定を、安全面に配慮し、的確に実施できる。					
関心・意欲 ・態度	⑫チームメンバーと協働し、自身の役割を考え、対象者に対する働きかけを積極的にすることができる。					
授業形態						
実習	オリエンテーション・講義は、パワーポイントや資料を用いて行う。一部グループワークを取り入れる。実習は主にグループ単位で取り組む。					

授 業 計 画								
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容					
1	加藤・濱田・臼井	オリエンテーション	コースオリエンテーション 「清須市民げんき大学」「はじめての元気あつぷ教室」について					
2	加藤・濱田・臼井	介護予防等	清須市における介護予防事業や高齢者施策の現状、高齢者に関するデータから、介護予防領域において理学療法士としてできることを考える(講義とグループワーク)。					
3	加藤・濱田・臼井	介護予防等	運動方法、サポート方法、指導法などについて(実技)					
4	加藤・濱田・臼井	介護予防等	身体機能測定・認知機能測定法について学ぶ(実技)。					
5～15	加藤・濱田・臼井	介護予防等	実習 期間：6月～3月上旬 実習場所：本学、清須市ならびに大治町内公共施設他 *参加高齢者の体力測定、運動のサポート、リスク管理等を行う。 *その他					
16	山田	発達支援	オリエンテーション 未就学児の発達とは					
17～18	山田	発達支援	運動遊び、体力測定、指導方法などについて資料を基に考え、計画を立案する。					
19～23	山田	発達支援	実習 場所：本学、ゆうあいこども園他 *状況に応じて、オンライン開催、オンデマンド開催とする。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標	
		【介護予防】実習貢献態度	●	●	●	●	30	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑫
		【介護予防】課題レポート・報告書	●	●			20	①②③⑤
		【発達】実習貢献態度	●	●	●	●	30	②③④⑤⑦ ⑧⑨⑩⑪⑫
		【発達】課題レポート・報告書等	●	●			20	①②③④⑤
評価の特記事項	レポート・報告書の未提出・遅延は減点とし、場合によっては追加課題を課す。実習貢献態度及び課題レポート・報告書の成績評価については授業内にて説明する。 本科目は「予防理学療法学」の未履修者は受講できない。また、成績評価をしない。 上記の合計が6割未満であっても、再試験やそれに代わる措置はない。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
【介護予防領域】 高齢者の身体、心理、社会的な特徴について事前学習を求める。体力測定方法、指導する運動内容については十分に復習し正しく実施できるように準備すること。（30分程度） 【発達領域】 子どもの動きをつかむ為、子ども向け番組や外で出会った子ども達の様子を観察する。また、未就学児が理解できる言葉遣いが必要になるため、改めて、自分自身の言葉遣いや行動が子どもの手本になるかどうかを見直すこと。また、小学校に入学する前の子どもに必要な事を調べること。(1時間程度)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
【介護予防領域】及び【発達領域】 レポート等は、後日返却する。								
教科書								
【介護予防領域】「予防理学療法学」で使用する教科書及び資料 【発達領域】なし								

参考図書
【介護予防領域】 「高齢者理学療法学」島田裕之 総編集 医歯薬出版 など関係成書 【発達領域】 人間発達学、小児科学で使用する教科書・参考書に準ずる。
備考：履修者への要望
【介護予防領域】 ・参加高齢者が安全に、安心して運動等ができるように対象者に対する配慮を怠らず積極的に行動すること。 ・人と人の触れ合いを大切に、積極的に交流を図ること。 ・リスク管理面から、報告・連絡・相談を怠らないこと。 【発達領域】 ・学生スタッフとして教室の運営に関わっていることを自覚し、対象者に対する目配り・気配りを怠らず積極的に行動すること。 ・理学療法士はすべての年代の方を対象とする。未就学児に対しても積極的に交流を図ること。 ※介護予防・発達領域での理学療法士の存在意義について考え行動する。 ※本科目で学んだことは、老年期障害理学療法学、地域理学療法学、小児疾患系障害理学療法学・実習に繋げてほしい。 ※本科目は「予防理学療法学」の未履修者は受講できない。

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
84	地域理学療法学	理学療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
山田 和政						
実務経験のある教員						
山田 和政：医療・介護保健分野において理学療法士として臨床経験のある教員が、地域理学療法について講義する。						
授業概要						
障害を持ちながらも地域で生活することを望む高齢者・障害者が増えている。介護保険制度等の導入以降、その者たちを取り巻く状況も変化してきており、生活を支える立場として、リハビリテーション、特に理学療法士への期待は大きいといえる。本講では、理学療法士として実生活をサポートしていく上での専門的な知識と考え方を獲得するため、障害を持つ人々や高齢者が安心して地域で暮らすための地域包括ケアシステムを見据えた法制度や施策、地域リハビリテーションにおける理学療法士の専門性と役割について学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①地域包括ケアシステムと地域理学療法について説明ができる ②医療・介護保険制度および各種生活支援サービスについて説明ができる					
思考・判断 ・表現	③地域における理学療法士の専門性と役割について考え、自身の意見を述べることができる ④事例を通じて問題点を抽出し、適切な介入内容とサービス提供案を提示できる					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	基本的に講義資料と教科書を中心とした講義形式であるが、一部、グループワーク実施する。					
授　業　計　画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田	地域リハビリテーションとは	「地域リハビリテーションとは何か」について考える（グループワーク）			
2	山田	地域リハビリテーションの概念	地域リハビリテーション、地域包括ケアシステム、地域理学療法の概念について学ぶ			
3	山田	地域リハビリテーションの関連制度と関連法規	保健医療福祉制度の変遷と地域リハビリテーションに関する制度と法規について学ぶ			
4	山田	住環境と福祉用具	安心、安全な生活を送るための住環境整備の手法と介護保険制度の利用について学ぶ			
5	山田	自宅を評価する	自宅にて車いすを利用して生活する場面を想定し、住環境整備について考える（グループワーク）			
6	山田	介護保険制度導入の背景	介護保険制度の導入の背景と目的について学ぶ			
7	山田	介護保険制度の仕組み	介護保険制度の仕組みと介護保険サービスについて学ぶ			

8	山田	介護保険制度の変遷と今後の動向	介護保険制度改正のポイントと今後の社会情勢を見据えた制度の動向について学ぶ					
9	山田	急性期・回復期の理学療法	急性期・回復期における理学療法の目的、対象、理学療法士に求められる役割について学ぶ					
10	山田	維持期の理学療法	維持期（療養型病院）における理学療法の目的、対象、理学療法士に求められる役割について学ぶ					
11	山田	維持期・生活期の理学療法①	介護保険分野（介護老人保健施設）における理学療法の目的、対象、理学療法士に求められる役割について学ぶ					
12	山田	維持期・生活期の理学療法②	介護保険分野（訪問・通所リハビリテーション）における理学療法の目的、対象、理学療法士に求められる役割について学ぶ					
13	山田	終末期の理学療法	終末期における理学療法の目的、対象、理学療法士に求められる役割について学ぶ					
14	山田	予防分野の理学療法	介護保険分野での介護予防事業と理学療法士の関与について学ぶ					
15	山田	ケーススタディ	生活障害をきたした在宅事例を通して介護保険サービスの活用と理学療法士としての対応策について考える（グループワーク）					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③
	ポートフォリオ		●	●			20	①②③④
評価の特記事項	期末試験（筆記試験）を実施する。中間試験は実施しない。 ポートフォリオ（20点）と期末試験（80点）にて評価する。 ポートフォリオについては、事前に提示するルーブリックを用いて評価する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験（筆記試験）を実施し、筆記試験のみで評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
毎回、配布する「予習・復習プリント」を活用し、取り組むこと。 予習：シラバスに記載されている授業内容を確認し、教科書の当該部分に目を通す（1時間）。 復習：教科書および配布した講義資料を参考に授業内容を整理し、理解が不十分な部分については、次回の講義までに解決する（3時間）。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出課題（学習成果物）は、評価後に返却する。 筆記試験の答案は返却しませんが、希望者には個別に開示する（事前連絡必要）。								
教科書								
「PT・OTビジュアルテキスト 地域リハビリテーション学」重森健太 ほか 羊土社								
参考図書								
関係成書								
備考：履修者への要望								
積極的な態度で授業に臨み、授業内容の理解を深めるよう努めること。懸命に学びたいと考えている周囲の学生の妨げになるような態度（講義中の私語、グループワークでの非協力的な取り組み）は、厳禁とする。□								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
85	臨床実習Ⅰ（見学）	理学療法学専攻	1学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
山田 和政・加藤 真弓・林 尊弘・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・加藤 真弓・林 尊弘・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介 以上の教員は、医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士として勤務した経験を有する						
授業概要						
病院・施設の見学を通じて、診療チームの一員として、対象者への対応や施設・医療スタッフに対する適切な態度について学ぶ。また、社会や医療の中における、理学療法士の役割と責任を全体的に理解するため、また、2、3年次における専門的な学習を通しての知識習得をより効果的かつ有意義に行えるように準備するために行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①理学療法士の役割や専門的な内容を体系的に理解できる。 ②症例を把握し、その問題解決のために理学療法士として可能なことを概念的に把握できる。 ③見学した病院・施設の目的・役割・治療方針・施設組織、および理学療法部門の役割を把握し、その中でリハビリテーションとしての理学療法の意義を把握できる。					
思考・判断 ・表現	④1年次に学んだ基礎知識が実際にはどのような意味を持つのかを考え、これ以降の専門的な学習を通じての知識習得をより効果的かつ有意義に行えるように準備できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤理学療法の対象者やスタッフおよび診療現場全体に対して医療従事者として相応しい態度で配慮することができる。 ⑥先輩理学療法士、他の医療スタッフと積極的に交流し、将来、理学療法士(専門職)としての資質向上のために役立てることができる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設においての実習					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	山田(和)・加藤・林・松村・宮津・木村・臼井・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	実習前学習	病院・施設の見学を通じて社会や医療の中における、理学療法士の役割と責任を理解するための準備を行うとともに、各自、配置される実習施設の概要など必要な実習前学習を行う。			
	山田(和)・加藤・林・松村・宮津・木村・臼井・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	実習	医療機関・介護施設などへ赴き、規定期間実習実施(※) ※①2月中旬～3月上旬の期間(このうちの5日間)に実習を行う。			
	山田(和)・加藤・林・松村・宮津・木村・臼井・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	実習後学習	実習終了後、実習報告の資料を作成し、学内での実習後セミナー(臨床セミナーの講義)に参加・発表を行う。また、各自実習の振り返りをして、2年次の学習につなげる準備をする。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	事前課題	●	●		●	10	①②③④ ⑤⑥
	ポートフォリオ	●	●		●	20	①②③④ ⑤⑥
	実習評定	●	●		●	40	①②③④ ⑤⑥
	実習後発表資料	●	●		●	30	①②③④ ⑤⑥
評価の 特記事項	事前課題は実習前学習の中で提示する。ポートフォリオは実習期間中に作成したデイリーノートや自己学習資料などを1つのファイルにまとめて作成する。事前課題、ポートフォリオともルーブリックによって評価する。実習評定は各施設において、実習指導者によって実習目標に基づいた具体的項目についての評価を受ける。実習前学習や学内ガイダンス等には必ず出席すること。正当な理由なく欠席するなど実習施設での臨床実習を行う準備が不十分である場合には、実習を見合わせることもある。すべての評価項目の合計が60%以上である場合、単位を認定する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
実習期間中は、その日の経験を振り返り、デイリーノートに記録する時間を設けること（1時間程度）。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
〈実習中〉 ・デイリーノートは実習日毎に実習指導者に提出し、適宜フィードバックを受ける。 〈実習後〉 ・実習評定は学生に閲覧の機会を設ける。 ・提出された「ポートフォリオ」、「実習後発表資料」はルーブリックに基づいて評価し、学生に返却する。							
教科書							
必要に応じ資料を配布する							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・理学療法士になるための総合的な学習の場として、臨床実習がある。対象者に対する接遇に加え、知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むこと。 ・受け身的な態度ではなく積極的に指導者や職員に働きかけ、疑問を解決すること。 ・2年次の専門学習に繋がられるような実習をすること。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
86	臨床実習Ⅱ（地域）	理学療法学専攻	4学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
山田 和政・加藤 真弓・林 尊弘・松田 文浩・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・加藤 真弓・林 尊弘・松田 文浩・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士としての臨床経験を有する						
授業概要						
通所リハビリテーション又は訪問リハビリテーション実施施設に赴き、臨床実習指導者の指導のもとで実習を行う。地域包括ケアシステムにおける通所リハビリテーションや訪問リハビリテーションの役割や地域における理学療法士としての役割を見学を通して学ぶ。また、リハビリテーションマネジメント、多職種連携などについても学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションについて説明できる。 ②通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションにおける理学療法士の役割を理解し説明できる。 ③多職種連携について理解できる。					
思考・判断 ・表現	④利用者にとって通所リハビリテーション、訪問リハビリーションが必要な理由及び目標を考え説明することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤先輩理学療法士、他の医療スタッフと積極的に交流し、将来、理学療法士(専門職)としての資質向上のために役立てることができる。 ⑥理学療法の対象者やスタッフおよび診療現場全体に対して必要な配慮、心配りなどができ、医療従事者として相応しい態度を身につける。					
授業形態						
外部実習	通所リハ、訪問リハ実施施設においての実習					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習前学習	見学を通じて通所リハもしくは訪問リハにおける理学療法士の役割と責任を全体的に理解するための準備をする。地域包括ケアシステムにおける通所リハ・訪問リハの位置づけを考える。実習の目的、目標を確認し、実習への心構え、接遇、個人情報保護、SNSに関する事項、その他準備すべきことを周知する。その上で、各自必要な実習前学習を行う。 (実習目標およびそれに関する詳細は、学修の手引き別頁の「臨床実習」を参照のこと。また、その他の詳細については、事前のガイダンスにて提示する)			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習	医療機関・介護施設などへ赴き、規定期間実習実施 ※4年次の9月～10月初旬に5日間行う。			

	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習後学習	実習終了後、実習報告レポートを提出し、学内での実習報告会に参加・発表を行う。また、各自実習の振り返りをする。				
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	総合評価	●	●		●	100	①②③④⑤⑥
評価の特記事項	実習指導者によって実習目標に基づいた具体的項目についての評価を受ける。その評価内容をもとに、実習後の報告会、レポート内容などを総合的にみて、学内の専攻における実習判定会議にて、学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。事前、事後ガイダンス等、学内ガイダンス・報告会には必ず出席すること。正当な理由なき欠席の場合は、実習を見合わせることもあります。また、不合格となることもあります。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
（予習・復習） ・臨床実習前には、「地域包括ケアシステム、通所リハビリテーション・訪問リハビリテーション」について整理するとともに、多職種連携に関わる職種を整理すること。 ・臨床実習前に、医療従事者として社会人として身につけておくべき資質について考えまとめておくこと。実習中・後には、自身の課題を整理し、理学療法士としての資質向上に努めること。 ・実習中において、解らないことや疑問に思ったことは積極的に自己学習すること。 ・実習後は、経験してきた内容を振り返りまとめ、以後の学習に繋がられるようにすること。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・実習中に解らないことや疑問に思ったことは自ら調べまとめること。その内容は「デイリーレポート」や自己学習ノートに記し、実習指導者からフィードバックをその都度受け、解決するよう努めること。また、指導者に直接的に質問や指導を仰ぎ、解決を図る。デイリーレポート等は、実習後に学内教員に提出し、教員から口頭もしくは紙面にてフィードバックを受ける。 ・実習で学んだことを「実習レポート」にまとめ、実習中に実習指導者からその内容について指導を受ける。実習指導者により認可されたレポートを、実習後に学内教員に提出し、内容確認をしてもらう。 ・実習で学んだことを「実習後セミナー」で発表する。発表は、レジュメを事前に作成し、発表の場で教員からのフィードバックを受ける。							
教科書							
必要に応じ資料を配布する							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・理学療法士になるための総合的な学習の場として、臨床実習があります。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むこと。 ・受け身的な態度ではなく積極的に指導者や職員に働きかけ、疑問を解決すること。 ・重複障害を抱えながら、地域において生活する者が増えている。この現状を発症、受傷からのリハビリテーションの一連の過程において考えながら取り組むこと。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
87	臨床実習Ⅲ（評価）	理学療法学専攻	3学年	必修	4単位	180時間
担当教員名						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士としての臨床経験を有する						
授業概要						
これまでに学んだ理学療法の検査・測定を、実習指導者のもとで、見学・協同参加・実施を通し（監視レベル）、対象者の状態に合わせて適切な検査・測定項目を選択できる力を修得する。また、実習指導者の指導を仰ぎながら理学療法検査を適切に実施できる力を修得する。また、得られた検査結果を統合・解釈し、障害像を理解する。その際に、全身（whole body）を診る視点を養えるように取組む。さらに、実習を通し医療者に相応しい態度を身につける。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①疾患や障害の知識及び検査測定の適切な知識を持つことができる。					
思考・判断 ・表現	②収集した情報および実施した個々の検査結果をもとに、患者の主要な問題を把握できる。 ③実習での経験を通して、最終的にある程度の助言で患者に応じた評価計画を立案することができる。					
技能	④疾患や障害の知識及び検査測定の適切な知識を持ち、検査測定を実際の患者に実施できる。 ⑤医学的・社会的に必要な情報を多方面から収集することができる。 ⑥必要な事項を記録し、適切に報告することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑦知識・技術・人格が理学療法士の三本柱であることを理解し、専門職としての向上・充実を図るための態度を修得できる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設においての実習					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習前学習	対象者に対し、適切な検査・測定や理学療法評価を実施するための準備をする。実習の目的、目標を確認し、実習への心構え、接遇、個人情報保護、SNSに関する事項、その他準備すべきことを周知する。その上で、主に検査・測定の知識・技術、臨床的思考について実習前学習を行う。 （実習目標およびそれに関する詳細は、学修の手引き別頁の「臨床実習」を参照のこと。また、その他の詳細については、事前のガイダンスにて提示する）			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習（理学療法評価）	指定期間（4週間）を医療機関・介護施設などへ赴き、対象者に対し、適切な検査・測定や理学療法評価を実施できるよう実習を行う。 ※1月初旬～2月中旬で行う。			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習後学習	実習終了後、学内での実習報告会などに参加し、実習内容を報告する。また、デイリーノート等を提出し、教員からフィードバックを受け、自身の過不足について振り返る。そして、不足を補う。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実習評定	●	●	●	●	40	①②③④⑤⑥⑦
	ポートフォリオ	●	●	●	●	10	①②③④⑤⑥⑦
	実習報告会資料	●	●	●	●	30	①②③④⑤⑥⑦
	実習後OSCE	●	●	●	●	20	①②③④⑤⑥⑦
評価の 特記事項	・本科目の受講条件は、本科目を除く、3年次までの必修科目の単位をすべて修得していることとする。 ・実習評定は、クリニカルクラークシップに則り実施された各種検査・測定及び評価、理学療法等の状況（見学・協同参加・実施（監視レベル））に関して、各施設の実習指導者が評価する。 ・ポートフォリオは実習期間中に作成したデイリーノートや自己学習資料などを1つのファイルにまとめて作成する。 ・実習後OSCE（客観的臨床能力試験）は、学外での臨床実習期間終了後に学内教員が評価者となって行う。 ・なお、単位認定に必要な出席日数には、各施設での実習・学内実習だけでなく、実習前ガイダンス、実習後報告会等への参加も含まれる。また、正当な理由なく学内ガイダンス等を欠席した場合は、臨床実習への参加を認めない、単位不認定とするなどの処置を行うことがある。 すべての評価項目の合計が60%以上である場合、単位を認定する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
実習期間中は、その日の経験を振り返り、デイリーノートに記録する時間を設けること（1時間程度）。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
〈実習中〉 ・デイリーノートは実習日毎に実習指導者に提出し、適宜フィードバックを受ける。 〈実習後〉 ・実習評定は学生に閲覧の機会を設ける。 ・提出された「ポートフォリオ」、「実習後発表資料」はルーブリックに基づいて評価し、学生に返却する。 ・実習後OSCE（客観的臨床能力試験）はルーブリックに基づいて評価し、学内教員よりフィードバックする。							
教科書							
これまでに使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
「臨床実習とケーススタディ」（標準理学療法学シリーズ） 鶴見隆正 編 医学書院							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・理学療法士になるための実践的な学びの場として、臨床実習がある。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むことが大切である。 ・実習では多くの解らないことや疑問が生じるため、実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げること。 ・実習前のガイダンスにおいて詳細な説明をするため、必ず出席し十分な理解をした上で臨床実習に参加すること。 ・本科目の受講条件は、本科目を除く、3年次までの必修科目の単位をすべて修得していることとする。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
88	臨床実習Ⅳ（総合１）	理学療法専攻	4学年	必修	7単位	315時間
担当教員名						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士としての臨床経験を有する						
授業概要						
理学療法についての知識・技能を、実習指導者のもとで見学・協同参加・実施(監視レベル)を通し、評価(検査・測定含む)・ゴール設定・治療計画・治療及び訓練・指導等の一連の過程を学ぶ。その際に、全身及び全体を診る視点をもって取組む。また、臨床実習Ⅲ（評価）時よりも評価の精度を高められるようにする。1つ1つの実践を積み重ね、理学療法における臨床的思考を理解し実践に繋げられるようにする。さらに、理学療法部門の管理・運営に関する基本的事項についての自分の意見を持ち、医療専門職として責任ある態度・行動を取れるようになることを目的とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①疾患や障害及び評価の適切な知識を持ち、どのような治療計画のもとに理学療法が実践されているかを理解する。					
思考・判断 ・表現	②検査・測定結果をもとに統合と解釈をし、最終的にはある程度の助言で治療計画を立てることができる。					
技能	③患者のもつ問題点やその原因をつかむために、実習指導者のある程度の助言のもと、必要かつ適切な評価を行うことができる。 ④理学療法士として必要な記録および報告ができる。 ⑤治療計画に沿って、実習指導者の指導のもとで適切な治療訓練ができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥医療専門職に相応しい責任ある態度・積極的な行動ができる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設においての実習					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習前学習	対象者に対し、適切な検査・測定や理学療法評価を実施するための準備をする。実習の目的、目標を確認し、実習への心構え、接遇、個人情報保護、SNSに関する事項、その他準備すべきことを周知する。その上で、理学療法における一連の臨床的思考や理学療法の基本的技術について実習前学習を行う。 (実習目標およびそれに関する詳細は、学修の手引き別頁の「臨床実習」を参照のこと。また、その他の詳細については、事前のガイダンスにて提示する)			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習	指定期間のうち7週間を医療機関・介護施設などへ赴き、その後の1週間を学内で実習目標が達成できるよう実習を行う。 4月初旬～6月中旬で行う。			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習後学習	実習終了後、学内での実習報告会などに参加し、実習内容を報告する。また、デイリーレポート・関連図等を提出し、教員からフィードバックを受け、自身の過不足について振り返る。そして、不足を補う。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	総合評価	●	●	●	●	100	①②③④⑤⑥
評価の 特記事項	・本科目の受講条件は、3年次までの必修科目の単位をすべて修得していることとする。 ・各施設において、クリニカルクラークシップに則り実施された各種評価、理学療法等の状況（見学・協同参加・実施（監視レベル））に関して、実習目標に基づいた具体的項目についての評価を実習指導者に受ける。 ・その評価内容と、学内実習での取り組み状況、実習後に学内にて開催される報告会・報告書等の提出物・OSCE（客観的臨床試験）等の状況から、理学療法学専攻における実習判定会議にて、総合的に学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。 ・なお、単位認定に必要な出席日数には、各施設での実習だけでなく、実習前ガイダンス、実習後報告会等への参加も含まれる。また、正当な理由なく学内ガイダンス等を欠席した場合は、臨床実習への参加を認めない、単位不認定とするなどの処置を行うことがある。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
（実習前） ・評価実習の経験を踏まえ、「リハビリテーション、理学療法」について整理するとともに、現在の社会的背景や自分の考えも踏まえ説明ができるようにすること。 ・理学療法に必要な基礎的知識・専門知識を整理しておくこと。また、検査・測定技術、起居・移乗等の動作誘導・介助技術の練習を十分に行うこと。 ・医療従事者として、社会人として身につけておくべき資質について考えまとめること。 （実習中） ・患者の障害像把握に努めること（関連図を用いる）。 ・不足する自己の知識・技術を客観的に把握し、補う努力をすること。 ・見学・協同参加・実施（監視レベル）の経験を通して、適切な評価計画や理学療法プログラムを立案し、実施できるようになるために必要な準備を行うこと。また、最終的に統合と解釈、問題点抽出、ゴール設定、理学療法プログラムを行えるようになることを念頭に置き、実習に取り組むこと。 ・実習での経験内容を振り返り、デイリーレポート等にまとめることにより、自らの学習目標・行動目標を見直し、それ以降の学習に繋がられるようにすること。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・実習中は、実習指導者に直接的に質問をしたり指導を仰ぎ、その都度解決するよう努力する。間接的には、日々の実習内容や疑問点等を「デイリーレポート」等に記し指導を仰ぐ。 ・実習後には実習の成果(学習内容等)を各種報告書等としてまとめ、担当教員に提出し指導を受ける。 ・実習での成果(学習内容等)を学内での実習後報告会にて発表し、教員や他学生からフィードバックを受ける。							
教科書							
これまで使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
標準理学療法学シリーズ 「臨床実習とケーススタディ」 鶴見隆正編 医学書院							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・理学療法士になるための実践的な学びの場として、臨床実習があります。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むことが大切です。 ・実習では多くの解らないことや疑問が出ます。実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げてください。 ・実習前のガイダンスにおいて詳細な説明をするため、必ず出席し十分な理解をした上で臨床実習に参加すること。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
89	臨床実習Ⅴ（総合２）	理学療法学専攻	4学年	必修	7単位	315時間
担当教員名						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士としての臨床経験を有する						
授業概要						
理学療法についての知識・技能を、多様な対象者に対し実習指導者のもとで、見学・協同参加・実施（監視レベル）を通し、評価（検査・測定含む）・ゴール設定・治療計画・治療及び訓練・指導等を学び、その際に、全身及び全体を診る視点をもって取組む。また、臨床実習（総合1）よりも評価の精度を高められるようにする。1つ1つの実践を積み重ね、理学療法における臨床的思考を理解し実践に繋がられるようにする。さらに、理学療法部門の管理・運営に関する基本的事項についての自分の意見を持ち、診療チームの一員として医療専門職として責任ある態度・行動を取れるようになることを目的とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①疾患や障害及び評価の適切な知識を持ち、どのような治療計画のもとに理学療法が実践されているかを理解する。					
思考・判断 ・表現	②検査・測定結果をもとに統合と解釈をし、最終的にはある程度の助言で治療計画を立てることができる。					
技能	③患者のもつ問題点やその原因をつかむために、実習指導者のある程度の助言のもと、必要かつ適切な評価を行うことができる。 ④理学療法士として必要な記録および報告ができる。 ⑤治療計画に沿って、実習指導者の指導のもとで適切な治療訓練ができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥医療専門職に相応しい責任ある態度・積極的な行動ができる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設においての実習					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習前学習	対象者に対し、適切な検査・測定や理学療法評価を実施するための準備をする。実習の目的、目標を確認し、実習への心構え、接遇、個人情報保護、SNSに関する事項、その他準備すべきことを周知する。その上で、理学療法における一連の臨床的思考や理学療法の基本的技術について実習前学習を行う。 （実習目標およびそれに関する詳細は、学修の手引き別頁の「臨床実習」を参照のこと。また、その他の詳細については、事前のガイダンスにて提示する）			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習（理学療法評価、治療）	指定期間のうち7週間を医療機関・介護施設などへ赴き、その後の1週間を学内で実習目標が達成できるよう実習を行う。 6月中旬～8月中旬で行う。			
	山田（和）・加藤・林・松田・松村・宮津・木村・臼井・山田（南）・齊藤・濱田・藤本	実習後学習	実習終了後、学内での実習報告会などに参加し、実習内容を報告する。また、デイリーレポート・関連図等を提出し、教員からフィードバックを受け、自身の過不足について振り返る。そして、不足を補う。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	総合評価	●	●	●	●	100	①②③④⑤⑥
評価の 特記事項	・本科目の受講条件は、3年次までの必修科目の単位をすべて修得していることとする。 ・各施設において、クリニカルクラークシップに則り実施された各種評価、理学療法等の状況（見学・協同参加・実施（監視レベル））に関して、実習目標に基づいた具体的項目についての評価を実習指導者に受ける。 ・その評価内容と、学内実習での取り組み状況、実習後に学内にて開催される報告会・報告書等の提出物・OSCE（客観的臨床試験）等の状況から、理学療法学専攻における実習判定会議にて、総合的に学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。 ・なお、単位認定に必要な出席日数には、各施設での実習だけでなく、実習前ガイダンス、実習後報告会等への参加も含まれる。また、正当な理由なく学内ガイダンス等を欠席した場合は、臨床実習への参加を認めない、単位不認定とするなどの処置を行うことがある。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
（実習前） ・評価実習及び総合実習①の経験を踏まえ、「リハビリテーション、理学療法」について整理するとともに、現在の社会的背景や自分の考えも踏まえ説明ができるようにすること。 ・理学療法に必要な基礎的知識・専門知識を整理しておくこと。また、検査・測定技術、起居・移乗等の動作誘導・介助技術、基本的理学療法の練習を十分に行うこと。 ・医療従事者として、社会人として身につけておくべき資質について考えまとめること。 （実習中） ・患者の障害像把握に努めること（関連図を用いる）。 ・不足する自己の知識・技術を客観的に把握し、補う努力をすること。 ・見学・協同参加・実施（監視レベル）の経験を通して、適切な評価計画や理学療法プログラムを立案し、実施できるようになるために必要な準備を行うこと。また、最終的に統合と解釈、問題点抽出、ゴール設定、理学療法プログラム立案・実施が行えるようになることを念頭に置き、実習に取り組むこと。 ・実習での経験内容を振り返り、デイリーレポート等にまとめることにより、自らの学習目標・行動目標を見直し、それ以降の学習に繋げられるようにすること。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・実習中は、実習指導者に直接的に質問をしたり指導を仰ぎ、その都度解決するよう努力する。間接的には、日々の実習内容や疑問点等を「デイリーレポート」等に記し指導を仰ぐ。 ・実習後には実習の成果（学習内容等）を各種報告書等としてまとめ、担当教員に提出し指導を受ける。 ・実習での成果（学習内容等）を学内での実習後報告会にて発表し、教員や他学生からフィードバックを受ける。							
教科書							
これまでに使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
標準理学療法学シリーズ 「臨床実習とケーススタディ」 鶴見隆正編 医学書院							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・理学療法士になるための実践的な学びの場として、臨床実習があります。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むことが大切です。 ・実習では多くの解らないことや疑問が出ます。実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げてください。 ・実習前のガイダンスにおいて詳細な説明をするため、必ず出席し十分な理解をした上で臨床実習に参加すること。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
90	臨床セミナー	理学療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
松村 仁実・木村 菜穂子・齊藤 誠						
実務経験のある教員						
松村 仁実・木村 菜穂子・齊藤 誠 以上の教員は、医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士として勤務した経験を有する						
授業概要						
臨床実習では理学療法士として必要な知識、技能を習得するために積極的な態度で臨むことは当然であるが、実習施設をはじめ施設の利用者や患者、職員の不利益が生じないように学生として注意すべき事項が存在する。臨床での実習を行う前に個人情報保護や安全配慮などの注意義務を知り、対応方法を検討しておくことは重要であると思われる。よって、本講義は、学内での演習を通して、臨床実習へ臨むにあたって求められる基本的な態度、技能を習得し、円滑に臨床実習を行うための準備をすることを主な目的とする。また、臨床実習後にもまとめを行い、学生間での学修成果の共有を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①個人情報保護、感染拡大予防などの医療現場において注意すべき事項を理解する。 ②医療従事者において求められる基本的な接遇について理解する。					
思考・判断 ・表現	③上の①、②を踏まえたうえで、効果的な臨床実習を遂行するために必要な事項を検討できる。					
技能	④医療従事者に求められる基本的な接遇について、模擬患者や学生、施設利用者を対象に実施できる。					
関心・意欲 ・態度	⑤理学療法士として必要な技能、態度を習得するために臨床実習が重要な位置づけにあることを理解し、積極的に演習に取り組むことができる。					
授業形態						
演習	グループワークやロールプレイを中心に実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松村・木村・齊藤	臨床実習ガイダンス	臨床実習に（愛知医科大学病院の見学含む）臨むにあたり、本学の学生として、一般的心得・職業人としての心得を理解する。			
2	松村・木村・齊藤	病院見学のガイダンス、医師の講演	ガイダンスや講演を通じて、リハビリテーションの仕事内容や職業倫理などの概要を理解する。			
3	松村・木村・齊藤	病院見学	愛知医科大学病院を見学し、病院の概要・役割・各職種の役割などを理解する。			
4	松村・木村・齊藤	病院見学	愛知医科大学の附属施設を見学し、各施設の概要・役割・各職種の役割などを理解する。			
5	松村・木村・齊藤	実習報告会	愛知医科大学病院の見学実習後、各職種の役割、コミュニケーション方法などを報告する。			

6	松村・木村・齊藤	臨床実習Ⅰガイダンス	実習の目的、目標を確認し、実習への心構え、接遇、個人情報保護などに関する事項を周知する。 (実習目標およびそれに関する詳細は、学修の手引き別頁の「臨床実習」を参照のこと。また、その他の詳細については、事前のガイダンスにて提示する)					
7	松村・木村・齊藤	実習後セミナー	臨床実習Ⅰ後、学生が実習施設の概要・役割、理学療法士の役割などを報告し、学生間で共有する。					
8	松村・木村・齊藤	実習後セミナー	臨床実習Ⅰ後、学生が実習施設の概要・役割、理学療法士の役割などを報告し、学生間で共有する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	個人レポート課題		●	●		●	50	①②③⑤
	グループワーク課題		●	●	●	●	20	①②③④⑤
	実習後セミナーでの発表		●	●	●	●	30	①②③④⑤
評価の 特記事項	個人レポート課題、グループワーク課題、実習後セミナーでの発表のすべてを実施することが単位認定の条件となる。いずれの評価項目もルーブリックを用いて評価する。ルーブリックは、臨床実習ガイダンスもしくは臨床実習Ⅰガイダンス時に提示する。特段の事情により臨床実習が実施できなかった場合は代替課題の提出によって単位を認定することはありうる。すべての評価項目の合計が60%以上である場合、単位を認定する。基準に満たない場合は、評価項目に応じてレポート、課題の再提出、再発表を課す。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
個人レポートの作成やグループワーク課題、発表資料の作成のため、各講義後に4時間程度の自己学習時間が必要になる。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出されたレポートは担当教員より返却、フィードバックを行う。グループワークにて得られた成果については発表の機会を設け、教員からフィードバックを行う。								
教科書								
本学が各学生に配布している「学修の手引き」、「実習の手引き」 その他、必要に応じてパンフレットなどの資料を配布する。								
参考図書								
特になし								
備考：履修者への要望								
臨床実習について重要な事項を多く説明する。しっかりとメモを取り、不明な点は必ず質問等を行うこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
91	卒業研究	理学療法学専攻	4学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・濱田 光佑・藤本 大介：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士としての臨床経験を有する教員が、卒業論文をまとめる過程を通して、理学療法士として必要な思考過程や問題解決能力を教授する。						
授業概要						
この科目では、これまで学習した基礎・専門的な知識をもとに、理学療法研究法で学んだ研究手法を使って研究を実施し、具体的に卒業論文としてまとめ上げることを最終目標としている。論文にまとめるためには、各自が、研究テーマに沿って様々な調査や実験を行い、結果を先行文献などと比較検討し考察しなくてはならない。それは、単に教科書を読むだけの学習にとどまらず、多角的な知識を得ることにつながる。この卒業論文をまとめる過程を通して、理学療法士として必要な思考過程や問題解決能力を修得することを目的とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3	DP4●	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①これまでに学習した基礎・専門的な知識を応用することができる。					
思考・判断 ・表現	②研究計画を立案、実施し、その結果から論理的な考察を導き出すことができる。 ③自らの研究の成果を論文にまとめることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④研究の実施、研究成果の公開発表、論文作成のために、指導教員に相談、討論し、研究をすすめることができる。					
授業形態						
演習	担当教員によるゼミ形式で行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本	研究の実施	指導教員の指導の下、研究の実施			
2	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本					
3	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本					
4	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本					

5	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本	研究の実施	指導教員の指導の下、研究の実施
6	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本		
7	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本	研究のまとめ	仮論文作成
8	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本		
9	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本	研究発表	発表準備
10	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本		
11	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本	研究発表	卒業研究発表会で発表（4年次11月下旬～12月初旬）
12	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本		
13	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本		
14	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本	研究論文作成	論文作成（4年次12月中旬）
15	山田(和)・林・松田・加藤・松村・宮津・臼井・木村・濱田・藤本		

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	発表		●		●	40	①②③④
	論文		●		●	60	①②③④
評価の 特記事項	卒業研究発表会で発表する予定の学生は、発表年度の前年度3月末に、論文の草稿を提出すること。 研究成果の発表(40％：抄録10%、発表内容10%、わかりやすさ10%、質疑応答10%)、論文(60％：内容50%、体裁10%)で評価する。ただし、指導教員が認めない抄録提出は発表できない。また、指導教員が認めない卒業論文は、評価対象にならない。 また、研究を進める上で、倫理的問題があった場合には本科目の受講を取り消す場合がある。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
この科目は、特定の授業時間のみで行うものではなく、指導教員の指導の下、各自の研究計画によって行われる。 研究計画を立てて、計画的に遂行していくよう努めてほしい。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
すべての過程において、学生から指導教員に意見を述べ、助言やフィードバックを受けてほしい。積極的な討論により、研究はすすむ。 また、卒業研究発表会で研究成果を公開し、教員や他の学生からフィードバックを受け、論文作成に活かす。							
教科書							
なし							
参考図書							
各分野の成書							
備考：履修者への要望							
理学療法研究法Ⅰ、理学療法研究法Ⅱの単位を修得した者が、本科目の評価対象者となる。 本科目で、卒業論文をまとめ上げることは、総合的な学習成果の指標になる。他の科目で学習した知識にとどまらず、実習や自己学習で得た知識や経験を活かして、積極的に研究活動を進め、理学療法士に必要な思考過程や問題解決能力を向上してほしい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
92	総合演習	理学療法学専攻	4学年	必修	2単位	60時間
担当教員名						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・内藤 通孝・山田 南欧美・ 齊藤 誠・濱田 光佑・藤本 大介						
実務経験のある教員						
山田 和政・林 尊弘・松田 文浩・加藤 真弓・松村 仁実・宮津 真寿美・臼井 晴信・木村 菜穂子・山田 南欧美・齊藤 誠・濱 田 光佑・藤本 大介：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士としての臨床経験を有する。 内藤 通孝：大学病院にて医師としての実務および教育、研究の経験を有する。						
授業概要						
(概要) 本演習は主として各講義や実習などで学んだ知識を整理し、卒業後の診療活動における専門職として必要な総合的能力を統合させることを目的とし、本学におけるすべての講義、演習、実習の成果を総括する。 理学療法士として必要な知識等について、講義や複数の教員によるゼミナール形式で、これまでに学習した内容をより臨床に向けて整理し、一人の理学療法の専門家として活躍できるように準備を行う。 (オムニバス方式／全30回) (山田 和政／24回・林 尊弘／24回・松田 文浩／24回・加藤 真弓／24回・松村 仁実／24回・宮津 真寿美／24回・臼井 晴信／24回・木村 菜穂子／24回・山田 南欧美／24回・齊藤 誠／24回・濱田 光佑／24回・藤本 大介／24回) (共同) 理学療法士のキャリア形成、社会に出るにあたり、理学療法に関する知識、専門基礎分野、専門分野、総まとめ (内藤 通孝／6回) 専門基礎分野 (人体の構造と機能及び心身の発達、疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進、総まとめ)						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2○	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①理学療法士として必要な総合的な知識を身につける(他者に適切に説明できる) ②理学療法士としてだけでなく、一医療人、一社会人として医療施設、福祉施設、地域などにおいて求められる能力を理解することができる					
思考・判断 ・表現	③理学療法士として臨床における問題解決能力を身につけることができる					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
演習	グループワークによるアクティブラーニングおよび個人において演習を行う					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	理学療法士のキャリアについて	理学療法士としてのキャリア形成について			
2	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	社会に出るにあたり	医療人として、社会人として求められる能力について			

3	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	社会に出るにあたり	医療人として、社会人として求められる能力についての確認
4	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	理学療法に関する知識について	理学療法士として必要な基礎的知識と技術を用いた問題解決方法について
5	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	理学療法に関する知識について	理学療法士として必要な基礎的知識と技術を用いた問題解決方法について
6	内藤	専門基礎分野	人体の構造と機能及び心身の発達分野（解剖学）について、卒業後の診療活動に向け、これまでに学んだ知識を統合する。
7	内藤	専門基礎分野	人体の構造と機能及び心身の発達分野（生理学）について、卒業後の診療活動に向け、これまでに学んだ知識を統合する。
8	内藤	専門基礎分野	人体の構造と機能及び心身の発達分野（人間発達学）について、卒業後の診療活動に向け、これまでに学んだ知識を統合する。
9	内藤	専門基礎分野	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進分野（臨床医学総論）について、これまで学んだ基礎医学などの知識等を活用し、卒業後の診療活動に向け課題に取り組む。
10	内藤	専門基礎分野	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進分野（リハビリテーション医学）について、これまで学んだ基礎医学などの知識等を活用し、卒業後の診療活動に向け課題に取り組む。
11	内藤	専門基礎分野	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進分野（臨床医学）について、これまで学んだ基礎医学などの知識等を活用し、卒業後の診療活動に向け課題に取り組む。
12	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	専門基礎分野	保健医療福祉とリハビリテーションの理念分野（リハビリテーション概論）について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
13	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	専門基礎分野	保健医療福祉とリハビリテーションの理念分野（保健医療福祉）について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
14	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	専門基礎分野	保健医療福祉とリハビリテーションの理念分野（保健医療福祉）について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
15	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	専門基礎分野	【PT】理学療法評価学分野・治療学分野（理学療法の基礎・治療学基礎）について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。

29	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	まとめ	総まとめ				
30	山田(和)・松田・林・加藤・松村・宮津・臼井・木村・山田(南)・齊藤・濱田・藤本	まとめ	総まとめ				
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●	●		100	①②③
評価の特記事項	筆記試験で100％評価する。 ※受験要件として、すべての科目の単位修得できていること。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
4年間の集大成として理学療法士に関する知識の整理と統合が重要である。そのための学習は本講義のみでは不十分であるため、積極的な課外学習をしておく必要がある。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
模擬試験なども活用し、各課題終了時点で紙面もしくは口頭でフィードバックを行う。							
教科書							
関係各成書全般							
参考図書							
関係各成書全般							
備考：履修者への要望							
最終的に必要な知識を修得し統合した上で、臨床現場へ就職していくことになる。そのために知識の習得は必須条件となる。各自が自身の能力を客観的に自覚し、積極的な取り組みをする必要がある。この科目は、集大成であるという心構えで取り組んで欲しい。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
93	作業療法概論	作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
岩井 和子						
実務経験のある教員						
岩井 和子：作業療法士として勤務し身体障害領域・老年期障害領域の臨床経験を有する教員が、作業療法理論び実践の概要について講義する。						
授業概要						
本講義は作業療法学の導入科目であり、その歴史および専門性についての理解に必要な基礎知識を学び、作業療法士としてのアイデンティティを養い、以後の専門科目につながる根幹科目である。各領域の作業療法の概要を理解する事を目的とし医療の倫理を踏まえた医療人、作業療法士としての態度を学ぶことを目的とする。講義及び課題に対する調査・考察レポートの作成によるアクティブラーニングをその内容とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①作業療法の定義及び原理を理解できる ②治療手段としての作業、目的とする作業について理解できる ③作業療法におけるクリニカルリーズニングの概要を理解できる ④作業療法における実践過程を理解できる ⑤医療・保健・福祉領域における作業療法士の機能と役割について理解できる ⑥作業療法士の倫理について理解できる					
思考・判断 ・表現	⑦作業療法における初回評価～治療計画～最終評価の過程について、その概要を事例を通して説明できる ⑧人の健康に対する作業の関与について説明できる ⑨作業療法士の倫理について事例を通して説明できる ⑩医療・保健・福祉領域における作業療法士の昨日と役割について、自身の言葉で説明できる					
技能	⑪指定された内容・様式でレポート作成ができる					
関心・意欲 ・態度	⑫ノートテイクを丁寧に行うことができる ⑬レポートは指定された内容、提出期限を守って提出することができる					
授業形態						
講義	対面授業（講義及びアクティブラーニング）					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	岩井	作業療法の歴史	リハビリテーションの歴史及び作業療法のわが国及び欧米諸国の歴史を学ぶ			
2	岩井	作業療法と作業	作業療法の基礎となる人の健康と作業の関与について学ぶ マイデイマイライフ			
3	岩井	リハビリテーションと作業療法	リハビリテーション全過程における作業療法の機能と役割及び多職種との連携について及び、国際疾病分類（ICD）/国際障害分類/国際生活機能分類について学ぶ 事例を通し、国際生活機能分類（ICF）図を学ぶ			
4	岩井	作業療法の領域と対象	身体障害/老年期障害/小児発達障害/精神障害の各領域における対象と臨床現場についてその概要を学ぶ			
5	岩井	作業療法の実践課程 （1）	作業療法の評価～治療計画～実践までの過程について学ぶ			

6	岩井	作業療法の実践課程 (2)	クリニカル・リーズニングと科学的根拠に基づいた医療（EBM）について学ぶ					
7	岩井	作業療法の実践課程 (3)	作業療法実践における記録と報告について学ぶ					
8	岩井	作業療法士の資質	作業療法教育と作業療法士に求められる資質・適性・倫理について学ぶ					
9	岩井	世界の作業療法	世界における作業療法実践及び作業療法士について学ぶ					
10	岩井	作業療法の実際 (1)	身体障害領域の作業療法実践の概要を学ぶ					
11	岩井	作業療法の実際 (2)	老年期障害領域の作業療法実践の概要を学ぶ					
12	岩井	作業療法の実際 (3)	小児・発達障害領域の作業療法実践の概要を学ぶ					
13	岩井	作業療法の実際医 (4)	精神障害領域の作業療法実践の概要を学ぶ					
14	岩井	保健・福祉領域と作業療 法 (5)	医療・保健・福祉各領域における作業療法士の機能と役割について学ぶ					
15	岩井	ライフヒストリーと重要な作業	ライフヒストリー及び個人にとっての重要な作業について学ぶ 自身のライフヒストリーレポートを作成する					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	90	①②③④⑤⑥⑩⑫
	レポート		●	●	●	●	10	④⑦⑧⑨⑩⑪⑬
評価の 特記事項	筆記試験（90％）、レポート2課題（10％：評価内容は授業内で提示）とし、これらの総合60％以上を単位認定とする。 再試験は筆記試験についてのみ実施し、最終評価は再試験結果とする							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
1回の授業につき1時間以上の事後学修（教科書・授業資料・ノート等による復習）を行うこと （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートは採点后、随時返却する 成績発表後、フィードバックシートにてフィードバックを行う								
教科書								
「作業療法テキスト 作業療法概論」石川朗 ほか 中山書店								
参考図書								
授業開始後、必要に応じて周知する								
備考：履修者への要望								
事後学修を行うこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
94	臨床運動学	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
渡邊 豊明						
実務経験のある教員						
渡邊 豊明：医療機関、通所介護事業所において作業療法士として勤務し、身体障害領域及び老年期領域の臨床経験を有する教員が、疾患別動作特性についての講義を行う。						
授業概要						
様々な疾患によって引き起こされる機能障害により、人の動作には変化が生じる。その変化とは、疾患ごとにどのような特徴があるのか、またなぜ生じるのかを運動学的に分析する手法を理解することを本科目の目的とする。同時に、それらの動作の変化に対してどのような作業療法的アプローチが可能かを、講義及び模擬実践を通して習得する。本科目では日常生活活動（ADL）に関わる作業療法のうち、起居・移動動作に焦点を当てて講義する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①疾患や加齢により生じる動作方法の変化についてなぜそのような動作になるのか、運動学で学習した知識を基に説明できる。					
思考・判断 ・表現	②多様な動作分析の視点を挙げることができる。					
技能	③動作をモトスコピーを用いて記録し、層ごとの特徴を簡潔な文章で記述できる。					
関心・意欲 ・態度	④講義や実技に関心を持ち、積極的に参加することができる。					
授業形態						
講義	講義を主体とするが、理解を深めるために模擬体験やレポート作成など、能動的な学習を促す演習を多く併用する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	渡邊	オリエンテーション 寝返り、起き上がり	脊髄損傷、片麻痺、その他の疾患 教科書：474-479			
2	渡邊	車いす移動	車いす移動：教科書442-448			
3	渡邊	立ち座り	様々な起立の方法：教科書494-498			
4・5	渡邊	移乗動作	一人介助、二人介助、三人介助 参考資料			
6	渡邊	杖歩行	杖歩行：教科書530-535			
7	渡邊	姿勢 肩甲帯・肩	姿勢反応とバランス：教科書358-363 肩の分析：教科書113-120			

8	渡邊	講義のまとめ	授業の総括を行う。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート	●	●	●	●	85	①②③④
	参加貢献度				●	15	⑤
評価の 特記事項	・レポートは、課題ごとに評点を定めたルーブリックを用いて評価する。評点は課題ごとに提示する。 ・レポートは、提出の遅滞や内容の不足があった場合に減点する。評価方法の合計が6割に満たない場合、再提出（再試験）を求める。 ・参加貢献度の評価は、ルーブリックを使用し、積極性、質疑・意見交換、授業聴講態度を5段階で評価する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習：提示されるテーマについて、教科書を熟読し予習する。 復習：学習したテーマについて復習し、理解を深める。 課題：授業にて指示された課題について調べ、まとめる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
レポートは、コメントを記入するなどしてフィードバックする。							
教科書							
「PT・OTのための運動学テキスト」小柳磨毅　ほか　金原出版							
参考図書							
「基礎運動学」中村隆一　ほか　医歯薬出版							
備考：履修者への要望							
・毎回実技を取り入れる。動きやすい服装で臨むこと。 ・動画の撮影できる機器（デジタルビデオカメラやスマートフォン）を持っている学生は、持参すること。 ・臨床における対象者の動作観察の視点を養い、動作変更の理由を考えるために必要な知識を身につける。 ・受け身的ではなく、自身の身体を教材に積極的に様々なことを考え、学ぶ取ること。 ・運動学や解剖学、身体障害領域の講義と関連付けて行うため、関連科目を含めた予習、復習を行うことを求める。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
95	基礎作業学	作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
岩井 和子						
実務経験のある教員						
岩井 和子：作業療法士として勤務し、身体障害領域・老年期障害領域の臨床経験を有する教員が作業療法理論び実践の概要について講義する。						
授業概要						
本科目は、作業療法の治療的要素である作業についての基礎的な知識を修得する。基礎作業学の概略、作業の分類、治療的要素としての作業とその遂行に及ぼす要因、作業を行う主体である人について、運動機能、心理機能、ライフステージなどと関連付けて学修する。また、作業分析の方法、各障害領域への作業適応について学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①作業療法における「作業」について内容、意義を理解できる ②作業遂行に関与する要因、要素について理解できる ③作業に焦点を当てた理論について理解できる ④各障害障害領域に対する治療的作業の適応を理解できる ⑤治療における作業決定の要因について理解できる					
思考・判断 ・表現	⑥人と作業の関係について説明できる ⑦作業に焦点をあてた理論について自身の言葉で説明できる ⑧各障害領域に対する治療的作業の適応を考えることができる					
技能	⑨治療的作業についての分析ができる ⑩指定された様式でのレポート作成ができる					
関心・意欲 ・態度	⑪ノートテイクを丁寧に行うことができる ⑫学生間の論議では積極的に発言することができる ⑬レポートは指定された内容、提出期限を守って提出することができる					
授業形態						
講義	対面授業（講義・グループワークを用いた演習）					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	岩井	作業とは何か	作業療法における「作業」とについての構成、人の生活のなかの作業の意義			
2	岩井	作業遂行	作業遂行の要因と構成要素およびそれらの関連			
3	岩井	作業の治療的応用（1）	作業分析とは / 作業分析をする *G. 課題、レポート①作成			
4	岩井	作業の治療的応用（2）	作業分析をする / *G. レポート発表			
5	岩井	作業の治療的応用（3）	作業のもたらす生理的・精神的反応			
6	岩井	作業体験と作業活動分析	コラージュ作成と作業活動分析 *レポート②作成			

7	岩井	作業選択と段階付け	治療計画における作業決定要因と、段階付けについて					
8	岩井	自己の作業分析	人間作業モデル（MOHO）による自身の作業分析 ＊レポート③作成					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				50	①②③④⑤
	レポート		●	●	●	●	25	③⑦⑩⑬
	演習			●	●	●	25	⑥⑧⑨⑪⑫
評価の 特記事項	筆記試験（50%）、演習（25%：演習シート評価基準は授業内で提示）及びそのレポート（25 %：評価基準は授業内で提示）とし、以上の総合60%以上をもって単位認定とする。 再試験は筆記試験についてのみ実施し、最終評価は再試験結果とする。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
授業の事前事後における自己学習4時間（教科書・授業資料等を用いた予習・復習）を行う （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
成績発表後、フィードバックシートにてフィードバックを行う。 レポートは、採点后返却する。								
教科書								
「作業学」（作業療法学ゴールドマスター・テキスト）長崎重信 監修 メジカルビュー社								
参考図書								
必要に応じ提示する。								
備考：履修者への要望								
事後学修を行うこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
96	基礎作業学実習	作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	60時間
担当教員名						
横山 剛・松田 裕美						
実務経験のある教員						
横山 剛・松田 裕美：医療機関で作業療法士として臨床経験のある教員が、実際の現場で使用していた作業やその方法を用い、作業療法における作業（アクティビティ）の用い方についての講義を行う。						
授業概要						
本科目は、基礎作業学で学んだ内容をもとに、実際に作業を行い、その内容を分析する。各種作業活動において、それぞれの作業手順の理解と作業分析を通して、作業療法における作業の位置づけを理解する。なお、本講義は2名の教員によるオムニバス形式にて実施する。本授業を通して作業を用いた治療構造の特性や強みを学生自身が実証しながら学んでいく。 (オムニバス方式／全30回) (松田 裕美／15回) 籐細工や作業の教え合いについて実習を行い、指導法について学修し、リハビリへの応用を考察する。 (横山 剛／15回) 革細工や陶芸などの作業種目による可塑性や自由度の違いについて段階づけて学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①各作業の材料の用途について正確に説明できる ②各作業の道具の用途について正確に説明できる ③作業時の注意点を説明できる					
思考・判断 ・表現						
技能	④各作業の材料の正確に使用できる ⑤各作業の道具を正確に使用できる ⑥作業時の注意点に基づき作業ができる					
関心・意欲 ・態度	⑦各作業の臨床での応用を考えることができる					
授業形態						
実習	講義を交えながら実習を行う。Googleformsで授業の疑問、次回授業の目標を聴取し、ICTを活用した双方向授業を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1～2	松田	籐細工：導入	籐の特性、籐を扱う道具、組み立ての工程、治療としての応用について講義する。作品づくりの用途を構想する。			
3～10	松田	籐細工：実施	籐細工の基本的な作成の仕方を学習し、自身の作品に応用する。用途に応じた籐細工の作成を製作する。			
11～12	松田	作業の教え合い：準備	自身の得意な作業、経験のある作業を他の学生に教示するため、必要な物品や工程、援助の仕方について計画を立てる。			

13～15	松田	作業の教え合い：実施	自身の得意な作業，経験のある作業を他の学生に教示する。教示を受けた学生は教示内容について「作業時間」「作業内容」「作業工程の自由度」「作業工程の段階付け」「作業の教示の仕方」について評価する。					
16～18	横山	革細工の基礎	実際に革を使い素材の特性、可塑性などの特性を知る。スタンピングの技法を通して作品を作製する。					
19～22	横山	陶芸の基礎	実際に粘土使い素材の特性、可塑性などの特性を知る。手びねりの技法を通して作品を作製する。削り、素焼き、施釉の工程を体験する。					
23～30	横山	木工の基礎	実際に木材の特性、可塑性などの特性を知る。製図、木取り、切断、切削、組み立て、塗装の工程を体験する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				60	①②③
	レポート		●		●	●	30	①②③④⑤⑥⑦
	参加貢献度				●	●	10	④⑤⑥⑦
評価の 特記事項	授業への参加貢献度(授業の振り返り，質問等を含む)（10％）、レポート（30％）、筆記試験（60％） すべての評価方法を合計し、基準点に満たない場合は再試験を行う。レポート課題については、講義内で詳細を示す。成績は参加貢献度、レポートともにルーブリック評価に基づいて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。再試験は筆記試験分の試験を行う。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
作製するものの用途やデザインを考える。次回授業時までに作業工程を確認する。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
授業貢献度、作業の教え合い評価、筆記試験で成績を判定する。レポート評価後、作品は返却する。								
教科書								
授業中にプリントを配布する。								
参考図書								
授業の中で紹介する。								
備考：履修者への要望								
これまでに行ったことがない作業が含まれる。初めて行う作業に対する自身の感情や感覚を忘れないでおく。作業をすることの意味や治療として用いることの意味を説明できることを目標に実習に取り組む。道具の取り扱いには細心の注意を払う。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
97	作業療法管理学	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
石井 文康						
実務経験のある教員						
石井 文康：勤務していた医療施設等において作業療法士として管理運営の経験を有する教員が講義を行う。						
授業概要						
作業療法士有資格者の増加とともに、部門管理、施設内管理等を担う役割が必要とされている。職場管理者等となった際に必要な作業療法をとりまくマネジメントについて学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①臨床現場での作業療法管理について、述べることができる。					
思考・判断 ・表現	②管理する側、管理される側について予測することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	主に講義形式で行う中で、管理学の模擬的実践を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	石井	作業療法管理学概論Ⅰ	社会科学からみた管理学等について学ぶ。			
2	石井	作業療法管理学概論Ⅱ	医療における管理学、リハビリテーションにおける管理学等について学ぶ。			
3	石井	作業療法管理学各論Ⅰ	作業療法士が勤務する組織と関連法規等について学ぶ。			
4	石井	作業療法管理学各論Ⅱ	職業倫理、作業療法士の倫理等について学ぶ。			
5	石井	作業療法管理学各論Ⅲ	リスク管理、作業療法で起こり得る有害事象等について学ぶ。			
6	石井	作業療法管理学各論Ⅳ	病院における管理・運営等について学ぶ。			
7	石井	作業療法管理学各論Ⅴ	介護保険関連施設における管理・運営等について学ぶ。			

8	石井	まとめ	全体についてのまとめ				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・ 理解	思考・判断・ 表現	技能	関心・意欲・ 態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験	●	●			70	①②
	レポート	●	●		●	30	①②
評価の 特記事項	全ての評価方法を合計した評点が60点未満の場合、再試験を実施する。 再試験の際は、全ての評価方法の合計点数で評価する。 レポートは記述内容（まとめ方など）で評価し、配点など評価方法は授業内で提示する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
・各単元の授業に配布されたレポート課題を作成する。 ・各単元の授業テーマ・内容に関連した教科書の該当ページを読み込む。 ・授業での配布資料やレポートを整理し、ポートフォリオを作成する。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
課題の振り返りを行う。							
教科書							
「作業療法管理学」（作業療法学　ゴールド・マスター・テキスト）長崎重信　監修　メジカルビュー社							
参考図書							
「リハビリテーション管理学」（PT・OTビジュアルテキスト）　齋藤昭彦　ほか　羊土社							
備考：履修者への要望							
積極的な授業参加を希望。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
98	作業療法管理学演習	作業療法学専攻	4学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
石井 文康						
実務経験のある教員						
石井 文康：勤務していた医療施設等において作業療法士として管理運営の経験を有する教員が演習を行う。						
授業概要						
作業療法士者数の増加とともに、部門管理、施設内管理等を担う役割が必要とされている。作業療法管理学について演習を通して学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①臨床現場での作業療法管理について、理解することができる。 ②臨床現場で求められる作業療法管理について述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③管理する側、管理される側について説明することができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④課題に対し、作業療法管理等の在り方を様々な角度から討議することができる。					
授業形態						
演習	主にグループワークを行い、必要に応じて説明、解釈を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	石井	オリエンテーション	概要、実習課題①～⑤の説明等			
2	石井	ワークショップ	課題① (各グループで課題を行う。)			
3	石井	ワークショップ	課題② (各グループで課題を行う。)			
4	石井	ワークショップ	課題③ (各グループで課題を行う。)			
5	石井	ワークショップ	課題④ (各グループで課題を行う。)			
6	石井	ワークショップ	課題⑤ (各グループで課題を行う。)			
7	石井	まとめ	各課題のまとめ			
8	石井	まとめ	全体についてのまとめ			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・ 理解	思考・判断・ 表現	技能	関心・意欲・ 態度	割合（％）	到達目標
	レポート	●	●		●	95	①②③④
	参加貢献度				●	5	④
評価の 特記事項	レポート等未提出の場合、かつ6割を満たさない場合は未修得となりますので注意してください。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
・各単元の授業に配布されたレポート課題を作成する。 ・各単元の授業テーマ・内容に関連した教科書の該当ページを読み込む。 ・授業での配布資料やレポートを整理し、ポートフォリオを作成する。 (1コマあたりの準備学習時間：4時間)							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
課題の振り返りを予定。							
教科書							
「PT・OTビジュアルテキスト リハビリテーション管理学」 齋藤昭彦 下田信明 羊土社							
参考図書							
「作業療法管理学入門（第2版）」 大庭潤平 医歯薬出版							
備考：履修者への要望							
積極的な授業参加を希望。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
99	作業療法評価法	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
清水　一輝						
実務経験のある教員						
清水　一輝：作業療法士として勤務し、身体障害領域・老年期障害領域の臨床経験を有する教員が、作業療法評価の概要について講義する。						
授業概要						
本科目では、作業療法のプロセス（情報収集、評価、問題点と利点の抽出、目標の設定、治療計画の立案、再評価、効果判定）と作業療法評価の意義目的について説明できることを目的とする。身体障害・精神障害・老年期・発達の各領域に共通する作業療法評価の基礎について学び、特に各領域共通の面接（カナダ作業遂行測定（以下、COPM）、作業選択意思決定ソフト（以下、ADOC））や観察（運動技能とプロセス技能の評価（以下、AMPS））について学ぶ。また、記録や報告の意義についても学修し、作業療法の診療録についての基本的な知識を習得する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	（●：強い関連がある　○：関連がある）	
知識・理解	①作業の特性を踏まえて作業療法の評価について論じることができる ②作業療法の実践過程について説明できる ③作業療法の領域を列挙することができる ④領域共通の各種検査の意義や目的，実施方法について説明できる ⑤身体機能、精神機能、発達過程、高齢期機能それぞれの評価の特徴について比較して説明できる					
思考・判断 ・表現	⑥講義ノートで学びを整理し、理解できた内容や疑問点について説明できる					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑦グループワークに積極的に参加し、講義の理解を深めるような議論ができる					
授業形態						
講義	教科書、配布資料による講義と評価の演習やグループワークなどのアクティブラーニングを行う。					
授　業　計　画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	清水	作業療法評価とは	授業の進め方、評価基準に関するオリエンテーション 「評価」「作業」の意味を知り、作業療法における評価とは何かを学ぶ			
2	清水	作業療法の実践過程，領域について	作業療法の実践枠組みと評価すべき領域について学ぶ			
3	清水	面接・観察	面接の目的や種類，観察の種類などについて学ぶ　2章1, 2			
4	清水	バイタルサイン	意識の種類や評価，バイタルサインについて学ぶ　2章5			
5	清水	形態計測・関節可動域	形態測定の種類，関節可動域測定の意義と目的などについて学ぶ　2章7, 13			
6	清水	感覚	感覚・知覚検査の意義や目的，感覚の伝導路などについて学ぶ　2章6			
7	清水	筋力	筋力検査の方法や意義と目的などについて学ぶ　2章8			

8	清水	筋緊張・姿勢と反射	筋緊張検査，反射検査，姿勢反射検査・バランス機能検査の方法や目的などについて学ぶ 2章9, 11					
9	清水	体力と代謝	協調性検査の方法や意義，脳神経検査の方法などについて学ぶ 2章12					
10	清水	上肢機能・摂食・嚥下	上肢機能検査の種類や検査方法，摂食・嚥下機能検査の方法について学ぶ 2章14, 16					
11	清水	ADL	日常生活活動の評価方法について学ぶ 2章19					
12	清水	社会生活	興味，関心，役割の評価について学ぶ 2章21					
13	清水	人間作業モデル・作業遂行能力	人間作業モデルの基本的な考え方やその評価，作業遂行の評価について学ぶ 2章23, 24					
14	清水	QOL・ICF	QOLの評価，ICFの考え方について学ぶ 2章25, 26					
15	清水	まとめ	これまで学んだ知識を振り返り，改めて作業療法士が評価すべき対象や実践領域ごとの違いについて学ぶ					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				70	①②③④⑤
	ポートフォリオ		●	●		●	30	①②③④⑤⑥⑦
評価の特記事項	すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験は、全ての評価方法の合計点数で評価する。 ポートフォリオはルーブリックを用いて評価する。 ポートフォリオには毎回の講義資料、課題、文献、自己学習の記録など講義に関連する全ての資料を含める。ポートフォリオは授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前に教科書の該当箇所を学習する。 講義の中で取り組んだ課題について復習しながら疑問点を整理・学習し、ポートフォリオにまとめる。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験結果は研究室内で内容を確認できる。ポートフォリオの評価基準は事前に通知する。								
教科書								
「作業療法評価学」（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト）佐竹勝、石井文康 編 メジカルビュー社								
参考図書								
授業中に適宜資料を配布する。								
備考：履修者への要望								
皆さんが目指す作業療法士は、常に自己研鑽が必要である。この講義の中で、知識を与えられるだけでなく、自ら学ぶ姿勢が身につけられるようにポートフォリオのまとめや予習復習に取り組むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
100	作業療法評価法実習Ⅰ	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
渡邊 豊明・清水 一輝						
実務経験のある教員						
渡邊 豊明：医療機関、介護老人保健施設、通所介護事業所において作業療法士として勤務し、身体障害領域の臨床経験を有する。 清水 一輝：医療機関、介護老人保健施設、通所リハビリテーション事業所において作業療法士として勤務し、身体障害領域の臨床経験を有する。						
授業概要						
本科目では、実習を行うことにより、作業療法で用いられる基本的な評価技術の習得を目的とする。身体障害領域で主に用いられる、バイタルサイン、腱反射、筋緊張、関節可動域、筋力などの実施方法、記録方法とその結果の解釈の仕方について実習を通して身につける。また、事例を通じて、必要な評価を選択できるように知識を深める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①検査の目的、手順、注意点を説明できる。 ②筋の起始、停止、神経支配、作用について説明できる。					
思考・判断 ・表現	③事例を通して、必要な評価を選択できる。					
技能	④検査を、正確・迅速・丁寧に実施できる。 ⑤決められた形式で、検査結果を記録できる。					
関心・意欲 ・態度	⑥大きく明瞭な声で検査の目的や内容を説明することができる。 ⑦明るく、柔らかな表情で対応することができる。					
授業形態						
実習	実習では、動画撮影によるフィードバック、グループディスカッションによる討議などを用いて進めて行く。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	渡邊・清水	オリエンテーション バイタルサインの測定	脈拍、血圧、呼吸の測定を実施：教科書①pp53-64			
2	渡邊・清水	形態計測	形態計測を実施：教科書①pp65-71			
3	渡邊・清水	関節可動域測定（ROM） 上肢①	肩甲帯、肩の可動域測定：教科書①pp82-83			
4	渡邊・清水	関節可動域測定（ROM） 上肢②	肘、前腕、手、手指の可動域測定：教科書①pp83-84			
5	渡邊・清水	関節可動域測定（ROM） 下肢①	股、膝の可動域測定：教科書①pp84-85			
6	渡邊・清水	関節可動域測定（ROM） 下肢②	足、足部の可動域測定：教科書①pp85-86			

7	渡邊・清水	関節可動域測定 (ROM) 体幹	頸部、胸腰部、その他の検査法：教科書①pp86-88
8	渡邊・清水	関節可動域測定 (ROM) まとめ	検査の目的説明から検査の実施、記録までの基本実践。体位をできるだけ変えない応用実践。：教科書①pp72-95
9	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) 上肢①	肩甲骨外転と上方回旋、挙上、内転、下制と内転、内転と下方回旋、下制：教科書②pp82-108
10	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) 上肢②	肩関節屈曲、伸展、外転、水平外転、水平内転、外旋、内旋：教科書②pp109-139
11	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) 上肢③	肘関節屈曲、伸展、前腕回外、回内、手関節屈曲、伸展：教科書②pp140-166
12	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) 手指	指の中手指節 (MP) 関節屈曲～対立運動 (母指を小指へ)：教科書②pp167-203
13	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) 下肢①	股関節屈曲、屈曲・外転および膝関節屈曲位での外旋、伸展、外転、屈曲位からの外転、内転：教科書②pp206-234
14	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) 下肢②	股関節外旋、内旋、膝関節屈曲、伸展、足関節底屈、背屈ならびに内がえし、足の内がえし、足の背屈位を伴う外がえし：教科書②pp235-269
15	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) 頭・頸部、体幹	頭部伸展～体幹回旋：教科書②pp22-65
16	渡邊・清水	徒手筋力検査 (MMT) まとめ	検査の目的説明から検査の実施、記録までの基本実践。体位をできるだけ変えない応用実践。：教科書②pp22-269
17	渡邊・清水	感覚検査	感覚検査を実施：教科書①pp114-129
18	渡邊・清水	反射・筋緊張検査	深部腱反射、病的反射を実施：教科書①pp130-137 筋緊張評価を実施：教科書①pp151-159
19	渡邊・清水	姿勢反射・バランス検査	姿勢反射・バランス検査の実施：教科書①pp138-150
20	渡邊・清水	協調性検査	協調性検査の実施：教科書①pp160-167
21	渡邊・清水	上肢機能検査	上肢機能検査の実施：教科書①pp204-212
22	渡邊・清水	事例検討	事例に合わせた検査法の選択
23	渡邊・清水	事例報告 まとめ	事例に合わせた、検査法選択 まとめ

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実技試験	●	●	●	●	80	①②③④⑤⑥⑦
	事例報告	●	●		●	20	①②③⑥⑦
評価の 特記事項	ROM、MMTの実技試験は事前にルーブリックを提示し、合格点に達しない場合は、再試験を実施する。事例検討・報告はルーブリックで評価する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習：ROMは、教科書①にて基本軸、移動軸、注意点を事前学習（1時間）、MMTは、教科書②にて筋の起始、停止、神経支配、作用を事前学習（1時間） 復習：実技の定着を深めるため、復習（1時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
実技試験は、試験終了時に即時フィードバックを実施する。							
教科書							
「作業療法評価学」（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト）佐竹勝、石井文康編 メジカルビュー社 「新・徒手筋力検査法」津山直一 協同医書出版社 「運動・からだ図解 筋と骨格の触診術の基本」藤縄理 マイナビ出版 「ベッドサイドの神経の診かた」田崎義昭 南山堂							
参考図書							
特になし							
備考：履修者への要望							
筋の触診、視診、可動域を正確に測定するために、半袖、半ズボンの服装で授業の受講を望む。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
101	作業療法評価法実習Ⅱ	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
横山 剛・松田 裕美						
実務経験のある教員						
横山 剛・松田 裕美：作業療法士として精神科臨床経験のある教員の指導のもと、作業療法評価の中の面接を実施できるようになることを目標に、教員が演じる面接の風景から考察することを教授する。						
授業概要						
本科目は、作業療法評価として必要な情報にはどんなものがあるか、また評価はどのように進めていくのかなどについて、面接を中心に実施し、対象者の主観の理解に努めながら部分的に実際に他者を評価する。スーパーバイズを受けながら探索していく実習形式を主体に進める。カール・ロジャースのカウンセリング技法から共感的理解、自己一致、無条件の肯定的関心について学んでいく。 (横山 剛／10回) カウンセリング、面接に関する講義 (横山 剛・松田裕美／13回) (共同) 面接実習						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①国際生活機能分類（ICF）に照らして他者理解のため必要な情報を説明できる。 ②必要な情報を得るための方法を説明できる。					
思考・判断 ・表現	③自身が他者の何を理解しようとしているか説明できる。					
技能	④面接の結果を適切に記録することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤得られた情報を作業療法の視点から解釈することができる。					
授業形態						
実習	講義・実習 講義をして実習をする形で行う。教員の面接の風景を見て考察してみる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横山	作業療法の評価プロセス	評価プロセスを確認する			
2	横山	作業療法の評価とは？	評価の意味を確認する			
3	横山	コミュニケーションと作業療法	コミュニケーションの種類			
4	横山	対話について	患者との実際のやり取りから対話について考える			
5	横山	絵描き歌の演習	音声情報でどこまでわかるか体験する			
6	横山	面接について	質問の仕方の工夫、ジョハリの窓			

7	横山	面接について	情報の変容の演習（伝言ゲーム）					
8	横山	面接について	情報の変容の演習（伝言ゲーム）					
9	横山	面接について	心理療法					
10	横山	面接について	カウンセリング（共感的理解、自己一致、無条件の肯定的関心について）					
11	横山・松田	面接実習	作業療法評価プロセスにおけるポイント					
12	横山・松田	面接実習	対話録の説明					
13	横山・松田	面接実習	教員が演じる面接風景を観察する					
14	横山・松田	面接実習	結果をまとめる					
15～22	横山・松田	面接実習	教員からのフィードバック					
23	横山・松田	ペア学生の分かち合い	評価した内容についてペア学生が分かち合いの作業をする					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●	●	●	●	70	①②③④⑤
	参加貢献度					●	30	⑤
評価の 特記事項	参加貢献度は、積極的に発言し、その内容・回数に基づき評価する。 基準点（60点）に満たない場合は、レポート指導をした上で再提出とするが再試験の扱いとはしない。成績は参加貢献度、レポートともにルーブリック評価に基づいて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
・配布プリントから面接の特徴について考える。（30分程度） ・教員の演じる面接の風景から考察する。（1時間程度）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
授業の振り返りの内容について次回授業時にフィードバックする。								
教科書								
授業中にプリントを配布する。								
参考図書								
適宜紹介する。								
備考：履修者への要望								
本授業は、知識を暗記するための授業ではなく、作業療法の評価とはどんなものであるのかを自ら疑問を持ち探求していく授業である。つまり、主体的な実習参加が求められる。この授業で疑問や感想を多く持つことで、作業療法専門科目の授業をより意欲的に受けられるようになって欲しい。自身の確かな学習の感覚を養って欲しい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
102	身体障害作業評価学	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
加藤 真夕美						
実務経験のある教員						
加藤 真夕美：医療機関、介護老人保健施設、保健センター、通所介護事業所などにおいて作業療法士として勤務し、身体障害及び高齢期領域の臨床経験を有する教員が、身体障害領域で主に用いられる評価の基礎知識についての講義を行う。						
授業概要						
本科目は、身体障害領域において主に対象とする心身機能・身体構造の分類、障害の種類、障害の神経学的解釈の仕方、代表的な評価方法についての知識を修得することを目的とする。授業は講義形式で実施し、バイタルサイン、意識レベル、機能形態計測、関節可動域、筋力、反射、筋緊張、知覚、協調性、バランス、上肢機能などを講義の範囲とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①身体障害領域における評価の意義を説明できる。 ②各心身機能／身体構造の分類・障害の種類を挙げ、説明することができる。 ③各心身機能／身体構造、および活動／参加に対する代表的な評価方法を挙げることができる。 ④作業療法で必要な医用画像の種類や特性、および画像の評価方法を説明することができる。					
思考・判断 ・表現	⑤各心身機能／身体構造を作業療法士が評価することの意義を説明することができる。 ⑥各心身機能／身体構造の障害によって活動／参加にどのような影響が生じるのかを、各自の生活に照らし合わせて考察できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑦提出物を、期限に遅れることなく、また内容が不足することなく確実に提出することができる。					
授業形態						
講義	資料を用いた知識伝達型の講義を中心に、アクティブラーニング（復習課題・小テスト・ポートフォリオ・グループワーク・ディスカッション）を組み合わせる行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤	オリエンテーション	主な対象疾患、病期、作業療法評価の意義と視点など、身体障害領域作業療法の概要を学ぶ。（第1章）			
2	加藤	生理機能の評価 摂食・嚥下機能、排泄機能 の評価	生理機能および摂食・嚥下機能、排泄機能に関する基礎知識とその障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ）			
3	加藤	骨・関節の機能と構造の評価	骨・関節の機能と構造について、その障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－Ⅲ，Ⅳ）			
4	加藤	筋の機能と構造の評価	筋の機能と構造について、その障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－Ⅴ）			
5	加藤	知覚機能の評価①	上行性伝導路と知覚機能の関連を、解剖学の復習を通して学ぶ。（第2章－Ⅵ）			
6	加藤	知覚機能の評価②	体性感覚・特殊知覚に関する基礎知識とその障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ）			
7	加藤	運動機能の評価①	下行性伝導路と運動機能の関連を、解剖学の復習を通して学ぶ。（第2章－Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ）			
8	加藤	運動機能の評価②	筋緊張・反射機能に関する基礎知識とその障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ）			

9	加藤	運動機能の評価③	運動麻痺に関する基礎知識とその障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第3章－Ⅰ）					
10	加藤	運動機能の評価④	協調性・不随意運動に関する基礎知識とその障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－Ⅸ～Ⅹ）					
11	加藤	運動機能の評価⑤	姿勢反射、バランスに関する基礎知識とその障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－Ⅷ）					
12	加藤	発話・構音機能の評価 精神機能の評価	発話・構音機能および精神機能に関する基礎知識とその障害の種類や評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第3章）					
13	加藤	上肢操作性の評価	上肢操作性に関する基礎知識と評価法について学ぶ。また、それらをOTが評価することの意義を学ぶ。（第2章－ⅩⅣ）					
14	加藤	総括①	これまでの知識を振り返り、理解を深める。					
15	加藤	総括②	これまでの知識を用いて、作業療法事例の検討を行う。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			70	①②③④⑤⑥
	小テスト		●				10	①②③④
	レポート		●	●		●	10	①②③④⑤⑥⑦
	ポートフォリオ					●	10	⑦
評価の 特記事項	・再試験は、筆記試験得点が6割未満の場合に実施する。 ・筆記試験得点が6割以上かつ、すべてのレポートとポートフォリオが提出された場合に、単位を認定する。 ・再試験は再筆記試験得点が6割以上であることを合格の条件とするが、総成績は小テスト・レポート・ポートフォリオすべての合計で算出する。 ・小テストがある日に欠席した場合には、その分の小テスト得点は、未受験として零点とする。 ・レポート、ポートフォリオは、課題ごとに評点を定めたルーブリックを用いて評価する。評点は課題ごとに提示する。 ・レポート、ポートフォリオは、提出の遅滞や内容の不足があった場合に減点する。内容によっては再提出を求める。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
・各単元の終わりに配布されたレポート課題を自宅で回答する。 レポートは次回の授業中に回収する（各回50分） ・このレポート課題をもとに、毎回小テストを行う。 ・授業での配布資料やレポートを整理し、ポートフォリオを作成する（各回10分）。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
・レポートは、コメントを記入するなどしてフィードバックする。 ・筆記試験は、希望のある学生に対し、個別に口頭でフィードバックを行う。								
教科書								
「作業療法評価学」（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト）佐竹勝、石井文康編 メジカルビュー社								
参考図書								
「ベッドサイドの神経の診かた」田崎義昭 ほか著 南山堂 「専門分野 作業療法評価学」（標準作業療法学）岩崎テル子 ほか編 医学書院								
備考：履修者への要望								
すべての専門支持科目及び専門科目と密接に関わる科目である。どのテキストを調べれば必要な知識が得られるか、などといった情報の整理を随時しておくこと。 疾患による個別の機能障害のみに目を向けるのではなく、重複する障害を有する対象者に対し、活動・参加や背景因子など多視点から評価し介入することができる知識と技術を身につけるよう心掛けてほしい。 また、急性期から生活期に至る幅広い病期および予防における作業療法士の役割を理解するように努めてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
103	精神障害作業評価学	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
横山 剛・松田 裕美・岩井 和子						
実務経験のある教員						
横山 剛・松田 裕美・岩井 和子：医療機関で作業療法士としての臨床経験のある教員が、精神障害領域における作業療法評価を実践できることを目標に精神障害作業療法の歴史や実際の方法について講義する。						
授業概要						
精神障害領域の作業療法は、障害のある人の精神・心理機能（特に認知の障害）について理解していることが必要である。更に精神障害を持つ人の「生きにくさ」について、精神医療の歴史や治療的自己を踏まえて理解することが必要である。 本講義は3名の教員によるオムニバス形式にて実施する。講義内容は①評価方法としての面接、観察を講義形式で学習する、②各種検査について実際に検査を実施し、各種検査の目的や違いについてグループディスカッションを行う、③代表的な精神疾患の作業療法評価計画の立案を模擬的に行う。 本授業を通して自身の持つ偏見や自分自身の気持ちの動きについても気づきを得る。						
(オムニバス方式／全9回)						
(横山 剛／5回・松田 裕美／3回・岩井 和子／1回) 面接、観察を講義形式で学習する						
(横山 剛／6回・松田 裕美／6回・岩井 和子／6回) (共同) 各種検査の目的について、代表的な精神疾患の作業療法評価計画の立案						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①精神科領域の評価を説明できる。 ②精神科領域の評価方法の長所・短所を説明できる。 ③精神科領域の評価の使用上の注意点を説明できる。					
思考・判断 ・表現	④ペーパーペイシェントの評価計画を立案できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤グループディスカッションに主体的に参加できる。 ⑥精神科領域に関心を持てる。					
授業形態						
講義	講義、グループディスカッション、感想や質疑応答					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横山	オリエンテーション	・シラバス，科目試験等の説明 ・精神医療，精神疾患に対するイメージ調査 ・自分自身の考え方や捉え方を知ろう！			
2～3	横山	精神障害作業療法の概要	・評価とは？ 評価することは評価されること 見学実習での面接や観察の視点共有 動画や映画を鑑賞し，精神医療の歴史について知ろう			
4	横山	作業療法の実際1	・精神の障害とは？ 解剖生理の知識と繋げてみよう 気分の波について			
5	横山	作業療法の実際2	・症状が日常生活に及ぼす影響 発症年齢や生きにくさ，回復段階について			
6	岩井	各種検査の実践1	・実際に検査をやってみよう！ 箱作り法 他			

7～9	松田	各種検査の実践2	・実際に検査をやってみよう！ 国家試験頻出のRehab, LASMI, BACS-Jなどの各種評価をグループにて実践し，検査の目的や違いについてディスカッションを行う。					
10～15	横山・松田・岩井	ペーパーペイシェントの評価計画の立案	・匂わせに気づこう！ 国家試験の実地問題等を用いて評価計画を立案する。 文中からペーパーペイシェントの症状や評価方法について気づく練習を行う。 疑問に思った点，もっと知りたい点について列挙し，複数の視点を導く。 ①回復段階の見極め方 ②評価項目の列挙 ③評価方法の選択 ④評価の目的，評価実施上の留意点 ⑤評価の優先順位					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●		●	60	①②③④⑤⑥
	感想・質問フォームの内容		●				20	①②③
	参加貢献度					●	20	⑤⑥
評価の特記事項	筆記試験（60％）、感想，質問フォームの内容（20％）、参加貢献度（20％）で評価する。60点の未満の場合は，筆記試験分のみの再試験を行う。 毎回の授業後に感想，質問フォームを実施する。参加貢献度は，積極的に発言し，その内容・回数に基づき評価する。フォームが未提出の場合は参加貢献度，フォームの内容とともに減点する。回答を忘れないよう心すること。参加貢献度，フォームの内容とともにループリック評価に基づいて評価する。ループリックは授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
毎週の授業資料を元に予習・復習に努めること。予習復習の要点がわからない場合は相談に応じる。 また日々の生活の中での自分自身の考え方や感じ方について気づきが得られるよう気持ちのチェックシートに気づいたことを書き留めておくことと良い。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
感想・質問フォーム，筆記試験に関して希望者には随時フィードバックする。								
教科書								
「精神障害と作業療法」山根寛 三輪書店 「作業療法評価学」（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト）佐竹勝，石井文康編 メジカルビュー社 その他配布プリント								
参考図書								
「精神疾患の理解と精神科作業療法」堀田英樹 編著 中央法規出版								
備考：履修者への要望								
精神科作業療法では，「精神」という目には見えない，数値的な変化がわかりづらいものを取り扱う。「精神」について知識を得ることや考えることは，“作業療法士になるため”だけでなく，自分自身の考え方や感じ方に気づききっかけとなると思う。疾患による個別の機能障害のみに目を向けるのではなく，重複する障害を有する対象者に対し，活動・参加や背景因子など多視点から評価し介入することができる知識と技術を身につけるよう心掛けて欲しい。 また，急性期から生活期に至る幅広い病期および予防における作業療法士の役割を理解するように努めて欲しい。 目に見えないから「わからない」「できない」と思い過ぎず，少しずつ知っていこうという気持ちで履修して欲しい。 毎回感想や質問を尋ねる。1つの物事に対して，様々な視点を持って考えられるよう5W1Hで考えていく練習をして欲しい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
104	発達障害作業評価学	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
加賀谷 繁						
実務経験のある教員						
加賀谷 繁：発達障害領域において肢体不自由児や自閉スペクトラム症などの子どもへの臨床経験ある教員が、発達障害児本人やその家族も含めた関わり方を通じて、評価の視点や評価の流れ、必要な評価手段としての内容について講義する。						
授業概要						
人の発達の特性を学修することで発達障害児の作業療法評価について理解を深めていく。特に姿勢や運動の発達過程を中心とした正常運動発達について学修することで、発達障害領域における作業療法評価の過程や評価内容について理解を深め発達障害領域の対象児のADLに関連付けた思考性を学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①発達障害作業療法評価の概要を理解し説明できる ②乳児期を中心とした各運動発達について、その各運動発達の関連性について理解し説明できる					
思考・判断 ・表現	③運動発達について、各姿勢や運動の構成要素の関連性の分析から機能的動作の状況を予測することができる					
技能	④運動発達について、姿勢や運動の発達過程と関連付けた観察ができる					
関心・意欲 ・態度	⑤発達障害領域の子どもと家族の暮らしへの支援について配慮する視点を持つことができる					
授業形態						
講義	講義、グループワーク					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加賀谷	発達障害作業療法評価学の概要	授業オリエンテーション、発達障害領域の評価の概要を学ぶ			
2	加賀谷	発達の特性	発達についてその特性を学ぶ			
3	加賀谷	姿勢と運動	姿勢と運動の関連性について学ぶ			
4	加賀谷	正常運動発達①	胎児の発達について学ぶ			
5	加賀谷	正常運動発達②	0～3ヶ月の運動発達について学ぶ			
6	加賀谷	正常運動発達③	4～6ヶ月の運動発達について学ぶ			
7	加賀谷	正常運動発達④	7～9ヶ月の運動発達について学ぶ			

8	加賀谷	正常運動発達⑤	10～12ヶ月の運動発達について学ぶ					
9	加賀谷	正常運動発達⑥	寝返りについて学ぶ					
10	加賀谷	正常運動発達⑦	座位・立位姿勢について学ぶ					
11	加賀谷	症例観察	症例の姿勢や運動と活動の関連性を学ぶ					
12	加賀谷	発達障害領域の作業療法過程①	発達障害領域の作業療法評価の流れを理解し学ぶ					
13	加賀谷	発達障害領域の作業療法過程②	発達障害領域の作業療法評価の内容を学ぶ					
14	加賀谷	上肢機能の発達	上肢・手指の運動発達段階について学ぶ					
15	加賀谷	まとめ	発達障害領域の作業療法評価の総括					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			50	①②③
	課題レポート		●	●		●	40	①②③⑤
	参加貢献度		●	●	●	●	10	①②③④⑤
評価の特記事項	全ての評価方法の合計点が6割に満たない場合は再試験を実施する（試験を課し、課題レポート・参加貢献度の評定も含める）。 課題レポートの内容については、講義内で詳細を示す。 参加貢献度は、毎回の講義ごとに意見・学んだことなどを記載してもらい提出用紙の内容により評価する。（授業資料等の整理も含む）詳細は講義内で説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
予習：『人間発達学』科目の教科書と資料の確認。教科書の該当部分の確認（30分） 復習：毎回の授業内容の再確認（30分） （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題レポートは、発表時にフィードバックする								
教科書								
「標準作業療法学 発達過程作業療法学」加藤寿宏 ほか編 医学書院								
参考図書								
「イラストでわかる人間発達学」上杉雅之 監修 医歯薬出版								
備考：履修者への要望								
正常運動発達に関して、様々な動画があげられていますのでそれらを視聴して子どもの発達について理解を深めておく。 疾患による個別の機能障害のみに目を向けるのではなく、重複する障害を有する対象者に対し、活動・参加や背景因子など多視点から評価し介入することができる知識と技術を身につけるよう心掛ける。 また、急性期から生活期に至る幅広い病期および予防における作業療法士の役割を理解するように努める。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
105	作業療法研究法	作業療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
石井 文康・廣渡 洋史・横山 剛・加藤 真夕美・渡邊 豊明・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之						
実務経験のある教員						
石井 文康・廣渡 洋史・横山 剛・加藤 真夕美・渡邊 豊明・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：医療機関や福祉施設などで作業療法士としての臨床経験を有する。						
授業概要						
研究を実施できる基本的な知識を習得する。 (石井 文康／12回) 研究者の心構えや研究の倫理、文献レビュー・文献研究の理解を図り、研究計画の手順と論文の構成の説明を行う。 石井 文康／3回・廣渡 洋史／3回・横山 剛／3回・加藤 真夕美／3回・渡邊 豊明／3回・清水 一輝／3回・松田 裕美／3回・外倉 由之／3回) (共同) 各教員の研究紹介と研究手法および検定方法の説明						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①研究の倫理、研究の流れを述べることができる。 ②調査研究、実験研究、事例研究等について応用することができる。 ③統計処理の基礎を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	④文献検索の方法を知り、興味ある文献を収集することができる。					
技能	⑤研究計画の手順と論文の構成について模擬的に実施することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥作業療法研究に興味を持つことができる。					
授業形態						
講義	主に講義形式で行う中で、研究法の模擬的実践を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	石井	作業療法研究法概論Ⅰ	研究の倫理、研究の意義、研究者の心構え等について学ぶ。			
2	石井	作業療法研究法概論Ⅱ	分野別研究とその流れ等について学ぶ。			
3	石井	作業療法研究法各論Ⅰ	文献レビューと文献研究を理解する。			
4	石井	作業療法研究法各論Ⅱ	文献レビューと文献研究を理解する。			
5	石井	作業療法研究法各論Ⅲ	調査研究を理解する。			

6	石井	作業療法研究法各論Ⅳ	実験研究を理解する。					
7	石井	作業療法研究法各論Ⅴ	事例研究：一般を理解する。					
8	石井	作業療法研究法各論Ⅵ	事例研究：シングルケースデザインを理解する。					
9	石井	作業療法研究法各論Ⅶ	基本的な統計手法を実践する。					
10	石井	作業療法研究法各論Ⅷ	研究計画の手順と論文の構成を実践する。					
11	石井	作業療法研究法各論Ⅸ	研究計画の手順と論文の構成を実践する。					
12	石井	作業療法研究法各論Ⅹ	研究発表に必要なスキルを実践する。					
13	石井・廣渡・横山・加藤・渡邊 清水・松田・外倉	教員研究紹介①	石井・廣渡・横山・加藤・渡邊 清水・松田・外倉の研究紹介と研究手法および検定方法の説明					
14	石井・廣渡・横山・加藤・渡邊 清水・松田・外倉	教員研究紹介②	石井・廣渡・横山・加藤・渡邊 清水・松田・外倉の研究紹介と研究手法および検定方法の説明					
15	石井・廣渡・横山・加藤・渡邊 清水・松田・外倉	教員研究紹介③	石井・廣渡・横山・加藤・渡邊 清水・松田・外倉の研究紹介と研究手法および検定方法の説明					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート等提出物		●	●	●	●	90	①②③④⑤⑥
	参加貢献度					●	10	⑥
評価の 特記事項	全ての評価方法の合計点数で評価する。レポート等未提出の場合、かつ6割を満たさない場合でも再試験を実施しないため、注意を要する。 レポート等提出物は記述内容（まとめ方など）で評価し、参加貢献度は、積極的な発言などを評価し、配点など評価方法は授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）図書館で気になる論文を確認すること。約2時間 （復習）授業で習った点について先行文献における該当箇所を確認すること。約2時間 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
提出物等は研究室に保管しているので事前に連絡の上、内容を確認することができる。								
教科書								
「作業療法研究法」（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト）長崎重信監修 メジカルビュー社								
参考図書								
「作業療法士のための研究法入門」鎌倉矩子 三輪書店 「はじめての研究法 - コ・メディカルの研究法入門」千住秀明 神陵文庫								
備考：履修者への要望								
積極的な授業参加を希望。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
106	作業治療学理論	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
岩井 和子						
実務経験のある教員						
岩井 和子：作業療法士として勤務し、身体障害領域・老年期障害領域の臨床経験を有する教員が、作業療法理論の概要について講義する。						
授業概要						
長い歴史をもつ作業療法実践においては近年、その経験則を理論として整理し、さらに新しい理論開発のための実践及び研究が発展している。こうした作業療法理論の歴史と現状について解説し、代表的な作業療法理論を教授する。伝統的な運動コントロールモデル、生体力学モデルから説き起こし、近年の作業科学の基盤となっている人間作業モデル（MOHO）について概説する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①作業療法理論の歴史と発展過程を理解できる ②作業療法の理念と構造・機能を理解できる ③作業療法実践における理論の応用について理解できる					
思考・判断 ・表現	④作業療法を取り巻く時代状況（医療・保健・福祉）における作業療法の特性と変遷について自身の言葉で述べることができる ⑤各作業療法モデルと実践概念について自身の言葉で述べることができる ⑥人間作業療法に基づき、自身の作業遂行について考察できる					
技能	⑦人間作業モデルに基づいた面接を実施できる ⑧実施した面接内容に基づき、自己の作業遂行についてレポートが作成できる ⑨指定されて様式によるレポート作成ができる					
関心・意欲 ・態度	⑩ノートテイクを丁寧に行うことができる ⑪演習に積極的に参加することができる					
授業形態						
講義	対面授業（講義と演習）					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	岩井	作業療法の理論とは （１）	作業と治療			
2	岩井	作業療法の理論とは （２）	実践から概念、理論へ			
3	岩井	作業療法実践の歴史	20C. 半ばの作業療法実践			
4	岩井	作業療法パラダイム	パラダイムと実践モデルの変遷			
5	岩井	作業療法理論（１）	概念的実践モデルとは			
6	岩井	作業療法理論（２）	意図関係的モデル			
7	岩井	作業療法理論（３）	運動コントロールモデル			

8	岩井	作業療法理論（４）	感覚統合モデル					
9	岩井	作業療法理論（５）	生体力学モデル					
10	岩井	作業療法理論（９）	認知モデル					
11	岩井	作業療法理論（６）	人間作業モデル①					
12	岩井	作業療法理論（７）	人間作業モデル(2)※課題①					
13	岩井	作業療法理論（８）	人間作業モデル（３）インタビュー・興味チェックリストを演習					
14	岩井	作業療法のリーズニング	作業の適合性のための理論活用					
15	岩井	障害学	障害をもつことと作業活動					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			60	①②③④⑤⑥
	演習			●	●	●	20	⑥⑦⑧⑨⑩⑪
	レポート		●	●	●	●	20	①②③⑥⑦⑧⑨
評価の 特記事項	筆記試験（60%）、演習（20%：演習シートについて評価基準を授業内で提示）、レポート（20%：評価基準は授業内で提示）とし、総合的に評価し60%以上を単位認定とする。 筆記試験についてのみ再試験を実施し、最終評価は再試験結果をもって行う。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
授業の事前事後に1時間の自己学習（教科書・講義資料・参考図書等による復習及び自己調査等）を行う。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
成績発表後、筆記試験は、フィードバックシートにてフィードバックを行う。 レポートは採点后、返却する。								
教科書								
「作業療法実践の理論」ギャリーキルホフナー著 山田孝監訳 医学書院								
参考図書								
「事例でわかる人間作業モデル」山田孝 協同医書出版								
備考：履修者への要望								
毎回の授業内容が豊富であり、演習回に欠席するとレポート作成ができなくなるので、体調に気を付け、欠席しないこと								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
107	身体障害作業治療学Ⅰ	作業療法学専攻	2学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
廣渡 洋史						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史：整形外科疾患を主とする医療機関に作業療法士として臨床経験を有する教員が、身体障害領域（主に整形外科疾患）における作業療法対象疾患について、各疾患の特徴・障害像・評価法・作業療法アプローチの基礎などの講義を行う。						
授業概要						
本講義では、作業療法を対象とする身体障害領域である整形外科疾患について講義する。疾患対象は骨折、末梢神経損傷、腱損傷、熱傷、脊髄損傷、関節リウマチ、切断である。各疾患の特徴・障害像・評価法・作業療法アプローチの基礎などを学習する。整形外科疾患の作業療法は、解剖学および運動学の基礎知識を元に展開されるものであるため、それらの復習を行いながら、各疾患の特徴・障害像・評価法・作業療法アプローチを学ぶ。また、派生し得る二次的疾患の予防や複合性局所疼痛症候群（以下、CRPS）等の疾患の特徴・障害像・評価法・作業療法アプローチを学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①各疾患の特徴・障害像を説明できる。 ②障害像を理解したうえで、必要な評価項目を列挙することができる。					
思考・判断 ・表現	③各疾患における作業療法アプローチについて討議できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	講義形式で行うが、アクティブラーニングとして、グループワークを一部取り入れディスカッションを適宜行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	廣渡	骨折①：疾患の特徴と障害像	骨折に関する基礎知識（病態、修復方法、治癒過程、合併症）について学習する			
2	廣渡	骨折②：骨折例に対する作業療法	骨修復後の作業療法の展開（評価とアプローチ）を学習する			
3	廣渡	骨折③：骨折例に対する作業療法	骨修復後の作業療法の展開（評価とアプローチ）を学習する			
4	廣渡	末梢神経損傷：疾患の特徴と障害像、作業療法①	末梢神経損傷に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する			
5	廣渡	末梢神経損傷：疾患の特徴と障害像、作業療法②	末梢神経損傷に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する			
6	廣渡	腱損傷	屈筋腱損傷に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する			
7	廣渡	屈筋腱損傷①	屈筋腱損傷に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する			

8	廣渡	屈筋腱損傷②	伸筋腱損傷に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する					
9	廣渡	伸筋腱損傷	伸筋腱損傷に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する					
10	廣渡	CRPSや二次的疾患	CRPSの発生機序とその治療について学習する					
11	廣渡	熱傷：疾患の特徴と障害像、作業療法	熱傷に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する					
12	廣渡	脊髄損傷①：疾患の特徴と障害像	脊髄損傷に関する基礎知識（病態、治療法、合併症）について学習する					
13	廣渡	脊髄損傷②：脊髄損傷例に対する作業療法	脊髄損傷症例に対する作業療法の展開（評価とアプローチ）を学習する					
14	廣渡	関節リウマチ及び関連疾患：疾患の特徴と障害像、作業療法	関節リウマチ及び関連疾患に関する基礎知識と症例に対する作業療法の展開について学習する					
15	廣渡	切断	切断の原因、種類とその概要（資料配布）					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③
	小テスト		●				20	①②
評価の特記事項	小テストと筆記試験の合計点が6割に達しなかった場合に再試験を実施する。再試験は小テストと筆記試験の範囲とし、6割以上を合格とする。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前学習：講義のテーマの該当箇所の予習 事後学習：講義後は、復習箇所の復習 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テストは授業で返却する。筆記試験は研究室に保管しているので事前に連絡の上、内容を確認することができる。								
教科書								
・「標準作業療法学 専門分野 身体機能作業療法学」山口昇 ほか編 医学書院 ・ プリント配布								
参考図書								
特になし								
備考：履修者への要望								
授業で取り扱う疾患は臨床実習や国家試験に関連することが多い。疾患ごとに特徴があるので理解を深めることができるよう努力すること。 疾患による個別の機能障害のみに目を向けるのではなく、重複する障害を有する対象者に対し、活動・参加や背景因子など多視点から評価し介入することができる知識と技術を身につけるよう心掛けること。 また、急性期から生活期に至る幅広い病期および予防における作業療法士の役割を理解するように努めること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
108	身体障害作業治療学Ⅱ	作業療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
渡邊 豊明						
実務経験のある教員						
渡邊 豊明：医療機関、通所リハビリテーション事業所において作業療法士として勤務し、身体障害領域の臨床経験を有する教員が、身体障害の作業療法について講義する。						
授業概要						
身体障害領域（特に脳血管障害、外傷性脳損傷、神経変性疾患、神経筋疾患）において、作業療法士が焦点を当てる作業に対する介入をするために最低限必要となる、身体障害領域における作業療法対象疾患について、各疾患の特徴・障害像・評価法・作業療法アプローチの基礎などについて学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①脳血管障害の障害特性について説明できる。 ②脳血管障害の評価（脳画像の読み取り方や検査測定の方法）について説明できる。 ③脳血管障害における介入の基本について説明できる。 ④神経筋疾患の各疾患の障害特性について説明できる。 ⑤神経筋疾患の各疾患に対する介入の基本を説明できる。 ⑥神経変性疾患の各疾患の障害特性について説明できる。 ⑦神経変性疾患の各疾患に対する介入の基本を説明できる。 ⑧内部疾患、悪性腫瘍の障害特性と介入の基本を説明できる。					
思考・判断 ・表現	⑨模擬事例に対する評価、介入計画を立案できる。					
技能	⑩模擬事例に対する評価、介入計画を発表できる。					
関心・意欲 ・態度	⑪講義の中での疑問を明確にし、作業療法の対象となる疾患や介入方法に対する理解を深めることができる。					
授業形態						
講義	主に資料を使用して講義形式で実施する。模擬事例を通したグループワークを実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	渡邊	脳血管障害の障害特性について	脳血管障害の障害特性について学ぶ。教科書p176-181			
2	渡邊	脳血管障害の評価について	脳血管障害の評価方法とその結果の解釈について学習する。教科書p182-184			
3	渡邊	脳血管障害に対する介入	脳血管障害の評価結果から介入プログラムの立案について学習する。教科書p185-202			
4	渡邊	神経筋疾患の障害特性について	ギランバレー症候群の障害特性とその評価、介入方法について学ぶ。教科書p358-364			
5	渡邊	神経筋疾患に対する評価、介入	多発性硬化症、重症筋無力症の障害特性とその評価、介入方法について学ぶ。教科書p365-379			
6	渡邊	神経変性疾患の障害特性について	パーキンソン病の障害特性とその評価、介入方法について学ぶ。教科書p380-391			
7	渡邊	神経変性疾患に対する評価、介入	脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症の障害特性とその評価、介入方法について学ぶ。教科書p392-407			

8	渡邊	内部疾患、悪性腫瘍の障害特性について	心疾患の障害特性とその評価、介入方法について学ぶ。教科書p408-423					
9	渡邊	内部疾患、悪性腫瘍に対する評価、介入	呼吸器の障害特性とその評価、介入方法について学ぶ。教科書p424-459					
10	渡邊	内部疾患、悪性腫瘍に対する評価、介入	糖尿病、悪性腫瘍の障害特性とその評価、介入方法について学ぶ。教科書p460-473					
11	渡邊	中枢事例検討	問題提起から、評価や治療について検討し、発表する。					
12	渡邊	ギランバレー、MS事例検討	問題提起から、評価や治療について検討し、発表する。					
13	渡邊	パーキンソン、SCD事例検討	問題提起から、評価や治療について検討し、発表する。					
14	渡邊	心疾患，呼吸器，糖尿病事例検討	問題提起から、評価や治療について検討し、発表する。					
15	渡邊	まとめ	講義のまとめ					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				70	①②③④ ⑤⑥⑦⑧
	グループ発表		●	●	●		20	①②③④⑤ ⑥⑦⑧⑨⑩
	参加貢献度			●	●	●	10	⑨⑩⑪
評価の特記事項	すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験は筆記試験のみで評価する。グループ発表は、ルーブリック評価を用いて評価する。評価基準はその都度提示する。参加貢献度は、ルーブリックを使用し、積極性、質疑・意見交換、授業聴講態度を評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
授業のプリント、講義のまとめノート、講義の疑問に対する自己学習の資料（2時間程度） 模擬事例に対する評価計画、統合と解釈、介入計画についてレポートにまとめ提出する。（2時間程度） （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートは講義の中で返却・フィードバックする。筆記試験は研究室に保管しているので、内容を確認することができる。								
教科書								
「身体機能作業療法学」（標準作業療法学 専門分野）岩崎テル子 ほか編 医学書院								
参考図書								
「身体障害」（作業療法全書第4巻）日本作業療法士協会 監修 協同医書出版 「作業療法評価学」（作業療法学 ゴールドマスターテキスト）長崎重信 ほか編 メジカルビュー社								
備考：履修者への要望								
学ぶ内容が多岐に渡るので講義で伝えられる知識は基本的な原則にとどまる。課題の学習などを通じて、十分に予習復習を行い理解を深めること。 疾患による個別の機能障害のみに目を向けるのではなく、重複する障害を有する対象者に対し、活動・参加や背景因子など多視点から評価し介入することができる知識と技術を身につけるよう心掛けること。 また、急性期から生活期に至る幅広い病期および予防における作業療法士の役割を理解するように努めること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
109	身体障害作業治療学実習	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
外倉 由之						
実務経験のある教員						
外倉 由之：作業療法士として勤務し、身体障害領域の臨床経験を有する教員が、作業療法の介入方法について講義する。						
授業概要						
本科目では、これまで作業療法評価学・治療学などで学習してきた身体障害領域における各疾患について、適切な評価に基づき、各評価の記録方法と結果の解釈の仕方、目標設定、治療計画を立案できるようする。 講義において、各疾患における基本的知識・治療手技を理解することを目的とする。その後、演習を通じて各疾患に対する知識の理解をより深め、治療手技においても手技を習得できることを目的とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①検査測定に必要な知識を理解し、説明することができる ②身体障害領域における、作業療法評価、介入の基本について説明できる					
思考・判断 ・表現	③事例検討において、治療プログラムの設定が問題点と目標設定等と関連付けて説明することができる					
技能	④各検査・測定の手技を理解し、模擬患者に対して実施することができる ⑤身体障害に対する作業療法介入計画を立案し、模擬患者に対して実施することができる					
関心・意欲 ・態度	⑥グループワークにおいて、積極的な関わりと役割遂行を行うことができる					
授業形態						
実習	講義および実習					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	外倉	事例に基づいた各種疾患の理解①	情報から事例の状態を予測し、必要な評価について整理することができる			
2	外倉	事例に基づいた各種疾患の理解②	情報から事例の状態を予測し、必要な評価について整理することができる			
3	外倉	事例に対する評価計画の立案①	事例情報を整理して必要な評価を列挙、評価計画を立案する			
4	外倉	事例に対する評価計画の立案②	事例情報を整理して必要な評価を列挙、評価計画を立案する（グループワーク）			
5	外倉	事例に対する評価	評価計画で立案した評価を実施する			
6	外倉	評価結果の解釈①	評価結果を記録し、事例の作業を疎外している要因について整理する			

7	外倉	評価結果の解釈②	評価結果を記録し、事例の作業を疎外している要因について整理する（グループワーク）					
8	外倉	作業療法介入計画の立案①	事例の作業を可能にするための作業療法介入について学ぶ					
9	外倉	作業療法介入計画の立案②	事例の作業を可能にするための作業療法介入について学ぶ（グループワーク）					
10	外倉	作業療法介入の実施	模擬事例に対して立案した作業療法介入を実施する					
11	外倉	ケースレポートのまとめ①	事例に関して評価、結果の解釈、目標の立案、介入計画までをレポートにまとめる（グループワーク）					
12	外倉	ケースレポートのまとめ②	事例に関して評価、結果の解釈、目標の立案、介入計画までをレポートにまとめる（グループワーク）					
13	外倉	作業療法過程の報告	事例に関する作業療法の一連の過程を報告し、議論する					
14	外倉	吸引について	吸引の方法やリスクについて					
15	外倉	吸引の実践	吸引の演習を通して実践方法を学習する					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●	●			50	①②③
	発表				●	●	50	④⑤⑥
評価の特記事項	レポート・発表はルーブリックで評価を行う。全ての評価基準の合計が6割を満たさない場合、再試験として追加のレポート提出を求める。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
各テーマに該当する教科書を予習する。 実技は学生同士で確実に実施できるよう復習をする。事例学習の内容は各自でレポートにまとめる。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポート作成において必ず担当教員の指導を受ける。								
教科書								
「作業療法評価学」（作業療法学　ゴールド・マスター・テキスト）佐竹勝、石井文康編　メジカルビュー社								
参考図書								
「ベッドサイドの神経の診かた」田崎義昭　ほか　南山堂								
備考：履修者への要望								
実技を行う際は、動きやすい服装で臨むこと。 作業療法実践（実習）に向けて作業療法士として必要な思考過程を学ぶ講義になるため、自ら積極的に学ぶ姿勢を意識して取り組むこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
110	精神障害作業治療学	作業療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
横山 剛・松田 裕美・岩井 和子						
実務経験のある教員						
横山 剛・松田 裕美・岩井 和子：作業療法士として精神科臨床経験のある教員の指導のもと、精神障害における各疾患、疾病、障害の特徴、精神科作業療法について、講義、グループワークを通して教授する。						
授業概要						
本科目では、精神科臨床における代表的な疾患を取り上げ、それら疾患の生活の障害特性・予後、問題点の焦点化、作業療法の介入について講義、グループワークを通して学習する。 本講義は3名の教員による共同形式にて実施する。①精神疾患の障害特性(岩井、横山、松田)、②精神障害作業療法の意義について理解を深め、精神障害を持つ人の「生きにくさ」について共感的に理解する(横山、松田)。 本授業を通して治療的自己を用いて対応することができるようになることを目的とする。 (オムニバス方式／全4回) (横山 剛／2回・松田 裕美／1回・岩井 和子／1回) 教員の精神科臨床における作業療法の実際の紹介 (横山 剛／11回・松田 裕美／11回) (共同) 各疾患・障害についての学習と学習成果のプレゼンテーション						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①精神障害者の特性を説明できる ②精神障害者の作業療法介入について説明できる					
思考・判断 ・表現	③障害特性から生きにくさを考察できる					
技能						
関心・意欲 ・態度	④精神障害領域に興味を持つことができる。					
授業形態						
講義	講義、グループワーク課題レポートの作成、プレゼンテーション					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横山	オリエンテーション 精神の病と障害	授業の概要説明、課題の説明。課題取り組みのための準備。			
2	横山	精神科臨床における作業療法 の実際1	教員の精神科臨床における作業療法の実際の紹介			
3	岩井	精神科臨床における作業療法 の実際2	教員の精神科臨床における作業療法の実際の紹介			
4	松田	精神科臨床における作業療法 の実際3	教員の精神科臨床における作業療法の実際の紹介			
5～8	横山・松田	各疾患・障害についての学習	統合失調症、気分障害、パーソナリティ障害、神経症性障害、アルコール依存症、自閉症性障害、のそれぞれのグループワーク課題に取り組む。			

9～14	横山・松田	学習成果のプレゼンテーション	統合失調症、気分障害、人格障害、神経症圏、アルコール依存症、自閉症、のそれぞれの障害特性・作業療法について等のプレゼンテーション					
15	横山・松田	授業まとめ	質問表の応答など					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標	
	筆記試験	●	●			40	①②③	
	レポート	●	●		●	40	①②③④	
	参加貢献度				●	20	④	
評価の 特記事項	筆記試験（40%）、レポート（質問表の応答含む）（40%）、参加貢献度（20%）で評価する。全ての評価の合計が60点の未満の場合は、再試験を行う。再試験は筆記試験のみ行う。 参加貢献度は、積極的に発言し、その内容・回数に基づき評価する。成績は参加貢献度、レポートともにルーブリック評価に基づいて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
グループワーク課題への取り組み （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
グループワークも含め、毎回質問表を使用する。その質問に返答する。また、担当した課題の発表の際には、他の学生の質問表に返答する。								
教科書								
「精神障害と作業療法」山根寛 三輪書店								
参考図書								
随時紹介する。								
備考：履修者への要望								
本講義は、作業療法の治療学における精神分野の内容である。こころという目には見えない領域を扱う。病気・疾病にとどまらず幅広い知識が必要であるため新聞や他の本などでも調べ、理解を深めて欲しい。 疾患による個別の機能障害のみに目を向けるのではなく、重複する障害を有する対象者に対し、活動・参加や背景因子など多視点から評価し介入することができる知識と技術を身につけるよう心掛けて欲しい。 また、急性期から生活期に至る幅広い病期および予防における作業療法士の役割を理解するように努めて欲しい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
111	精神障害作業治療学実習	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
横山 剛・松田 裕美						
実務経験のある教員						
横山 剛・松田 裕美：作業療法士として精神科臨床経験のある教員の指導のもと、精神障害における作業療法評価を実施できるようになることを目標に、学生自身が評価計画立案を行う。						
授業概要						
本科目では、精神障害に対する評価の考え方と評価方法を模擬的に実践する。青年期の発達課題であるアイデンティティ確立に向けて、延いては治療者として治療的自己を用いることができるようになるために、教員のフィードバックを受けながらペア学生および自身についての理解を深めていく授業である。学生同士が、評価計画を立案しそれを行い、結果のまとめ・整理、レポート作成・発表をする機会を通して、精神障害に対する作業療法の実際を模擬的に学習する。 (横山 剛／18回) 精神科領域の評価について講義、各種検査の目的について、代表的な精神疾患の作業療法評価計画の立案 (横山 剛／5回・松田 裕美／5回) (共同) 評価実施、フィードバック、レポート発表						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①評価方法の種類と手順を説明できる。					
思考・判断 ・表現	②スーパーバイズを受け、結果から適切な解釈を行える。					
技能	③これまでに学習した知識・技術を体系的に活用できる。					
関心・意欲 ・態度	④作業療法士を目指す学生について興味関心を持つことができる。					
授業形態						
実習	講義および実習					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1～8	横山	精神障害領域の評価について	評価のタイプを講義し、5W1Hの視点から、評価について学ぶ。実習のオリエンテーションを含めて各種検査を実施する。			
9～10	横山	評価計画立案	評価を効率よく行うための方法について教授し、評価計画を立案する。			
11～18	横山	評価実施	指定した評価法を実施し、結果を整理する。			
19～22	横山・松田	評価実施とフィードバック	必要な評価内容をリストアップし、評価計画に加えて実施する。随時フィードバックを受けながら、結果を整理する。整理したものをレポートにまとめる。			
23	横山・松田	レポート発表	レポートを発表する機会を持ち、他者と分かち合いを行う。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート	●	●	●	●	40	①②③④
	レポートの発表	●	●			30	①②
	参加貢献度				●	30	④
評価の 特記事項	レポート（40％）、発表（30％）、参加貢献度（30％）で評価する。参加貢献度は、積極的に発言し、その内容・回数に基づき評価する。基準点（60点）に満たない場合は、レポート指導をした上で再提出とするが再試験の扱いとはしない。成績は参加貢献度、レポートともにルーブリック評価に基づいて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
毎回の実習時にフィードバックを受け授業時間内でレポートをまとめていく。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
実習においては各自に毎回の授業時にフィードバックする（1回につき10～15分程度）。							
教科書							
資料を授業中に配布する。							
参考図書							
随時紹介する。							
備考：履修者への要望							
実習科目であるため、十分に健康に留意して臨床実習を想定しながら臨むこと。 フィードバックを受ける機会が増えるので、報告・連絡・相談を行い信頼関係構築に努めること。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
112	発達障害作業治療学	作業療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
加賀谷 繁						
実務経験のある教員						
加賀谷 繁：発達障害領域において肢体不自由児や自閉スペクトラム症などの子ども達への臨床経験ある教員が、疾患の特徴と臨床症状の関連性を通じ発達障害児の治療的関わりについて講義する。						
授業概要						
発達障害の疾患の特徴を理解し各疾患の症例検討を通じてその特徴的な臨床症状について理解する。また、症例検討において各臨床症状の確認と症状の理解を行い、これらが生活環境における生きづらさとしての生活障害との関連性について理解や考察を深め、ライフステージも含めた目標設定の捉え方やそれを到達出来るような治療プログラムの立案までを関連付けられる思考性を学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①発達障害領域の各疾患の特徴について理解し説明できる。 ②発達障害領域の各疾患の特徴について、臨床症状として捉え説明することができる。					
思考・判断 ・表現	③発達障害領域の症状を作業療法の視点で捉え、「症状分析」「問題点の列挙」「統合と解釈」「目標設定」「プログラム立案」までの各項目内容を関連付けてまとめ、これらの思考性を説明することができる。					
技能	④症例検討を通じて、作業療法の治療的な思考性に基づく治療的関わりを実施することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤自分の意見をグループワークや課題発表時に発言することができる。 ⑥発達障害に関する興味を深め自己学習を展開することができる。					
授業形態						
講義	講義、グループワーク					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加賀谷	発達障害作業療法治療学の授業概要	授業オリエンテーション、発達障害領域の治療の概要を学ぶ			
2	加賀谷	発達障害作業療法	対人援助活動について			
3	加賀谷	発達障害作業療法	発達障害の概要、対象児と家族の理解			
4	加賀谷	発達障害作業療法	発達障害領域の対象児との関り			
5	加賀谷	二分脊椎症の作業療法①	疾患レポートの発表と症例分析（グループワーク）			
6	加賀谷	二分脊椎症の作業療法②	症例の症状分析とその内容をまとめる（グループワーク）			
7	加賀谷	ダウン症の作業療法①	疾患レポートの発表と症例分析（グループワーク）			

8	加賀谷	ダウン症の作業療法②	症例の症状を分析し、症状の関連性をまとめる（グループワーク）					
9	加賀谷	ダウン症の作業療法③	症例の症状の関連性から問題点を抽出し列挙する。治療目標を設定する（グループワーク）					
10	加賀谷	脳性麻痺の作業療法①	疾患レポートの発表と症例分析（グループワーク）					
11	加賀谷	脳性麻痺の作業療法②	症例の症状を分析し、症状の関連性をまとめる（グループワーク）					
12	加賀谷	脳性麻痺の作業療法③	症例の症状の関連性から問題点を抽出し列挙する。治療目標を設定し治療プログラムを立案する（グループワーク）					
13	加賀谷	脳性麻痺の作業療法④	症例検討 （グループワーク）					
14	加賀谷	脳性麻痺の作業療法⑤	症例検討 （グループワーク）					
15	加賀谷	自閉症スペクトラムの作業療法	疾患レポートの発表と症例分析・治療的関わりを学ぶ（グループワーク）					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題レポート		●	●	●	●	90	①②③④⑤
	参加貢献度				●	●	10	④⑤⑥
評価の 特記事項	成績評定方法で6割を満たない場合は、再試験（試験またはレポート課題を課し、参加貢献度も含める）を実施する。 課題レポートの内容については、講義内で詳細を示す。 参加貢献度は、毎回の講義ごとに意見・学んだことなどを記載してもらい提出用紙の内容により評価する（授業資料等の整理も含む） 詳細は講義内で説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
予習：「人間発達学」「発達障害作業評価学」の授業内容を再確認しておく。 復習：毎回の授業内容について振り返りを行い再確認しておく。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題レポートについては、発表時にフィードバックする								
教科書								
「標準作業療法学 発達過程作業療法学」加藤寿宏 ほか編 医学書院								
参考図書								
必要に応じて紹介する								
備考：履修者への要望								
「人間発達学」「発達障害作業評価学」の授業内容を再確認しておくこと。また、これまでの専門科目の評価と治療の関連付けなどについてもその内容を復習しておくようにしておくこと。 疾患による個別の機能障害のみに目を向けるのではなく、重複する障害を有する対象児に対し、活動・参加や背景因子など多視点から評価し介入することができる知識と技術を身につけるよう心掛ける。 また、急性期から生活期に至る幅広い病期および予防における作業療法士の役割を理解するように努める。 発達障害領域の対象児は「子ども」とであるという事をそれぞれの履修者が事前に理解を深めておくこと。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
113	発達障害作業治療学実習	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
加賀谷 繁						
実務経験のある教員						
加賀谷 繁：発達障害領域において肢体不自由児や自閉スペクトラム症などの子ども達への臨床経験ある教員が、疾患の特徴と臨床症状の関連性を通じ発達障害児の治療的関わりについて講義する。						
授業概要						
発達障害領域の作業療法において治療展開するには、子どもの生活や活動を理解しておく事が、子どもとの関係性を構築する上で大変重要になる。この授業では子どものセルフケアやあそびについてそれぞれの発達過程を講義や実習も交えて学修します。そして子ども達と関わる場面において、子どもの示す行動・行為の理解が深めた解釈できるように学修を目指します。これらの内容は、疾患を患った対象児の症例分析や症例検討を通じて学修を行います。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①1歳までの各運動発達について資料からグループワークを通じて必要事項をまとめることができる ②「あそび」や「セルフケア活動」の各動作の発達過程を理解し説明できる ③発達検査の内容を理解し説明することができる ④代表的な小児疾患についてその疾患の特徴についてグループワークを通じて必要事項をまとめることができる					
思考・判断 ・表現	⑤症例検討において、治療プログラムの設定が問題点と目標設定と関連付けるよう推測することができる					
技能	⑥機能的な活動において、姿勢と運動を関連付けた観察の視点で捉えるよう行うことができる					
関心・意欲 ・態度	⑦発達障害領域の対象児に対する作業活動として「あそび」や「セルフケア」等の治療的説明ができる ⑧グループワークにおいて積極的な関わりと役割遂行して参加することができる					
授業形態						
実習	講義、実技、グループワーク					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加賀谷	発達障害作業療法治療学実習の授業概要	科目オリエンテーション、発達障害領域の治療的関わりの概要を学ぶ			
2	加賀谷	正常運動発達	0～3ヶ月・4～6ヶ月・7～9ヶ月・10～12ヶ月の各期間の運動発達過程の必要事項をまとめる（グループワーク）			
3	加賀谷	正常運動発達	0～3ヶ月・4～6ヶ月・7～9ヶ月・10～12ヶ月の各期間の運動発達の必要事項をまとめる（グループワーク）			
4	加賀谷	正常運動発達	0～3ヶ月・4～6ヶ月・7～9ヶ月・10～12ヶ月の各期間の運動発達の必要事項をまとめる（グループワーク）			
5	加賀谷	正常姿勢反応	臥位・座位姿勢等の個人特性を分析する(実技)			
6	加賀谷	子どものセルフケアとあそびの発達	食事・更衣・排泄・あそびの発達について学ぶ（グループワーク）			
7	加賀谷	子どものセルフケアとあそびの発達	食事・更衣・排泄・あそびの発達について学ぶ（グループワーク）			
8	加賀谷	子どものセルフケアとあそびの発達	食事・更衣・排泄・あそびの発達の紹介			
9	加賀谷	症例分析①-1	姿勢や運動の捉え方を学ぶ（グループワーク）			

10	加賀谷	症例分析①-2	症例の身体状況の捉え方を学ぶ（グループワーク）					
11	加賀谷	症例分析①-3	機能活動での姿勢と運動の捉え方について分析しまとめる（グループワーク）					
12	加賀谷	症例分析①-4	機能活動の分析内容の紹介					
13	加賀谷	小児疾患について	二分脊椎・ダウン症・脳性麻痺・自閉スペクトラム症についてまとめる（グループワーク）					
14	加賀谷	小児疾患について	二分脊椎・ダウン症・脳性麻痺・自閉スペクトラム症についてまとめる（グループワーク）					
15	加賀谷	小児疾患について	二分脊椎・ダウン症・脳性麻痺・自閉スペクトラム症についてまとめる（グループワーク）					
16	加賀谷	発達検査①-1	遠城寺式発達検査を学ぶ					
17	加賀谷	発達検査①-2	検査内容の実施と内容をまとめる					
18	加賀谷	発達検査②-1	フロスティグ視知覚検査を学ぶ					
19	加賀谷	発達検査②-2	検査内容の実施と内容をまとめる					
20	加賀谷	症例検討	対象児の具体的な問題について分析する（グループワーク）					
21	加賀谷	症例検討	対象児の具体的な課題のまとめについて検討（グループワーク）					
22	加賀谷	症例検討	対象児への治療的関り方の検討（グループワーク）					
23	加賀谷	まとめ	発達障害児への作業療法士の関りについて					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題レポート		●	●	●	●	90%	①②③④⑤⑥⑦
	参加貢献度					●	10%	⑧
評価の 特記事項	成績評定方法の合計が6割を満たない場合は、再試験（試験又はレポート課題を課し、参加貢献度も含める）を実施する。 課題レポートの内容については、講義内で詳細を示す。 参加貢献度は、毎回の講義ごとに意見・学んだことなどを記載してもらい提出用紙の内容により評価する（授業資料等の整理も含む）。 詳細は講義内で説明する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
予習：「人間発達学」「小児科学」などの授業内容を再確認しておく。また前期「発達障害作業評価学」や後期「発達障害作業治療学」についても並行して授業内容を確認しておく（30分） 復習：毎回の授業内容について振り返りを行い再確認しておく（30分）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題レポート等は、発表時にフィードバックする。								
教科書								
「標準作業療法学 発達過程作業療法学」加藤寿宏　ほか編　医学書院								

参考図書
必要に応じて紹介する
備考：履修者への要望
発達障害領域の対象者が「子ども」であるという事について、これまでに学んだことから「子ども」について履修者の事前理解を深めてもらいたい。この点について授業において考えを確認する機会もあると思われる。

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
114	高齢期作業療法学	作業療法学専攻	3学年	必修	2単位	30時間
担当教員名						
加藤 真夕美						
実務経験のある教員						
加藤 真夕美：医療機関、介護老人保健施設、保健センター、通所介護事業所において作業療法士として勤務し、高齢期に関する種々の疾患、特に身体機能障害、高次脳機能障害および認知症に対する臨床経験を有する教員が、高齢期障害の評価および作業療法についての講義を行う。						
授業概要						
作業療法の対象となる高齢者および高齢者を取り巻く状況を理解し、高齢期作業療法における評価から介入の流れを種々の情報検索や模擬事例検討を通して学ぶ。高齢期作業療法に関して幅広く学習するが、特に認知機能や身体機能の低下および家族支援に関する作業療法士の役割を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①高齢期障害の特徴を述べることができる。					
思考・判断 ・表現	②高齢期分野の作業療法の目的・流れ・評価・介入について説明できる。 ③認知症の疾患特性や評価の際の留意点・介入の考え方や方法について説明できる。					
技能	④代表的な認知機能のスクリーニング検査を、学生を相手に実施することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤対象者の状態や周囲の状況に応じた評価・介入計画について自分の意見を述べることができる。 ⑥提出物を遅滞なく、内容の不足なく確実に提出することができる。					
授業形態						
講義	主に講義形式で行う。評価法の模擬実践や文献検索、ディスカッション、ポートフォリオの作成など、アクティブラーニングを促す演習を取り入れる。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤	オリエンテーション 高齢者を取り巻く社会①	高齢者を取り巻く社会について、人口減少、少子高齢化などの視点で学習する。			
2	加藤	高齢者を取り巻く社会②	高齢者を取り巻く社会について、社会の仕組みや価値観の変化などの視点で学習する。			
3	加藤	現代の高齢者像①	高齢者について、加齢と老化、健康寿命などの視点で学習する。			
4	加藤	現代の高齢者像②	高齢者について、ライフコース、就業、自動車運転などの視点で学習する。			
5	加藤	高齢者に特有な知的・精神的障害の理解と作業療法①	高齢者の知的・精神的障害の概要を学習する。			
6	加藤	高齢者に特有な知的・精神的障害の理解と作業療法②	認知症の分類や臨床症状について学ぶ。			
7	加藤	高齢者に特有な知的・精神的障害の理解と作業療法③	認知症の評価について学ぶ。			
8	加藤	高齢者に特有な知的・精神的障害の理解と作業療法④	認知症の作業療法について学ぶ。また、地域の認知症に対する取り組み事例について学ぶ。			

9	加藤	高齢者に特有な身体障害の理解と作業療法①	高齢者に多い循環器疾患、整形外科疾患、視聴覚の障害について概観する。					
10	加藤	高齢者に特有な身体障害の理解と作業療法②	サルコペニアやフレイル、転倒のリスクなどについて学ぶ。					
11	加藤	高齢者に特有な身体障害の理解と作業療法③	高齢者に特有な身体障害に関する評価について学ぶ。					
12	加藤	高齢者に特有な身体障害の理解と作業療法③	高齢者に特有な身体障害に関する作業療法について学ぶ。					
13	加藤	制度と介護予防	高齢者に関する制度について、介護保険制度を中心に学ぶ。また介護予防の概念と実際について学ぶ。					
14	加藤	作業療法提供施設	高齢者に関わる作業療法提供施設の種類と役割、またマネジメントの概要を学ぶ。					
15	加藤	作業療法の介入事例	作業療法の介入事例をもとに効果的な作業療法について検討する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●	●		70	①②③④
	レポート		●	●		●	20	①②③⑤⑥
	ポートフォリオ					●	10	⑤⑥
評価の 特記事項		・再試験は、筆記試験得点が6割未満の場合に実施する。 ・筆記試験得点が6割以上かつ、すべてのレポートとポートフォリオが提出された場合に、単位を認定する。 ・再試験は再筆記試験得点が6割以上であることを合格の条件とするが、総合成績はレポート・ポートフォリオすべての合計で算出する。 ・レポート、ポートフォリオは、課題ごとに評点を定めたルーブリックを用いて評価する。評点は課題ごとに提示する。 ・レポート、ポートフォリオは、提出の遅滞や内容の不足があった場合に減点する。内容によっては再提出を求める。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
・各単元の終わりに配布されたレポート課題を作成する。レポートは次回の授業中に回収する。（授業時間内に完成しなかった分は自宅に持ち帰り仕上げる） ・教科書の該当ページを読み込む。 ・授業での配布資料やレポートを整理し、ポートフォリオを作成する。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
・レポートは、コメントを記入するなどしてフィードバックする。 ・筆記試験は、答案を返却する。答案を取りに来た学生に対し、個別に口頭でフィードバックを行う。								
教科書								
「専門分野 高齢期作業療法学」（標準作業療法学） 松房利憲 監修 医学書院								
参考図書								
「老年期作業療法学」（作業療法学ゴールド・マスター・テキスト） 長崎重信 監修 メジカルビュー社								
備考：履修者への要望								
超高齢社会における日本の取り組みは世界から注目されている。作業療法士として何ができるかを模索する契機となるよう、社会の動向に目を向ける習慣を身につけてほしい。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
115	日常生活作業学Ⅰ	作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
石井 文康・外倉 由之						
実務経験のある教員						
石井 文康・外倉 由之：医療機関、介護老人保健施設等において作業療法士として勤務し、身体障害領域および老年期領域の臨床経験を有する教員が、日常生活活動の基礎知識についての講義を行う。						
授業概要						
本科目は、作業療法士にとって重要な概念である日常生活活動（以下、ADL）の基礎を作業療法の視点から理解することを目的とする。 （外倉 由之／6回） ADLの概念および分類、ADLの構成要素を概観した後、ADLの制限や制約の意味付け、ADLの評価方法、ADL支援の種類、ADL制限・制約に対する分野別の作業療法の実践例について、その概要を学ぶ。授業は講義が主体であるが、理解を深めるために随時演習を用いる。 （石井 文康／2回・外倉 由之／2回）（共同） 第1回目には、日常生活活動の概要を理解する。 第8回目には、総括を行う。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①ADLの概念と範囲を説明することができる。 ②ADL評価の種類と特徴を説明することができる。					
思考・判断 ・表現	③各障害領域のADL制限・制約に対する作業療法士の基本的役割を理解し、説明することができる。					
技能	④ADLに対する作業療法の実践例について、文献検索を通して情報収集することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤提出物を遅滞なく、内容の不足なく確実に提出することができる。					
授業形態						
講義	講義を主体とするが、理解を深めるために模擬体験や文献検索、レポート作成など、能動的な学習を促す演習を併用する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	石井・外倉	オリエンテーション ADLの概念と範囲	ADLの定義および範囲、位置づけを学ぶ。 教科書：p. 1－15			
2	外倉	ADLの構成要素と特徴	ADLの構成要素（工程）と特徴を学ぶ。 教科書：p. 17－42 参考資料			
3	外倉	ADLの自立と制限・制約 ADLの評価	ADLの自立および制限・制約について学ぶ。またADLの評価法の種類を学ぶ。教科書：p. 43－72			
4	外倉	ADLに対する作業療法	ADLの制限、制約に対するの作業療法介入の基礎を学ぶ。 参考資料			
5	外倉	ADLの観察と記録	ADLの観察と記録の方法を学ぶ。 教科書：p. 95－106			

6	外倉	領域別のADL制限・制約に対する支援①	発達障害・身体障害領域におけるADLの支援方法について学ぶ。教科書：p. 107－246 参考資料					
7	外倉	領域別のADL制限・制約に対する支援②	精神障害・老年期領域等におけるADLの支援方法について学ぶ。教科書：p. 247－304 参考資料					
8	石井・外倉	まとめ	授業の総括を行う。					
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③
	レポート			●	●	●	20	③④⑤
評価の特記事項		・再試験は、筆記試験・レポートの総得点が6割未満の場合に実施する。再試験は再筆記試験得点が6割以上であることを合格の条件とする。 ・レポートは、課題ごとに評点を定めたルーブリックを用いて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。 ・レポートは、提出の遅滞や内容の不足があった場合に減点する。内容によっては再提出を求める。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
・各単元の終わりに配布されたレポート課題（文献レビューなど）をラーニングコモンズスペースを利用して作成する。レポートは次回の授業中に回収する。（授業時間内に完成しなかった分は自宅に持ち帰り仕上げる） ・教科書の該当ページを読み込む。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
・レポートは、コメントを記入するなどしてフィードバックする。 ・筆記試験は、答案を返却する。答案を取りに来た学生に対し、個別に口頭でフィードバックを行う。								
教科書								
「日常生活活動学（ADL）」（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト）長崎重信 監修 メジカルビュー社								
参考図書								
必要に応じて授業の中で紹介する。								
備考：履修者への要望								
ADLの支援は作業療法士の根幹とも言えるほど重要な位置を占める。これから作業療法を学ぶに当たっての基盤となる知識となるため、しっかりと理解するよう努めること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
116	日常生活作業学Ⅱ	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
石井 文康・清水 一輝						
実務経験のある教員						
石井 文康・清水 一輝：作業療法士として勤務し、身体障害領域の臨床経験を有する教員が、日常生活作業の評価や支援方法について講義する。						
授業概要						
本科目では、日常生活作業に関する評価の特徴について、活動別の支援方法について理解することを目的とする。 (オムニバス方式／全15回) (清水一輝／7回) 作業療法プロセスで用いる、作業質問紙（以下、OQ）、運動機能とプロセスの（以下、AMPS）などの評価について、その評価の視点、評価結果の解釈の仕方について学習する。また、生活行為向上マネジメント（以下、MTDLP）について講義でその概要を学び、演習で作業療法実践プロセスの理解を深める。 (石井文康／8回) 日常生活活動評価である機能的自立度評価法（以下、FIM）について、特に脳卒中における評価の視点を学習する。各疾患における日常生活作業の分析方法、支援方法について具体的な事例に基づいて学習する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①AMPSの実施方法について説明できる ②脳卒中患者の日常生活作業に関連する要因と介入方法について説明できる ③脊髄損傷患者の日常生活作業に関連する要因と介入方法について説明できる ④FIMの採点基準について説明できる ⑤MTDLPの実践方法について説明できる					
思考・判断 ・表現						
技能	⑥AMPSを用いた観察評価が模擬事例に対して行える ⑦FIMの採点基準に基づき模擬事例の評価ができる ⑧MTDLPの実施手順に従い事例情報の解釈や介入方法の検討ができる					
関心・意欲 ・態度	⑨グループワークに積極的に参加し、講義の理解を深めるような議論ができる					
授業形態						
講義	講義が主体であるが、グループワークや演習も行いながら理解を深めていく					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	清水	AMPSについて	AMPSの各技能について学習し、AMPSの観察の視点を学ぶ			
2	清水	AMPSに基づいた日常生活作業の評価	AMPSの基準に従って模擬事例の技能を評価する			
3	清水	生活行為向上マネジメント：①概論	生活行為向上マネジメントの概要を学ぶ			
4	清水	生活行為向上マネジメント：②アセスメント演習	模擬事例を用いて生活行為向上マネジメントでのアセスメントを実施する			

5	清水	生活行為向上マネジメント：③プラン立案演習	模擬事例を用いて生活行為向上マネジメントでのプラン立案を実施する					
6	清水	生活行為向上マネジメント：④グループ討議	立案した生活行為向上マネジメントについてグループで検討する					
7	清水	生活行為向上マネジメント：⑤発表	模擬事例に対して立案した生活行為向上マネジメントを発表する					
8	石井	日常生活活動評価	脳卒中でのFIM等の評価					
9	石井	動作別分析，支援法Ⅰ	脳卒中の動作分析、支援法					
10	石井	動作別分析，支援法Ⅱ	脳卒中の動作分析、支援法					
11	石井	動作別分析，支援法Ⅲ	脳卒中の動作分析、支援法					
12	石井	動作別分析，支援法Ⅳ	脳卒中の動作別分析、支援法					
13	石井	動作別分析，支援法Ⅴ	脊髄損傷の動作別分析、支援法					
14	石井	動作別分析，支援法Ⅵ	脊髄損傷の動作別分析、支援法					
15	石井	まとめ	日常生活作業学のまとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●				70	①②③④⑤
	発表					●	10	⑨
	レポート				●		20	⑥⑦⑧
評価の 特記事項	すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験の際は、全ての評価方法の合計点数で評価する。 レポート・発表はルーブリックで評価を行う。ルーブリックは、授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
教科書の該当ページや配布資料を事前に読み理解する 講義で出された課題を行い必要な図書等で学習する （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験は研究室で保管しているため、内容を確認することができる。発表はその場でフィードバックをする。								
教科書								
「日常生活活動学（ADL）」（作業療法学　ゴールド・マスター・テキスト）長崎重信監修　メジカルビュー社								
参考図書								
講義の中で適宜紹介する。								
備考：履修者への要望								
講義は皆さんに日常生活作業について深く考えるきっかけである。普段の生活の中で、自らの日常生活作業について考え、他者と比較し、日常生活作業の多様性を実感することを期待する。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
117	日常生活作業学実習	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
加藤 真夕美						
実務経験のある教員						
加藤 真夕美：医療機関、介護老人保健施設、保健センター、通所介護事業所において作業療法士として勤務し、身体障害領域および高齢期領域の臨床経験を有する教員が、日常生活活動支援についての講義および実技指導を行う。						
授業概要						
本科目は、日常生活活動（以下、ADL）が心身状態の変化あるいは環境の影響によってどのように変化するか、またADL制限・制約に対する作業療法の役割を理解することを目的とする。本科目では主にセルフケアおよび手段的日常生活活動（以下、IADL）について、基本的な評価方法をはじめ、代表的な各疾患特有の制限・制約に関する知識および支援のあり方の基礎を、作業療法の視点から実習を通して実践的に学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①障害に応じたADLの代表的な評価方法、基礎的な介助や指導について調べてまとめることができる。					
思考・判断 ・表現	②模擬事例のADL制限・制約の理由について、様々な情報を統合し、検討し、その検討結果を説明することができる。					
技能	③障害に応じたADLの基礎的な介助、指導を、学生を相手に実践できる。 ④基礎的なADLに関する面接評価を、健康な高齢者を相手に実施できる。					
関心・意欲 ・態度	⑤提出物を遅滞なく、内容の不足なく確実に提出することができる。					
授業形態						
実習	実習および演習を主体とする。随時必要な知識を講義形式で伝える。講義全般を通して、グループワークやディスカッション、レポート作成など、アクティブラーニングを主体とした構成とする。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1, 2	加藤	オリエンテーション 日常生活動作能力（以下、BADL）の活動支援①	ADLに関連する事項の復習（範囲、分類、評価法など） 移動動作（車椅子操作）に対する支援方法や技術を学ぶ。			
3, 4	加藤	BADLの活動支援②	起居・移動動作に対する支援方法や技術を学ぶ。			
5, 6	加藤	BADLの活動支援③	片麻痺を主に、身辺処理活動（食事・排泄・更衣・入浴・整容）に対する支援方法や技術を学ぶ。			
7, 8	加藤	IADLの活動支援①	片麻痺・リウマチ・呼吸器障害を主に、屋内活動（家事動作）に対する支援方法や技術を学ぶ。			
9, 10	加藤	IADLの活動支援②	片麻痺を主に、屋外活動（買い物・電車利用）に対する支援方法や技術を学ぶ。			
11, 12	加藤	ADL評価	IADLのFIM、BIを中心に、代表的なADL評価方法を学び、対象者評価（面接）の計画を立てる。			
13, 14	加藤	PBL	対象者（げんき大学同窓生）に対するADL面接評価および記録の過程を経験する。			

15	加藤	まとめ	対象者評価の総括、および授業全体の総括を行う。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標	
		実技試験			●		50	③④
		レポート	●	●		●	50	①②⑤
評価の 特記事項	・実技試験は、課題ごとに定めたルーブリック評価に基づいて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。 ・レポートは、提出の遅滞や内容の不足があった場合に減点する。 ・実技試験とレポートの合計が6割未満の場合には、再試験として再度実技試験を行い、レポートの再提出を求める。 ・本科目の単位認定には、「日常生活作業学Ⅰ」の単位認定が条件である。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
・各単元ごとに提示されるレポートを作成する（授業内で作成。授業内で作成できなければ自宅に持ち帰り仕上げる） ・実技試験のための練習 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
・レポートは、ルーブリックにて評価し、口頭およびレポート内へのコメント記載などによりフィードバックする。 ・実技練習は、授業内で見回り、その都度口頭などにてフィードバックする。								
教科書								
「日常生活活動学（ADL）」（作業療法学 ゴールド・マスター・テキスト）長崎重信 監修 メジカルビュー社								
参考図書								
「新版日常生活活動（ADK） 評価と支援の実践」伊藤利之 ほか編集 医歯薬出版 「日常生活活動」（作業療法学全書）酒井ひとみ 編集 協同医書出版 他、必要に応じて授業内で紹介する。								
備考：履修者への要望								
他のすべての教科で学んだ知識、あるいは生まれてから今までの経験が、何らかの形で繋がってくる。必要に応じて知識を適切に利用できるよう、他の授業の資料等を整理しておくこと。 「日常生活作業学Ⅰ」の単位をすでに修得していることを、本科目の履修要件とする。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
118	高次脳機能障害作業治療学	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
石井 文康						
実務経験のある教員						
石井 文康：医療機関において作業療法士として勤務し、高次脳機能障害に対する臨床経験を有する教員が、高次脳機能障害の評価および作業療法についての講義を行う。						
授業概要						
本科目は、人が合目的な動作を行う際に必要となる高次脳機能障害について、作業療法の視点で理解することを目的とする。意識、情動制御、注意、記憶、対象や空間の認知、言語の表出および理解、行為の表出、遂行機能などについて、それらの機能の概要や障害の種類、責任病巣、行動上の特徴、評価方法および作業療法の基本的な考え方について学ぶ。授業は、講義が主体であるが、評価方法習得のために随時演習を用いる。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①高次脳機能障害の種類と責任病巣、行動上の特徴、主な評価法について説明できる。 ②各障害に対する作業療法の基本的な考え方を説明できる。					
思考・判断 ・表現	③高次脳機能障害が日常生活に及ぼす影響について考察できる。					
技能	④臨床での高次脳機能障害について口頭報告、紙面記載をすることができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤高次脳機能障害を有する対象者に配慮することができる。					
授業形態						
講義	主に講義形式で行う中で、評価法の模擬的実践を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	石井	高次脳機能障害概論Ⅰ	高次脳機能障害の捉え方、人と動物の行動様式の差異より高次脳機能について学ぶ。			
2	石井	高次脳機能障害概論Ⅱ	脳の側性化、利き手の関連性等について学ぶ。			
3	石井	高次脳機能障害概論Ⅲ	脳の機能局在と高次脳機能障害等について学ぶ。			
4	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅰ	失語についての障害像、失語症状等について学ぶ。			
5	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅱ	失語についての評価法、記載法等について学ぶ。			
6	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅲ	失行についての障害像、失行症状等について学ぶ。			
7	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅳ	失行についての評価法、記載法等について学ぶ。			
8	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅴ	半側空間無視についての障害像、症状等について学ぶ。			

9	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅵ	半側空間無視についての評価法、記載法等について学ぶ。					
10	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅶ	半側空間無視と日常生活活動との関連性等について学ぶ。					
11	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅷ	失認（主に視覚失認）について、障害像、評価法等について学ぶ。					
12	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅸ	病態失認、運動維持困難、プッシャー現象について、障害像、評価法等について学ぶ。					
13	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅹ	記憶障害について、障害像、評価法等について学ぶ。					
14	石井	高次脳機能障害の臨床Ⅺ	前頭葉機能障害について、障害像、評価法等について学ぶ。					
15	石井	まとめ	高次脳機能障害の概論、臨床のまとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			70	①②③
	レポート		●	●	●	●	30	①②③④⑤
評価の 特記事項	全ての評価方法を合計した評点が60点未満の場合、再試験を実施する。 再試験の際は、全ての評価方法の合計点数で評価する。 レポートは記述内容（まとめ方など）で評価し、配点など評価方法は授業内で提示する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
毎週1時間以上、教科書等にて学ぶ。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
課題の振り返りを予定。								
教科書								
「高次脳機能障害学」石合純夫 医歯薬出版								
参考図書								
「脳解剖から学べる高次脳機能障害リハビリテーション入門」安保雅博 監修 診断と治療社								
備考：履修者への要望								
積極的な授業参加を希望。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
119	義肢装具学	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
廣渡 洋史						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史：義肢装具の提供も業務とする医療機関で勤務し、装具を作成・提供していた経験を有する教員が、義肢装具の種類と適応、そのチェックアウトについて講義を行う。						
授業概要						
本講義では、切断と義肢装具について講義する。特に上肢の義肢装具は作業療法でも関わることより、その構造や特徴について実物を提示・操作して理解を進めていく。義手のチェックアウトは実際の方法に則して理解する。装具については義肢装具士が作成するものと作業療法士が作成するスプリントとの区分けを理解する。上肢装具の種類は幅広く、その適応も複雑であるため、病期や症状によってその適応とする種類の確認と適応方法について疾患別に理解する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①切断と切断が与える影響（特徴・障害像）を説明できる。 ②障害像を理解したうえで、必要な義肢装具を列挙することができる。 ③各疾患における義肢装具と作業療法アプローチについて説明できる。 ④義肢装具の構造とチェックアウトを説明できる。					
思考・判断 ・表現	⑤拘縮手におけるスプリントの適応および評価、作業療法プログラムを説明できる。					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
講義	講義は、教科書とプリント配布物で行う。義手と装具は実物に触れて理解を深める。（チェックアウトは実物を用いてグループで行う。）					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	廣渡	オリエンテーション 切断	切断総論			
2	廣渡	義手	義手の構造と部品・肩義手・上腕義手			
3	廣渡	義手	手部義手・筋電義手			
4	廣渡	義手	義手の訓練、チェックアウト、筋電義手の評価と訓練			
5	廣渡	義足・上肢装具	義足各論・上肢装具各論			
6	廣渡	上肢装具	上肢装具各論			

7	廣渡	体幹装具・下肢装具	体幹装具・下肢装具各論（要点のみ）					
8	廣渡	総括	全体についてのポイント確認					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③④⑤
	小テスト		●				20	④
評価の 特記事項	小テストと筆記試験の合計点が6割に達しなかった場合に再試験を実施する。再試験は小テストと筆記試験の範囲とし、6割以上を合格とする。再試験の評定は筆記試験のみで行う。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前学習：該当箇所の予習。 事後学習：講義後は、教科書を読み直すなどの復習。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
小テストは授業で返却する。筆記試験は研究室に保管しているので事前に連絡の上、内容を確認することができる。								
教科書								
「リハビリテーション義肢装具学」清水順一　ほか編　メディカルビュー社								
参考図書								
随時、配布するプリント								
備考：履修者への要望								
できるだけ実物に触れて理解を深めるように心がけること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
120	義肢装具学実習	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
廣渡 洋史						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史：義肢装具の提供も業務とする医療機関で勤務し、装具を作成・提供していた経験を有する教員が、装具を作成する環境、道具、樹脂、作成方法、樹脂の自助具への応用等について演習形式を中心に講義を行う。						
授業概要						
熱可塑性プラスチックを用いてスプリントの作成を行う。評価・採型からチェックアウトまで行い、技術を習得していく。作成前には道具の基本的な使用方法と作成中の道具の管理を学ぶ。代表的なスプリントを作成し、その技術を身につける。代表的なスプリントは掌側各カクアップスプリント、背側カクアップスプリント、アウトリガースプリント、サムスパイカスプリント、ジョイントジャックスプリント、八の字スプリント、スタックスプリントを作成する。また、その樹脂の活用として簡単な自助具を作成し福祉用具への活用も学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①装具作成に必要な解剖学的知識を整理できる ②装具作成に必要な道具とその取り扱いすることができる ③装具作成におけるリスク管理を述べることができる					
思考・判断 ・表現	④装具作成と同時に対象者への対応をすることができる					
技能	⑤樹脂の特性を理解して作成することができる					
関心・意欲 ・態度	⑥装具作成における失敗点や工夫する点において関心をもって意欲的に授業に参加できる					
授業形態						
実習	熱可塑性プラスチックを用いてスプリントの作成を行う。作成はペアワークを通して行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	廣渡	スプリント作成に必要な解剖学	スプリント作成に必要な解剖学を学び、特に前腕から手指の解剖について学ぶ			
2	廣渡	スプリント作成に必要な運動学	スプリント作成に必要な運動学を学び、特に前腕から手指のうごきについて学ぶ			
3	廣渡	治療とスプリント適応①	治療によるスプリント適応（RBT、安静装具）を学ぶ			
4	廣渡	治療とスプリント適応②	治療によるスプリント適応（RBT、安静装具）を学ぶ			
5	廣渡	スプリント作成の事前知識	スプリント作成を作成するにあたり、必要な知識と作成の物品などの種類・取り扱いについて学ぶ。熱可塑性樹脂の裁断まで行う。			
6	廣渡	樹脂の特徴と自助具の転用	樹脂の特徴を知るとともに、摂食動作に必要な自助具を作成する			
7	廣渡	掌側・背側カクアップ	説明（作り方や注意点を知る）・作成を開始する（採型）			

8	廣渡	掌側・背側カックアップ	作成を開始する（採型）					
9	廣渡	掌側・背側カックアップ	作成（説明通りに作る）					
10	廣渡	短対立スプリント アウトリガースプリント	説明（作り方や注意点を知る）・作成を開始する（採型）					
11	廣渡	短対立スプリント アウトリガースプリント	作成（説明通りに作る）					
12	廣渡	サムスパイカスプリント ジョイントジャック	説明（作り方や注意点を知る）・作成を開始する（採型）					
13	廣渡	サムスパイカスプリント ジョイントジャック	作成（説明通りに作る）					
14	廣渡	8の字スプリント スタックスプリント	説明（作り方や注意点を知る）・作成を開始する（採型）・作成（説明通りに作る）					
15	廣渡	総括	スプリント・装具の違いや特徴についてまとめる					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●	●	●	●	70	①②③④⑤⑥
	作成した装具				●		30	⑤
評価の 特記事項	レポートと作成した装具で評価する。課題未提出者は未修得となるので注意すること。レポートは作成の準備、方法、失敗したことを主に記載すること。特に、卒後、レポートを見て作成方法を思い返せるようなレポートとなるように意識し、適宜、質問しながら進めること。作成した装具とレポートはルーブリック（講義内で提示）で評価する。作成した装具とレポートの評価の合計点数が6割に達しない場合、レポートは再提出し、装具は再度作成したものを評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
主に手に関する解剖・運動学の予習をすること。 授業後は忘れないうちに作成に関する事項のメモをとりレポート記載をすること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポート記載にあたり、作成にあたる課題解決のポイントや質問事項があればその都度担当教員に質問すること。								
教科書								
随時、配布するプリント								
参考図書								
「リハ実践テクニック ハンドセラピー」 齋藤慶一郎 ほか編 メディカルビュー社 「リハビリテーション義肢装具学」 清水順一 ほか編 メディカルビュー社								
備考：履修者への要望								
まず楽しむこと。理解したことを実践し、実践の中で失敗を恐れず体で覚えるように心がけること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
121	臨床作業療法演習	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
渡邊 豊明・廣渡 洋史・加藤 真夕美・清水 一輝・外倉 由之・横山 剛・松田 裕美						
実務経験のある教員						
渡邊 豊明・廣渡 洋史・加藤 真夕美・清水 一輝・外倉 由之・横山 剛・松田 裕美：以上の教員は、医療施設等で作業療法を実践した経験を有し、臨床作業療法演習を担当する。						
授業概要						
作業療法では、患者の障害像の把握、治療目標及び治療計画の立案、治療実践並びに治療効果判定という一連の過程を実施する。本科目では、3年次の臨床実習に向け、客観的臨床能力試験（OSCE）の視点を導入することで、臨床で必要とされる「知識・技能・態度」を理解し、実習を通して3年次の臨床実習に必要な能力を養うことを目的とする。 （渡邊 豊明／4回） オリエンテーション、バイタルチェック・腱反射、脳卒中麻痺側運動機能評価、関節可動域測定、徒手筋力検査、脳卒中麻痺側運動機能評価、形態測定、感覚検査、療法士面接の実技指導 （渡邊 豊明／3回・外倉 由之／3回）（共同） バイタルチェック・腱反射、脳卒中麻痺側運動機能評価 （渡邊 豊明／3回・加藤 真夕美／3回）（共同） 関節可動域測定、徒手筋力検査、脳卒中麻痺側運動機能評価 （渡邊 豊明／2回・廣渡 洋史／2回）（共同） 形態測定、感覚検査 （渡邊 豊明／2回・清水 一輝／2回）（共同） 関節可動域測定、徒手筋力検査 （渡邊 豊明／1回・横山 剛／1回・松田 裕美／1回）（共同） 療法士面接						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3●	DP4○	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①「療法士面接・バイタルチェック・腱反射・関節可動域測定・徒手筋力検査」を実施する際の目標と必要なポイントを述べることができる。					
思考・判断 ・表現	②「療法士面接・バイタルチェック・腱反射・関節可動域測定・徒手筋力検査」において臨床で求められる評価項目と採点基準を説明できる。					
技能	③「療法士面接・バイタルチェック・腱反射・関節可動域測定・徒手筋力検査」を適切に実施できる。					
関心・意欲 ・態度	④臨床で必要とされる「知識・技能・態度」に対する自身の能力を知ることにより、実習までの学習計画を立て、実施することができる。					
授業形態						
演習	講義及び実技練習やグループディスカッションなどのアクティブ・ラーニングにて授業を進める。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	渡邊	オリエンテーション 臨床実習とは	客観的臨床技能試験（OSCE）の考え方を学習する。 臨床実習Ⅲ・Ⅳを体験した3年生から実習の体験談を聞く。			
2	渡邊・外倉	バイタルチェック・腱反射 説明	目標の確認・ポイントの説明・評価項目と採点基準を理解する。			

3	渡邊・外倉	バイタルチェック・腱反射 演習	バイタルチェック・腱反射を学生間で行い、フィードバックを受ける。					
4	渡邊・加藤	関節可動域測定 説明	目標の確認・ポイントの説明・評価項目と採点基準を理解する。					
5	渡邊・清水	関節可動域測定 演習	関節可動域測定を学生間で行い、フィードバックを受ける。					
6	渡邊・加藤	徒手筋力検査 説明	目標の確認・ポイントの説明・評価項目と採点基準を理解する。					
7	渡邊・清水	徒手筋力検査 演習	徒手筋力検査を学生間で行い、フィードバックを受ける。					
8	渡邊・横山・松田	療法士面接 説明・演習	目標の確認・ポイントの説明・評価項目と採点基準を理解する。 療法士面接を学生間で行い、フィードバックを受ける。					
9	渡邊・廣渡	形態測定	説明・演習目標の確認・ポイントの説明・評価項目と採点基準を理解する。 形態測定を学生間で行い、フィードバックを受ける。					
10	渡邊・廣渡	感覚検査 説明・演習	目標の確認・ポイントの説明・評価項目と採点基準を理解する。 感覚検査を学生間で行い、フィードバックを受ける。					
11	渡邊・外倉	脳卒中麻痺側運動機能評価 説明	目標の確認・ポイントの説明・評価項目と採点基準を理解する。					
12	渡邊・加藤	脳卒中麻痺側運動機能評価 演習	脳卒中麻痺側運動機能評価を学生間で行い、フィードバックを受ける。					
13	渡邊	実技練習①	実技練習を行う					
14	渡邊	実技練習②	実技練習を行う					
15	渡邊	総括	総括を行う					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実技試験		●	●	●	●	85	①②③④
	参加貢献度					●	15	④
評価の 特記事項	実技試験はOSCEの形式で実施する。 評価方法の基準点に満たない場合、実技試験の再試験を実施する。 参加貢献度の評価は、ルーブリック（初回授業で配布）を使用し、積極性、質疑・意見交換、授業聴講態度を3段階で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）実技項目に関して、既に学習した内容を確認し、この授業に臨むこと。 （復習）自身の不足点に関して、補強すること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
個々の実技項目に関して、その都度フィードバックしていく。実技試験では、模擬患者からもフィードバックするので、臨床で必要とされる「知識・技能・態度」について自身の不足分を補強すること。								
教科書								
「PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編」才藤栄一 監修 金田嘉清 編集他 金原出版								

参考図書
適宜紹介する。
備考：履修者への要望
臨床実習へ向けての具体的な準備に役立てるための授業であることを理解し、取り組むこと。

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
122	リハビリテーション関連機器	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
渡邊 豊明						
実務経験のある教員						
渡邊 豊明：医療機関で作業療法士として臨床経験のある教員が、ADL、移乗・移動、食事、整容、入浴、排泄、更衣の各ADLにおいて使用するリハビリテーション関連機器の適用や使用方法、導入する際の選定のポイントについて講義する。						
授業概要						
作業療法介入の手段として、リハビリテーション関連機器を用いることがある。本講義では、ADL、移乗・移動、食事、整容、入浴、排泄、更衣の各ADLにおいて使用するリハビリテーション関連機器の適用や使用方法、導入する際の選定のポイントについて学ぶ。また、福祉用具等の展示施設に参加し、実際の機器に触れ、さらに最新の機器についての情報を収集しながら、リハビリテーション関連機器についての理解を深める。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①ADL、IADLで用いるリハビリテーション関連機器の使用方を説明できる。 ②各疾患患者による、リハビリテーション関連機器を用いた生活の仕方の違いを比較できる。 ③住宅改修上の注意点を説明できる。					
思考・判断 ・表現	④最新のリハ関連機器について、その使用方法や利点、対象について調べて表現することができる。					
技能	⑤グループにて必要事項をまとめ、疾患別の内容を発表できる。					
関心・意欲 ・態度	⑥積極的に授業に参加し、意見交換ができる。					
授業形態						
講義	講義は各テーマごとに、グループディスカッション方式を併用していき、その結果を発表し、意見を出し合う双方向性の授業を展開する。授業後半には、グループワークを用いて知識を深める。					
授　業　計　画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	渡邊	オリエンテーション、福祉用具	オリエンテーション、福祉用部総論から作業療法士の役割、福祉用具適応論、リスクマネジメントについて 教科書：pp1-32			
2	渡邊	福祉用具の適用	起居、移乗動作について 教科書：pp33-50			
3	渡邊	車の運転実習	ドライビングシュミレーターの実践			
4	渡邊	ビデオ鑑賞	滝沢さんドキュメント（頸髄損傷の受傷とその後の生活）			
5	渡邊	福祉用具の適用	姿勢、移動について 教科書：pp52-73			
6	渡邊	福祉用具の適用	更衣、整容と排泄について 教科書：pp74-82			
7	渡邊	福祉用具の適用	食事、家事について 教科書：pp83-94			

8	渡邊	コミュニケーション，環境制御装置	コミュニケーション機器、環境制御装置 教科書：pp98-106					
9	渡邊	疾患別福祉用具使用例	頸髄損傷、脳血管障害、関節リウマチについて 教科書：pp107-122					
10	渡邊	疾患別福祉用具使用例	進行性疾患、脳性麻痺、認知症、精神障害について 教科書：pp122-152					
11	渡邊	住環境整備	作業療法と環境整備について 教科書：pp153-163					
12	渡邊	住環境整備	住宅改造について 教科書：pp164-173					
13	渡邊	疾患別の留意点	頸髄損傷、脳血管障害、関節リウマチ、進行性疾患、脳性麻痺の住宅改修留意点について 教科書：pp180-186					
14	渡邊	症例検討	疾患別福祉用具、住宅改修についてのグループワーク					
15	渡邊	国家試験対策	福祉用具、住宅改修の国家試験問題について					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			80	①②③④
	参加貢献度			●	●	●	20	④⑤⑥
評価の 特記事項	すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかった場合、再試験を実施する。再試験は筆記試験のみで評価する。 参加貢献度の評価は、ルーブリックを使用し、積極性、質疑・意見交換、授業聴講態度を3段階で評価する。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
事前学習：指定した教科書のページの予習 事後学習：講義後は、教科書を読み直すなどの復習 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
筆記試験は研究室に保管しているので事前に連絡の上、内容を確認することができる。								
教科書								
「福祉用具の使い方、住環境整備」（作業療法技術学2）日本作業療法士協会 協同医書出版								
参考図書								
随時配布するプリントなど								
備考：履修者への要望								
リハビリテーション関連機器は様々な種類があり、新製品の開発にも力がそそがれている。講義の中だけでなく、自ら積極的に調べ理解を深めること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
123	地域作業療法学	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
渡邊 豊明						
実務経験のある教員						
渡邊 豊明：介護保険施設での実務経験を有する教員が、地域作業療法の講義を実施する。						
授業概要						
地域における作業療法士の役割は、近年益々重要度を増している。地域リハビリテーションの背景と歴史を学び、それを支える制度・支援・連携について理解する。自らの住む地域の資源を把握するとともに、事例を通して地域リハビリテーションの実際について学ぶ。さらに、地域包括ケアシステムの中の作業療法の実際について学び、地域で求められる作業療法士の役割について、自らの考えを持つことを目的とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある　○：関連がある)	
知識・理解	①地域リハビリテーションの背景と歴史について説明できる。 ②介護保険制度の概要について説明できる。					
思考・判断 ・表現	③自分の住む街の地域資源を調べ、報告することができる。 ④事例を通して、地域作業療法の実際について理解し、伝えることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤地域で求められる作業療法士の役割について、自らの考えを述べることができる。					
授業形態						
講義	主に資料を使用して講義形式で実施する。模擬事例を通したグループワークを実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	渡邊	オリエンテーション	地域リハビリテーションについて、授業の進め方について			
2	渡邊	地域リハビリテーションの 基盤と背景	地域を知る、地域リハビリテーションの流れをとらえる、地域作業療法を考察する 教科書2-37			
3	渡邊	地域リハビリテーションを支える制度①	制度・施策とのつながりを知る　教科書38-87			
4	渡邊	地域リハビリテーションを支える制度②	介護保険について（別紙資料）			
5	渡邊	地域作業療法の実践①	地域作業療法の枠組みを理解する　教科書88-156			
6	渡邊	地域作業療法の実践①	地域作業法の実践の場を知る　教科書141-161			
7	渡邊	実践事例①	病院、診療所、介護保険施設　教科書162-270			

8	渡邊	実践事例②	通所施設、訪問作業療法					
9	渡邊	実践事例③	その他					
10	渡邊	地域包括ケアシステムについて	地域包括ケアシステムとは（別紙資料）					
11	渡邊	事例検討	事例の提示、グループ討議					
12	渡邊	事例検討	事例検討（発表資料作成）					
13	渡邊	事例検討	事例検討（発表）					
14	渡邊	事例検討	レポート作成					
15	渡邊	まとめ	まとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題レポート		●	●			85	①②③④
	参加貢献度					●	15	⑤
評価の 特記事項	レポートはルーブリック（事例検討時に提示）で評価する。 参加貢献度は主に、グループディスカッション時の様子で評価する。詳細は授業内で説明する。 評価方法の合計が6割に満たない場合、レポートの再提出（再試扱い）を求める。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
（予習）教科書の該当ページを読み、事前に専門用語を理解しておく。介護保険制度等についての報道に関心を寄せるよう心がけること。自分の住む街の地域資源を調べ、報告していただく。 （復習）授業内容を振り返り、前回の内容と統合を図りながら理解に努めること。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートはルーブリックにて評価し、点数やコメントをつけて、速やかに返却する。								
教科書								
「地域作業療法学」（標準作業療法学）大熊明　ほか編集　医学書院								
参考図書								
なし								
備考：履修者への要望								
地域で求められる作業療法士について学び、自らの住む地域に置き換えて、自分が何ができそうか一緒に考えよう。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
124	地域作業療法学実習	作業療法学専攻	3学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
清水 一輝						
実務経験のある教員						
清水 一輝：介護保険施設での臨床経験を有する教員が、地域作業療法実習の講義を実施する。						
授業概要						
本科目は、地域で実施されている作業療法を見学し、その目的を理解する。また、臨地での経験を積むため、こども園などで実習を行う。具体的には、作業療法の一部の経験を通して、地域リハビリテーション・地域作業療法の実際を理解し、地域の社会資源や、そこに関わる専門職種について学び、その中で求められる作業療法士の役割について学習する。また、清須市民げんき大学にも参加し、地域で生活している高齢者の生活についての理解を深めることで、作業療法士としての面接技術の習得や地域での予防作業療法に必要な役割について学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3●	DP4○	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解						
思考・判断 ・表現	①地域作業療法が実施されている施設を見学し、その目的を説明することができる。 ②対象者を評価するための視点について説明することができる。					
技能	③対象者を評価するための視点を実際プログラムと結びつけ、対象者に提供する作業を計画できる。 ④対象者に対して適切な作業を提供することができる。 ⑤対象者への作業の提供を通じて対象者を評価することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥対象者と、適切に関わることができる。 ⑦グループワークにおいて、自らの役割を果たし、他者と協調できる。					
授業形態						
実習	グループでのディスカッション、体験学習、グループ発表など					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	清水	オリエンテーション	科目全体のオリエンテーション、地域での作業療法実践の概要について			
2	清水	生活史および聞き取り方法について	地域在住高齢者に対して聞き取りをする方法や配慮する点について			
3, 4	清水	生活史の聞き取り	地域在住高齢者から生活史の聞き取りを行う			
5, 6	清水	生活史の作成	聞き取った生活史をもとに、対象者のこれまでの人生についてまとめる			
7	清水	当事者の生活と作業療法士への期待	ゲストスピーカーとして当事者である作業療法士を招き、当事者との関わりを通じて、障害を抱えながら生活することや作業療法士として必要な態度について学ぶ			
8	清水	障害の捉え方と作業療法の支援	ゲストスピーカーとして当事者である作業療法士を招き、当事者セラピストからの講義を通して、作業療法が対象とする障害とは何かを考え、作業療法士として支援すべきポイントについて学ぶ			
9	清水	就労支援やまちづくりにおける作業療法	ゲストスピーカーとして就労継続支援B型施設運営に携わる作業療法士を招き、作業療法士の専門性を活かした実践やまちづくりへの応用についてを学ぶ			
10	清水	就労移行支援事業所における作業療法実践	ゲストスピーカーとして脳卒中・身体障害専門就職支援センターの運営に携わる作業療法士を招き、就労移行支援における作業療法士の専門性を活かした実践や地域における作業療法士に必要な知識や技術を学ぶ			
11, 12	清水	地域での作業療法の見学	大治町100歳大学、就労移行支援事業所など、地域での作業療法実践の場を見学する			

13, 14	清水	地域での作業療法見学のまとめ	見学した地域での作業療法実践について振り返り、まとめる					
15	清水	見学した内容の報告	見学した地域での作業療法実践について報告する					
16～19	清水	提供する作業の検討	グループ単位で、こども園の園児に対して提供する作業の計画を立案する					
20～23	清水	施設での作業の実施	計画した作業をこども園の園児に提供する					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート			●	●		80	①②③④⑤
	参加貢献度				●	●	20	④⑥⑦
評価の 特記事項	全ての評価基準の合計が6割を満たさない場合、再試験として追加のレポートを課す。 参加貢献度は、実習中の学習態度やグループワークへの貢献度をルーブリックで評価する。ルーブリックは授業内で提示する。 本科目の単位認定には「地域作業療法学」の単位の修得が必須である。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
施設見学実習前の実習施設に関する情報収集や、提供する作業の計画立案・準備・練習を行う。								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
レポートはコメントし、その都度フィードバックを行う。								
教科書								
なし								
参考図書								
授業中に紹介する。								
備考：履修者への要望								
・グループワークを円滑に進めるため、各自が責任を持って積極的・協力的に行動すること。 ・見学の際、受身的な態度では何も学びとることはできないため、積極的に自ら学ぼうとする態度で臨むこと。 ・実習の際は、実際に対象者と関わり触れることになるため、安全面（精神的・身体的）への配慮を怠らないこと。 ・本科目の先修要件として、「地域作業療法学」の単位の修得すること。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
125	就労支援学	作業療法学専攻	4学年	必修	1単位	30時間
担当教員名						
横山 剛・岩井 和子						
実務経験のある教員						
横山 剛・岩井 和子：医療機関で作業療法士として臨床経験のある教員の指導のもと、心理社会的発達について理解することを目標に、学生が自身のこれまでの心理社会的発達および職業的発達を確認し、作業療法士になろうとしている自身の課題を探る授業である。						
授業概要						
本科目は、まず人の欲求についてMaslowの欲求階層説に触れ、人が働くという意味について講義形式で学修する。次に、人の職業的発達について概観し、自身がどのような発達を遂げながら現在に至ったのかについてワークシートを用いて解釈していく。その際には、「自身の職業的発達の説明」や「他者の職業的発達の聞き取り」について他者の視点を取り入れるため、少人数形式で演習を交えながら行う。さらに、これらの内容を元に、他の科目で学んだ障害特性と関連付け、障害就労援助や支援方法について考察する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3●	DP4	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①人が働く意味について心理社会的発達の理論から説明できる ②障害者雇用の現状を説明できる ③障害者雇用の政策について説明できる ④障害者雇用の支援について説明できる					
思考・判断 ・表現						
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤自身の職業的発達について整理し作業療法士になることの意味を説明できる					
授業形態						
講義	講義、グループディスカッション、ディスカッションした内容のプレゼンテーション					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横山・岩井	障害者の就業の現状①	障害者の雇用の現状について①			
2	横山・岩井	障害者の就業の現状②	障害者の雇用の現状について②			
3	横山・岩井	心理社会的発達について①	乳幼児期、学童期の発達			
4	横山・岩井	心理社会的発達について②	青年期の発達①			
5	横山・岩井	心理社会的発達について③	青年期の発達②			
6	横山・岩井	心理社会的発達について④	青年期の発達③			

7	横山・岩井	心理社会的発達について⑤	成人期、老年期の発達					
8	横山・岩井	障害者の就労支援総論①	就労支援に必要な知識の整理					
9	横山・岩井	障害者の就労支援総論②	職業準備性について					
10	横山・岩井	障害者就労支援	身体障害領域の就労支援					
11	横山・岩井	障害者就労支援	精神障害領域の就労支援					
12	横山・岩井	障害者就労支援	発達障害領域の就労支援					
13	横山・岩井	障害者就労支援	作業療法士に求められること					
14	横山・岩井	まとめ	まとめ					
15	横山・岩井	まとめ	まとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート		●			●	40	①②③④⑤
	参加貢献度		●			●	30	①②③④⑤
	プレゼンテーション内容		●			●	30	①②③④⑤
評価の 特記事項	評価の合計の点数が60点の未満の場合は、再度レポートをしていただきます。 参加貢献度は、積極的に発言し、その内容・回数に基づき評価します。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
自身のこれまでの職業的発達について、発達段階ごとにレポートしてください。 （1コマあたりの準備学習時間：1時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
希望者には、レポート等について個別にフィードバックします。								
教科書								
「就労支援の作業療法-基礎から臨床実践まで-」 中村俊彦他 編 医歯薬出版社								
参考図書								
随時紹介します。								
備考：履修者への要望								
人の職業はどのように決まっていくのか、また人はなぜ働くのかについて心理社会的発達から理解し、自身の職業的発達についての理解を深めてください。その上で障害を持つ方の就労支援について理解を深めていきましょう。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
126	臨床実習Ⅰ（見学）	作業療法学専攻	1学年	必修	2単位	90時間
担当教員名						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：医療機関や福祉施設などで作業療法士としての臨床経験を有する。						
授業概要						
病院・施設における作業療法の実際を見学することにより、全体（急性期から生活期及び活動全体）を理解する。また作業療法士の役割と責任についても理解する。この臨床実習を通して、医学的基礎知識が作業療法士の業務にどのように関連しているかを理解し、今後の専門的な知識の習得をより効果的かつ有意義に行うための準備としての目的を持つ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3○	DP4●	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①作業療法士の役割や専門的な内容を述べることができる。 ②病院・施設での作業療法を見学し、対象者の問題解決の為に作業療法士としてできることを述べることができる。					
思考・判断 ・表現	③見学した施設の目的、役割を把握し、その中で作業療法部門の役割を説明することができる。					
技能	④これまでに学んだ基礎知識と臨床実践の関連を整理することができる					
関心・意欲 ・態度	⑤医療職および作業療法士として求められる社会的態度、コミュニケーション能力を培うことができる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設における臨床実習とする。なお、事前の実習前ガイダンス、及び実習後セミナー（いずれも演習形態）を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習前ガイダンス	病院・施設の見学を通じて社会の医療の中における、作業療法士の役割と責任を全体的に理解するための準備をする。各自、配置される実習施設の概要など必要な実習前学習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	医療・介護施設での見学実習	作業療法士の在籍する医療機関・介護施設へ赴き、規定の期間、実習目標が達成できるよう実習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習後学習	実習終了後、学内での実習報告会を実施する。実習報告レポートなどの内容については、実習前のガイダンスにて提示する。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実習評価表	●	●	●	●	40	①②③④⑤
	実習後報告会資料	●	●	●	●	30	①②③④⑤
	ポートフォリオ	●	●	●	●	30	①②③④⑤
評価の 特記事項	各施設において、実習指導者によって実習目標に基づいた具体的項目についての評価を受ける。その評価内容をもとに、実習後の報告会、レポート内容などをルーブリックに基づいて評価し、学内の各専攻における実習判定会議にて、学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。ルーブリックは実習前ガイダンスで提示する。実習前ガイダンスや実習後セミナー等、学内ガイダンス・報告会には必ず出席すること。正当な理由なき欠席の場合は、実習を見合わせることもある。また、不合格となることもある。 全ての評価方法の合計点が基準に満たなかった場合は、追加での実習や演習、レポート課題などを課す。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
学内で学んだ内容を整理し、実習の準備を進めること。 経験した内容を振り返りまとめ、レポートを作成すること。学習内容に関する実習指導者からのフィードバック内容を踏まえて更に学習を深め、以後の学習に繋がられるようにすること。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・日々の実習内容や疑問点を記す「デイリーノート」は、基本的にはその翌日に実習指導者からフィードバックを受ける。 ・実習で学んだことをまとめる「実習レポート」は、実習中に実習指導者から随時フィードバックを受ける。 ・実習で学んだことは「実習後報告会」で発表する。発表は、実習レポートを踏まえて資料を事前に作成し、発表の場で教員からのフィードバックを受ける。							
教科書							
これまでに使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・「リハビリテーション、作業療法」について整理するとともに、現在の社会的背景や自分の考えも踏まえ説明ができるようになること。 ・医療従事者として、社会人として身につけておくべき資質について考えまとめること。 ・実習中において、わからないことや疑問に思ったことは自ら調べること。 ・作業療法士になるための総合的な学習の場として、臨床実習がある。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むこと。 ・実習では多くのわからないことや疑問が出る。実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げること。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
127	臨床実習Ⅱ（地域）	作業療法学専攻	2学年	必修	1単位	45時間
担当教員名						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：医療機関や福祉施設などで作業療法士としての臨床経験を有する。						
授業概要						
通所リハビリテーションまたは訪問リハビリテーションを実施している病院・施設において、地域における作業療法の実際を見学することにより、地域包括ケアシステムの中での作業療法士の役割と責任を理解する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①地域における作業療法士の役割や責任を述べることができる。 ②地域包括ケアシステムの中での多職種連携について説明できる。					
思考・判断 ・表現	③在宅生活を送る対象者を把握し、その問題解決の為に作業療法士としてできることを説明できる。 ④対象者の支援に必要な、地域の社会資源について説明できる。 ⑤見学した施設の目的、役割を把握し、その中で地域リハビリテーションとしての作業療法の役割を説明できる。					
技能	⑥これまでに学んだ基礎知識と臨床実践の関連を整理することができる					
関心・意欲 ・態度	⑦医療職および作業療法士として求められる社会的態度、コミュニケーション能力を培うことができる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設における臨床実習とする。なお、事前の実習前ガイダンス、及び実習後セミナー（いずれも演習形態）を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習前ガイダンス	実習のオリエンテーションを実施し、実習への心構え、態度、その他準備すべきことを周知する。その上で、各自必要な実習前学習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	医療・介護施設での見学実習	作業療法士の在籍する医療機関・介護施設へ赴き、規定の期間、実習目標が達成できるよう実習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習後セミナー	実習終了後、学内での実習報告会を実施し、実習報告レポートを本学へ提出する。実習報告レポートなどの内容については、実習前のガイダンスにて提示する。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実習評価表	●	●	●	●	40	①②③④⑤⑥⑦
	実習後報告会	●	●	●	●	40	①②③④⑤⑥⑦
	ポートフォリオ	●	●	●	●	20	①②③④⑤⑥⑦
評価の 特記事項	各施設において、実習指導者によって実習目標に基づいた具体的項目についての評価を受ける。その評価内容をもとに、実習後の報告会、レポート内容などをルーブリックに基づいて評価し、学内の各専攻における実習判定会議にて、学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。ルーブリックは実習前ガイダンスで提示する。実習前ガイダンスや実習後セミナー等、学内ガイダンス・報告会には必ず出席すること。正当な理由なき欠席の場合は、実習を見合わせることもある。また、不合格となることもある。 全ての評価方法の合計点が基準に満たなかった場合は、追加での実習や演習、レポート課題などを課す。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
学内で学んだ内容を整理し、実習の準備を進めること。 経験した内容を振り返りまとめ、レポートを作成すること。学習内容に関する実習指導者からのフィードバック内容を踏まえて更に学習を深め、以後の学習に繋がられるようにすること。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・日々の実習内容や疑問点を記す「デイリーノート」は、基本的にはその翌日に実習指導者からフィードバックを受ける。 ・実習で学んだことをまとめる「実習レポート」は、実習中に実習指導者から随時フィードバックを受ける。 ・実習で学んだことは「実習後報告会」で発表する。発表の場で本学教員及び参加学生からのフィードバックを受ける。							
教科書							
これまでに使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・「リハビリテーション、作業療法」について整理するとともに、現在の社会的背景や自分の考えも踏まえ説明ができるようになること。 ・医療従事者として、社会人として身につけておくべき資質について考えまとめること。 ・実習中において、わからないことや疑問に思ったことは自ら調べること。 ・作業療法士になるための総合的な学習の場として、臨床実習がある。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むこと。 ・実習では多くのわからないことや疑問が出る。実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げること。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
128	臨床実習Ⅲ（評価）	作業療法学専攻	3学年	必修	4単位	180時間
担当教員名						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：医療機関や福祉施設などで作業療法士としての臨床経験を有する。						
授業概要						
既に学んだ作業療法評価の知識、技術を中心に実習指導者の指導を仰ぎながら実際の対象者に応用し体得する。また、全身（whole body）を診る視点を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①既に学んだ検査測定の方法や目的について説明できる。 ②実際の対象者に検査測定を実施する際の注意点等について説明することができる。					
思考・判断 ・表現	③収集した情報及び実施した個々の検査結果を基にして対象者像をとらえ、主要な問題を把握することができる。					
技能	④対象者に必要な評価を選択し、評価計画を立案できる。 ⑤医学的、社会的に必要な情報を集めることができる。 ⑥必要な事項を記録し、報告するすることができる。 ⑦臨床実習指導者の指導のもと、対象者に検査測定の一部を実施できる。					
関心・意欲 ・態度	⑧医療職および作業療法士として求められる社会的態度、コミュニケーション能力を培うことができる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設における臨床実習とする。なお、事前の実習前ガイダンス、及び実習後セミナー（いずれも演習形態）を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習前ガイダンス	実習のオリエンテーションを実施し、実習への心構え、態度、その他準備すべきことを周知する。その上で、各自必要な実習前学習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	医療・介護施設での実習	作業療法士の在籍する医療機関・介護施設へ赴き、規定の期間、実習目標が達成できるよう実習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習後セミナー	実習終了後、学内での実習報告会を実施し、実習報告レポートを本学へ提出する。実習報告レポートなどの内容については、実習前のガイダンスにて提示する。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	実習評価表	●	●	●	●	40	①②③④⑤⑥⑦⑧
	実習後報告会	●	●	●	●	20	①②③④⑤⑥⑦⑧
	ポートフォリオ	●	●	●	●	20	①②③④⑤⑥⑦⑧
	実習後OSCE	●	●	●	●	20	①②③④⑤⑥⑦⑧
評価の 特記事項	各施設において、実習指導者によって実習目標に基づいた具体的項目についての評価を受ける。その評価内容をもとに、実習後の報告会、レポート内容、客観的臨床能力試験（OSCE）の結果などをルーブリックに基づいて評価し、学内の各専攻における実習判定会議にて、学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。ルーブリックは実習前ガイダンスで提示する。実習前ガイダンスや実習後セミナー等、学内ガイダンス・報告会には必ず出席すること。正当な理由なき欠席の場合は、実習を見合わせることもある。また、不合格となることもある。 全ての評価方法の合計点が基準に満たなかった場合は、追加での実習や演習、レポート課題などを課す。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
学内で学んだ内容を整理し、実習の準備を進めること。 経験した内容を振り返りまとめ、レポートを作成すること。学習内容に関する実習指導者からのフィードバック内容を踏まえて更に学習を深め、以後の学習に繋がられるようにすること。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・日々の実習内容や疑問点を記す「デイリーノート」及び、症例の日々の様子を記す「ケースノート」は、実習期間中に適宜実習指導者からフィードバックを受ける。 ・症例の評価結果をまとめる「ケースレポート」は、実習後に学内で作成し、適宜教員のフィードバックを受ける。 ・実習で学んだことは「実習後報告会」で発表する。学生はセミナー用にレジュメを作成する。発表の場で教員及び参加学生からのフィードバックを受ける。							
教科書							
これまでに使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・「リハビリテーション、作業療法」について整理するとともに、現在の社会的背景や自分の考えも踏まえ説明ができるようになること。 ・医療従事者として、社会人として身につけておくべき資質について考えまとめること。 ・実習中において、わからないことや疑問に思ったことは自ら調べること。 ・作業療法士になるための総合的な学習の場として、臨床実習がある。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むこと。 ・実習では多くのわからないことや疑問が出る。実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げること。 ・3年次前期までの開講科目として配置されている必修科目の単位を全て修得していること、3年次の実習前客観的臨床能力試験（OSCE）に合格していることを履修の要件とする。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
129	臨床実習Ⅳ（総合１）	作業療法学専攻	4学年	必修	8単位	360時間
担当教員名						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：医療機関や福祉施設などで作業療法士としての臨床経験を有する。						
授業概要						
総合実習という位置づけにあり、臨床実習指導者のもとに体得した作業療法の知識、技能を応用し、患者の障害像の把握、治療目標及び治療計画の立案、治療実践並びに治療効果判定という一連の作業療法過程を行い、作業療法士としての基盤を築く。また、そのために必要な記録、報告ができるようにする。 この過程を通じて、これまでに修得した知識・技術・態度を統合し、総合的に活用する力を養う。実習形態としては、学生が診療チームの一員として加わり、臨床実習指導者の指導・監督の下で行う診療参加型臨床実習（CCS）の形態をとる。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①評価結果を基に具体的な治療計画を組むことができる。					
思考・判断 ・表現	②治療計画に沿って、臨床実習指導者の指導のもとで、適切な治療訓練ができる。					
技能	③対象者が抱える問題点の原因や背景を掴むために、必要かつ適切な評価を行うことができる。 ④作業療法士として必要な記録及び報告ができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤医療専門職にふさわしい責任ある態度、積極的な行動を身につける。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設における臨床実習とする。なお、事前の実習前ガイダンス、及び実習後セミナー（いずれも演習形態）を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習前ガイダンス	実習のオリエンテーションを実施し、実習への心構え、態度、その他準備すべきことを周知する。その上で、各自必要な実習前学習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	医療・介護施設での実習	作業療法士の在籍する医療機関・介護施設へ赴き、規定の期間、実習目標が達成できるよう実習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習後セミナー	実習終了後、学内での実習報告会を実施し、実習報告レポートを本学へ提出する。実習報告レポートなどの内容については、実習前のガイダンスにて提示する。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	総合評価とする。「評価の特記事項」を参照のこと。	●	●	●	●	100	①②③④⑤
評価の特記事項	各施設において、実習指導者によって実習目標に基づいた具体的項目についての評価を受ける。その評価内容をもとに、実習後の報告会、レポート内容、客観的臨床能力試験（OSCE）の結果などを総合的にみて、学内の各専攻における実習判定会議にて、学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。実習前ガイダンスや実習後セミナー等、学内ガイダンス・報告会には必ず出席すること。正当な理由なき欠席の場合は、実習を見合わせることもある。また、不合格となることもある。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習：学内で学んだ内容を整理し、実習の準備を進めること。 復習：経験した内容を振り返りまとめ、レポートを作成すること。学習内容に関する実習指導者からのフィードバック内容を踏まえて更に学習を深め、以後の学習に繋がれるようにすること。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・日々の実習内容や疑問点を記す「デイリーノート」及び、症例の日々の様子を記す「ケースノート」は、実習期間中に適宜実習指導者からフィードバックを受ける。 ・症例の評価結果をまとめる「ケースレポート」は、実習後に学内で作成し、適宜教員のフィードバックを受ける。 ・実習で学んだことは「実習後セミナー」で発表する。学生はセミナー用にレジュメを作成する。発表の場で教員及び参加学生からのフィードバックを受ける。							
教科書							
これまでに使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・「リハビリテーション、作業療法」について整理するとともに、現在の社会的背景や自分の考えも踏まえ説明ができるようにしましょう。 ・医療従事者として、社会人として身につけておくべき資質について考えまとめましょう。 ・実習中において、わからないことや疑問に思ったことは自ら調べまとめましょう。 ・作業療法士になるための総合的な学習の場として、臨床実習があります。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むことが大切です。 ・実習では多くのわからないことや疑問が出ます。実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げてください。 ・実習開始時までに配置されている必修科目の単位を全て修得していること、4年次の実習前客観的臨床能力試験（OSCE）に合格していることを履修の要件とする。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
130	臨床実習Ⅴ（総合２）	作業療法学専攻	4学年	必修	8単位	360時間
担当教員名						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：医療機関や福祉施設などで作業療法士としての臨床経験を有する。						
授業概要						
総合実習という位置づけにあり、臨床実習指導者のもとに体得した作業療法の知識、技能を応用し、患者の障害像の把握、治療目標及び治療計画の立案、治療実践並びに治療効果判定という一連の作業療法過程を実施し、患者の生活課題に合わせた指導の基本を実践する。また、そのために必要な記録、報告ができるようにする。 この過程を通じて、これまでに修得した知識・技術・態度を統合し、総合的に活用する力を養う。実習形態としては、学生が診療チームの一員として加わり、臨床実習指導者の指導・監督の下で行う診療参加型臨床実習（CCS）の形態をとる。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3○	DP4●	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①評価結果を基に具体的な治療計画を組むことができる。					
思考・判断 ・表現	②治療計画に沿って、実習指導者の指導のもとで、適切な治療訓練ができる。 ③実施された治療訓練の結果から、その効果を検証し改めて問題点を考察できる。					
技能	④対象者が抱える問題点の原因や背景を掴むために、必要かつ適切な評価を行うことができる。 ⑤作業療法士として必要な記録及び報告ができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥医療専門職にふさわしい責任ある態度、積極的な行動を身につける。 ⑦臨床実習の総括として、それまでの過程、知識を考察し、自らに必要な項目を把握した上で、その補足をすることができる。					
授業形態						
外部実習	医療、介護施設における臨床実習とする。なお、事前の実習前ガイダンス、及び実習後セミナー（いずれも演習形態）を含む。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習前ガイダンス	実習のオリエンテーションを実施し、実習への心構え、態度、その他準備すべきことを周知する。その上で、各自必要な実習前学習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	医療・介護施設での実習	作業療法士の在籍する医療機関・介護施設へ赴き、規定の期間、実習目標が達成できるよう実習を行う。			
	廣渡・岩井・加賀谷・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	実習後セミナー	実習終了後、学内での実習報告会を実施し、実習報告レポートを本学へ提出する。実習報告レポートなどの内容については、実習前のガイダンスにて提示する。			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	総合評価とする。「評価の特記事項」を参照のこと。	●	●	●	●	100	①②③④⑤⑥⑦
評価の特記事項	各施設において、実習指導者によって実習目標に基づいた具体的項目についての評価を受ける。その評価内容をもとに、実習後の報告会、レポート内容、客観的臨床能力試験（OSCE）の結果などを総合的にみて、学内の各専攻における実習判定会議にて、学習目標が達成できたと判断された場合に合格とする。実習前ガイダンスや実習後セミナー等、学内ガイダンス・報告会には必ず出席すること。正当な理由なき欠席の場合は、実習を見合わせることもある。また、不合格となることもある。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習：学内で学んだ内容を整理し、実習の準備を進めること。 復習：経験した内容を振り返りまとめ、レポートを作成すること。学習内容に関する実習指導者からのフィードバック内容を踏まえて更に学習を深め、以後の学習に繋がられるようにすること。また、客観的臨床能力試験（OSCE）に向けた練習に励むこと。							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
・日々の実習内容や疑問点を記す「デイリーノート」及び、症例の日々の様子を記す「ケースノート」は、実習期間中に適宜実習指導者からフィードバックを受ける。 ・症例の評価結果をまとめる「ケースレポート」は、実習後に学内で作成し、適宜教員のフィードバックを受ける。 ・実習で学んだことは「実習後セミナー」で発表する。学生はセミナー用にレジюмеを作成する。発表の場で教員及び参加学生からのフィードバックを受ける。							
教科書							
これまでに使用した教科書や授業で配布した資料すべて							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
・「リハビリテーション、作業療法」について整理するとともに、現在の社会的背景や自分の考えも踏まえ説明ができるようにしよう。 ・医療従事者として、社会人として身につけておくべき資質について考えまとめよう。 ・実習中において、わからないことや疑問に思ったことは自ら調べまとめよう。 ・作業療法士になるための総合的な学習の場として、臨床実習があります。知識、技術、態度など多角的に能力を高められるように取り組むことが大切です。 ・実習では多くのわからないことや疑問が出ます。実習指導者や本学教員の助言を積極的に仰ぎ、自己成長に繋げてください。 ・4年間の学習成果の集大成です。作業療法士としての管理、倫理を含め、包括的な学習を心掛けてください。 ・実習開始時までに配置されている必修科目の単位を全て修得していること、4年次の実習前客観的臨床能力試験（OSCE）に合格していることを履修の要件とする。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
131	臨床セミナー	作業療法学専攻	1学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
加藤 真夕美・清水 一輝・外倉 由之						
実務経験のある教員						
加藤 真夕美、清水 一輝、外倉 由之：作業療法士として臨床経験のある教員が、臨床実習に向けて、臨床実習の目的・到達目標、実習に臨む職業人としての基本的態度（一般的心得含む）、レポート作成などについて演習を中心に実施する。						
授業概要						
本科目では、本学の臨床実習資料に沿って、臨床実習の目的や臨床実習における基本的態度（職業人としての責任行動・一般的な心得）、臨床技能・臨床思考過程習得の流れなどを理解できることを目的とする。臨床実習ではレポートを作成するため実習記録やレポートの作成方法・提出方法、データの管理方法についても理解する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1○	DP2	DP3●	DP4	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①臨床実習の目的を理解し、到達目標を説明することができる。 ②臨床実習における基本的態度（職業人としての責任行動・一般的な心得）に関する知識を身につけることができる。					
思考・判断 ・表現	③実習施設の概要・役割・作業療法士の役割などを報告することができる。					
技能	④実習記録、レポートの作成方法を理解し、実習記録やレポート記録を作成することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑤実習施設の概要・役割・作業療法士の役割などをまとめ、自らの意見を伝えることができる。					
授業形態						
演習	理解を深めるためレポート作成やグループワークを実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤・清水・外倉	臨床実習ガイダンス	臨床実習に（愛知医科大学病院の見学含む）臨むにあたり、本学の学生として、一般的心得・職業人としての心得を理解する。			
2	加藤・清水・外倉	病院見学のガイダンス、医師の講演	ガイダンスや講演を通じて、リハビリテーションの仕事内容や職業倫理などの概要を理解する。			
3	加藤・清水・外倉	病院見学	愛知医科大学病院を見学し、病院の概要・役割・各職種の役割などを理解する。			
4	加藤・清水・外倉	病院見学	愛知医科大学の附属施設を見学し、各施設の概要・役割・各職種の役割などを理解する。			
5	加藤・清水・外倉	実習報告会	愛知医科大学病院の見学実習後、各職種の役割、コミュニケーション方法などを報告する。			
6	加藤・清水・外倉	臨床実習Ⅰガイダンス	実習の目的、目標を確認し、実習への心構え、接遇、個人情報保護などに関する事項を周知する。 (実習目標およびそれに関する詳細は、学修の手引き別頁の「臨床実習」を参照のこと。また、その他の詳細については、事前のガイダンスにて提示する)			

7	加藤・清水・外倉	実習後セミナー	臨床実習Ⅰ後、学生が実習施設の概要・役割、作業療法士の役割などを報告し、学生間で共有する。					
8	加藤・清水・外倉	実習後セミナー	臨床実習Ⅰ後、学生が実習施設の概要・役割、作業療法士の役割などを報告し、学生間で共有する。					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標	
	個人レポート課題	●	●		●	50	①②③⑤	
	グループワーク課題	●	●	●	●	20	①②③④⑤	
	実習後セミナーでの発表	●	●	●	●	30	①②③④⑤	
評価の 特記事項	・課題や発表の合計が6割未満の場合は、再試験として課題の再提出や再発表を求める。 ・レポート、発表は課題ごとに観点を定めたルーブリックを用いて評価する。ルーブリックは授業内で提示する。 ・レポートは、提出の遅滞や内容の不足があった場合に減点する。内容によっては再提出を求める。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
配布資料を参考に、各テーマに該当する内容を予習する。（2時間程度） 学習した内容を各自でレポートにまとめる。（2時間程度） （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
・レポートは、コメントを記入するなどしてフィードバックする。 ・発表に関しては、ルーブリック評価をもとに個別でフィードバックを行う。								
教科書								
使用しない。								
参考図書								
必要に応じて授業の中で紹介する。								
備考：履修者への要望								
作業療法実践（実習）に向けて、臨床実習の概要や職業人としての心得を学ぶ授業である。自ら積極的に学ぶ姿勢を忘れないように参加することを求める。								

授業科目名		専攻		配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
132	卒業研究	作業療法学専攻		4学年	必修	2単位	30時間
担当教員名							
石井 文康・岩井 和子・加賀谷 繁・廣渡 洋史・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之							
実務経験のある教員							
石井 文康・岩井 和子・加賀谷 繁・廣渡 洋史・横山 剛・渡邊 豊明・加藤 真夕美・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：医療機関や福祉施設などで作業療法士としての臨床経験を有する。							
授業概要							
この科目では、作業療法学専攻で学習した基礎・専門的な知識のもとに、作業療法研究法で学んだ研究の手法を使って進めた研究を、具体的に卒業論文としてまとめ上げることを最終目標としている。論文にまとめるためには、各自が、それぞれの研究テーマに沿って様々な調査や実験を行い、それらの結果を多くの先行文献などと比較検討しなくてはならない。それは、単に教科書を読むだけの学習にとどまらず、広く多角的な知識を得ることにつながる。このように、この科目では論文をまとめる過程を通して様々な形での学習機会を体験し、自らの研究成果を形として残すことが重要な柱となる。4年次において論文を作成して合格をもって単位修得とする。							
学習到達目標							
関連するDP	DP1	DP2	DP3	DP4●	(●：強い関連がある　○：関連がある)		
知識・理解							
思考・判断 ・表現	①研究計画を立案、実施し、その結果から論理的な考察を導き出すことができる。 ②自らの研究の成果として、論文をまとめることができる。						
技能							
関心・意欲 ・態度							
授業形態							
演習	担当教員による全体にアクティブラーニングを主体としたゼミ形式で行う。						
授 業 計 画							
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容				
1～7	石井・岩井・加賀谷・廣渡・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	研究の実施	研究の実施				
8～15	石井・岩井・加賀谷・廣渡・横山・渡邊・加藤・清水・松田・外倉	研究論文のまとめと作成	論文作成				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	論文		●			80	②
	参加貢献度		●			20	①

評価の特記事項	作業療法研究法の単位が取得されていることが、本科目の評価対象者となる。 人を対象とした論文では、愛知医療学院大学の倫理委員会の承認を受け行う。また、論文提出は指導教員の受理と指導を受けることを前提とする。 参加貢献度は、ループリックを使用し、積極性、質疑・意見交換、協調性を5段階で評価する。 基本的に再試験は実施しない。
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間	
（予習・復習）研究は、ある特定の授業時間のみで進めるものではなく、各自の研究計画に沿って調査・実験をすすめるものです。それぞれの研究計画をしっかりと立てて遂行していきましょう。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）	
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法	
論文作成にあたり、指導教員のゼミに参加し積極的にフィードバックを受けましょう。	
教科書	
なし	
参考図書	
各分野成書	
備考：履修者への要望	
本科目の中で、卒業論文をまとめ上げることは、本学在学中の学習において、総合的な学習成果が十分であるかどうかの指標になる大切な事項です。それぞれが、各科目で学習した知識にとどまらず、実習や自己学習で得られた多くの知識を活かして、積極的に研究活動を進めることを望みます。	

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
133	総合演習	作業療法学専攻	4学年	必修	2単位	60時間
担当教員名						
石井 文康・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・加藤 真夕美・廣渡 洋史・長谷川 幸治・渡邊 豊明・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之・加藤 真弓 (PT)						
実務経験のある教員						
石井 文康・岩井 和子・加賀谷 繁・横山 剛・加藤 真夕美・廣渡 洋史・渡邊 豊明・清水 一輝・松田 裕美・外倉 由之：以上の教員は、医療機関や介護保険領域の施設等において作業療法士としての臨床経験を有する。 加藤 真弓 (PT)：医療機関や介護保険領域の施設等において理学療法士としての臨床経験を有する。 長谷川 幸治：複数の大学病院にて臨床および教育、研究の経験を有し、現役の整形外科医である。						
授業概要						
(概要) 本演習は主として各講義や実習などで学んだ知識を整理し、卒業後の診療活動における専門職として必要な総合的能力を統合させることを目的とし、本学におけるすべての講義、演習、実習の成果を総括する。 作業療法士として必要な知識等について、講義や複数の教員によるゼミナール形式で、これまで学習した内容をより臨床に向けて整理し、一人の作業療法の専門家として活躍できるように準備を行う。 (オムニバス方式/全30回) (石井 文康/24回・岩井 和子/24回・加賀谷 繁/24回・横山 剛/24回・加藤 真夕美/24回・廣渡 洋史/24回・渡邊 豊明/24回・清水 一輝/24回・松田 裕美/24回・外倉 由之/24回) (共同) 作業療法のキャリア形成、社会に出るにあたり、作業療法専門基礎分野、専門分野、総まとめ (加藤 真弓 (PT) /3回) (共同) 作業療法士のキャリア、社会に出るにあたり (長谷川 幸治/6回) 人体の構造と機能及び心身の発達分野、疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進分野						
関連するDP	DP1○	DP2○	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①作業療法士として必要な総合的な知識を身につける(他者に適切に説明できる) ②作業療法士としてだけでなく、一医療人、一社会人として医療施設、福祉施設、地域などにおいて求められる能力を理解することができる					
思考・判断 ・表現	③作業療法士として臨床における問題解決能力を身につけることができる					
技能						
関心・意欲 ・態度						
授業形態						
演習	グループおよび個人において演習を行う					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	石井・岩井・加賀谷・横山・廣渡・加藤・渡邊・清水・松田・外倉・P加藤	作業療法士のキャリアについて	作業療法士としてのキャリア形成について			
2	石井・岩井・加賀谷・横山・廣渡・加藤・渡邊・清水・松田・外倉・P加藤	社会に出るにあたり	医療人として、社会人として求められる能力について			

3	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉・P加藤	社会に出るにあたり	医療人として、社会人として求められる能力について
4	長谷川	専門基礎分野	人体の構造と機能及び心身の発達分野（解剖学）について、卒業後の診療活動に向け、これまでに学んだ知識を統合する。
5	長谷川	専門基礎分野	人体の構造と機能及び心身の発達分野（生理学）について、卒業後の診療活動に向け、これまでに学んだ知識を統合する。
6	長谷川	専門基礎分野	人体の構造と機能及び心身の発達分野（人間発達学）について、卒業後の診療活動に向け、これまでに学んだ知識を統合する。
7	長谷川	専門基礎分野	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進分野（臨床医学総論）について、これまで学んだ基礎医学などの知識等を活用し、卒業後の診療活動に向け課題に取り組む。
8	長谷川	専門基礎分野	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進分野（リハビリテーション医学）について、これまで学んだ基礎医学などの知識等を活用し、卒業後の診療活動に向け課題に取り組む。
9	長谷川	専門基礎分野	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進分野（臨床医学）について、これまで学んだ基礎医学などの知識等を活用し、卒業後の診療活動に向け課題に取り組む。
10	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門基礎分野	保健医療福祉とリハビリテーションの理念分野（リハビリテーション概論）について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
11	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門基礎分野	保健医療福祉とリハビリテーションの理念分野（保健医療福祉）について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
12	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門基礎分野	保健医療福祉とリハビリテーションの理念分野（保健医療福祉）について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
13	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
14	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
15	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
16	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
17	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。
18	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。

19	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
20	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
21	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
22	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
23	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
24	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
25	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
26	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
27	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
28	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	専門分野	【OT】作業療法評価学分野・治療学分野について、これまでに学んだ基礎医学や臨床医学などの知識、技術を統合し、卒業後の診療活動に向け、課題に取り組む。					
29	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	まとめ	総まとめ					
30	石井・岩井・加賀 谷・横山・廣渡・加 藤・渡邊・清水・松 田・外倉	まとめ	総まとめ					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	筆記試験		●	●			100	①②③
評価の 特記事項	筆記試験で100％評価する。 ※受験要件として、すべての科目の単位修得ができていないこと。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
4年間の集大成として作業療法士に関する知識の整理と統合が重要である。そのための学習は本講義のみでは不十分であるため、積極的な課外学習を1コマあたりにつき少なくとも1時間はしておく必要がある。 (1コマあたりの準備学習時間：1時間)								

課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法
模擬試験など、各課題終了時点で紙面もしくは口頭でフィードバックを行う。
教科書
関係各成書全般
参考図書
関係各成書全般
備考：履修者への要望
最終的に必要な知識を統合した上で、臨床現場等へ就職していくことになる。その為の知識の習得は必須条件となる。各自が自身の能力を客観的に自覚し、積極的な取り組みをする必要がある。この科目は、集大成であるという心構えで取り組んで欲しい。

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
134	臨床力アップ演習Ⅰ (病期別)	理学療法専攻 作業療法専攻	4学年	必修	1単位	15時間
担当教員名						
松村 仁実・林 尊弘・木村 菜穂子・渡邊 豊明・外倉 由之						
実務経験のある教員						
松村 仁実・林 尊弘・木村 菜穂子・渡邊 豊明・外倉 由之 以上の教員は、医療機関・介護保険機関にて理学療法士・作業療法士として勤務経験があり、病期別の視点からのリハビリテーションおよび理学療法・作業療法について演習を通して教授する。						
授業概要						
学内での講義、実習、臨床実習で学んだことを整理し、対象者が抱える重複する障害全体をみる力を養う。集中治療や急性期、回復期、生活期の病期別の全身を診ることを軸とし、対象者のライフステージを理解した全体を診たりハビリテーションならびに理学療法や作業療法について共に考える。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2○	DP3	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①集中治療や急性期、回復期、生活期の病期別リハビリテーションにおける理学療法士・作業療法士の役割を理解し、説明できる。					
思考・判断 ・表現	②重複障害を有する対象者への対応を考えることができる。 ③対象者のライフステージを理解した全体を診た対応を考えることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	④理学療法士・作業療法士の専門性を明確にするとともにお互いの職種を理解し、病期別の役割を理解し全体を診る態度を養う。					
授業形態						
演習	グループワークを中心に行う。一部、講義を行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの目的・役割・求められる力を考える	臨床実習で経験したリハビリテーション、理学療法、作業療法について(グループワーク、プレゼンテーション)			
2	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの目的・役割・求められる力を考える	臨床実習で経験したリハビリテーション、理学療法、作業療法について(グループワーク、プレゼンテーション)			
3	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの目的・役割・求められる力を考える	臨床実習で経験したリハビリテーション、理学療法、作業療法について(グループワーク、プレゼンテーション)			
4	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの実際①	超急性期、重症病床(ICU, CCU)リハビリテーション(講義、グループワーク)			
5	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの実際②	急性期リハビリテーション(講義、グループワーク)			
6	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの実際③	回復期リハビリテーション(講義、グループワーク)			
7	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの実際④	訪問リハビリテーション(生活期)(講義、グループワーク)			
8	松村・林・木村・ 渡邊・外倉	病期別リハの実際⑤ まとめ	終末期リハビリテーション(講義、グループワーク)			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	参加貢献度		●		●	30	②③④
	プレゼンテーション	●	●		●	30	①②③④
	総括レポート	●	●		●	40	①②③④
評価の 特記事項	「参加貢献度」「プレゼンテーション」「総括レポート」の合計が6割以上で合格となります。6割に満たなかった場合、再レポート提出での評価はいたしません。参加貢献度の評価は、ルーブリックを使用し、積極性、質疑・意見交換、授業聴講態度を5段階で評価します。プレゼンテーション、総括レポートの評価は事前に評価ポイントを提示します。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
1～3年次までに学習した内容を復習、および臨床実習での経験を病期別にまとめる 授業終了後に総括レポートを提出することもあり、その日に学んだことをまとめる （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
個別もしくは全体にフィードバックします							
教科書							
なし							
参考図書							
関係成書							
備考：履修者への要望							
臨床現場で働くことを間近に控えています。積極的な態度で参加することを強く望みます。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
135	臨床力アップ演習Ⅱ （中枢神経系障害）	理学療法学専攻 作業療法学専攻	4学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
加藤 真弓 ・ 加藤 真夕美 ・ 濱田 光佑						
実務経験のある教員						
加藤 真弓・加藤 真夕美・濱田 光佑：医療機関、介護老人保健施設、保健センター、通所介護事業所などにおいて理学療法士あるいは作業療法士として勤務し、中枢神経系障害領域の理学療法あるいは作業療法の経験を有する教員が、中枢神経系障害領域（主に脳血管疾患）での理学療法あるいは作業療法で用いられる技術についての授業を行う。						
授業概要						
脳血管疾患はリハビリテーションの主な対象疾患であり、要介護要因の上位を占める。本科目では、学内での授業、臨床実習で学んだことを整理し、脳卒中ガイドラインや機能回復のメカニズム等を参照しながら、脳血管疾患患者に対するリハビリテーションならびに理学療法・作業療法についてともに考え、卒後の臨床に役立てることを目的に授業を行う。 ・脳血管疾患患者の日常生活活動（ADL）獲得・生活の質（QOL）向上のための手段として、補装具の使用、環境調整、動作方法の工夫、健側の強化とともに、麻痺側の機能回復のための介入も大変重要な視点である。機能回復のための方法は種々あるが、ここでは固有受容性神経筋促通法、認知神経リハビリテーションの概要と一部の技術について学習する。また、脳血管疾患によって生じる高次脳機能障害について、日常生活に与えている影響を分析し、適切に介入するための基礎的な技術について学習する。 （オムニバス方式／全8回） （加藤 真弓／4回） 脳卒中リハビリテーションについて臨床実習を含めたこれまで学習を振り返り、脳卒中リハビリテーションの知識・思考をグループワークを通して整理する（2回）。また、神経生理学的アプローチの1つである固有受容性神経筋促通法（以下、PNF）の概要や基本的手技について学習する（2回）。 （加藤 真夕美／2回） 高次脳機能障害が日常生活に与えている影響を評価する技術と解釈の仕方および介入の仕方について、講義と実技を通して学ぶ。 （濱田 光佑／2回） 脳血管疾患のリハビリテーションとして、認知神経リハビリテーションに基づく治療理論、介入方法を学ぶ。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3○	DP4●	（●：強い関連がある ○：関連がある）	
知識・理解	①脳血管疾患患者の障害と回復過程について説明できる。 ②PNF、認知神経リハビリテーションについて、その基本的概念を理解し説明できる。 ③脳血管疾患に対するリハビリテーションおよび理学療法・作業療法について理解し、説明できる。					
思考・判断 ・表現	④専門書の記述内容等を批判的に読み、理解できる。 ⑤授業で学んだことと臨床実習での体験を融合させ、脳血管疾患に対するリハビリテーションおよび理学療法、作業療法について考えを整理し、説明することができる。					
技能	⑥授業内で紹介した基本的な手技を模倣できる。					
関心・意欲 ・態度	⑦批判的思考力を養う。					
授業形態						
演習	グループディスカッションおよび発表、実技を中心に行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加藤 真弓	脳血管疾患患者に対するリハビリテーション及び理学療法・作業療法	3年次までの授業や臨床実習での経験を整理し、脳血管疾患に対する理学療法・作業療法がどのような根拠をもとに実施されているのか、またその方法についてともに考える。			
2	加藤 真弓	脳血管疾患患者に対するリハビリテーション及び理学療法・作業療法	3年次までの授業や臨床実習での経験を整理し、脳血管疾患に対する理学療法・作業療法がどのような根拠をもとに実施されているのか、またその方法について検討した内容を発表する。			

3	濱田	認知神経リハビリテーション	認知神経リハビリテーションの定義・歴史・基本原則とその実際(講義・実技)					
4	濱田	認知神経リハビリテーション	認知神経リハビリテーションの実際(実技)					
5	加藤 真夕美	高次脳機能障害に対するリハビリテーション	高次脳機能障害が日常生活に与えている影響を評価する技術と解釈の仕方について、講義と実技を通して学ぶ。					
6	加藤 真夕美	高次脳機能障害に対するリハビリテーション	高次脳機能障害が主原因となり日常生活がうまく遂行できない対象者に対する介入方法について、講義と実技を通して学ぶ。					
7	加藤 真弓	固有受容性神経筋促通法(PNF)	PNFの定義・歴史・基本原則(講義) 基本的手技(実技)					
8	加藤 真弓	固有受容性神経筋促通法(PNF)	基本的手技(実技) 筆記試験					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合(%)	到達目標
	参加貢献度		●	●	●	●	50	①②③④ ⑤⑥⑦
	プレゼンテーション		●	●			20	①③⑤
	筆記試験		●	●			30	①②③⑤
評価の 特記事項	参加貢献度の評価は、ルーブリックを使用し、積極性、質疑・意見交換、授業聴講態度等で評価する。 すべての評価方法の合計点数が6割に達しなかったとしても再試験は実施しない。							
準備学習(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間								
1～3年次や臨床実習時に学んだ理学療法の知識・技術について受講前にまとめる(開講前に掲示連絡します)。技術に関する関係成書・ ジャーナルを読み、今後の臨床に繋がるよう学習を行う。 (1コマあたりの準備学習時間:4時間)								
課題(試験・レポート等)に対するフィードバックの方法								
筆記試験については、個別対応します。								
教科書								
なし								
参考図書								
関係成書								
備考:履修者への要望								
臨床に向かっの知識、技術のまとめに繋がるような受講態度を望みます。また「なぜ」という問いを立て、それを解決するように受講し てください。								

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
136	臨床力アップ演習Ⅲ (運動器系障害)	理学療法学専攻 作業療法学専攻	4学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
廣渡 洋史・齊藤 誠						
実務経験のある教員						
廣渡 洋史：作業療法士として医療施設での実務経験を有する。 齊藤 誠：理学療法士として医療施設での実務経験を有する。 各教員が臨床現場で使用されることもある治療方法などを講義、実技を通して指導する。						
授業概要						
本講座は肩関節周囲炎や変形性膝関節症、腰痛症、橈骨遠位端骨折などの有病率が高い疾患を例に、専門基礎科目で学習してきた治療方法について再確認し、より具体的かつ発展的な治療方法について検討、実践する。また、作業療法的治療と理学療法的治療との類似点や相違点を理解し、職種間連携を円滑に進めるための基礎的理解となることを目標とする。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①作業療法士が行う運動器障害に対する複数の治療方法を理解できる。 ②理学療法士が行う運動器障害に対する複数の治療方法を理解できる。					
思考・判断 ・表現	②運動器障害に対する具体的な治療計画を多職種連携を意識した上で立案できる。					
技能	③計画した治療を健常者を対象に実践することができる。					
関心・意欲 ・態度	④治療方法の立案から実践に至るまで、一貫して科学的な態度で検討ができる。					
授業形態						
演習	講義、実技、グループワークを行う。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	廣渡・齊藤	症例提示	肩関節周囲炎や変形性膝関節症、腰痛症、橈骨遠位端骨折などの有病率が高い整形外科領域疾患を提示し、病態生理などを確認する。			
2	廣渡・齊藤	グループ学習	初回講義時に提示した症例に対する具体的な治療方法をグループで検討し、実践できるように練習する。			
3	廣渡・齊藤	グループ学習	初回講義時に提示した症例に対する具体的な治療方法をグループで検討し、実践できるように練習する。			
4	廣渡・齊藤	グループ学習	初回講義時に提示した症例に対する具体的な治療方法をグループで検討し、実践できるように練習する。			
5	廣渡・齊藤	発表	上の成果について発表する。			
6	廣渡・齊藤	再検討	発表およびフィードバックを参考に、修正を行う。			
7	廣渡・齊藤	運動器疾患に対する治療	肩関節周囲炎や変形性膝関節症、腰痛症、橈骨遠位端骨折などの有病率が高い整形外科領域疾患に対するリハビリテーション治療について、グループワークでは検討しきれなかった内容を中心に解説し実技練習などを行う。			

8	廣渡・齊藤	運動器疾患に対する治療	肩関節周囲炎や変形性膝関節症、腰痛症、橈骨遠位端骨折などの有病率が高い整形外科領域疾患に対するリハビリテーション治療について、グループワークでは検討しきれなかった内容を中心に解説し実技練習などを行う。				
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	レポート	●	●	●	●	90	①②③④
	参加貢献度	●	●	●	●	10	①②③④
評価の 特記事項	レポートは個人で作成し、提出する。詳細は初回講義時などに適宜説明する。 また、すべての評価方法の合計点数に満たない場合でも、再試験は実施しない。 参加貢献度はグループワークおよび実技の学習態度から評価する。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
症例検討および発表資料の準備等で各講義前後に追加学習が必要となる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
レポートは返却する。内容に関するフィードバックは全体に対して一括して行う。							
教科書							
各専攻で運動器疾患と関連する科目で指定されている教科書を使用する。							
参考図書							
特になし（講義時に適宜、紹介、配布する）。							
備考：履修者への要望							
グループワーク、実技が主体となるため、積極的な参加を期待する。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
137	臨床力アップ演習Ⅳ (内部障害)	理学療法学専攻 作業療法学専攻	4学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
臼井 晴信・清水 一輝						
実務経験のある教員						
臼井 晴信・清水 一輝：医療機関で理学療法士、作業療法士として内部障害患者のリハビリテーションに携わった経験のある教員が、内部障害患者に対する理学療法や作業療法で用いられる技術について講義する。						
授業概要						
内部疾患系障害は身体機能障害の中でも年々増加している。リハビリテーションの対象として内部障害患者も増加しており、内部障害が合併症や既往歴にある対象者も多い。心臓や呼吸器など個々の臓器を理解するだけでは内部障害を理解することができない。骨格筋や脳も含む各臓器の連関、それらをつなぐ血管系、神経系（特に自律神経系機構）について理解することで対象者の全身を診て障害を評価・治療する必要がある。この科目では生体が恒常性を維持する仕組みと、内部障害のメカニズムから全身を診る力を習得する。その上で各病気別に内部障害患者への対応をPT、OTの視点から討論し、評価、治療技術について学修する。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①骨格筋、脳を含む全身の臓器連関について説明できる。 ②恒常性の維持と内部障害のしくみについて説明できる。 ③内部障害に対するリハビリテーション、理学療法、作業療法について説明できる。					
思考・判断 ・表現	④データから対象者の状態を把握し、他者に伝えることができる。					
技能						
関心・意欲 ・態度	⑤臨床実習での学びも踏まえながら、他者の意見に対し建設的な意見を述べることができる。					
授業形態						
演習	グループディスカッションおよび発表、実技演習を中心に行う					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	臼井・清水	臓器連関	3年次までに学修した内容を応用し、各臓器の連関について考える。			
2	臼井・清水	内部障害	恒常性の維持と内部障害の仕組みについて考える 全身障害としての視点について討論する			
3	臼井・清水	急性期の内部障害に対するリハ ビリテーション	臨床実習の経験も踏まえ、急性期の内部障害に対するリハビリテーションについ て学修する			
4	臼井・清水	急性期の内部障害に対するリハ ビリテーション	急性期の内部障害リハビリテーションについて発表し、理学療法、作業療法の立 場から討論する			
5	臼井・清水	回復期の内部障害に対するリハ ビリテーション	臨床実習の経験も踏まえ、回復期の内部障害に対するリハビリテーションについ て学修する			
6	臼井・清水	回復期の内部障害に対するリハ ビリテーション	回復期の内部障害リハビリテーションについて発表し、理学療法、作業療法の立 場から討論する			
7	臼井・清水	生活期の内部障害に対するリハ ビリテーション	生活期、地域在住者、職場復帰後の内部障害に対するリハビリテーションについ て学修する			

8	臼井・清水	生活期の内部障害に対するリハビリテーション	生活期、地域在住者、職場復帰後の内部障害リハビリテーションについて発表し、理学療法、作業療法の立場から討論する				
観点別成績評価と到達目標の関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	発表	●	●		●	40	①②③④⑤
	レポート	●	●			40	①②③④
	小テスト	●				20	①②③
評価の特記事項	発表は、発表内容と質疑応答、積極的な討論をしているかどうかを評価する。レポートでは臨床的な思考過程を評価し、基礎的事項の確認として小テストを行う。 全ての評価方法の合計点数が6割に達しなかったとしても再試験は実施しない。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
3年次までに学修した内容、特に解剖学、生理学、運動学、運動生理学および内科学、内部障害リハビリテーションに関連する事項について復習しておく。また関係書籍や文献を読み事前学修、事後学修を行う。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
レポートは返却します。							
教科書							
なし							
参考図書							
授業の中で紹介します。							
備考：履修者への要望							
常に疑問を持って講義に望んでください。臨床実習で感じた疑問を大切にしてください。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
138	臨床力アップ演習Ⅴ (精神障害)	理学療法学専攻 作業療法学専攻	4学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
横山 剛・松田 裕美						
実務経験のある教員						
横山 剛・松田 裕美：精神科病院で勤務し、認知行動療法等の考えを用いて作業療法を実践した教員が自身の理解が他者の理解につながることを演習を通して講義する。						
授業概要						
認知症、うつ病など精神の障害が日常の身近なものとして認識されてきています。精神の障害について理解するには、疾病性の理解にとどまらず事例性の理解が不可欠です。この授業では、事例性について取り上げて講義し、対象者の生きにくさの理解を深めると同時に、自身の生きにくさについても考えてみる時間を作ります。また自身の対人関係パターンなどを探り、より良い人間関係の持ち方について学んでいきます。社会が多様性を持って構築され進んでいく中で、セラピスト自身がセラピストとしてのアイデンティティを持ち確立していくことが求められている時代であると思います。自身が持つ特性をさらに理解することを通して、治療的自己の発見、獲得を目指していきます。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①精神疾患の疾病性について説明できる ②事例性について説明できる					
思考・判断 ・表現	③自身が持つ特性について理解を深める					
技能						
関心・意欲 ・態度	④精神科について興味を持てる					
授業形態						
演習	毎回講義後に演習を行う					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	横山・松田	精神疾患について1	主な精神疾患の知識の整理			
2	横山・松田	精神疾患について2	主な精神疾患の病理について、障害について			
3	横山・松田	精神障害者の生きにくさについて1	精神疾患特有の生きにくさ1			
4	横山・松田	精神障害者の生きにくさについて2	精神疾患特有の生きにくさ2			
5	横山・松田	自身の特性1	性格特性について理解する			
6	横山・松田	自身の特性2	行動特性について理解する			
7	横山・松田	自身の特性3	他者から見た自分について理解する			
8	横山・松田	まとめ	精神障害者の理解と自身の理解			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	参加貢献度	●			●	40%	①②④
	レポート	●	●		●	60%	①②③④
評価の 特記事項	レポートを作成していただきますが、レポート内容や書き方は授業で説明します。						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
自身の特性について講義内容にしたがってレポートにまとめる。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
演習を組み込んで行うので、課題に対してのフィードバックは随時行います。							
教科書							
特にありません。							
参考図書							
特にありません。							
備考：履修者への要望							
特に暗記を求める授業ではありません。自身の理解が深く広いほど、他者理解が進むという経験をしていただく予定です。恐れずに自己開示していくことに努めてください。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
139	臨床力アップ演習Ⅵ (発達支援)	理学療法学専攻 作業療法学専攻	4学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
加賀谷 繁						
実務経験のある教員						
加賀谷 繁：発達障害領域において肢体不自由児や自閉症スペクトラムなどの発達障害児に対して臨床経験ある教員が、発達障害児への治療介入に関して講義する						
授業概要						
発達障害領域における作業療法士・理学療法士は、子どもを理解する（生活や興味活動など）ことが、治療介入をするために大変重要になる。この授業では履修学生の総合臨床実習の経験を振り返ることを通じて、発達障害領域の対象児に介入していくための基本的なセラピストに必要な資質と技量などについて講義、演習を行います。						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①子どもが暮らしを通じてどのような学びをしているのかを理解し説明する事ができる。 ②母子関係について理解しその過程を説明することができる。 ③臨床推論についてその内容を理解し説明することができる。					
思考・判断 ・表現	④対象児へ関わる糸口を臨床症状を通じて気づき列挙することができる。					
技能	⑤臨床症状を通じて機能獲得に向けた潜在性と困難性について観察点を挙げる事が出来る。					
関心・意欲 ・態度	⑥自分自身の意見を分かり易く説明することができる。					
授業形態						
演習	演習中心に行う					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	加賀谷	臨床力とは	臨床実習を通じて学んだ求められる「臨床力」について振り返る			
2	加賀谷	セラピストに ゆだねられる	臨床現場でセラピストに求められるもの			
3	加賀谷	子どもの理解と 母子関係	子どもとおとなの違い			
4	加賀谷	臨床推論	臨床推論の思考性について理解する			
5	加賀谷	姿勢と運動の捉え方	姿勢と運動の関係性と再認識する			
6	加賀谷	発達障害児への 治療的介入について	子どものやる気を引き出す要因			
7	加賀谷	臨床分析①	症例の症状分析を行い、治療介入したい事を治療場面としてまとめる			
8	加賀谷	臨床分析②	症例の治療場面を設定し、治療場面の説明を行う			

観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法	知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	課題レポートと発表	●	●	●	●	60	①②③④⑤⑥
	授業への貢献		●	●	●	40	④⑤⑥
評価の 特記事項	成績評価方法の合計が6割を満たない場合は、再試験を実施する						
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間							
予習：これまでの関連した授業科目内容について再確認しておく 復習：毎回の授業内容について再確認しておく 授業時間以外の時間を使って、レポートを作成する。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）							
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法							
毎回の発表時にフィードバックを行う							
教科書							
必要に応じて資料を提示する							
参考図書							
特になし							
備考：履修者への要望							
臨床的な話題について意見を求められる状況となります。発達障害領域に関わりたいという積極的で強い思いの学生が履修することを期待します。							

授業科目名		専攻	配当年次 時期	履修方法	単位数	授業時間数
140	臨床力アップ演習Ⅶ (スポーツ支援)	理学療法学専攻 作業療法学専攻	4学年	選択	1単位	15時間
担当教員名						
藤本 大介・加藤 真弓・渡邊 豊明						
実務経験のある教員						
藤本 大介：スポーツ理学療法の活動実績のある教員がスポーツ外傷・障害とそのリハビリテーションについて指導する 加藤 真弓：障がい者のスポーツ支援に関する活動実績のある教員が、理学療法士・作業療法士が障がい者スポーツ分野で求められる役割について講義する 渡邊 豊明：競技・生涯スポーツの実績のある教員がスポーツ選手に欠かせないメンタル（イメージ）・認知トレーニングについて指導する						
授業概要						
スポーツ外傷・障害に対するリハビリテーションは、単に日常生活レベルに戻すことだけではなく、競技復帰に向けて心身共にそのスポーツに適応できる状態まで戻す必要がある。また、再発予防のための内容を積極的に取り入れる必要がある。この授業では、スポーツ障害の特徴とアスレティックリハビリテーションの概念を理解し実践できる内容を展開する。 また、障がい者スポーツ分野やメンタル（イメージ）・認知トレーニングにおいて理学療法士・作業療法士に求められる役割について学ぶ。 (オムニバス方式／全8回) (藤本大介／6回) スポーツ外傷・障害の概要、競技特性・部位別のスポーツ外傷・障害、テーピングの技術と効果、アスレティックリハビリテーションにおける動作分析、アスレティックリハビリテーションにおける具体的な対応の実践（運動療法・徒手療法） (加藤真弓／1回) スポーツ場面での疾患・障害から考えられるリスクとその管理、生活や社会参加の視点、クラス分け (渡邊豊明／1回) メンタル（イメージ）・認知トレーニングの方法						
学習到達目標						
関連するDP	DP1	DP2	DP3○	DP4●	(●：強い関連がある ○：関連がある)	
知識・理解	①スポーツ外傷および障害の原因や状態について説明することができる。 ②スポーツ外傷および障害に対する治療法について説明することができる。 ③スポーツ外傷および障害の予防について説明することができる。					
思考・判断 ・表現	④スポーツ外傷および障害の原因について自らの体験から考察することができる。					
技能	⑤スポーツ外傷および障害に対する基本的な処置や治療法を実施することができる。					
関心・意欲 ・態度	⑥スポーツ外傷および障害について積極的に学び、仲間と共同して実技に取り組むことができる。					
授業形態						
演習	基本的に講義と実技を取り混ぜながら実施する。 実技はグループにおいて課題解決のためのアクティブラーニングを実施する。					
授 業 計 画						
回数	担当教員	授業テーマ	授業内容			
1	藤本	スポーツ外傷・障害概論	スポーツ外傷・障害の概要を学ぶ 競技特性・部位別のスポーツ外傷・障害を学ぶ			
2～4	藤本	アスレティックリハビリテーション技術	テーピングの基本技術と効果について学ぶ テーピングの応用技術と効果について学ぶ			
5～6	藤本	アスレティックリハビリテーション技術	アスレティックリハビリテーションにおける動作分析の重要性および具体的方法について学ぶ 提示した課題に沿って、必要なアスレティックリハビリテーションプログラムを立案し、発表し、ディスカッションを行う			

7	渡邊	メンタル・認知トレーニング	メンタル（イメージ）・認知トレーニングとは、スポーツ選手に大切な要素である。いくつかのメンタル・認知トレーニング方法を学ぶ					
8	加藤	障がい者のスポーツ支援	理学療法士・作業療法士の知識・技術を活かした支援について学ぶ keyword: リスク管理、生活、社会参加、クラス分け					
観点別 成績評価と 到達目標の 関連	評価の観点 評価方法		知識・理解	思考・判断・表現	技能	関心・意欲・態度	割合（％）	到達目標
	知識確認レポート		●	●			50	①②③④
	技術確認テスト		●		●	●	50	①②③⑤⑥
評価の 特記事項	知識確認レポート（50%）は最終講義後に提出、技術確認テスト（50%）は第4回および第6回の講義の中で実施します。 なお、すべての評価方法の合計点数に満たない場合でも、再試験は実施しません。							
準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間								
予習として事前レポート、授業後に復習として振り返りレポートあり（障がい者のスポーツ支援） テーピングを含めた実技は講義時間外で自己研鑽が重要になってきます。時間を作って練習すること。 （1コマあたりの準備学習時間：4時間）								
課題（試験・レポート等）に対するフィードバックの方法								
講義の中で、全体にフィードバックしながら進める。								
教科書								
「理学療法ハンドブック」細田多穂他 協同医書 ※作業療法学専攻学生は、上記教科書を購入する必要はありません。								
参考図書								
スポーツ医学、アスレティックリハビリテーション等の成書								
備考：履修者への要望								
卒業後の臨床に向けて、具体的な技術を中心に行います。積極的な受講を望みます。								